

---

騎 西 町

---

# 修 理 山 遺 跡

---

ファミリータウン藤の里宅地造成事業関係  
埋蔵文化財発掘調査報告

1995

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第231号土壤遺物出土狀況



第1号住居跡出土土器



第6号住居跡出土土器



第11号住居跡出土土器



第12号住居跡出土土器

# 序

騎西町は埼玉県の東北部にあたり、自然環境に恵まれた豊かな田園地帯ですが、近年都市近郊の住宅地域として、自然と調和をとりつつ整備が進んでおります。

埼玉県住宅供給公社では、県域での住居跡環境整備を図るため、県内各地で宅地造成を進めておりますが、この地で計画された修理山団地造成事業もこの一環として進められ、地域活性化の一翼を担うものと期待されております。

今回の住宅団地予定地では、当地の現地調査の調査の結果、埋蔵文化財が確認され、その取り扱いについて、関係機関と協議が重ねられてまいりました。その結果、当事業団が発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。

住宅造成が計画された騎西町の歴史は古く、中世の武蔵武士の一つ私市党の発祥の地として広く知られた地であります。戦国時代の城である騎西城もあり、町教育委員会の発掘調査により、城の様子も徐々に明らかになりつつあります。また、従来知られていなかつた原始・古代の遺跡も発見され、町の歴史を大きくさかのぼれることが明らかになってまいりました。

今回対象となりました修理山遺跡の発掘調査では、縄文時代早期から中・近世に至るまでの多くの遺構・遺物が発見されております。特に、今回の調査で明らかになった縄文時代早期の遺構や遺物の発見は、この地が早くから人々の生活の舞台として適地であったことを示しております。また、縄文時代中期・後期の遺構遺物とも埼玉県東部地区では最もまとまった基準となる資料といえましょう。

さらに、鎌倉時代以降、中世全般に及ぶ資料も発見されており、騎西町を中心としたこの地が中世埼玉の中核地の一つであったことを傍証しております。

これらの成果をまとめた本書が、埋蔵文化財保護の基礎資料として、また、学術研究や教育・普及の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、発掘調査から本書の刊行に至るまで御指導、御協力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県住宅供給公社、騎西町教育委員会、並びに地元関係各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井 桂

## 例 言

1. 本書は、埼玉県北埼玉郡騎西町大字騎西字修理山915番地他に所在する修理山遺跡の発掘調査報告書である。

文化庁の指示通知は、平成3年6月7日付委保第5の370号、平成3年7月8日付委保第5の876号、平成4年6月10日付委保第5の645号である。遺跡名の略号は、SRYMである。

2. 発掘調査は、ファミリータウン藤の里宅地造成事業に伴うものであり、埼玉県教育局生涯部文化財保護課が調整し、埼玉県住宅供給公社の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3. 発掘調査は、平成2年度(平成3年2月1日～平成3年3月30日)を剣持和夫・村田章人が担当し、平成3年度(平成3年4月1日～平成3年8月31日)を利根川章彦・村田章人が担当し、平成4年度(平成4年4月1日～平成4年11月30日)を西口正純(平成4年4月1日～平成4年9月30日)・細田 勝(平成4年10月1日～平成4年11月30日)・吉田 稔が担当し、実施した。

整理作業は、吉田 稔が担当し、平成6年7月1日から平成7年3月31日まで実施した。なお、発掘調査、整理作業の組織は、第Ⅰ章に示した。

4. 遺跡の基準点測量および航空写真測量は、シン航空写真株式会社に委託した。また土器展開写真は小川忠博氏に委託した。

5. 本書の執筆は、I-1を文化財保護課が、他を吉田が担当した。また、中・近世陶磁器の鑑定は、浅野晴樹が行なった。

図版作成、写真撮影は、下記の者が行なった。

図版作成 吉田 稔

発掘調査写真撮影 利根川章彦 劍持和夫

細田 勝 西口正純

吉田 稔 村田章人

遺物写真撮影 吉田 稔

6. 本書の編集は、資料部資料整理第一課の吉田が行なった。

7. 本書にかかる資料は、平成6年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

8. 本書の作成にあたり下記の方々から御教示、御協力を賜わった。

島村範久 島村英之 坂本征男 騎西町教育委員会

## 凡 例

1. X・Yによる座標表示は、国家标准直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. 掃図の縮尺は、遺跡全測図1/800、住居跡1/60、炉跡1/30、方形周溝墓1/160、土壙1/60、溝1/100、溝断面図1/50、縄文土器実測図1/5、縄文土器展開図1/10、縄文土器拓影図1/3、土師器・陶器・磁器実測図1/4、石器実測図1/3、小型石器・土製品実測図1/2、古錢拓影図1/1とした。
3. 全測図等に示す遺構表記の略号は、以下のとおりである。SJ…竪穴式住居跡、SR…方形周溝墓、SK…土壙、SD…溝、SA…柵列
4. 遺構図中に示したドットは、遺物の出土位置および接合関係を示し、ナンバーは、遺物実測図のそれと一致する。
5. 掃図中のスクリントーンは、次のことを表示した。遺跡全測図中の斜線は、攪乱の範囲を示した。また、網かけは、騎西町教育委員会による発掘調査区を示した。遺構図中の網かけは、炉跡内の焼土の範囲を示した。土器拓影図断面の網かけは、織維混入を示した。陶器実測図による網かけは、施釉の範囲を示した。
6. 遺物観察表の凡例は、以下のとおりである。法量の( )内数値は推定値であり、単位はcmを示す。胎土は、土器に含まれる含有鉱物を以下の記号で示した。A…石英、B…白色粒子、C…長石、D…角閃石、E…赤色粒子、F…黒色粒子、G…雲母、H…片岩、I…砂粒。色調は、『新版標準土色帖』(農林省水産技術会議事務局監修1967)に照らし最も近い色相を記した。彩度や明度は、無視したためかなり幅のあるものである。残存率は5%刻みで表わしたが、破片の場合図で示した残存部位に対するもので、必ずしも全体に占める残存率を表示していない。
7. 卷末に遺跡出土の石器一覧表及び遺構新旧対照表を掲載した。

# 目 次

序	III. 遺跡の概観	10
例言	IV. 検出された遺構と遺物	11
凡例	1. 住居跡	11
I. 調査の概要	2. 方形周溝墓	43
1. 発掘調査に至る経過	3. 土壙	48
2. 発掘調査・報告書刊行事業の組織	4. 棚列跡・溝	79
3. 発掘調査・報告書作成の経過	5. 包含層・グリッド	99
II. 遺跡の立地と環境	V. 結語	114

## 挿図目次

第1図 埼玉県の地形区分	4
第2図 修理山遺跡と周辺の遺跡	5
第3図 遺跡周辺の地形	7
第4図 遺跡全測図	8
第5図 遺跡基準土層図	10
第6図 第1号住居跡	11
第7図 第1号住居跡出土遺物(1)	13
第8図 第1号住居跡出土遺物(2)	14
第9図 第1号住居跡出土遺物(3)	15
第10図 第2号住居跡	16
第11図 第3号住居跡	17
第12図 第4号住居跡	17
第13図 第5・8号住居跡	18
第14図 第2・3・4・5号住居跡出土遺物	19
第15図 第6号住居跡	20
第16図 第7号住居跡	21
第17図 第6・7号住居跡出土遺物(1)	22
第18図 第6・7号住居跡出土遺物(2)	23
第19図 第9号住居跡	24
第20図 第8・9号住居跡出土遺物	24
第21図 第10号住居跡	25
第22図 第10号住居跡出土遺物	26
第23図 第11号住居跡	27
第24図 第11号住居跡出土遺物(1)	28
第25図 第11号住居跡出土遺物(2)	29
第26図 第12号住居跡	30
第27図 第12号住居跡遺物出土状況	31
第28図 第12号住居跡出土遺物(1)	34
第29図 第12号住居跡出土遺物(2)	35
第30図 第12号住居跡出土遺物(3)	37
第31図 第12号住居跡出土遺物(4)	38
第32図 第12号住居跡出土遺物(5)	39
第33図 第12号住居跡出土遺物(6)	40
第34図 第13号住居跡	41
第35図 第13号住居跡出土遺物	42
第36図 第1号方形周溝墓	43
第37図 第2号方形周溝墓	44
第38図 第3号方形周溝墓	44
第39図 方形周溝墓出土遺物(1)	45
第40図 方形周溝墓出土遺物(2)	46
第41図 方形周溝墓出土遺物(3)	47
第42図 土壙(1)	49
第43図 土壙(2)	50
第44図 土壙(3)	51
第45図 土壙(4)	53
第46図 土壙(5)	54
第47図 土壙(6)	56
第48図 土壙(7)	58
第49図 土壙(8)	59
第50図 土壙(9)	60
第51図 土壙(10)	63
第52図 土壙(11)	64
第53図 土壙(12)	66
第54図 土壙(13)	67
第55図 土壙(14)	68
第56図 土壙(15)	70
第57図 土壙出土遺物(1)	72
第58図 土壙出土遺物(2)	74
第59図 土壙出土遺物(3)	75
第60図 土壙出土遺物(4)	76
第61図 土壙出土遺物(5)	77
第62図 土壙出土遺物(6)	78
第63図 栅列跡・溝	80
第64図 溝(1)	81
第65図 溝(2)	82
第66図 溝(3)	83
第67図 溝(4)	84
第68図 溝(5)	85

第69図 溝(6)	86	第78図 溝出土遺物(2)	98
第70図 溝(7)	88	第79図 グリッド出土遺物(1)	100
第71図 溝(8)	89	第80図 グリッド出土遺物(2)	101
第72図 溝(9)	90	第81図 グリッド出土遺物(3)	102
第73図 溝(10)	92	第82図 グリッド出土遺物(4)	104
第74図 溝(11)	93	第83図 グリッド出土遺物(5)	105
第75図 溝断面図(1)	94	第84図 グリッド出土遺物(6)	106
第76図 溝断面図(2)	95	第85図 グリッド出土遺物(7)	108
第77図 溝出土遺物(1)	97	第86図 グリッド出土遺物(8)	109

## 表 目 次

第1表 方形周溝墓出土遺物観察表	45	第7表 土壙一覧表(6)	71
第2表 土壙一覧表(1)	52	第8表 石器一覧表(1)	110
第3表 土壙一覧表(2)	57	第9表 遺構新旧対照表(1)	111
第4表 土壙一覧表(3)	61	第10表 遺構新旧対照表(2)	112
第5表 土壙一覧表(4)	65	第11表 遺構新旧対照表(3)	113
第6表 土壙一覧表(5)	69		

## 図 版 目 次

図版1 修理山遺跡航空写真(全景)	埋甕 第11号住居跡炉跡・埋甕
図版2 修理山遺跡航空写真(遠景)	図版13 第1号方形周溝墓 第3号方形周溝墓
調査区全景(G-5グリッド付近)	図版14 第12号土壙 第13号土壙 第14号土壙 第16
図版3 調査区全景(I-7グリッド付近)	号土壙 第19号土壙 第26号土壙 第40号土
調査区全景(L-11グリッド付近)	壙 第41号土壙
図版4 調査区全景(G-18グリッド付近)	図版15 第44号土壙 第46号土壙 第46号土壙焼土
調査区全景(G-21グリッド付近)	第47・48・49号土壙 第59号土壙(炉穴) 第64
図版5 調査区全景(H-21グリッド付近)	号土壙 第68号土壙 第70号土壙
第1号住居跡	図版16 第74号土壙 第81号土壙 第91号土壙 第93
図版6 第2号住居跡 第3号住居跡	・94号土壙 第97・98・110号土壙 第124号土
図版7 第4号住居跡 第6号住居跡	壙 第128号土壙 第138号土壙
図版8 第7号住居跡 第5・8号住居跡	図版17 第139号土壙 第140号土壙 第144号土壙
図版9 第9号住居跡 第10号住居跡	第154号土壙遺物出土状況 第154号土壙 第
図版10 第11号住居跡 第12号住居跡遺物出土状況	157号土壙 第169号土壙 第170号土壙
図版11 第12号住居跡 第13号住居跡	図版18 第162・178号土壙 第182号土壙 第184号土壙
図版12 第1号住居跡炉跡 第1号住居跡埋甕 第2号	第185号土壙 第188号土壙 第210・211号土壙
住居跡炉跡 第6号住居跡炉跡・埋甕 第6号	第217号土壙 第219号土壙遺物出土状況
住居跡炉跡 第6号住居跡埋甕 第6号住居跡	図版19 第231号土壙・第13号住居跡炉跡 第231号土

- 壙 遺物出土状況 第235号土壙 第238号土壙  
壙遺物出土状況 第244号土壙 第266号土壙  
第273号土壙 第275・276号土壙
- 図版20 I-21・22グリッド土壙群 G-22グリッド土壙群
- 図版21 1号棚列・第3・4・5・6・7号溝 第8・9・10号溝
- 図版22 第11・12・13・14・15号溝 第18・19号溝
- 図版23 第30・31・32号溝 第46・47・48・49号溝
- 図版24 SJ1第7図-1 SJ1第7図-2 SJ1第7図-4  
SJ1第7図-3 SJ1第7図-5 SJ1第7図-6
- 図版25 SJ1第7図-7 SJ1第7図-8 SJ1第7図-9  
SJ2第14図2-1 SJ6第17図6-1 SJ6第17  
図6-2
- 図版26 SJ6第17図6-3 SJ6第17図6-4 SJ6第17  
図6-5 SJ7第17図7-1 SJ8第20図8-1  
SJ8第20図8-2
- 図版27 SJ10第22図-1 SJ11第24図-1 SJ11第24  
図-2 SJ11第24図-3 SJ11第24図-4  
SJ11第25図-1
- 図版28 SJ11第25図-2 SJ12第28図-1 SJ12第28  
図-2 SJ12第28図-3 SJ12第28図-4  
SJ12第28図-5
- 図版29 SJ12第28図-6 SJ12第28図-7 SJ12第28  
図-8 SJ12第28図-11 SJ12第28図-12  
SJ12第28図-13
- 図版30 SJ12第28図-14 SJ12第29図-15 SJ12第  
29図-16 SJ12第29図-17 SJ12第29図-  
18 SJ12第28図-20
- 図版31 SJ12第29図-21 SJ12第28図-22 SJ13第  
35図-1 SJ13第35図-2 SR1第39図-3  
SK154第57図154-1
- 図版32 SK215第57図215-1 SK218第57図218-1  
SK219第57図219-1 SK219第57図219-2  
SK231第58図231-1 SK231第58図231-2
- 図版33 SK235第57図235-1 SK238第57図238-1  
SK251第57図251-1 SK268第57図268-1  
SK276第58図276-1 SK276第58図276-2
- 図版34 SD11第77図11-1 SD30・31・32第77図30・  
31・32-3 同俯瞰 SD30・32第77図30・32-  
4 同俯瞰 SD30・32第77図30・32-5 同俯  
瞰 SD30・32第77図30・32-6
- 図版35 同俯瞰 SD30・32第77図30・32-7 同俯瞰  
SD46第77図46-6 SD46第77図46-9 同俯  
瞰 SD47第77図47-2 グリッド出土第79図  
E5-1
- 図版36 グリッド出土第79図H22-1 グリッド出土第  
79図H21-1 グリッド出土第80図I21-1  
グリッド出土第81図G22-8 グリッド出土第  
81図G22-9 グリッド出土第84図H22-1  
グリッド出土第84図G23-2 グリッド出土第  
86図表-3
- 図版37 土器展開写真(1)
- 図版38 土器展開写真(2)
- 図版39 第1号住居跡出土土器 第2~7号住居跡出土  
土器
- 図版40 第8~11号住居跡出土土器 第12号住居跡出  
土土器(1)
- 図版41 第12号住居跡出土土器(2) 第12号住居跡出  
土土器(3)
- 図版42 第12号住居跡出土土器(4) 方形周溝墓出土土  
器(1)
- 図版43 方形周溝墓出土土器(2) 方形周溝墓出土土器  
(3)
- 図版44 土壙出土土器(1) 土壙出土土器(2)
- 図版45 土壙出土土器(3) 溝出土土器
- 図版46 グリッド出土土器(1) グリッド出土土器(2)
- 図版47 グリッド出土土器(3) グリッド出土土器(4)
- 図版48 出土陶磁器(1) 出土陶磁器(2)
- 図版49 出土土製品 出土石器(1)
- 図版50 出土石器(2) 出土石器(3)
- 図版51 出土石器(4) 出土古銭第77図15-3(表) 出  
土古銭第86図表-7(表) 出土古銭第86図表-  
6(表・裏) 第81号土壙出土陶器第62図81-1

# I 発掘調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

埼玉県は、東京都に隣接するという位置的な関係から、人口の増加が続いている。特に県南部への人口集中が著しく、住宅・土地問題他、交通混雑、環境悪化などの問題が生じている。

このような問題に対して、本県では「環境優先・生活重視」、そして「埼玉の新しい92（くに）づくり」を基本理念として、様々な施策を講じているところである。

住宅・土地問題では、県民が安全で快適な住生活を営むことができるよう、計画的な住宅供給の促進を図るとともに、多様化する県民の住宅需要に対応して居住・住環境の一層の向上を図るため総合的な対策を進めている。県教育局生涯学習部文化財保護課ではこのような施策の推進に伴う文化財の保護について、各事業主体部局等と事前協議をもち、調整を図っている。

県住宅供給公社により騎西町大字騎西地区に計画された住宅団地建設事業については、平成2年5月11日付け埼住公企第49号で、埼玉県住宅供給公社理事長から埼玉県教育委員会教育長あて、事業予定地内における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて照会があった。

事業予定地内には、騎西町No.9遺跡の所在が周知化されていたが、詳細な範囲、時代、内容、遺構密度等が不詳であったため、平成2年6月25日～29日に試掘調査を実施した。その結果、縄文時代中期の住居跡、近世の遺物などを検出した。

この調査結果をふまえ、平成2年7月11日付け教文第173号で、埼玉県教育委員会教育長から埼玉県住宅供給公社理事長あて、次の旨回答した。

1 事業予定地には周知の埋蔵文化財包蔵地（騎西町No.9遺跡）が所在する。

2 事業計画上、やむを得ず現状を変更する場合は文化財保護課と協議すること。

その後、埼玉県住宅供給公社と文化財保護課と取扱いなどについて協議を重ねたが、記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と埼玉県住宅供給公社、文化財保護課の三者で、調査期間、調査経費等について協議し、平成3年2月から調査を開始することとした。文化財保護法57条3項の規定による発掘通知が平成3年1月22日付け3埼住公企第8号で、埼玉県住宅供給公社理事長から提出され、57条1項の規定による発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から平成3年2月4日付け財埋文第787号で文化庁長官あて提出された。発掘調査届に対し、文化庁から平成3年6月7日付け委保第5の370号で指示通知があつた。

調査は平成3、4年度に継続され、これに係る発掘通知は埼玉県住宅供給公社理事長から平成3年3月30日付け3埼住公企第36-2号で提出された。また財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から平成3年3月30日付け財埋文第965号及び平成4年3月31日付け財埋文第957号で提出され、文化庁からのそれぞれ平成3年7月8日付け委保第5の876号、平成4年6月10日付け委保第5の645号で支持通知があつた。

(文化財保護課)

## 2. 発掘調査・報告書刊行事業の組織

主体者	財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団	副部長	梅沢太久夫(H3・4)
(1)発掘調査(平成2~3年度)		第一課長	坂野和信(H2・3)
理事長	荒井修二(H2・3・4)	第四課長	石岡憲雄(H4)
副理事長	早川智明(H2・3・4)	主任調査員	劍持和夫(H2)
常務理事		主任調査員	利根川章彦(H3)
兼管理部長	古市芳之(H2)	主任調査員	西口正純(H4)
常務理事		主任調査員	細田 勝(H4)
兼管理部長	倉持悦夫(H3・4)	調査員	吉田 稔(H4)
理事		調査員	村田章人(H2・3)
兼調査部長	吉川國男(H2)	(2)整理事業(平成6年度)	
理事		理事長	荒井 桂
兼調査部長	栗原文藏(H3・4)	副理事長	富田真也
管理部		専務理事	柄原嗣雄
管理部長	古市芳之(H2)	常務理事	
管理部長	倉持悦夫(H3・4)	兼管理部長	加藤敏昭
主査	松本 晋(H2・3)	理事	
主査	賀田 清(H4)	兼調査部長	小川良祐
庶務課長	高田弘義(H2・3)	管理部	
庶務課長	萩原和夫(H4)	管理部長	加藤敏昭
主事	岡野美智子(H2)	庶務課長	及川孝之
主事	長滝美智子(H3)	主査	市川有三
主事	菊池 久(H4)	主事	長滝美智子
経理課長	関野栄一(H2・3・4)	主事	菊池 久
主任	江田和美(H2・3・4)	専門調査員	
主事	本庄朗人(H2)	兼経理課長	関野栄一
主事	斎藤勝秀(H2)	主任	江田和美
主事	長滝美智子(H4)	主事	福田昭美
主事	福田昭美(H3・4)	主事	腰塚雄二
主事	腰塚雄二(H3・4)	資料部	
主事	菊池 久(H3)	資料部長	塩野 博
調査部		資料部副部長	
部長	吉川國男(H2)	兼整理第一課長	谷井 彪
部長	栗原文藏(H3・4)	主任調査員	吉田 稔
副部長	塩野 博(H2)		

### 3. 発掘調査・報告書作成の経過

修理山遺跡の調査は、平成3年2月から平成4年11月まで、一時中断期間をおいて2カ年にわたって実施された。調査対象面積は、12740m<sup>2</sup>であった。調査区は、東西に長い鍵形になり、北側と東側に浅い谷地部が入る。調査区は、以前水田耕作地として利用されていたため、調査区内の湧水および流水が多く、排水設備を構じて調査を実施した。しかし調査全般をとおしては、水害により苦慮する状態がたびたび生じた。調査は、3年度にまたがり、検出された遺構数も多いため、細かい経過を省略し、調査概要を年度ごとに記すこととする。

平成2年度の調査は、平成3年2月から開始された。2月当初からプレハブ建設工事に入り、これと並行して調査区中央部の表土除去を開始した。調査区は、流水があるため排水構を設けて表土を除去した。2月10日より、調査区北側に広がる、谷地部の第1次調査を実施した。2月末より、調査区中央部約1000m<sup>2</sup>の遺構確認調査に入り、住居跡・溝等の遺構が確認された。3月に入って検出された遺構の精査を実施した。3月末に本遺跡の次年度への継続が決定したため、調査区内の遺構保存処置を行い調査区を閉鎖して調査を終了した。なお、表土除去面積は、4000m<sup>2</sup>であった。

平成3年度の調査は、4月9日より開始された。先年度の調査に引き続き遺構の精査を進めた。またこれと並行して調査区を東西方向に拡張するため、表土の除去が行われた。発掘調査は、遺構確認、遺構精査、写真撮影、測量の順で進められ調査区拡張部分へと移行していった。調査途中で委託者側との計画変更があり8月末に調査区全体の航空測量を実施し、8月31日までにプレハブ等を撤去して調査を終了した。調査面積は先年度分を含めて7800m<sup>2</sup>であった。また、調査した遺構は、住居跡9軒、土壙186基、溝28条であった。

平成4年度の調査は、用地未買収で計画変更になった部分のうち3700m<sup>2</sup>を対象として調査を行った。調査区は、調査区中央東よりの一画及び北側の半島状の部分であった。4月よりプレハブの建設工事を行い、これと並行して調査区内の表土を除去した。表土除去にあたっては、事前に排水設備を施して実施した。5月より遺構の確認調査を中央よりの一画から行い、遺構精査・写真撮影・測量へと作業を進めた。6月に入り北側の調査区へ移動し調査を行った。7月24日には、航空測量を実施した。調査途中で委託者側との計画変更があり、北側調査区に接して調査区西側1240m<sup>2</sup>の調査区拡張と調査期間の延長が行われた。このため北側調査区を7月31日に終了して、引き続き拡張部分の表土除去を行った。8月に入り遺構確認を行い住居跡・方形周溝墓・溝等の遺構を確認した。また調査区北側の谷地部分に、縄文時代後期の遺物包含層が形成されていることが判明したので、並行して遺物包含層の掘り下げ調査を行った。9月に入り遺構精査、写真撮影、測量へと調査を移行し、11月25日に航空測量を行い発掘調査を終了した。また11月30日までにプレハブ等の撤去を行い全ての調査を終了した。本年度に検出された遺構は、住居跡4軒、方形周溝墓3基、土壙120基、溝22条であった。

整理作業は、平成6年7月1日より開始し、平成7年3月31日まで実施した。7月当初から図面整理・遺物接合・復元を行い、順次遺物実測・拓本・トレスを行った。11月より写真撮影・版組・割り付けを行い、原稿の執筆を開始した。2月に原稿執筆・編集を終了し、印刷製本に入り校正をへて、3月31日に報告書を刊行した。

## II 遺跡の立地と環境

修理山遺跡は、埼玉県北埼玉郡騎西町大字騎西字修理山に所在し、縄文時代早期から近世にまたがる複合遺跡である。遺跡は、JR高崎線鴻巣駅から4km北東に、東武伊勢崎線加須駅から1.4km南西に位置する。

騎西町は、北埼玉郡の南部に位置するが、かつては郡の西辺に位置する意味の呼び名として、使われていた。町の北東は加須市に、西は行田市および川里村に、南は南埼玉郡菖蒲町および鴻巣市に接する。

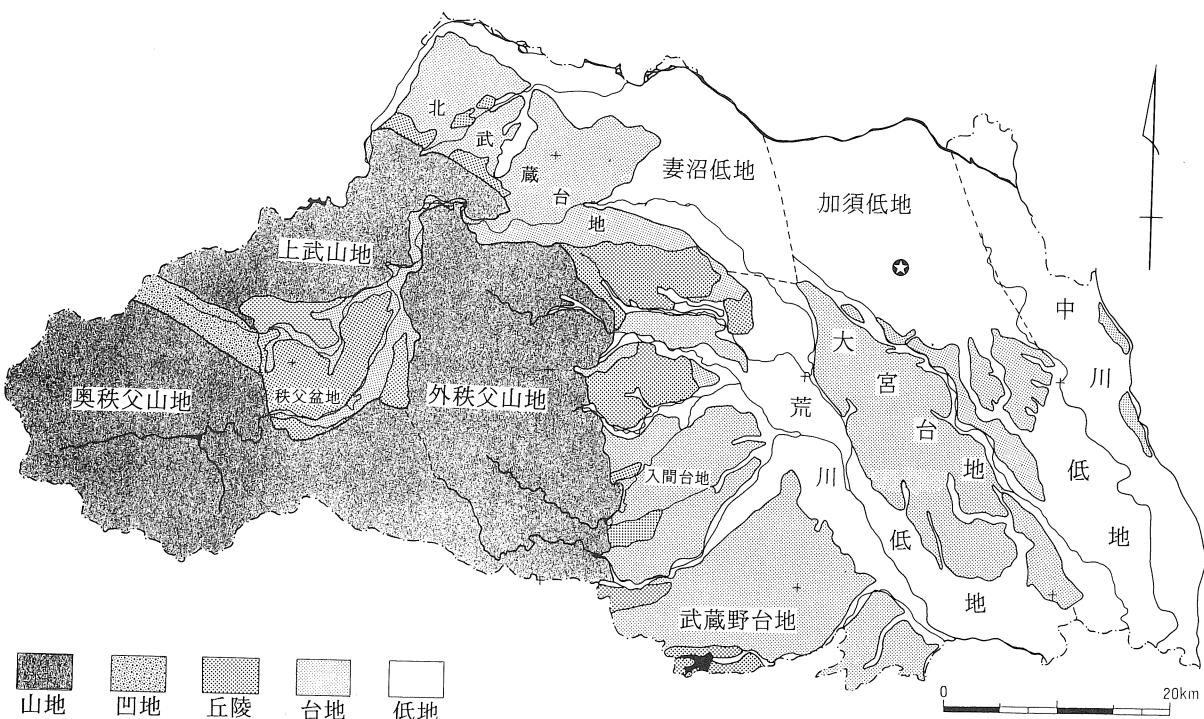
遺跡周辺部の地形は、大宮台地から連なる台地が埋没する地域にあたり、また加須低地の南部に位置する。周辺地域には、北西から南東へ連なる幾筋もの微高地とその後背湿地からなり、中川水系に属する見沼代用水が町の南側を南東流し、北側を新川用水が、東流している。

遺跡の標高は12mで、北西方向に緩やかに傾斜し、水田部との比高差は1mである。遺構は埋没したローム

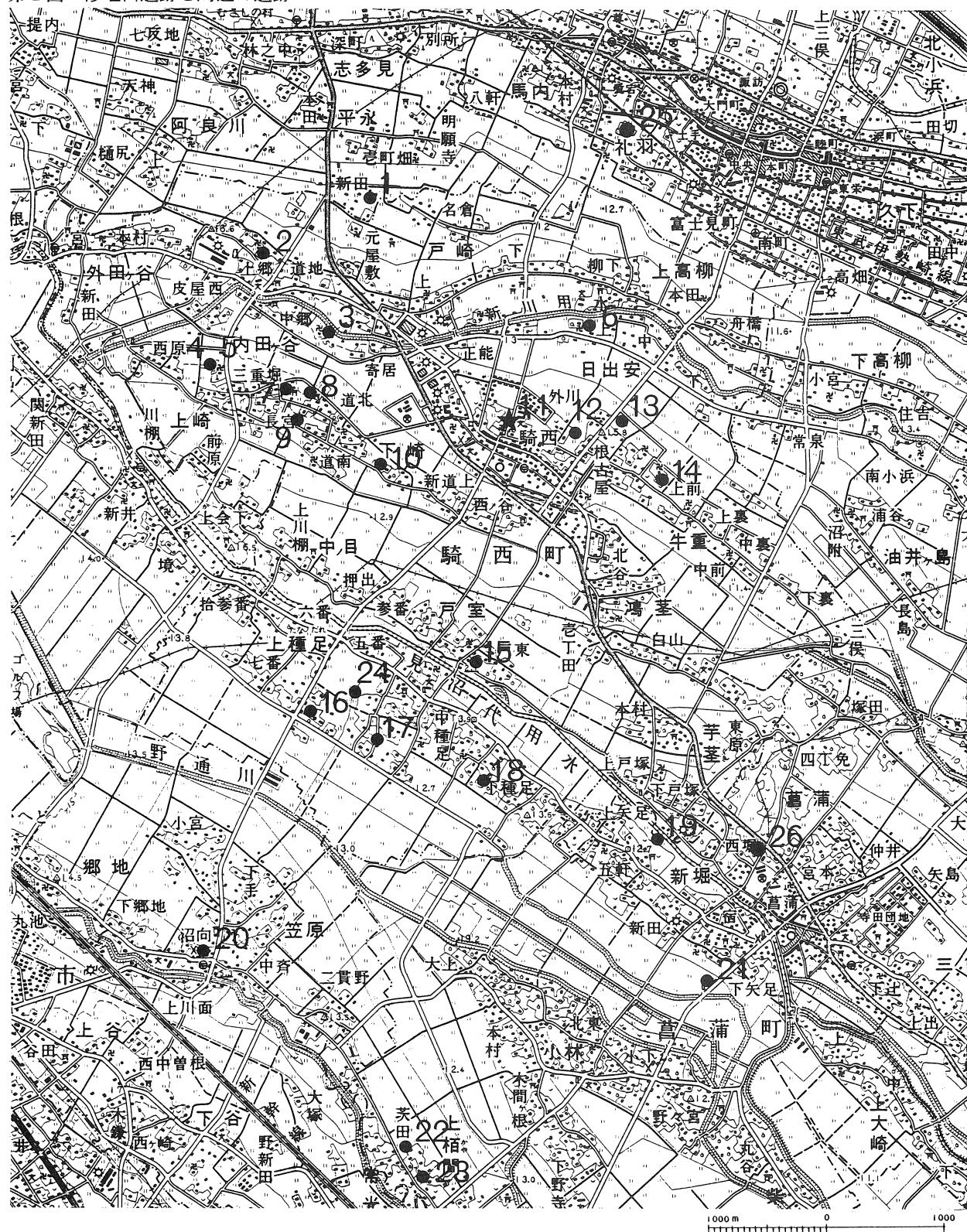
台地上に立地しているが、遺構の中心部を占める地区は、以前から一部畑作地として利用されていたことから、微高地状を成していたと考えられる。また、近年の中川水系総合調査の分析結果から、本遺跡の中心となる縄文時代のローム台地の埋没化は、縄文時代後期から晩期に開始されたことが明らかとなった。よって、本遺跡周辺の環境も起伏に富んだ地形を成し、現在の大宮台地南部の様相を呈していたと推察される。このことは、調査区北側に広がる谷地部に形成された、縄文時代後期(堀之内式期)の遺物包含層の、泥炭状堆積によって検証される。

本遺跡から検出された遺構・遺物は、縄文時代早期から始まるが、縄文時代早期の遺跡は、私市城発掘調査の際に出土した遺物を除き、県内北東部には所在しない。最も近い遺跡では、川里村赤城遺跡の他に鴻巣市内の台地部に認められる。これは埋没ローム台地の

第1図 埼玉県の地形区分



第2図 修理山遺跡と周辺の遺跡



- 1.戸崎城跡 2.多賀谷氏館跡 3.道智代館跡 4.足利持氏・春王・安王供養塔 5.龍興寺の青石塔婆 6.保寧寺中世墓  
7.上崎旧石器時代遺跡 8.下崎古墳時代遺跡 9.上崎・下崎古墳時代遺跡 10.中郷遺跡 11.修理山遺跡 12.萩原遺跡  
13.騎西城跡 14.騎西城武家屋敷跡 15.弁天塚のモッコク 16.三番遺跡 17.種垂遺跡 18.五番遺跡 19.物見塚古墳  
20.笠原古墳群 21.菖蒲城跡 22.夫婦塚古墳 23.禿塚古墳 24.小沼耕地遺跡 25.礼波遺跡 26.西堀遺跡

調査が少ないため、将来この地域における遺跡の発見に期待される。縄文時代中期の遺跡は、川里村赤城遺跡が埋没ローム台地上に立地し、鴻巣市赤台遺跡、北本市上手遺跡など大宮台地上に多く分布している。また、加須市礼波遺跡(25)から阿玉台式土器が出土し、これら埋没ローム台地上に潜在的に遺跡が存在している状況を窺い知ることができる。縄文時代後期には、川里村赤城遺跡、鴻巣市中三谷遺跡などがあり、いずれも内湾する台地縁辺部傾斜面に弧状に集落が形成されている。本遺跡も谷地部に向かう傾斜面に住居跡が検出され、谷地部の地形からみて、同様の集落形態を形成すると考えられる。本遺跡では、縄文時代晩期の遺物は、大洞C式土器破片1点が採取されたにすぎない。

しかし周辺部では、川里村赤城遺跡を始めとし、羽生市発戸遺跡、菖蒲町地獄田遺跡、桶川市後谷遺跡、大宮市寿能泥炭層遺跡、岩槻市裏慈恩寺遺跡、真福寺遺跡、

田端前遺跡など、中川水系に面した埋没ローム台地を含む、台地末端部の沖積低地との変換部に立地する傾向が窺える。

これとは反対に弥生時代中期までの遺跡は、周辺地域には見当たらず、岡部町四十坂遺跡、深谷市上敷面遺跡、熊谷市横間栗遺跡、行田市池上・小敷田遺跡などの県北部及び東松山市周辺部、大宮台地南部などの荒川水系地域に多くの遺跡が分布している。これは、当時の生産基盤となる水田耕作地に適した後背湿地及び谷地部が形成されず、河川の氾濫の多い地域であった可能性も考えられるが、周辺地域にも当該期の遺跡の発見が期待される。この状況は、弥生時代後期にいたっても認められるが、菖蒲町西堀遺跡(26)では、前野町式の土器が出土している他、同期の遺跡は鴻巣市域などの大宮台地上に分布している。

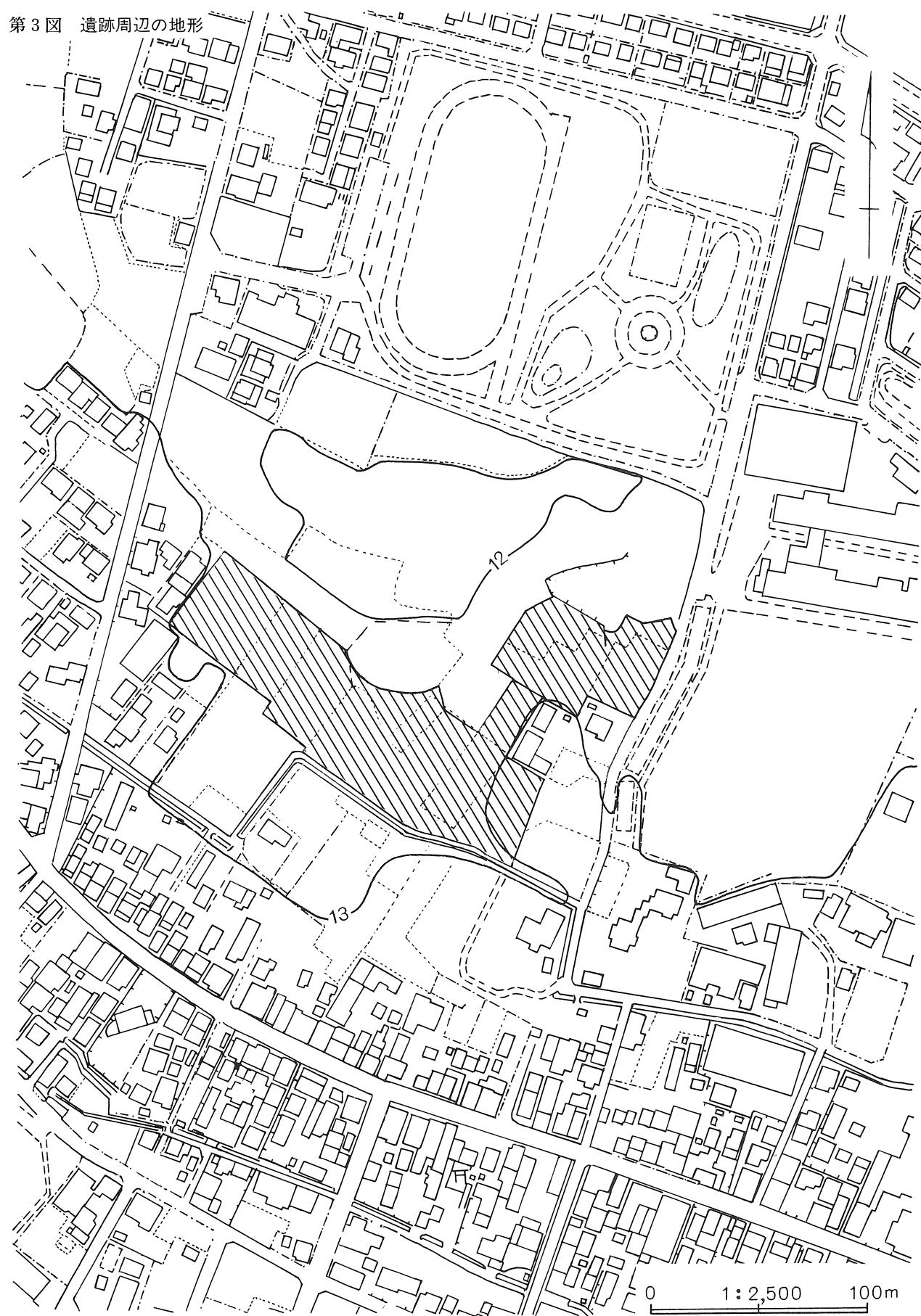
古墳時代前期に入ると本遺跡周辺部でも遺跡が増加してくる。本遺跡からは、前期(五領式期)の方形周溝

墓が検出されており、周辺部に集落跡が存在する可能性が高い。また小沼耕地遺跡(24)では、同期の方形周溝墓5基と住居跡1軒が検出されている。このうち方形周溝墓の方台部からは、4本の方形配置となると考えられる柱穴が検出され上屋構造が想定されている。この他周辺部では、行田市鴻地・武良内・高畠遺跡が方形周溝墓を伴う集落遺跡として発掘調査されている。古墳時代後期には、上記の小沼耕地遺跡で帆立貝式古墳が検出された他、加須市及び羽生市で埋没古墳が確認されている。隣接する鴻巣市では、笠原古墳群(20)及び埴輪窯跡を伴う生出塚古墳、新屋敷遺跡、集落跡として中三谷遺跡が所在する。また、北西には辛亥銘手鉄剣を出土したことで知られる、埼玉古墳群がある。

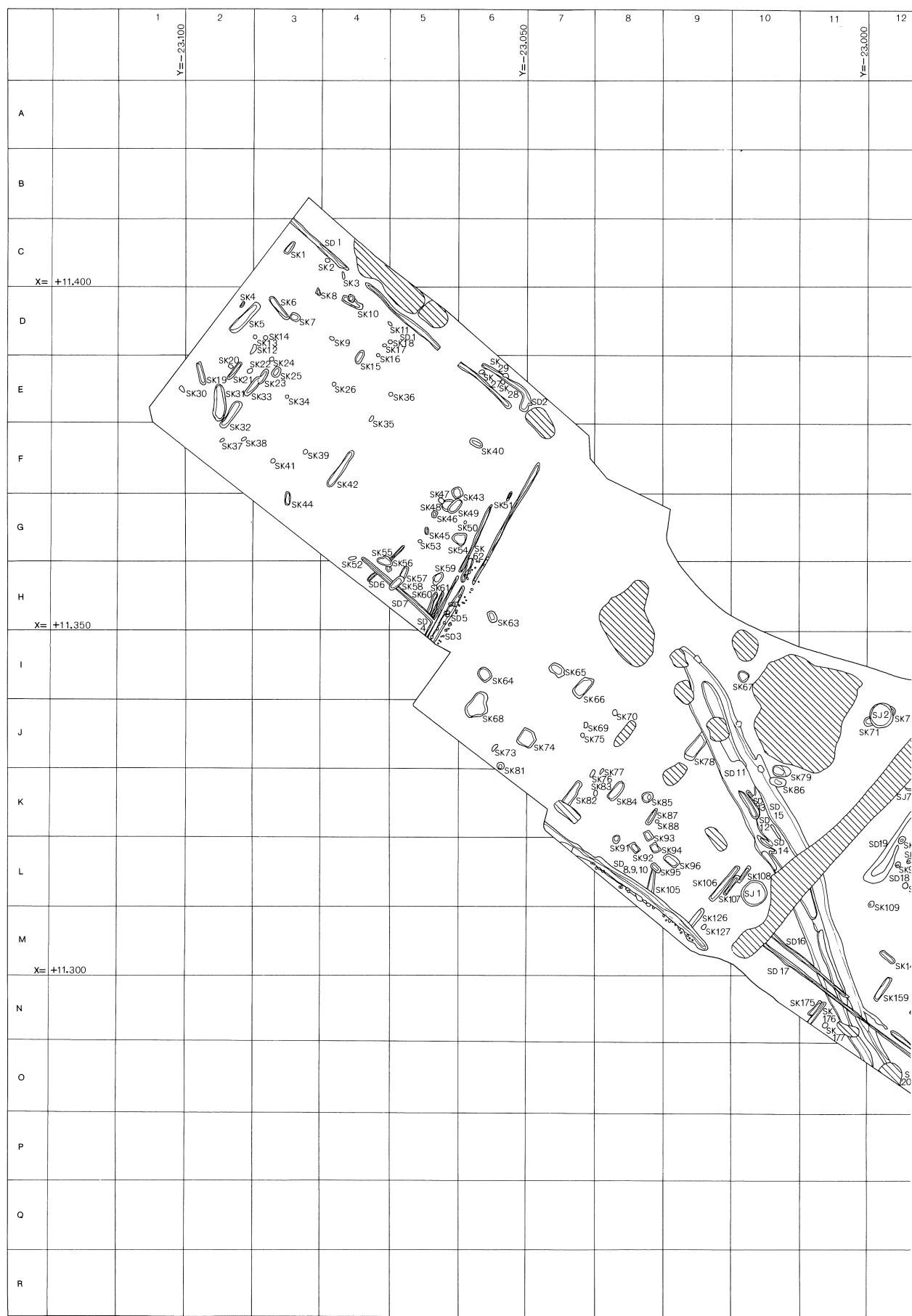
古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての集落は、近年の国道17号深谷バイパス発掘調査及び上武国道発掘調査の事例から、自然堤防部に立地することが判明し、加須市水深遺跡などと同様に、本遺跡周辺部の自然堤防上に、集落跡が検出される可能性がある。

古代末に入ると武藏七党の一つである私市党の発祥の地として、歴史上に登場してくる。以降周辺部には、多くの館跡が築かれ現在も一部遺構として残っているものもある。また、小沼耕地遺跡のように発掘調査によって本来の種足館跡より一時代古い遺構が検出されたところもある。なかでも近年騎西町教育委員会によって調査が進められている私市城(騎西城)の調査は、注目されている。発掘調査は昭和55年に開始され、多くの遺構・遺物が出土している。特に二重に廻る障子堀は、全国でも最大級のものである。また、歴史上からも戦国時代における上杉氏と北条氏との攻防の地として登場し、これら発掘調査によって得られた資料は、当時の歴史事情を解明する上でたいへん貴重なものである。その後私市城は、江戸時代初期に廃城となつたが、町場として栄え現在に至っている。

第3図 遺跡周辺の地形



第4図 遺跡全測図





### III 遺跡の概観

修理山遺跡は、大宮台地北東部の加須低地に移行する埋没台地上に位置する。遺跡は、東方向に開口する支谷の湾入部に位置し、東に南東流する新川用水を臨む。調査区の標高は、12mで西側調査区北東側に傾斜している。周辺低地部との比高差は1mである。

今回の発掘調査で検出された遺構は、縄文時代早期の炉穴4基、縄文時代中期の竪穴式住居跡10軒、縄文時代後期の竪穴式住居跡3軒、縄文時代の落とし穴1基、古墳時代前期の方形周溝墓3基、土壙276基、中世から近世にかけての溝49条、柵列1列であった。

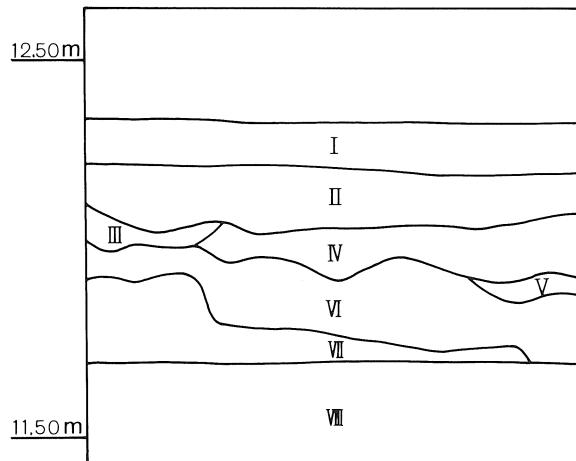
縄文時代早期の炉穴は、E-5グリッド周辺部にまとまって検出され、遺構周辺部からは、条痕文系の土器が出土した。縄文時代中期から後期にかけての住居跡群は、支谷に沿う様にして弧状に配置していたが、騎西町教育委員会の発掘調査では、該期の住居跡が検出されておらず、2群に別れる可能性がある。縄文時代中期加曾利式に属する第1号住居跡からは、炉体土器、埋甕に伴って一括土器の良好なセットが出土した。また、第6号住居跡炉跡出土土器と第8号住居跡出土炉体土器が接合した。縄文時代後期・堀之内式に属する第12号住居跡では、1700点にのぼる遺物が出土し、当該期の良好なセットを構成していた。この住居跡の北東側斜面に形成された包含層からは、縄文時代後期・堀之内式期の遺物が多量に出土した。同期の円形土壙には、断面観察の結果柱穴痕跡と考えられる堆積を示すものがあった。縄文時代に属する出土遺物は、深鉢型土器、浅鉢型土器、注口土器、手捏土器、土製蓋、耳栓、土製円盤、打製石斧、磨製石斧、石鎌、凹石、磨石、石皿、などがあった。

古墳時代前期・五領式に属する3基の方形周溝墓は、いずれも主軸を北西-南東にとり連接して構築されていた。このうち第3号方形周溝墓中央部に、多量の炭化材を含む長方形の土壙が2基検出され、主体部となる可能性がある。該期の遺物は、壺、無頸壺、台付甕、埴

型土器、ミニチュア土器、7点のみ出土した。

中世から近世にかけての遺構は、土壙、溝、柵列が検出された。楕円形をした第45号土壙からは、志野の小皿が出土した。また、長方形をした第66号土壙からは、蓮弁紋が付いた鉢が出土した。柵列は、第3号溝に付随し垣根状に配列していた。第4・5号溝は、道路側溝と考えられ、調査区外にある農道と走行が一致していた。また第8号溝は、調査区外を流れる用水路に平行し付随していた柱穴は、護岸用のものであったと考えられる。この溝からは、14世紀代の常滑甕破片が出土した。第26・27・29号溝は、県道鴻巣・加須線の延長方向に一致し道路側溝と考えられる。またこれらの溝は、町教育委員会の発掘調査区内でクランク状に曲がり、第46・47・48号溝に通じていた。第30・31・32号溝からは、近世の染め付けの皿が多量に出土したことから屋敷に関連する機能が考えられる。

第5図 遺跡基準土層図



- I 暗緑灰色土：耕作土
- II 灰 色：粘質土 浅間A火山灰を含む
- III 黒褐色土：粘質土
- IV 黒褐色土：灰白色粘質土を含む
- V 黄灰色土：砂質土
- VI 灰オリーブ：砂質土 遺物包含層
- VII 黄褐色土：ソフトローム
- VIII 黄褐色土：ローム土

# IV 検出された遺構と遺物

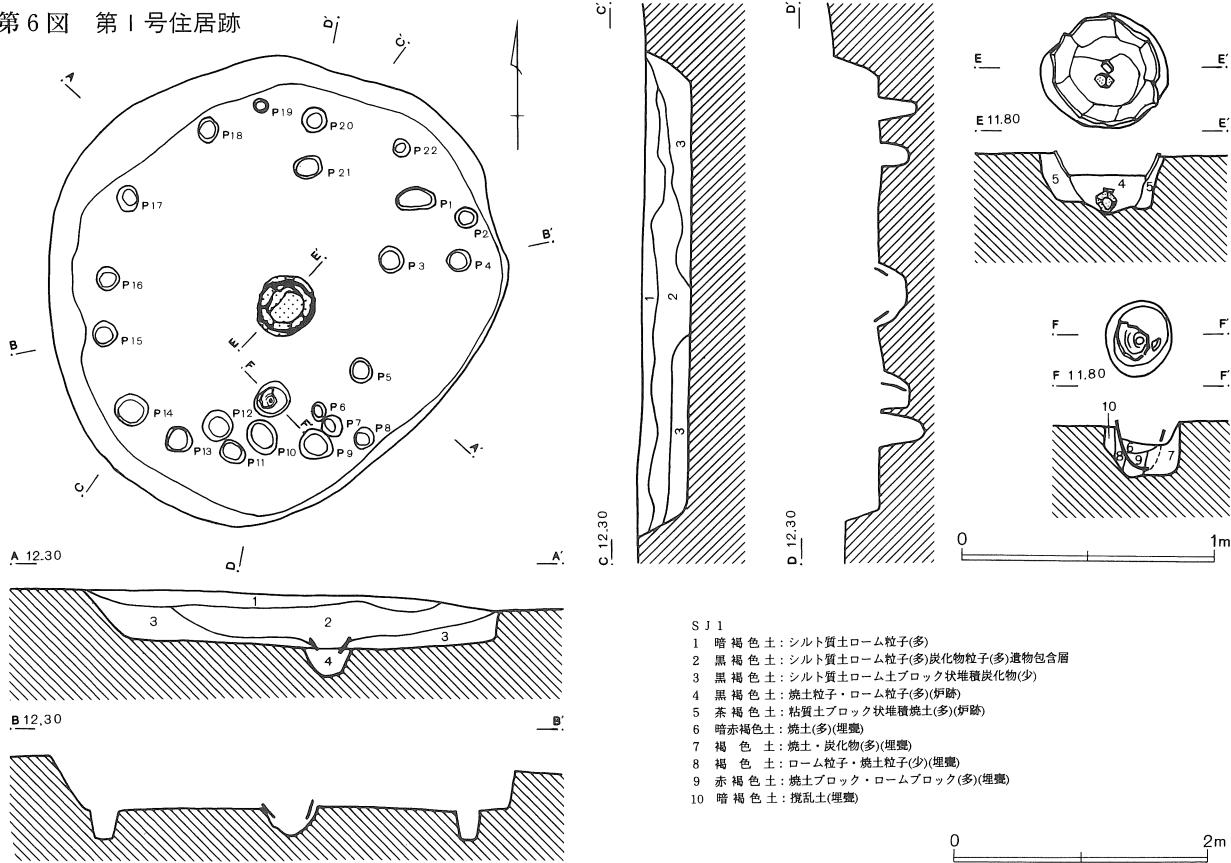
## 1. 住居跡

### 第1号住居跡（第6図）

L-10グリッドに検出された。この遺跡で最も西側に位置していた。平面プランは、北西-南東方向にやや長い不整円形であった。長径3.70m、短径3.40m、深さ0.40mであった。主軸は、炉跡-埋甕間でN-12°-Eであった。床面からは、炉跡、埋甕、柱穴が検出された。床面は軟弱であった。柱穴は、計22本検出され壁側に沿って一周していた。この内P-9、P-12は、出入口部に関連する柱穴と考えられる。深さは、いずれも30cmで円形であった。壁はやや斜めに立ち上がり、壁溝は確認されなかった。炉跡は中央に位置し、土器埋設炉で、第7図1の深鉢形土器胴部が埋設されていた。堀り方は、直径45cm、深さ25cmの円形であった。覆土には、多量の焼土が含まれよく焼けていた。

また、覆土中央より第9図7の磨石が出土した。埋甕は、出入口ピット間に検出された。炉跡に近接しているのが特徴である。直径30cm、深さ23cmの円形の掘り込みに、第7図7の深鉢胴下半部がやや斜位に埋設されていた。また、覆土には、焼土が認められた。出土した遺物は、炉跡埋設土器、埋甕の他、覆土より多量の遺物が出土し、当該期の住居跡の中で最も多かった。土器では、小形の深鉢形土器が多く第7図4のように台が付く深鉢も認められ、台部だけで他に5点が出土した。また、炉跡埋設土器口縁部破片は、住居跡覆土中から出土した。石器では、打製石斧、凹石が多く出土した。

第6図 第1号住居跡



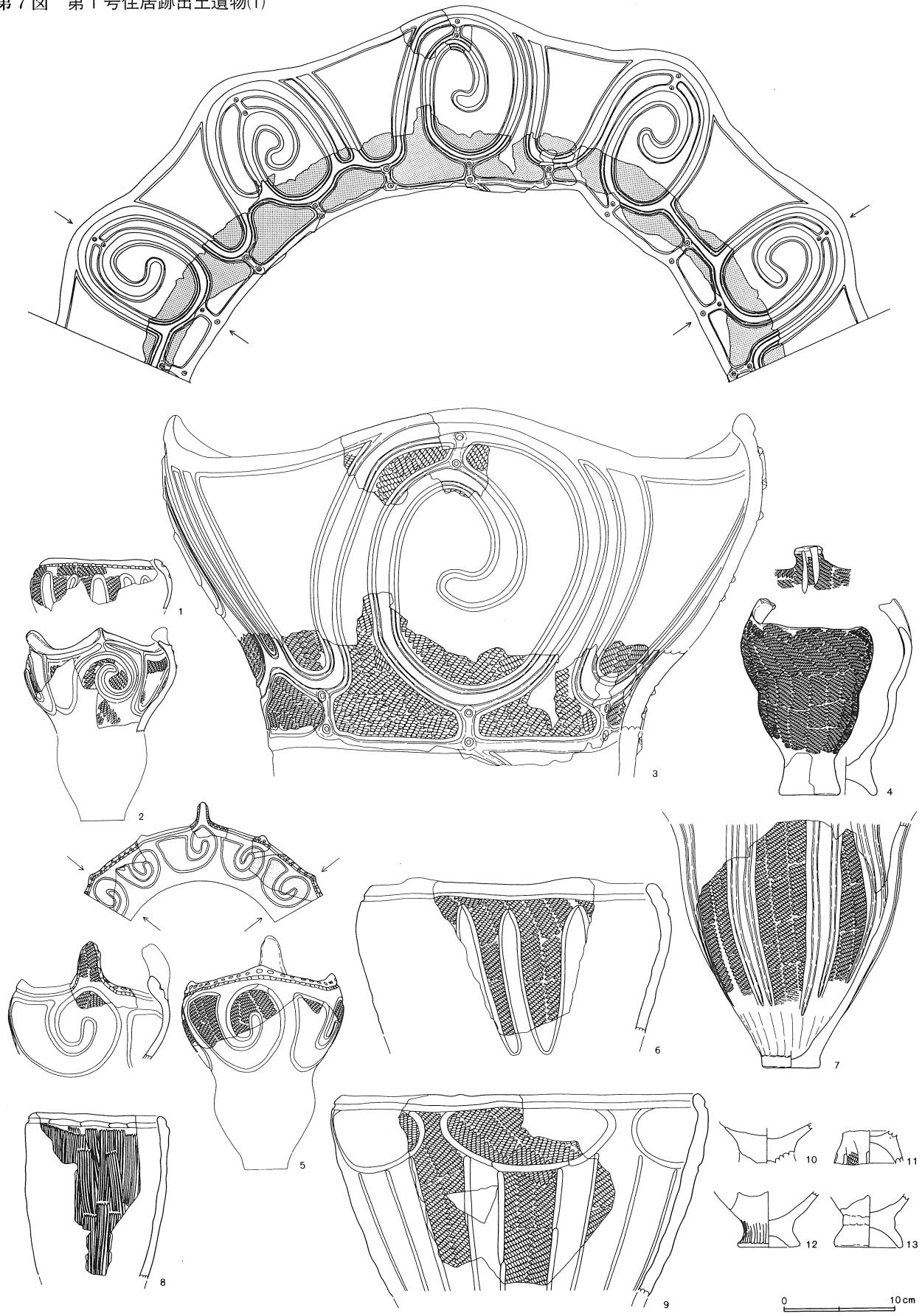
## 第1号住居跡出土遺物(第7・8・9図)

第7図1は口縁部が内彎し胴部が括れる小形の平縁深鉢形土器胴上半部破片である。口縁部無文帯を範状工具による、刺突列を伴う沈線により区画する。区画沈線下に波状沈線文を施文する。波状沈線下は、磨消している。また口縁部区画沈線直下は、地文縄文の施文方向を換えて羽状にしている。2は口縁部が内彎し、胴部が括れ波状口縁を呈する、小形の深鉢形土器胴上半部破片である。口縁部は強く内彎し、外面をナゾリにより無文化して隆帯を形成し、波頂部を突起状に整形している。文様は断面三角形を呈する、2本一対の隆帯により、4単位の渦巻文を描くと考えられる。図上では、一本隆帯による施文部が認められる。隆帯内は、ナゾリにより磨消されている。地文縄文はRLで、渦巻内は充填施文している。3は炉体土器であった。覆土中より同一個体と考えられる口縁部破片が出土し、口縁部までの復元を行った。器形は口縁部が内彎し、胴部が括れ、波状口縁を呈する深鉢形土器と考えられる。文様は、2本一対の隆帯によって渦巻文を4単位描く。2本の隆帯内は磨消され、外側は沈線が巡る。口縁波頂部及び胴部区画隆帯と渦巻文下端部の間には、2個の円孔をもつ隆帯により連結されている。渦巻文は、左巻3、右巻1と考えられる。胴部区画隆帯下に一部垂下する隆帯が認められる。地文は、RL縦位施文である。4は口縁部が内彎し胴部が括れる、小形の平縁台付深鉢形土器である。口縁部に一個の把手が付く。把手外面には2条の範描沈線が垂下する。地文は、LR縄文で胴部上半は斜位に、下半部は縦位に施文する。5は口縁部が内彎し胴部が括れる、波状口縁深鉢形土器胴上半部破片である。口縁部は上下2列の刺突文の下段に一条の横走沈線を配して区画している。4単位の波状口縁部の一箇所に、把手を設けている。文様は沈線により、波頂部に合わせて「J」字状の渦巻文を4単位描いている。区画文様内は縄文を充填施文している。6は口縁部が内彎し胴部が緩やかに括れる、小波状の深鉢形土器胴上半部破片である。沈線により口縁部無文帯を区画し、以下に「W」字状文を描いている。区画沈線内

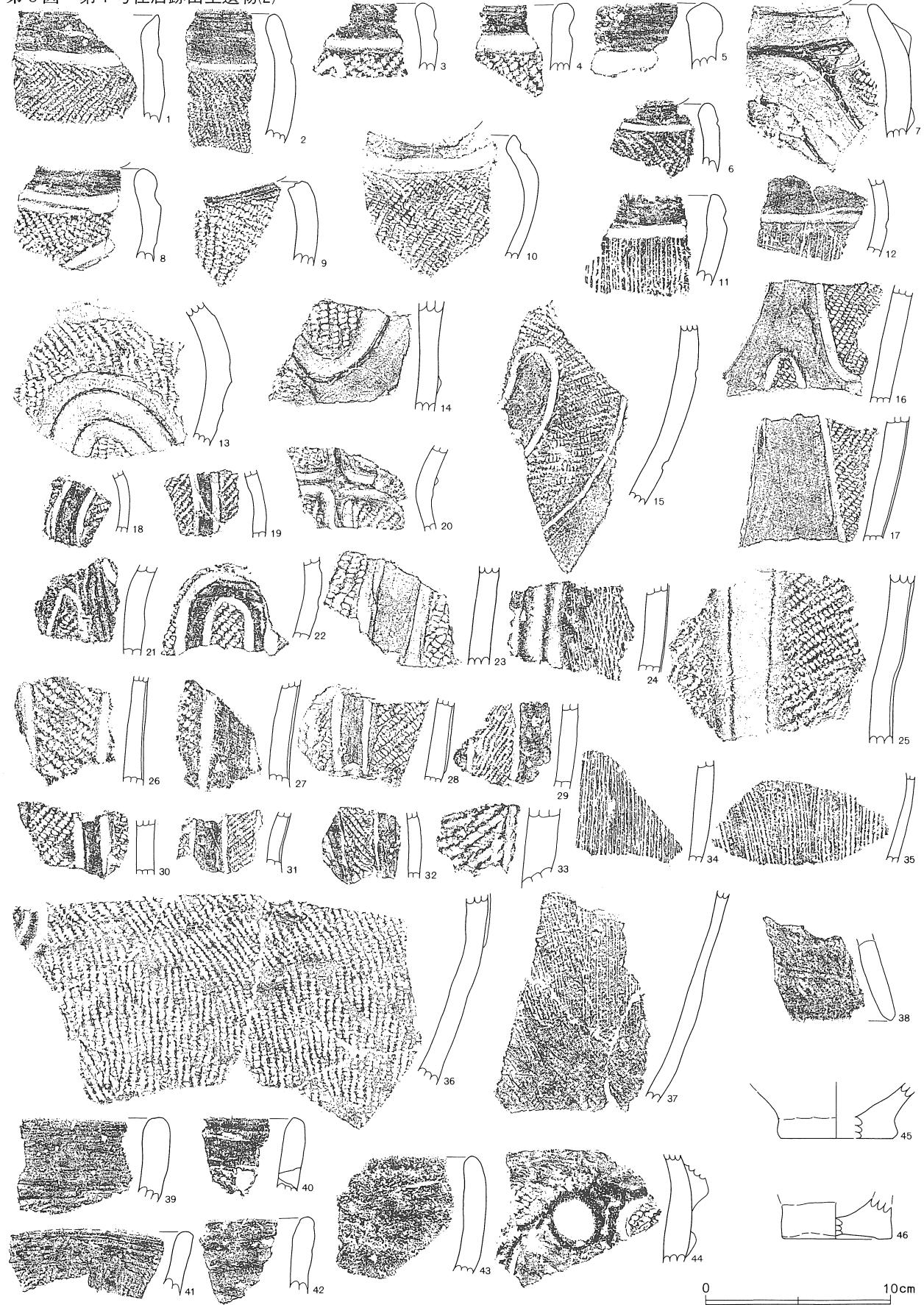
は、RL縄文を縦位に施文している。7は埋甕であった。底部が窄まる深鉢形土器胴下半部である。2本の隆帯により磨消懸垂文を描いている。隆帯の両側はナゾリを施している。地文はRL縄文を縦位に施文している。8は垂直に立ち上がる平縁の深鉢形土器である。口縁部無文帯を幅広の沈線で区画し、以下に条線を施文する。9は口縁部がやや内彎し、直線的に窄まる深鉢形土器である。口縁部文様帯と胴部文様帯をもつ。口縁部文様帯は一条の横走する沈線下に連結して、楕円形の区画文を描いている。胴部文様帯は、幅広の磨消懸垂文を描いている。地文はRL縄文を縦位に施文している。また、楕円形区画文内は斜位に施文している。10~13及び第8図38は台部である。38には円孔がある。第8図1~5は平縁深鉢口縁部である。口縁部無文帯を沈線により区画し、以下縄文を施文している。6~10は波状口縁を呈する深鉢形土器口縁部である。7は口縁部無文帯を隆帯で区画し、以下に渦巻文を描く。11~12は、口縁部無文帯下に条線を施文する。13はナゾリによる2本の隆帯により渦巻文を描く。15は沈線により渦巻文を描く。16~17は、同一個体で、「W」字状文下に交互にして、「Λ」字状文を描く。20は一本隆帯による区画文を描く、深鉢胴部破片である。22は2本の幅広の沈線により、「匂」字状文を描く。23~33は懸垂文を施文する深鉢胴部である。35~37は浅鉢ないしは、両耳壺胴部である。39~43は同口縁部と考えられる。44は両耳壺胴部で、隆帯及び沈線で区画文を描く。

第9図1は撥形の打製石斧である。表面に自然面を残す。両側辺は調整剝離が密である。刃部は曲線を呈し、裏面方向からの剝離により作り出されている。2は短冊形の打製石斧である。表裏面に自然面を残す。側辺は、やや抉りが入る。刃部は肉厚で一部自然面が残る。3は分銅形の打製石斧である。表面に自然面を残す。側辺の抉り込みは、丁寧に調整している。全体に肉厚で、裏面からの成形剝離が著しい。4~7は凹石で敲石としても使用されている。9~10は剝片である。11は石皿の破片である。

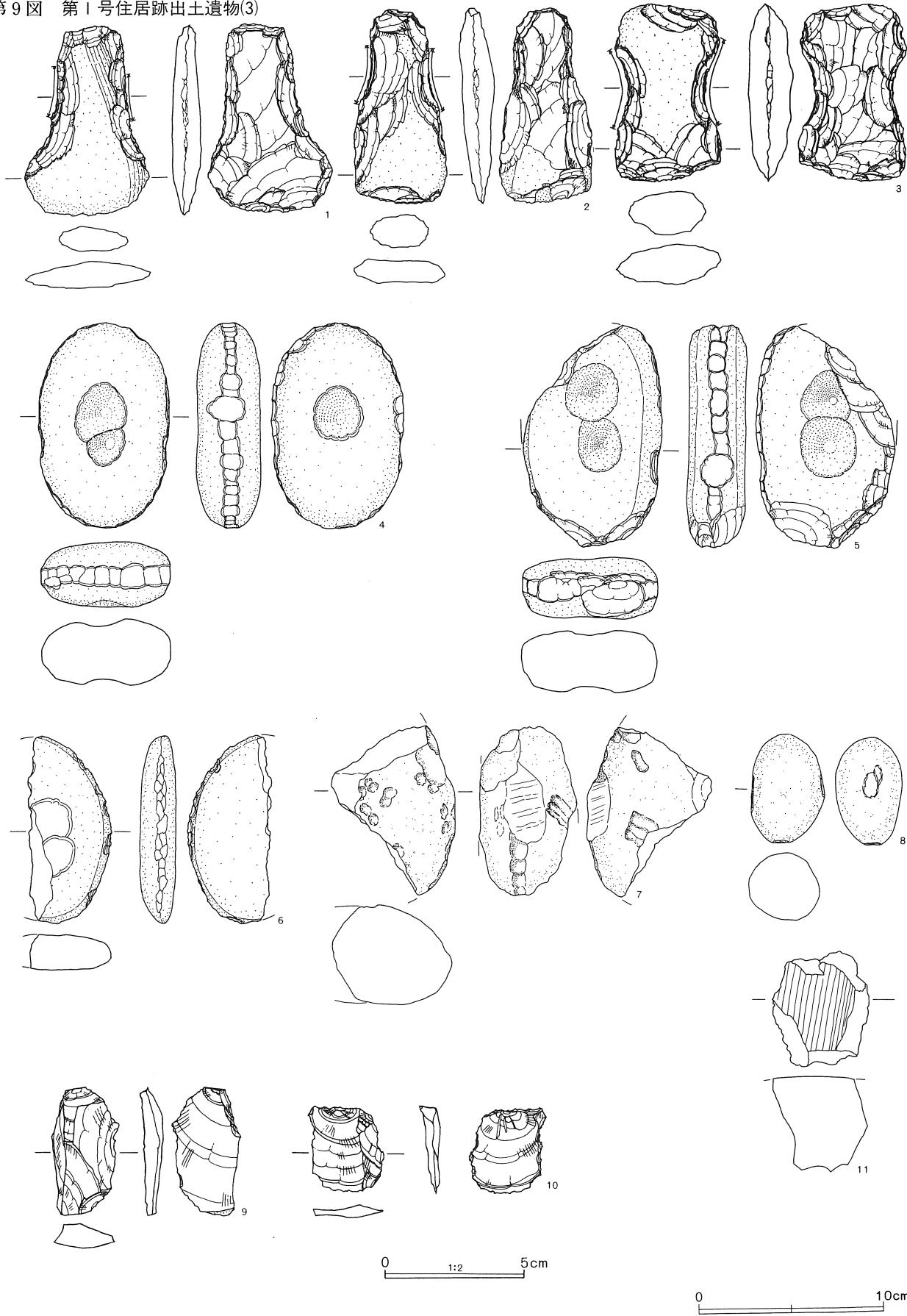
第7図 第1号住居跡出土遺物(1)



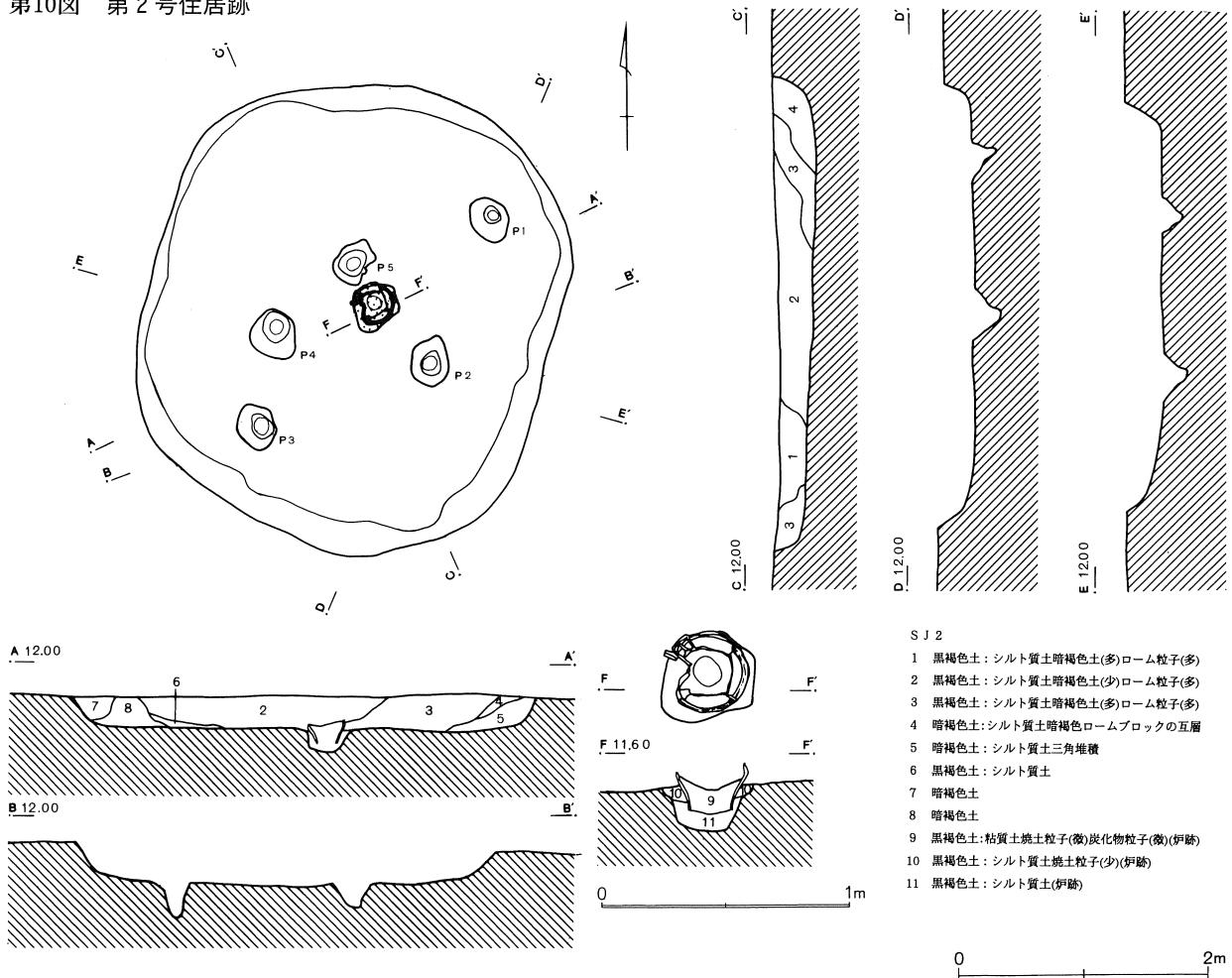
第8図 第1号住居跡出土遺物(2)



第9図 第1号住居跡出土遺物(3)



第10図 第2号住居跡



第2号住居跡 (第10図)

J-12グリッドに検出された。第71号土壙を切っていた。平面プランは、南北方向にやや長い不整円形であった。長径3.70m、短径3.25m、深さ0.25mであった。主軸は、長軸方向でN-20°-Eであった。床面からは、炉跡、柱穴が検出された。柱穴は計4本検出され、炉跡中央よりに2本、壁側に2本であった。深さは、P-3が37cmで、他は19cmで不整形であった。壁はやや斜めに立ち上がり、壁溝は確認されなかった。炉跡は中央に位置し、土器埋設炉で、第14図1のキャリパ一形深鉢土器胴部が、口縁部の一部及び胴下半部を欠いて、埋設されていた。堀り方は、直径60cm、深さ40cmの不整円形であった。覆土には、少量の焼土が含まれていた。

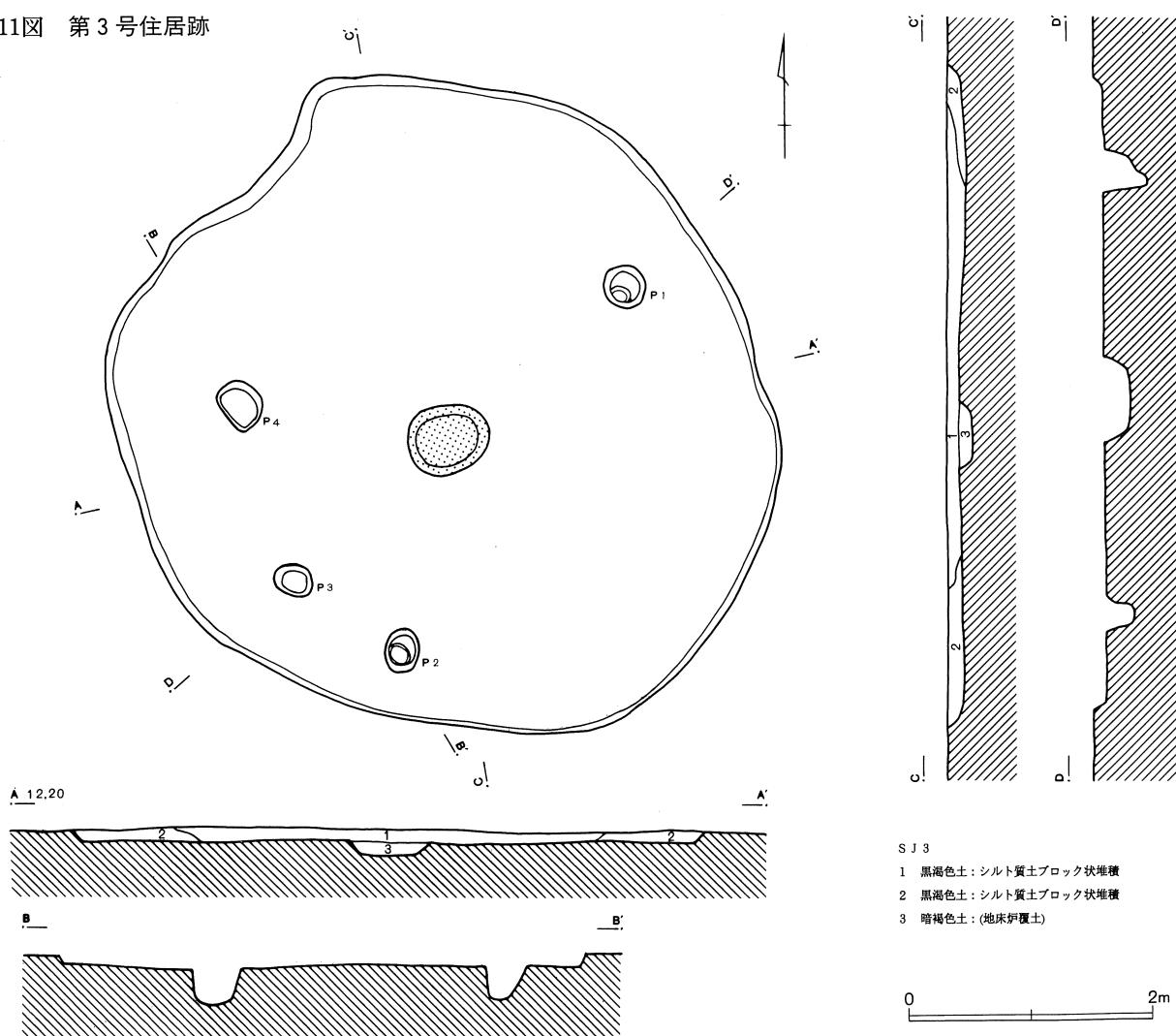
出土した遺物は、炉跡埋設土器の他、覆土より少量の遺物が出土した。

第3号住居跡 (第11図)

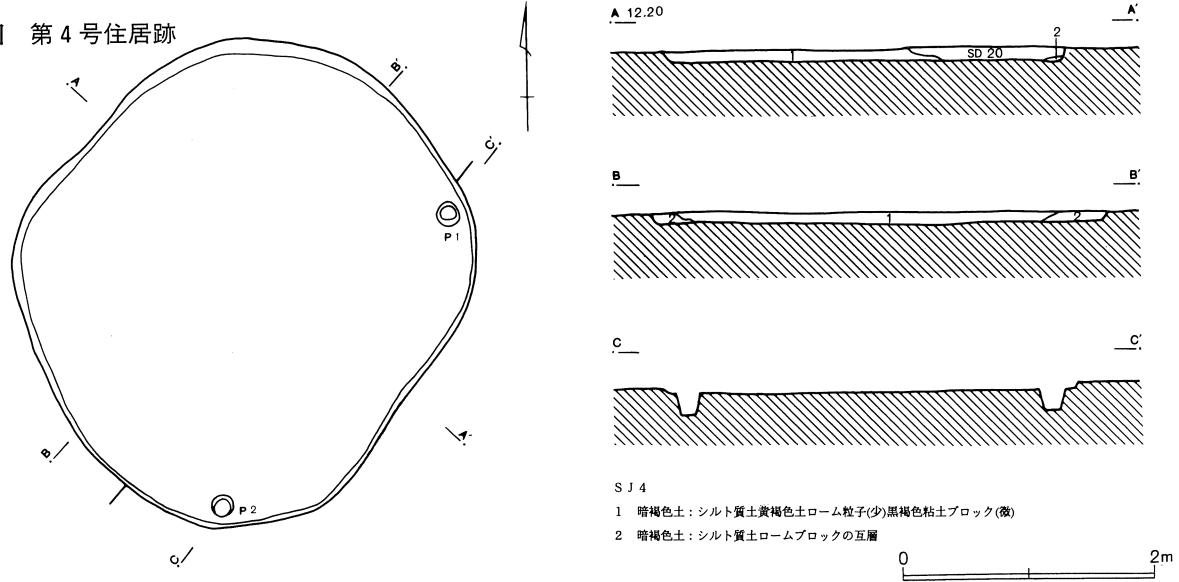
K-13グリッドに検出された。第4号住居跡の東側に近接していた。平面プランは、北西-南東方向にやや長い不整円形であった。長径5.40m、短径5.20m、深さ0.10mであった。主軸は、長軸方向でN-41°-Wであった。床面からは、炉跡、柱穴が検出された。柱穴は、計4本検出され南東壁側よりに3本、北西壁側によりに1本であった。深さは、P-1・3が20cmで、他は26cmで不整円形であった。壁はやや斜めに立ち上がり、壁溝は確認されなかった。炉跡は中央に位置し、地床炉であった。堀り方は、長径65cm、短径55cm、深さ10cmの楕円形であった。覆土には、少量の焼土が含まれていた。

出土した遺物は少なく、第14図1~5の当該期の土器の他に6~12の縄文時代早期、条痕文系土器が出土した。

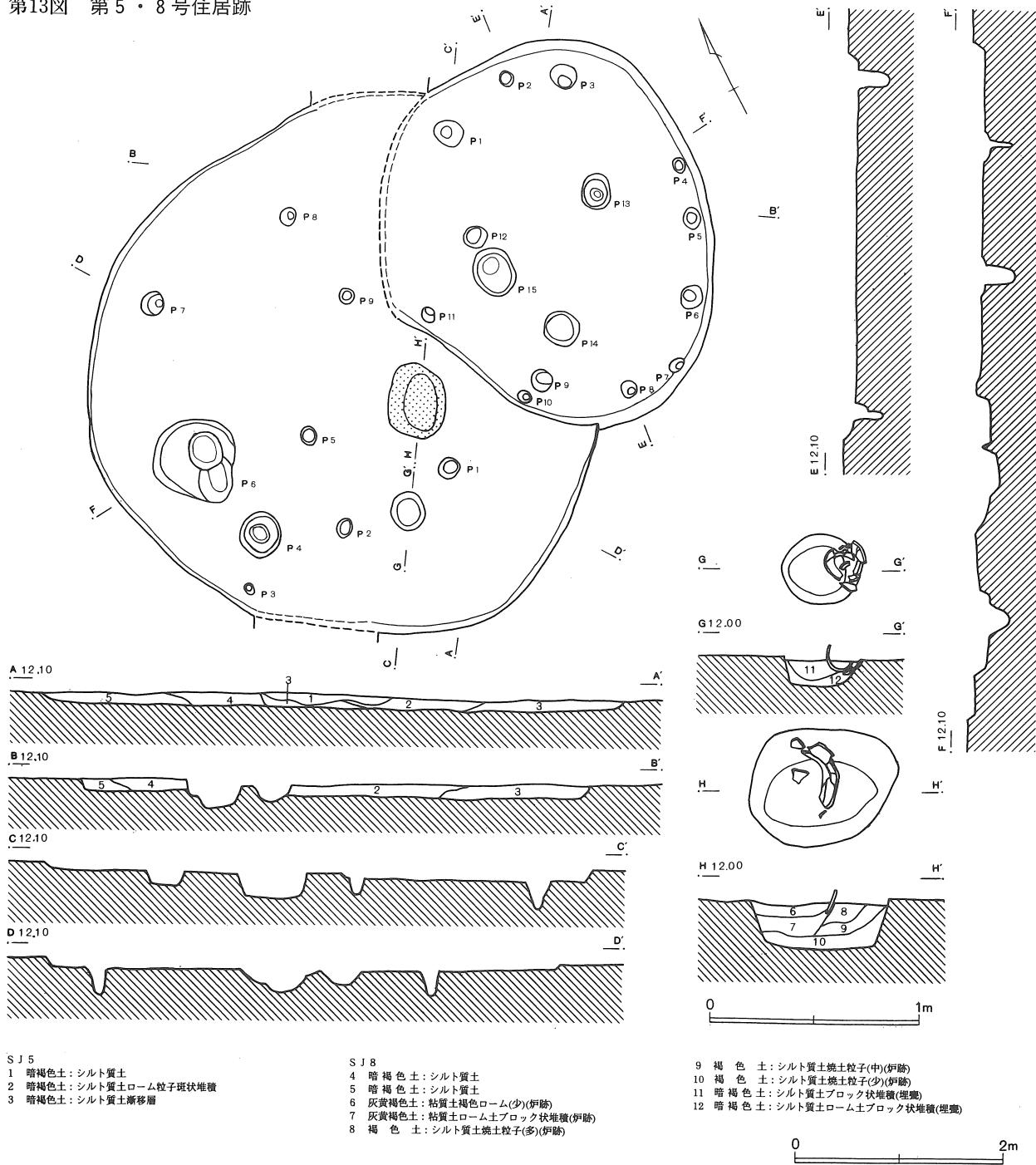
第11図 第3号住居跡



第12図 第4号住居跡



第13図 第5・8号住居跡



第4号住居跡 (第12図)

K-12グリッドに検出された。第7号住居跡を切って いた。平面プランは、不整円形であった。長径3.75m、短径3.20m、深さ0.10mであった。主軸は長軸方 向でN-40°-Eであった。床面からは、柱穴のみ検出 された。柱穴は、計2本検出され南壁際に1本、北東壁 隣に1本であった。深さは19cmで、円形であった。壁は やや斜めに立ち上がり、壁溝は確認されなかった。

出土した遺物は少なく、第14図1~7の土器破片が出土した。

第5号住居跡 (第13図)

M-N-15グリッドに検出された。第8号住居跡を切って いた。平面プランは、南北方向にやや長い不整円形 であった。長径3.65m、短径3.25m、深さ0.10mで あった。主軸は、長軸方向でN-1°-Eであった。床面 からは、柱穴のみ検出された。柱穴は計15本検出され、

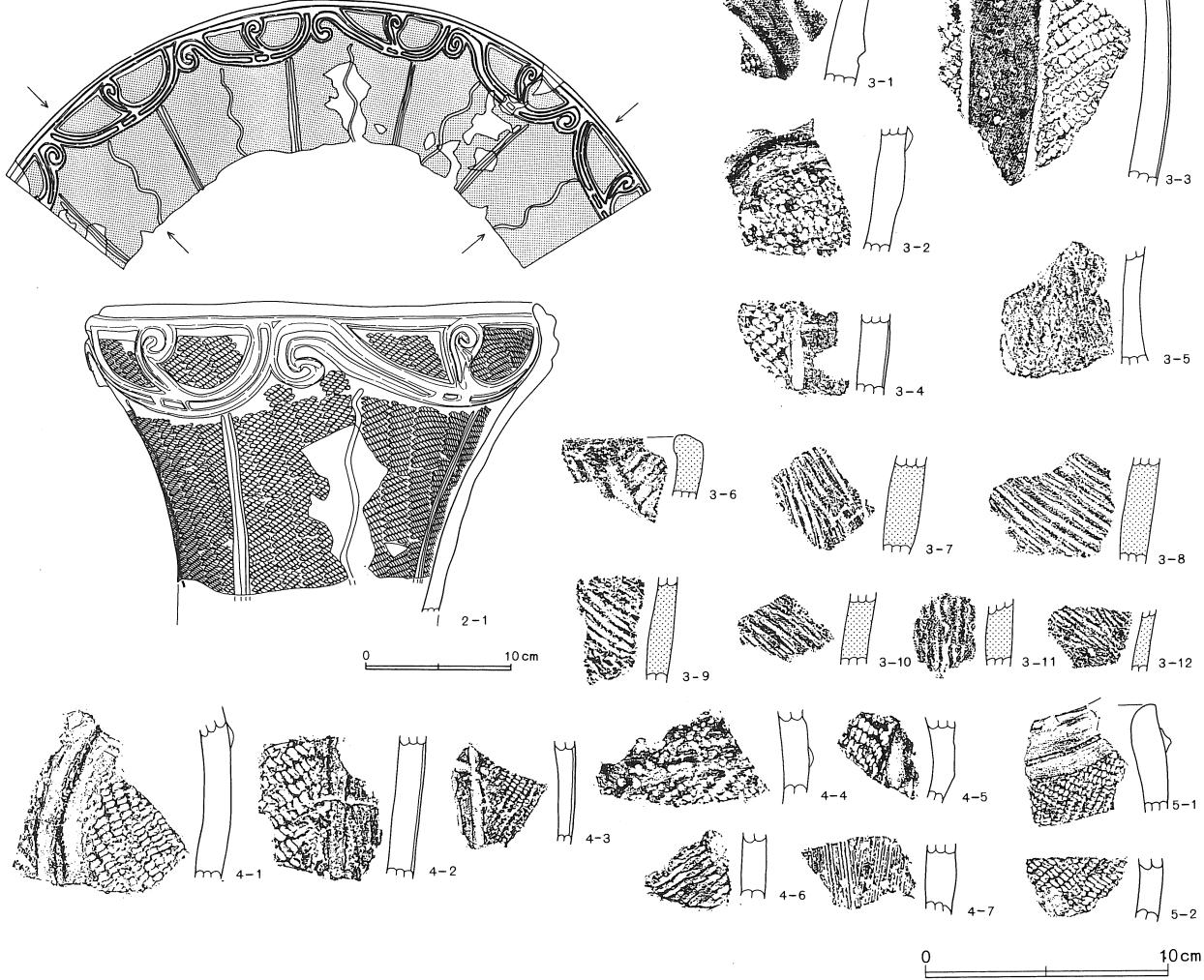
中央より4本、壁側に11本であった。深さは、P-4が4cm、中央部よりのP-12・13・14・15は、26cm～35cm、他は15cm～30cmで円形であった。壁はやや斜めに立ち上がり、壁溝は確認されなかった。

出土した遺物は少なく、第14図1・2の遺物が出土した。

#### 第2・3・4・5号住居跡出土遺物(第14図)

第14図2-1は炉体土器であった。底部からやや外傾して立ち上がり口縁部が内彎する、キャリバー形深鉢土器胴上半部である。口縁部にナゾリを加えて隆帯を作り出している。口縁部文様帶は2本の隆帯による、横位の渦巻文を4単位施文し、渦巻文区画内に隆帯による、縦位の渦巻文を配置する。横位の渦巻文は、最終単位部分を省略している。渦巻文下には、2条の沈線による幅狭の磨消懸垂文と、1条の沈線による蛇行懸垂文

第14図 第2・3・4・5号住居跡出土遺物

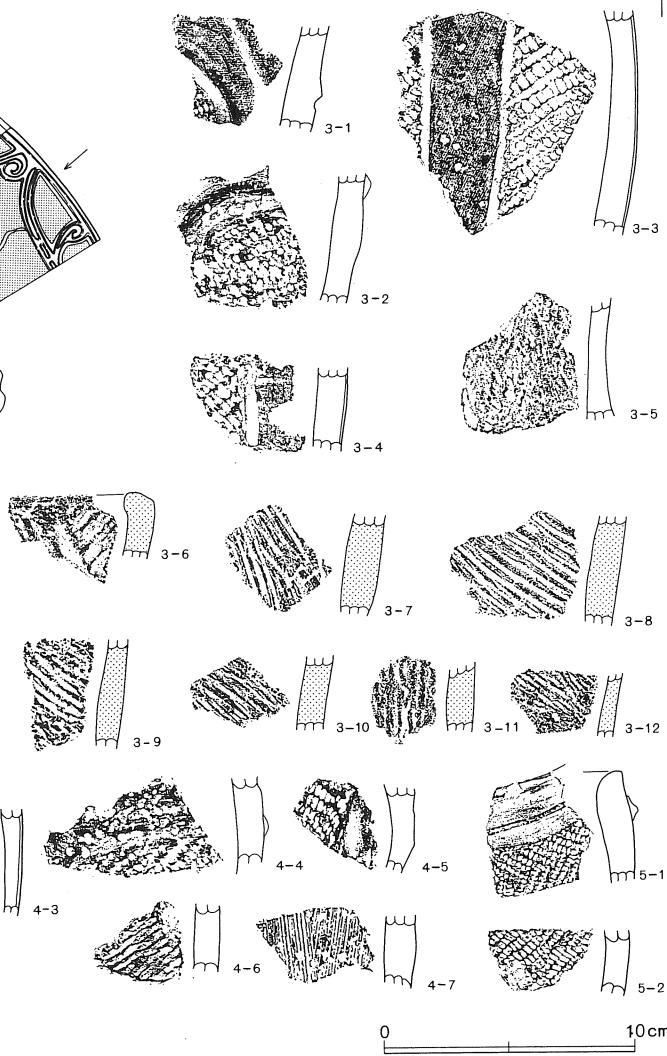


が垂下している。地文はRL縄文を縦位に施文している。

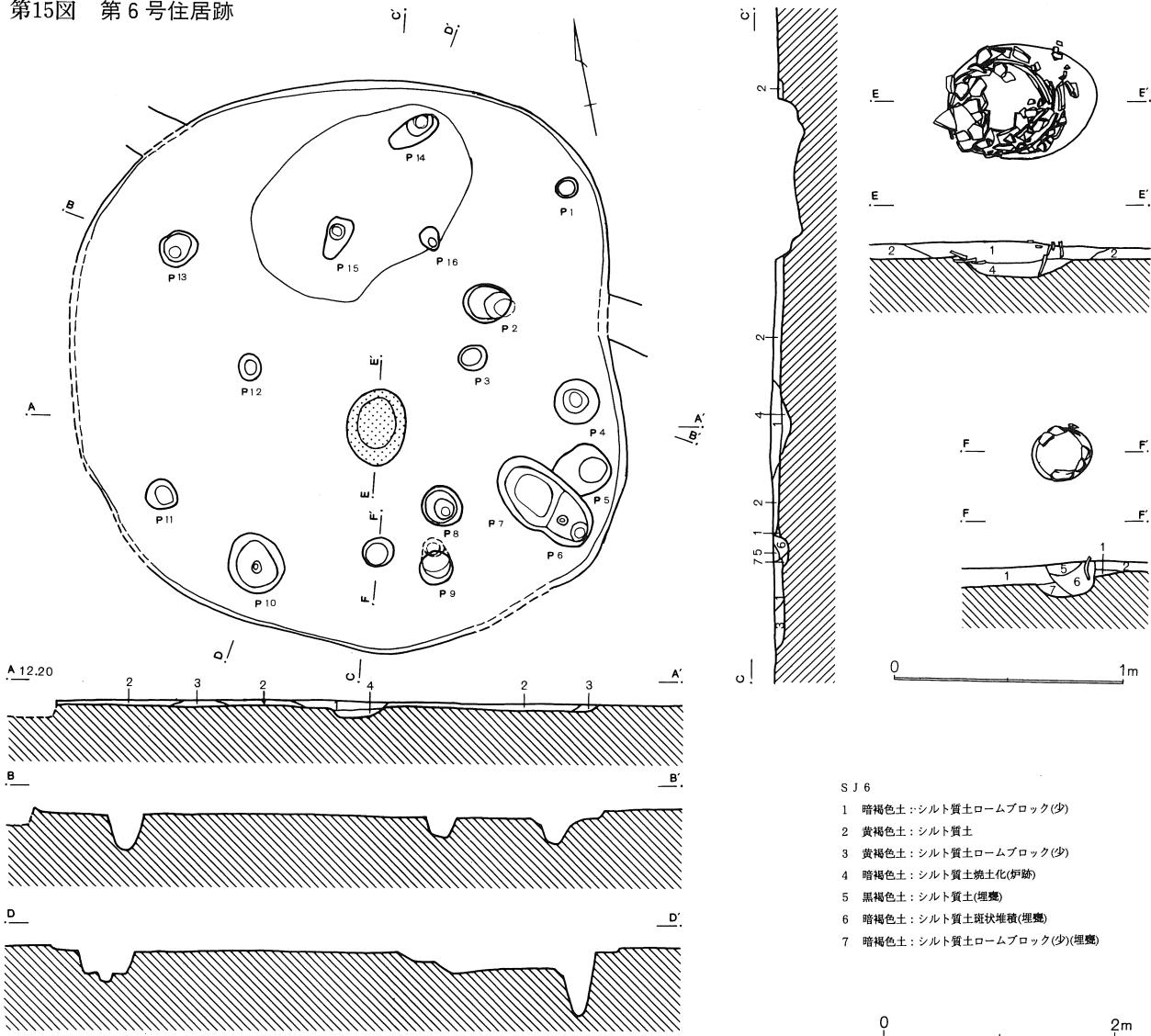
3-1・2は深鉢形土器胴部で、ナゾリによる隆帯で区画文を描いている。3-3・4は磨消懸垂文を施文している。3-5は、深鉢形土器胴部無文部破片である。3-6～12は、住居跡覆土に流入して出土した縄文時代早期条痕文系土器である。3-6は口縁部破片で、口唇部が角頭状を呈し、以下に細隆起線が認められる。3-7～12は胴部破片で、斜位または縦位の条痕が施文されている。

4-1は隆帯により区画文を描く。2・3は沈線により磨消懸垂文を施文する。4・5は隆帯による横位の区画文を描く。

5-1は波状口縁の深鉢形土器口縁部である。断面三角形を呈する隆帯により口縁部無文帯を区画する。



第15図 第6号住居跡



第6号住居跡（第15図）

L・M-15グリッドに検出された。この遺跡で中央に位置していた。第123号土壙に切られていた。平面プランは、南北方向にやや長い不整円形であった。長径4.95m、短径4.6m、深さ0.1mであった。主軸は、炉跡—埋甕間でN-10°-Eであった。床面からは、炉跡、埋甕、柱穴が検出された。柱穴は、計16本検出され、P-1・4・5・6・10・11・13・14は、壁側に沿って一周していた。またP-2・9は、斜傾のピットであった。深さは21cmから57cmで円形であった。壁は垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。炉跡は中央やや南よりに位置し、土器片囲い炉で、第17図1・2・4・5の土器が埋設されていた。堀り方は、長径65cm、短径50cm、深さ15cm

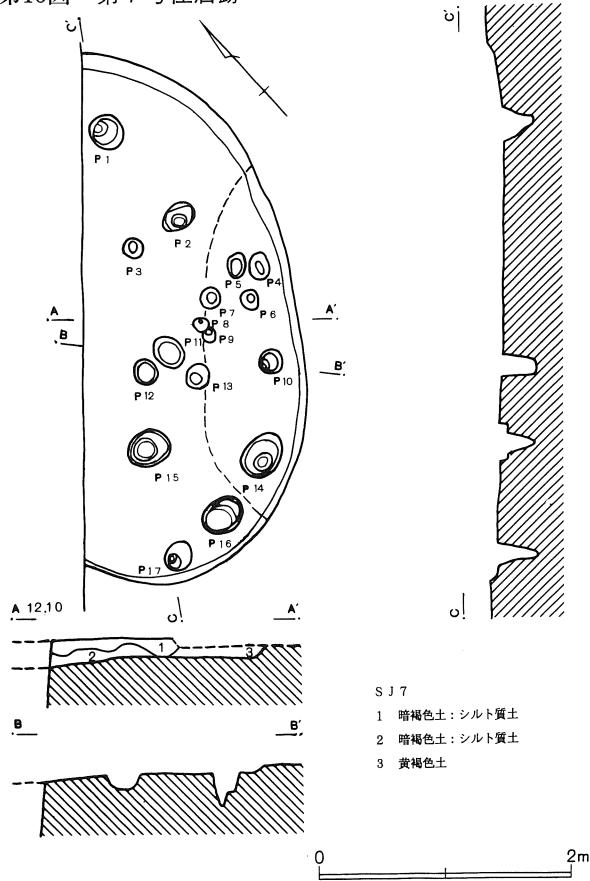
の楕円形であった。覆土には、多量の焼土が含まれよく焼けていた。埋甕は、炉跡南側に近接していた。直径25cm、深さ15cmの円形の掘り込みに、第17図3の深鉢胴部が埋設されていた。

出土した遺物は、炉跡埋設土器、埋甕の他、覆土より少量の遺物が出土した。また、本跡炉跡出土土器破片が第8号住居跡炉跡出土土器と接合した。

第7号住居跡（第16図）

J・K-12グリッドに検出された。第4号住居跡に切られていた。攪乱により住居跡西側を壊されていた。平面プランは、南北方向にやや長い楕円形と推定される。推定長径4.20m、推定短径2.90m、深さ0.10mであった。主軸は、長軸方向でN-22°-Eであった。

第16図 第7号住居跡



床面からは、柱穴のみ検出された。柱穴は計17本検出され、中央よりに8本、壁側に9本であった。深さは、P-11が14cmの他、21cm~29cmで円形であった。壁はやや斜めに立ち上がり、壁溝は確認されなかった。

出土した遺物は少なく、第17図1、第18図1・2の遺物が出土した。

#### 第6・7号住居跡出土遺物(第17・18図)

第17図6-1は炉体土器であった。口縁部が内彎し胴部が括れる波状口縁深鉢形土器である。図は同一個体と考えられる第18図6-1の口縁部破片をもとに、復元を行った。口縁部はナゾリによる隆帯を設けて区画し、波頂部はやや突起状を呈すると考えられる。また口縁部無文帯下に、部分的に横走する沈線が認められる。胴部文様帯は二段に分かれ、上半部は1本の沈線により、「J」字状を呈する渦巻文が10単位描かれる。下半部は先端部のやや丸い「A」字状文が描かれる。地文はRL縄文を縦位に施文し、交互に磨消している。2は炉体土器であった。胴部がやや膨らみ、口縁部にむかつ

て外傾する深鉢形土器胴部である。文様は3本の幅広の沈線による磨消懸垂文を施文している。3は埋甕であった。口縁部が内彎し、胴部が括れる深鉢形土器胴部である。全面にRL縄文を斜位に施文している。4は炉体で、底部から直線的に立ち上がり口縁部で内彎する平縁の深鉢形土器である。口縁部無文帯を幅広の沈線で区画し、以下に縄文を施文する。地文は0段多条の単節または、前前段反撲の3段の縄文を斜位に施文している。5は炉体で、口縁部が内彎し胴部が括れる、小波状口縁深鉢形土器である。口縁部無文帯を刺突列を加えた沈線により区画し、以下に縄文を施文する。地文はRL縄文を縦位に施文し、口縁直下は横位に施文して羽状にしている。第18図6-2は波状口縁で2条の沈線により渦巻文を描く。4は深鉢胴部で「J」字状文を施文する。6は2条の沈線による渦巻文を描く。

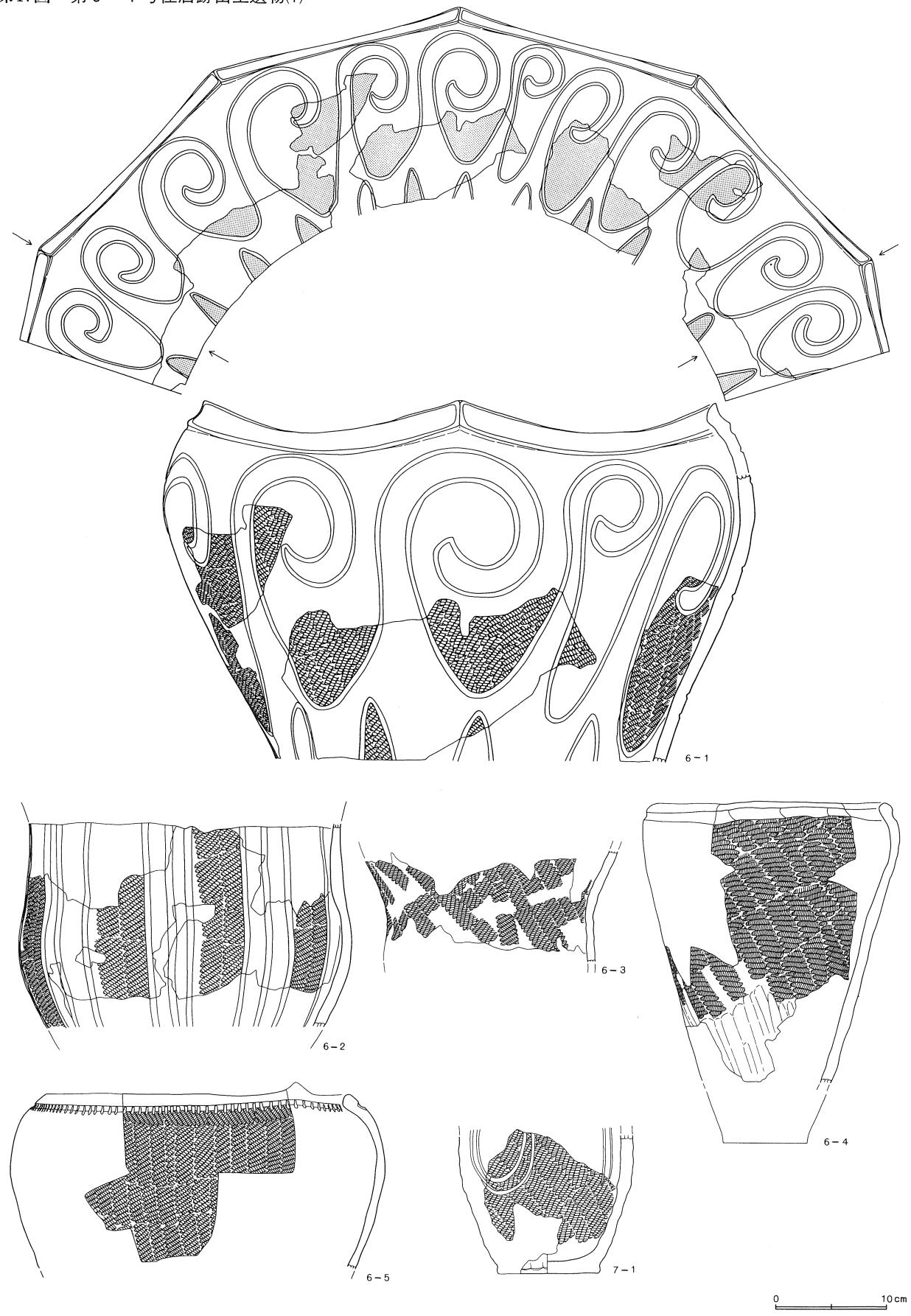
第17図7-1は底部から直線的に立ち上がる深鉢形土器である。文様は地文縄文に2条の沈線による区画文及び懸垂文を描いている。

#### 第8号住居跡(第13図)

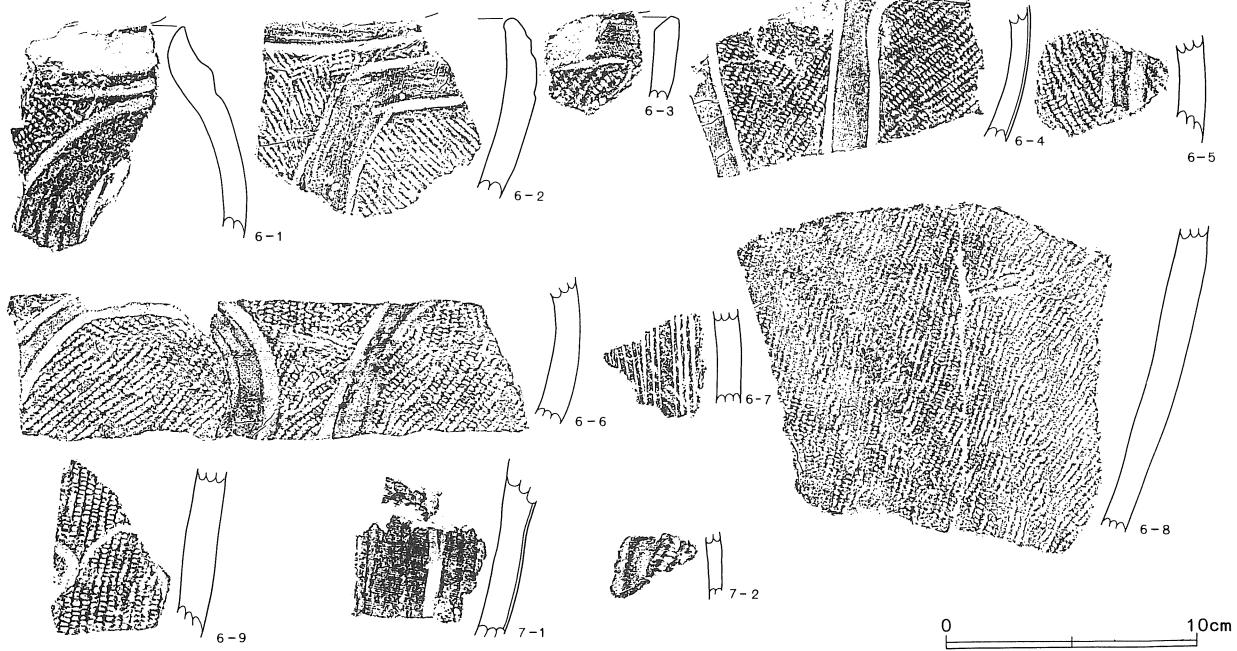
M・N-15グリッドに検出された。第5号住居跡を切っていた。平面プランは、不整円形であった。長径5.00m、短径4.80m、深さ0.15mであった。主軸は、炉跡-埋甕間でN-32°-Eであった。床面からは、炉跡、埋甕、柱穴が検出された。柱穴は、計9本検出され、P-3・4・6・7・8は壁側に、P-1・2・5・9は中央よりであった。深さはP-3が3cmの他、24cm~33cmで円形であった。壁は垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。炉跡は中央やや南東よりに位置し、土器埋設炉で、第20図2の深鉢形土器胴部半周分が埋設されていた。堀り方は、長径70cm、短径55cm、深さ25cmの楕円形であった。覆土には、多量の焼土が含まれよく焼けていた。埋甕は、炉跡南西側に近接していた。直径40cm、深さ15cmの円形の掘り込みに、第20図1の深鉢胴下半部がやや偏って埋設されていた。

出土した遺物は、炉跡埋設土器、埋甕の他、覆土より少量の遺物が出土した。また、本跡炉跡出土炉体土器が第6号住居跡炉跡出土土器破片と接合した。

第17図 第6・7号住居跡出土遺物(1)



第18図 第6・7号住居跡出土遺物(2)



第9号住居跡(第19図)

M・N-16・17グリッドに検出された。攪乱により住居跡北側を壊されていた。また、東側一部調査区外に延びていた。平面プランは、東西方向に長い楕円形と推定される。推定長径7.20m、推定短径5.50m、深さ0.15mで、この遺跡で最も大形の住居跡であった。主軸は、長軸方向でN-89°-Eであった。床面からは、柱穴のみ検出された。柱穴は計6本検出され、中央よりにまとまっていた。深さは、P-1・14cm、P-2・21cm、P-3・20cm、P-4・46cm、P-5・34cm、P-6・6cmで円形であった。壁はやや斜めに立ち上がり、壁溝は確認されなかった。

出土した遺物は少なく、第20図1～5の遺物が出土した。

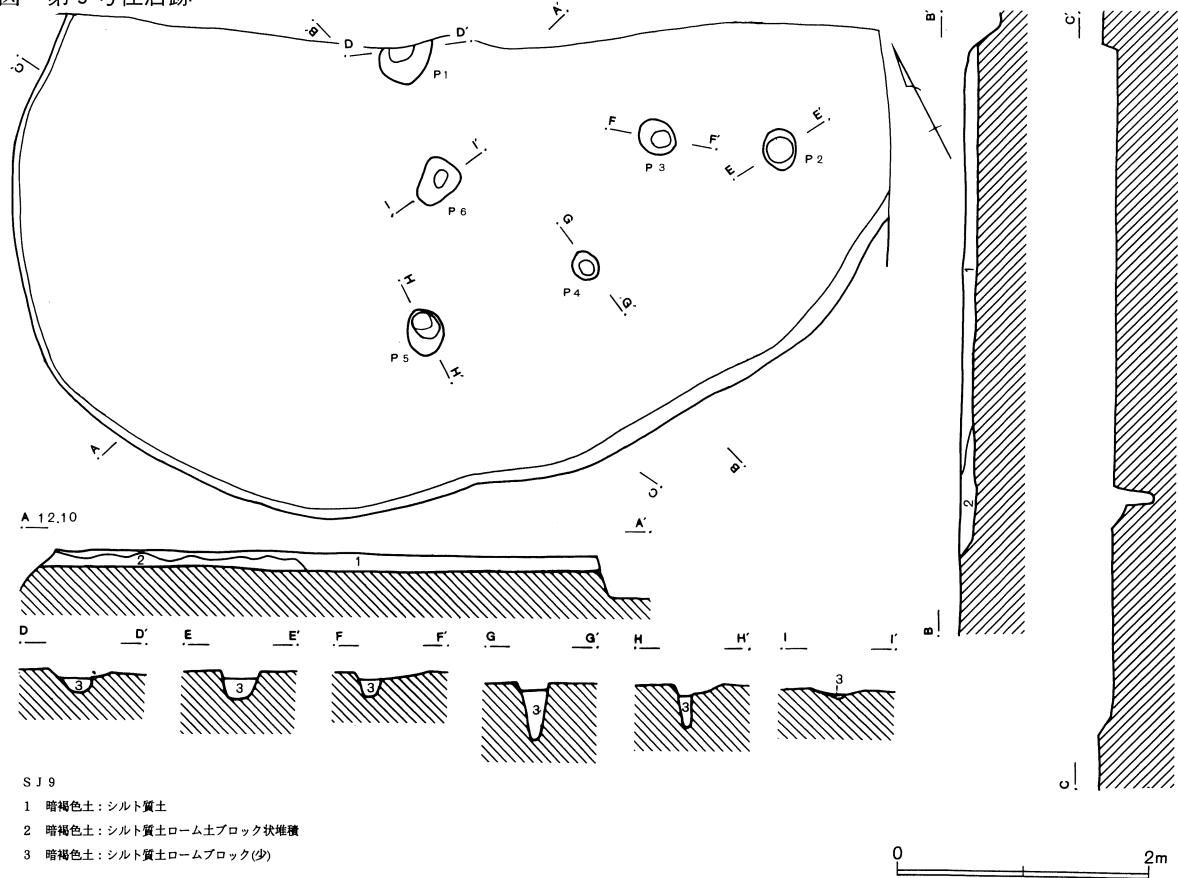
第8・9号住居跡出土遺物(第20図)

第20図8-1は埋甕であった。口縁部が内彎し、胴部が括れる深鉢形土器で、口縁部を欠損していた。全面に縄文が施文されている。地文は、無節で縦位に施文している。2は炉体土器であった。口縁部が内彎し、胴部が僅かに括れる縁深鉢形土器胴部である。文様は2段に分かれる。上半部は幅広の沈線により波状文を施文し、下半部は「匂」字状文を波頂部よりずらして施文している。地文はLR縄文を縦位に施文して、区画外

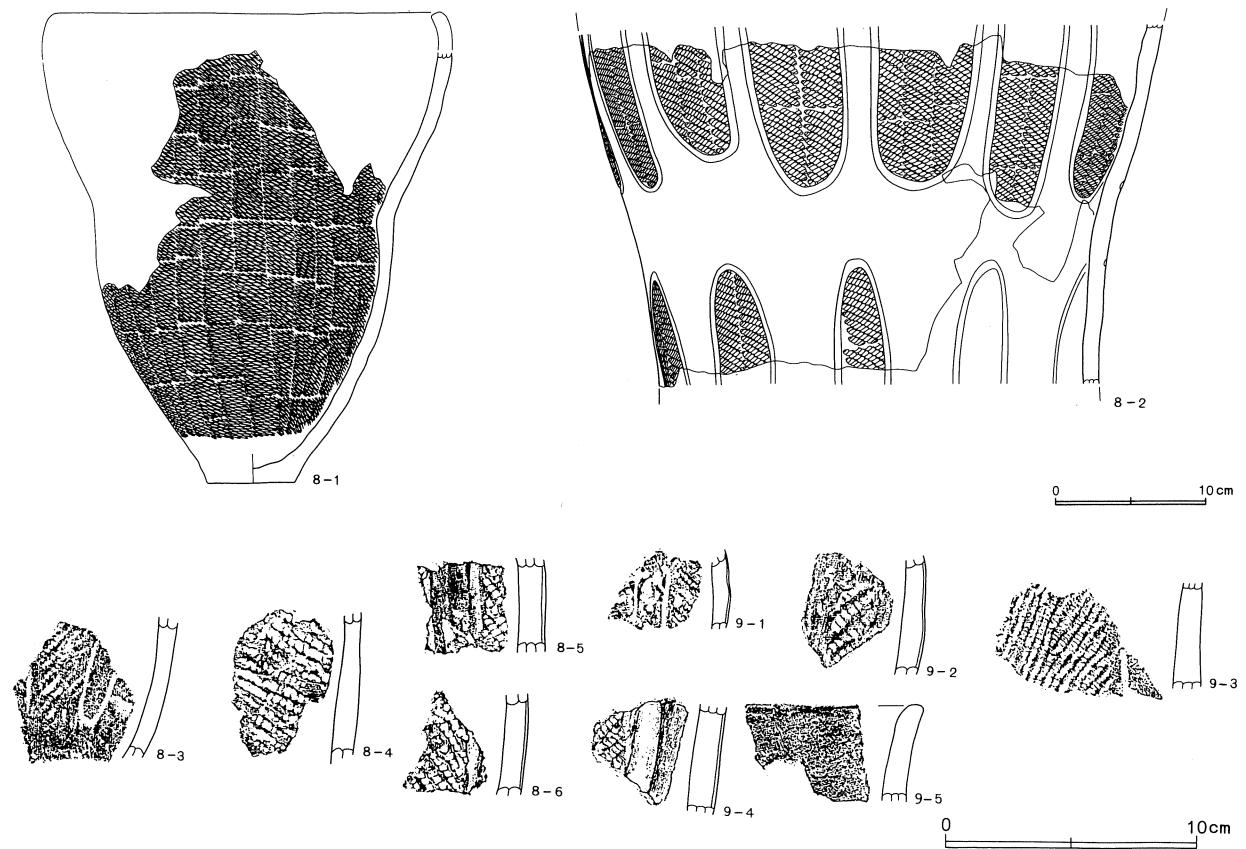
を丁寧に磨消している。3は沈線により波状文を描く、深鉢形土器胴部上半部破片である。5はRL縄文を縦位に施文する、胴部破片である。5・6は沈線による磨消懸垂文を施文する、深鉢形土器胴部破片である。

9-1は、口縁部が内彎し、胴部が括れる深鉢形土器胴部上半部破片である。文様は沈線により、波状文を描いている。2・3・4は深鉢形土器胴部破片である。2は幅広の沈線により懸垂文を描いている。3は沈線により磨消懸垂文を描いている。4は幅広の沈線とナゾリにより磨消懸垂文を描いている。5は浅鉢ないしは、両耳壺の口縁部破片である。

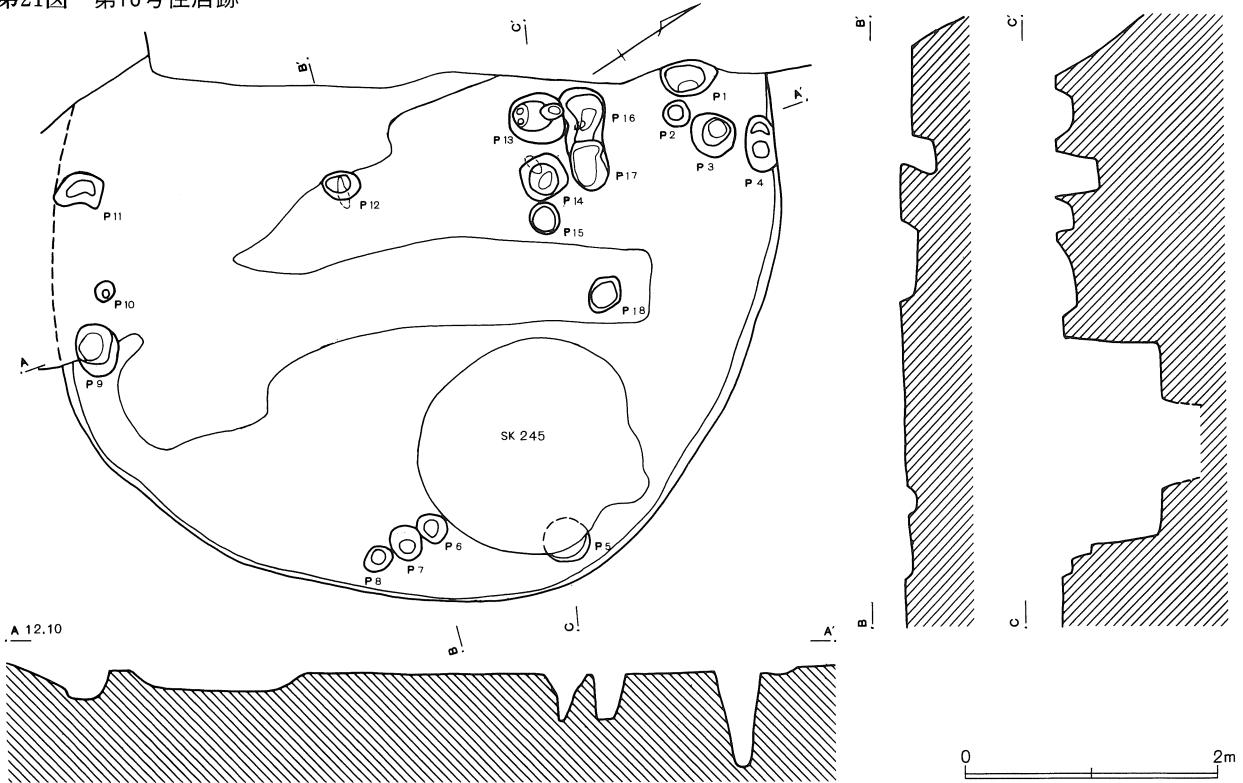
第19図 第9号住居跡



第20図 第8・9号住居跡出土遺物



第21図 第10号住居跡



第10号住居跡(第21図)

H-19グリッドに検出された。第1・2方形周溝墓、第245号土壙に切られていた。平面プランは、円形と推定される。推定径5.80m、深さ0.05mであった。主軸は、不明であった。床面からは、柱穴のみ検出された。柱穴は計18本検出され、P-1~11が壁により、P-12~18が中央よりであった。また、P-3・74cm、P-4・57cm、P-13・40cm、P-14・38cm、P-16・39cm、P-17・35cmで他のピットより深く、出入口部ピットに関連する可能性がある。壁は垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。

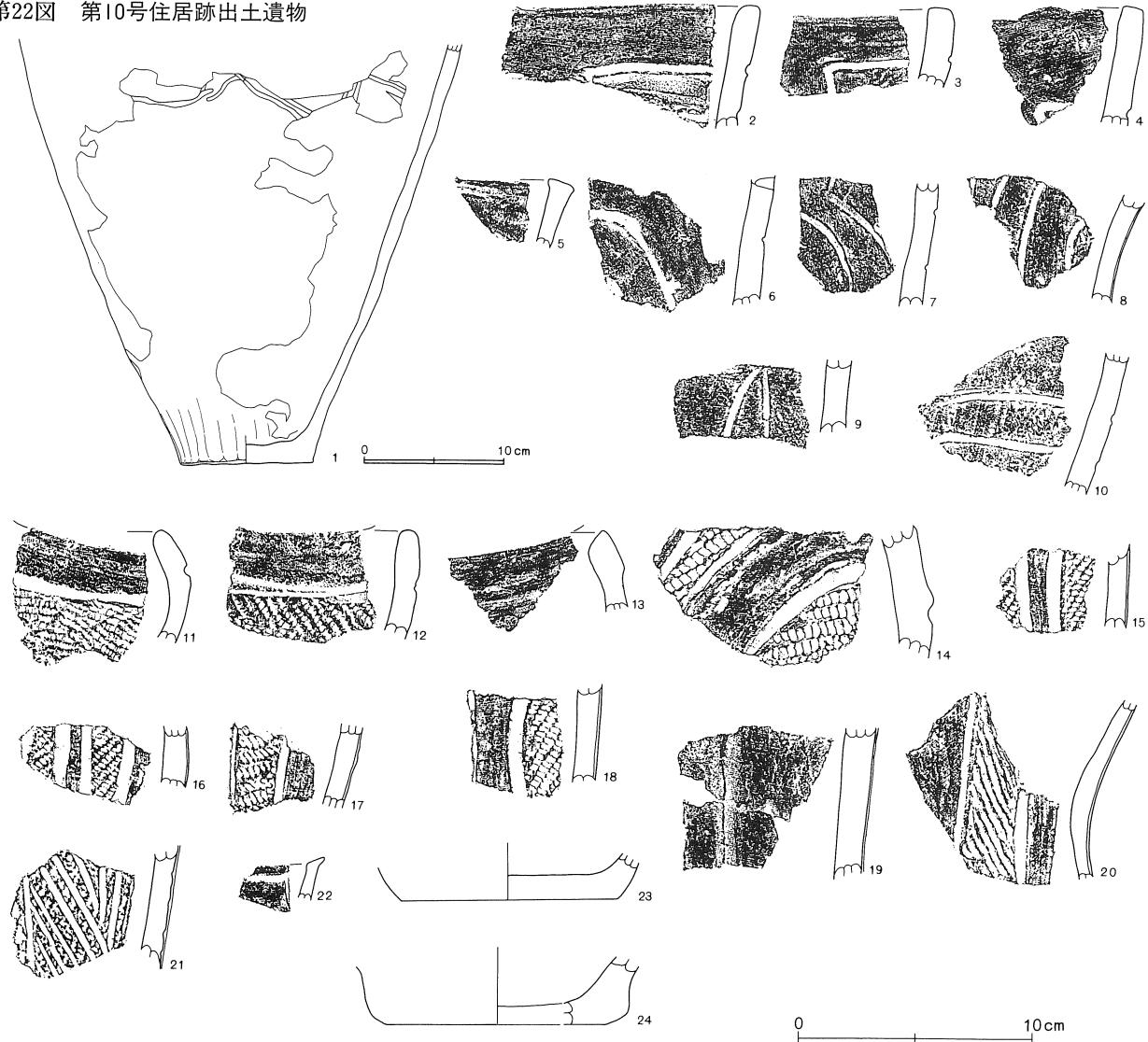
出土した遺物は少なく、第22図1~24の遺物が出土した。このうち1・10は、出土状況から第245号土壙出土遺物の可能性があった。また、11~22は、住居跡周辺部からの流入であると考えられる。

第10号住居跡出土遺物(第22図)

1は底部から直線的に外傾する深鉢形土器である。この土器は二次焼成を受けたため底部に亀裂があり、また胴部では土器表裏面の剥落が著しい。また同図10は同一個体の破片であると考えられる。文様は胴部上

半部に限られる。籠状工具により2状の横走する沈線を描き、その下に弧状の沈線を配置する。また弧状沈線の連結部からは垂下する沈線が認められる。2~9は本住居跡に該当する土器である。2~5は胴部で緩やかに括れ直線的に外傾して口縁部へ移行する、深鉢形土器口縁部である。2は口唇部内面をやや丸く作り出している。文様は沈線により「J」字状の区画文を描くと考えられる。3・4は口唇部を角頭状に作り出している。文様は沈線による区画文を描く。5は口唇部内面が「く」字状に屈曲する。6~9は、胴部破片である。沈線により「J」字状の区画文を描くと考えられる。区画内は、無文である。11~22は本住居跡覆土に流入して出土した土器である。11~13は波状口縁を呈する深鉢形土器口縁部である。11・12は横走する沈線により、口縁部無文帯を区画している。13は口縁部をナゾリ、肥厚させている。14は隆帯と沈線により渦巻文を描く深鉢胴部である。15~20は沈線により磨消懸垂文を施文している。21は縦位の区画沈線間に斜行する沈線を施文する。22はミニチュア土器口縁部破片で、口唇部が外反している。

第22図 第10号住居跡出土遺物



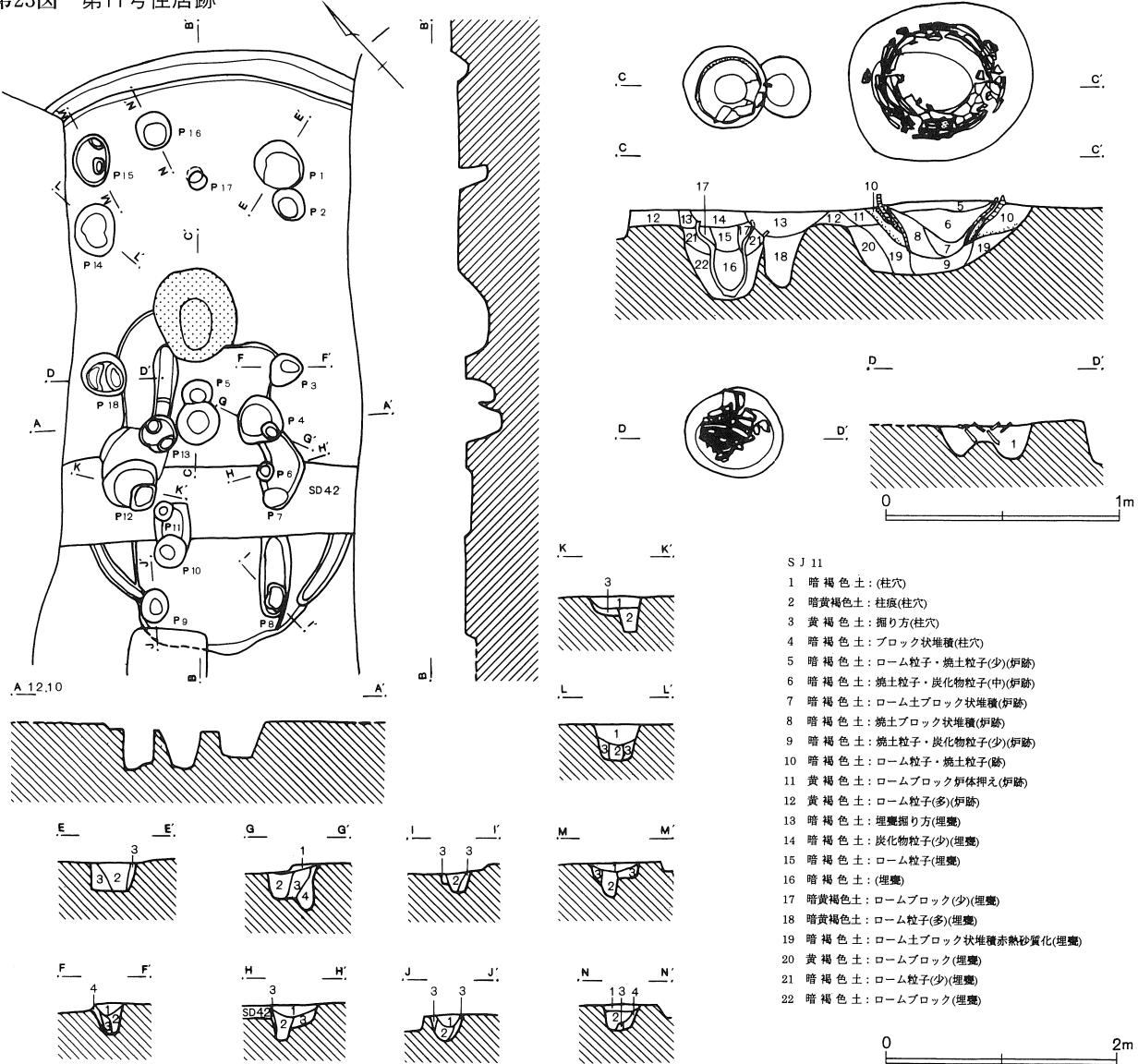
第11号住居跡（第23図）

I-18グリッドに検出された。住居跡両側を攪乱によって壊されていた。平面プランは、南西方向にやや張り出す円形と推定される。長径5.15m、推定短径4.30m、深さ0.10mであった。主軸は、炉跡一埋甕間でN-31°-Eであった。床面からは、炉跡、埋甕、柱穴が検出された。柱穴は、計17本検出されP-1・15・16壁側に沿い主柱穴であった。P-4・7・8・9・12・13は、出入口部に関連する柱穴と考えられる。また、これに沿って長方形の浅い土壙状の落ち込みが検出された。各柱穴の深さは、12cm～38cmで円形であった。壁は垂直に立ち上がり、U字形の壁溝が検出された。炉跡は中央に位置し、土器埋設炉であった。第24図1の深鉢形土器胴部が埋設され、同図2・3・4が外側に補強用に埋設

されていた。堀り方は、長径80cm、短径50cm、深さ30cmの楕円形であった。覆土には、多量の焼土が含まれよく焼けていた。埋甕は、出入口ピット間に炉体土器より一段低く埋設されていた。炉跡に近接しているのが特徴である。直径35cm、深さ30cmの円形の掘り込みに、第25図1のキャリパー形深鉢が埋設されていた。また、口縁部一部をP-5によって壊されていた。

出土した遺物は、炉跡埋設土器、埋甕の他、P-18上に第25図2の深鉢土器胴下半部が重なる状態で出土した。

第23図 第11号住居跡



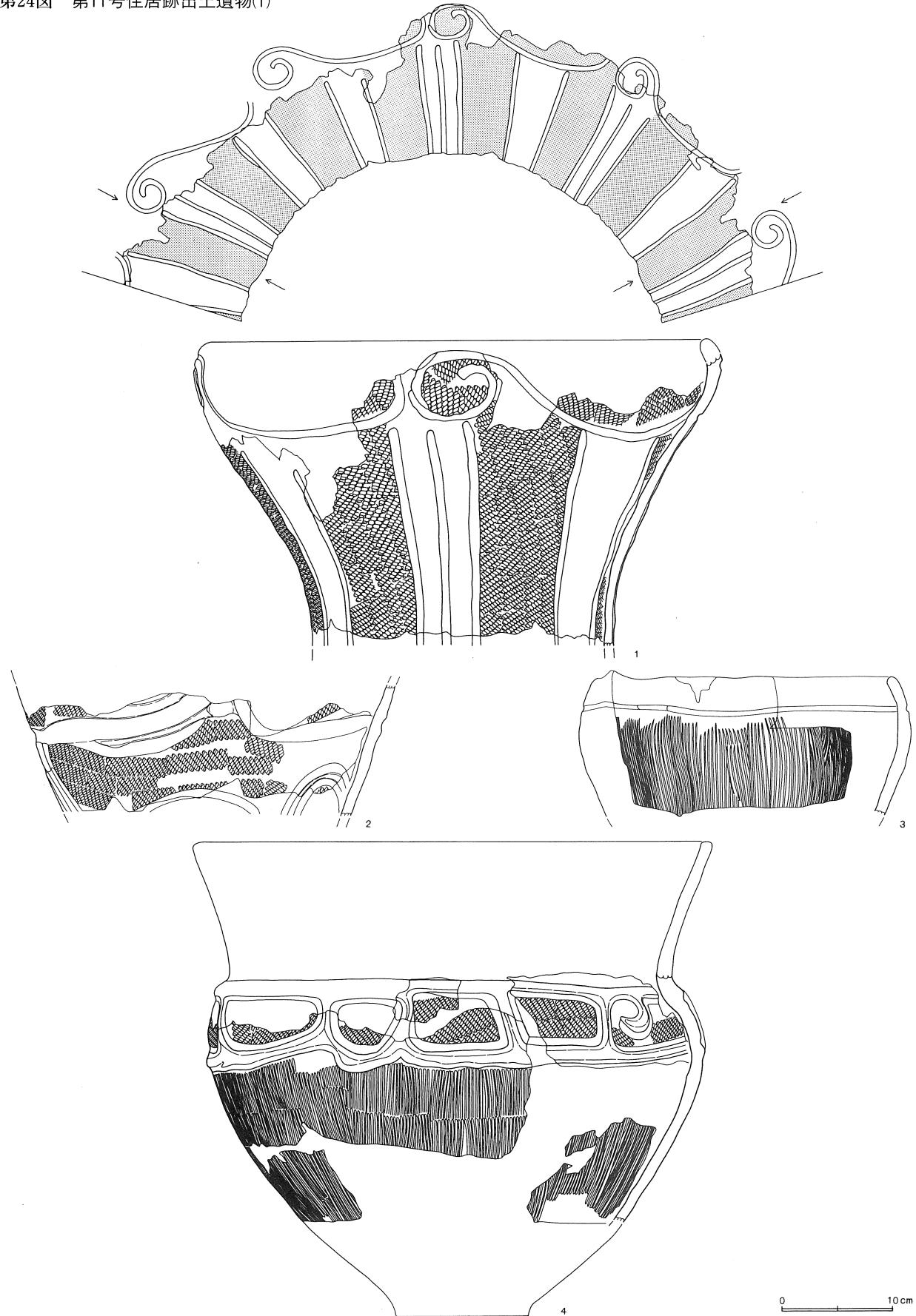
- S J 11
- 1 暗褐色土：柱穴
  - 2 暗黄褐色土：柱痕(柱穴)
  - 3 黄褐色土：掘り方(柱穴)
  - 4 暗褐色土：ブロック状堆積(柱穴)
  - 5 暗褐色土：ローム粒子・焼土粒子(少)(炉跡)
  - 6 暗褐色土：焼土粒子・炭化物粒子(中)(炉跡)
  - 7 暗褐色土：ローム土ブロック状堆積(炉跡)
  - 8 暗褐色土：焼土ブロック状堆積(炉跡)
  - 9 暗褐色土：焼土粒子・炭化物粒子(少)(炉跡)
  - 10 暗褐色土：ローム粒子・焼土粒子(跡)
  - 11 黄褐色土：ローム粒子(多)(炉跡)
  - 12 黄褐色土：ロームブロック状堆積(炉跡)
  - 13 暗褐色土：埋棄掘り方(埋廻)
  - 14 暗褐色土：炭化物粒子(少)(埋廻)
  - 15 暗褐色土：ローム粒子(埋廻)
  - 16 暗褐色土：(埋廻)
  - 17 暗黄褐色土：ロームブロック(少)(埋廻)
  - 18 暗黄褐色土：ローム粒子(多)(埋廻)
  - 19 暗褐色土：ローム土ブロック状堆積赤熱砂質化(埋廻)
  - 20 黄褐色土：ロームブロック(埋廻)
  - 21 暗褐色土：ローム粒子(少)(埋廻)
  - 22 暗褐色土：ロームブロック(埋廻)

第11号住居跡出土遺物(第24・25図)

第24図1は炉体土器であった。底部からやや外反して立ち上がり口縁部で内弯するキャリパー形深鉢土器である。口縁部及び胴下部を欠損する。文様は口縁部文様帯と胴部文様帯に分かれ。口縁部の文様は幅広の籠描沈線により、渦巻文を4単位描くと考えられる。各渦巻文の右端がどのように終局するかは不明である。胴部の文様は口縁部文様帯の渦巻部分に対応して、3条の籠描沈線による幅広の磨消懸垂文を、4単位描く。またこの間に2条の籠描沈線により同様の磨消懸垂文が描かれている。各籠描沈線部分にはナゾリが加えられている。地文はRL縄文を縦位に施文し、渦巻文内は沈線に沿って施文している。2は炉体土器であった。底部か

ら垂直に外反し、口縁部でやや内弯する深鉢形土器と考えられる。また第25図3・4・7の口縁部及び胴部破片は同一個体と考えられ、4単位の波状口縁を呈する。文様は口縁部文様帯と胴部文様帯に分かれ。各文様は貼り付けまたはナゾリによって、隆帯及び幅広の沈線を作り出している。口縁部の文様は波頂部に渦巻文を描き、以下に区画文を描く。胴部の文様は垂下する磨消懸垂文状ならびに、渦巻文状のモチーフが認められる。地文は、RL縄文を横位に施文し、一部充填施文が認められる。3は炉体土器であった。口縁部が内弯し、胴部が括れる深鉢形土器である。口縁部無文帯を幅広の籠描沈線で区画し、以下に条線を施文している。4は炉体土器であった。底部から胴部にかけて膨らみ、頸部で

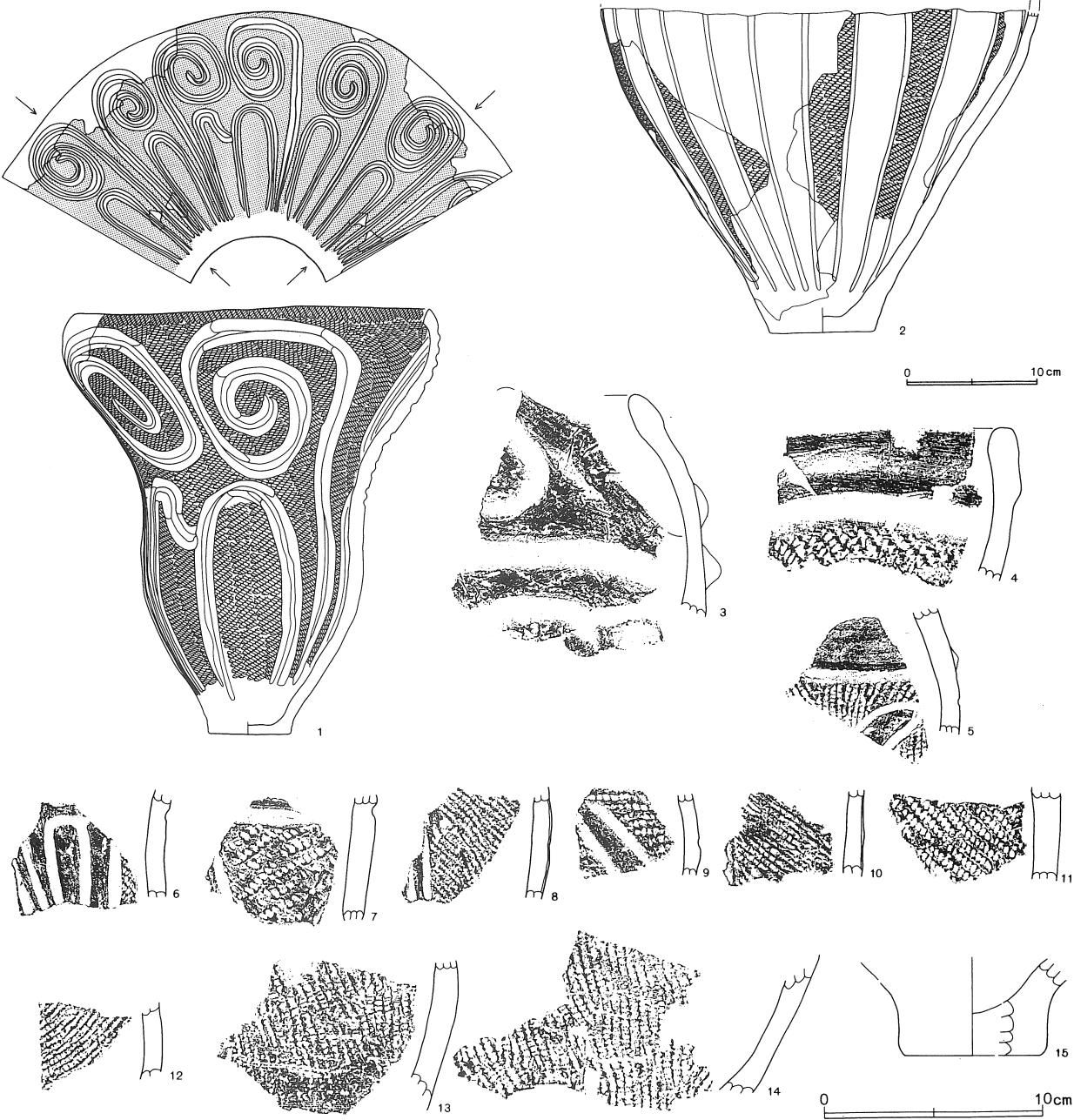
第24図 第11号住居跡出土遺物(1)



屈曲して外反する両耳壺である。口縁部及び胴下半部を欠損する。本土器は胴下半部欠損部分が丁寧に面取りされている。文様は両側にナゾリが加えられた隆帶により、渦巻文、楕円文、方形区画文が描かれている。各区画文内には、R L 繩文が横位に施文されている。区画文下には縦位の条線文が施文されている。第25図1は埋甕であった。底部から緩く外反して立ち上がり、胴部で屈曲して開き、口縁部で内弯する深鉢形土器である。口縁部の一部を欠損する。口唇部はやや尖り、

内面で「く」字に屈曲している。文様は幅広の篦描沈線にナゾリを加えた2条の沈線により、縦位の渦巻文を5単位描いている。また渦巻部分以下に対応して「匚」字状文を描いている。渦巻文は右巻3、左巻2で最終単位部分の「匚」字状文は鍵状に連結している。地文はRL繩文を縦位に施文し、渦巻部分は充填施文している。また口縁部は横位に施文して羽状にしている。2はP-18出土土器であった。底部から直線的に外反して、胴部で緩やかに括れる深鉢形土器胴下半部である。

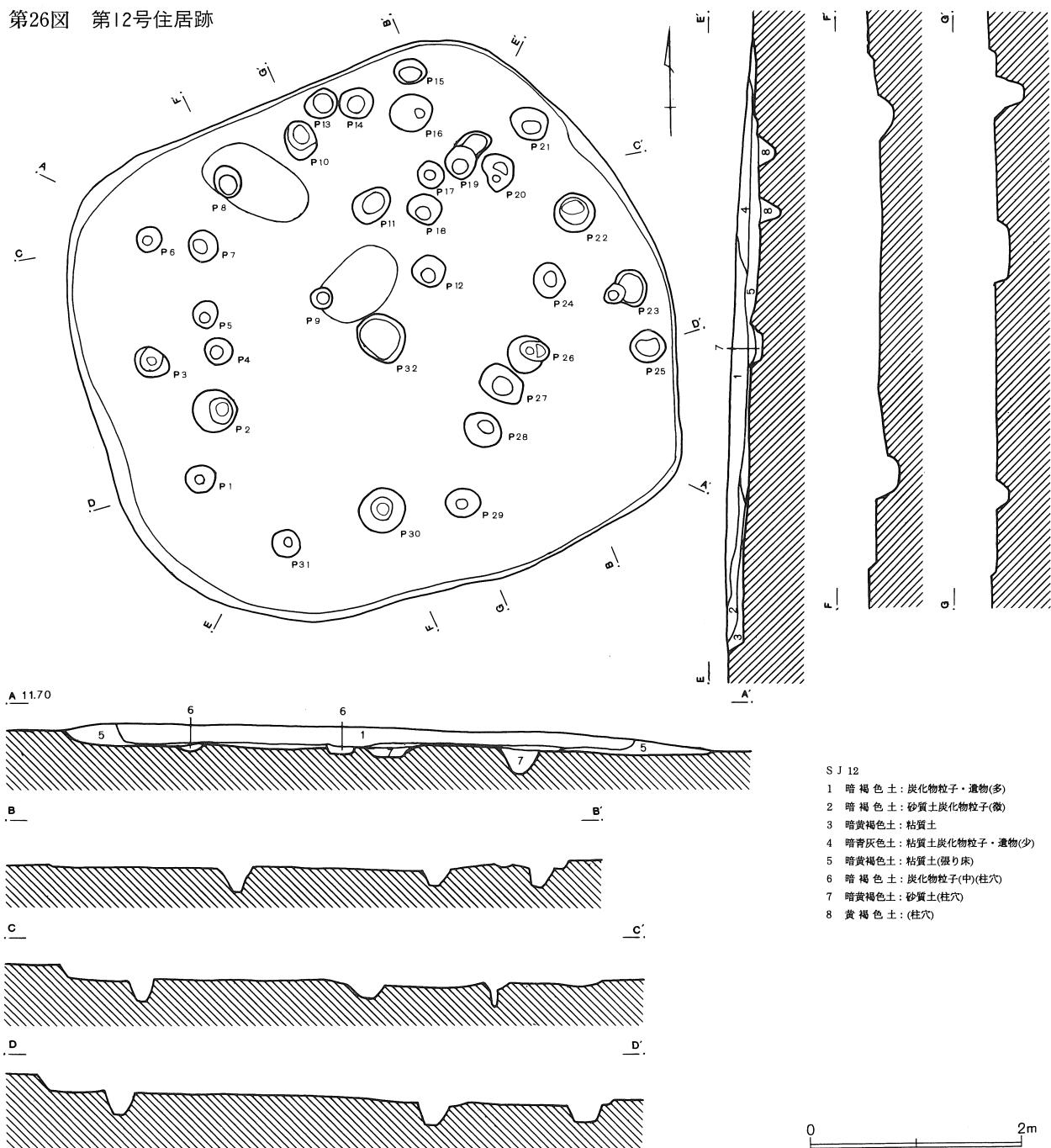
第25図 第11号住居跡出土遺物(2)



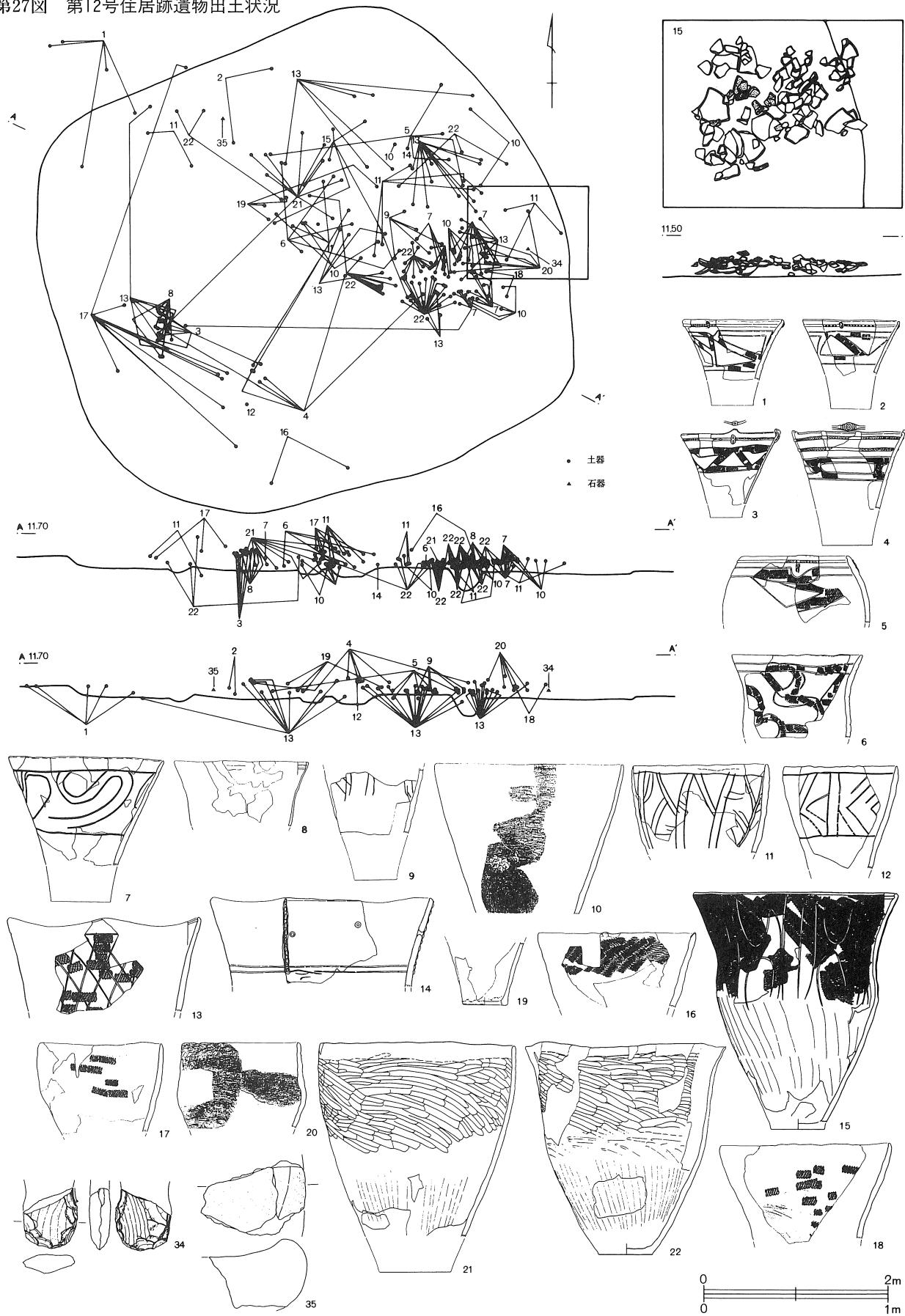
文様は幅広の沈線2条により懸垂線を施し、縄文帯と無文帯を交互に描いている。地文はRL縄文を縦位に施文している。5は波状口縁を呈する深鉢形土器口縁部である。口縁部無文帯を隆帯により区画し、ナゾリを加えている。胴部文様は沈線により区画文を描く。6は深鉢形土器胴部である。文様は2条の沈線により「Ω」字状または、「H」字状文を描くと考えられる。8は深鉢形土器胴部である。2条の沈線により、磨消懸垂文を描

く。9は深鉢形土器胴部である。幅広の沈線2条により区画文を描く。10は深鉢形土器胴部である。沈線により懸垂文を描く。13・14は両耳壺胴部破片である。

第26図 第12号住居跡



第27図 第12号住居跡遺物出土状況



## 第12号住居跡(第26・27図)

H・I-22グリッドに検出された。攪乱により住居跡中央部を壊されていた。第260・261号土壙を埋立てて構築していた。平面プランは、東西方向にやや長い不整円形であった。長径5.50m、短径4.90m、深さ0.23mであった。主軸は、不明であった。床面からは、柱穴のみ検出された。本住居跡東側は、地形上緩やかに傾斜しており、この部分にあたる床面に、粘質土の張り床が施されていた。柱穴は計32本検出され、住居跡内南北方向に長い楕円形をして一周する壁柱穴と、中央部から北東部にまとまる柱穴とに別れていた。また壁柱穴には、外側に重なる柱穴が検出されたため本住居跡が拡張された可能性がある。壁柱穴は、深さ20cm前後で、円形であった。また、P-32は、深さ12cmで円形の皿状を呈し、覆土に炭化物粒子が認められた。この部分が攪乱部にかかるものの炉跡の可能性があった。壁はやや斜めに立ち上がり、壁溝は確認されなかった。

出土した遺物は、この遺跡で最も多く総点数1700点であった。遺物は、床面直上からやや浮いた状態で出土し、攪乱部分を除いて住居跡全体に渡っていた。特に住居跡東側には、第29図15及び22の深鉢形土器が潰れた状態で出土した。

## 第12号住居跡出土遺物(第28・29・30・31・32・33図)

1は平縁の深鉢である。口唇部は「く」字状に内屈する。口縁下に紐線文が1条巡る。紐線文上には「8」字状貼付文が付く。胴部文様帯を2条の横走する沈線で区画し、内側に1条の沈線で斜行文を連続して配置している。「8」字状貼付文下に対応して、区画沈線は湾曲している。区画沈線間にはLR繩文が粗雑に充填施文されている。2は平縁の深鉢である。口唇部は「く」字状に内屈する。口縁下に紐線文が1条巡る。紐線文上には「8」字状貼付文が付く。胴部文様帯を2条の横走する沈線で区画し、内側に三角形を組み合わせて配置している。「8」字状貼付文下に三角形の頂部は対応していない。区画沈線間にはLR繩文が粗雑に充填施文されている。3は平縁の深鉢である。1単位の把手をもつ。

頂上部には円孔をもつボタン状貼付文が付く。口唇部は「く」字状に内屈する。口縁下に紐線文が1条巡る。紐線文上には「8」字状貼付文が付く。胴部文様帯を2条の横走する沈線で区画し、内側に三角形を組み合わせて配置している。「8」字状貼付文下に対応して、三角形の頂上部が配置されている。区画沈線間にはLR繩文が密に充填施文されている。4は平縁の深鉢である。1単位の把手をもつ。頂上部内面に沈線による同心円文を描く。口唇部は「く」字状に内屈する。口縁下に紐線文が2条巡る。胴部文様帯を2条の横走する沈線で区画し、棹状文を構成する。区画沈線間にはLR繩文が密に充填施文されている。5は胴上半部が張り口縁部が内彎する、樽形を呈する平縁の深鉢形土器である。口唇部は丸く内面に1条の沈線が巡る。口縁下に紐線文が1条巡る。紐線文直下には、やや崩れた「8」字状貼付文が付く。胴部文様帯上段を2条の横走する沈線で区画し、以下に沈線で三角形を組み合わせて配置している。「8」字状貼付文下に対応して、区画沈線は湾曲している。区画沈線間にはLR繩文が粗雑に充填施文されている。6は胴上半部で僅かに括れ、口縁部に向かって直線的に外反する深鉢形土器である。口唇部は丸みをもつ。文様は2条の沈線により胴部上半部を区画し、区画帯に連結して以下に蛇行状のモチーフ及び斜行文を描いている。またこの2条の沈線は短絡的に切れ、書き直している部分が認められる。区画沈線内にはLR繩文が粗雑に充填施文されている。7は平縁の深鉢である。口唇部はやや尖る。胴部文様帯を半截竹管による横走する沈線で区画している。上部区画線に連結して、内側に同様の沈線2条で、「S」字状文を5単位配置している。また「S」字状文が1条で描かれている部分が認められる。器面に繩文は施文されない。8は平縁の深鉢形土器胴上半部である。口唇部はやや丸みをもち、内面に2条の横走する沈線が巡る。外面は無文で輪積痕が認められる。本土器は薄手に作られている。9は平縁の深鉢形土器胴部である。文様は2条の細沈線により斜行文が描かれている。10は平縁の粗製の深鉢形土器である。口唇部はやや尖り口縁部下に2条の細沈線が巡る。

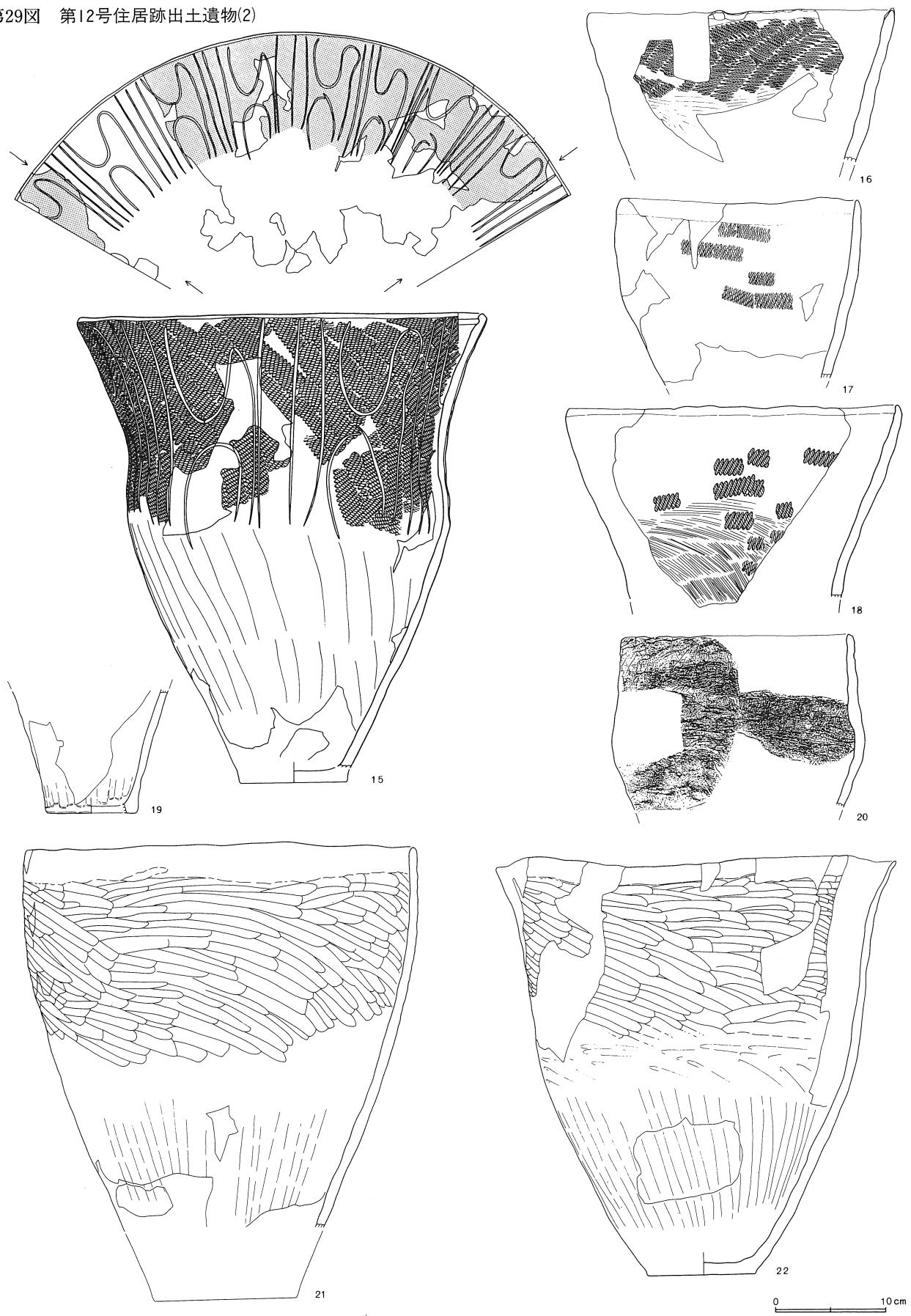
また胴部には2条の細沈線により斜行文が描かれる。11は口縁部が垂直に立ち上がる平縁の深鉢形土器胴上半部である。口唇部は丸みをもちやや肉厚である。口縁部無文帯を横走する1条の沈線で区画している。区画沈線に連結して、以下に2条の細沈線により、「Y」字状を呈する斜行文を描く。また斜行文上から短絡的に引かれる沈線が認められる。器面は範状工具による粗い調整が施されている。12は平縁の深鉢形土器である。口唇部はやや尖る。胴部文様帯を2条の沈線で区画し、さらに区画内を2条の沈線で縦に区画している。区画内には、複数の沈線により「く」字状のモチーフを描いている。本土器の沈線は粗雑に引かれ、消されている部分も認められる。13は波状口縁を呈する深鉢形土器である。口唇部は「く」字状に内屈する。口唇部内面に1条の沈線が巡る。文様は口縁部無文帯を1条の横走する沈線で区画し、以下に格子目文を描く。地文は粗く、LR縄文を横位に施文している。14は胴部が括れ口縁部が垂直に外反する深鉢形土器である。弱い波状口縁を呈すると考えられる。口唇部は外削ぎ状を呈している。文様は括れ部に2条の横走する沈線を描き、以上口縁部までを無文としている。口唇部からこの横走沈線まで、範状工具による押圧列を加えた貼り付け隆帯が垂下している。第29図15は口縁部上半で括れ、口縁部に向かって直線的に外反する平縁の深鉢形土器で、底部を欠損していた。口唇部は「く」字状に内屈し、内面には1条の沈線が巡る。文様は胴上半部に限られる。範描沈線により「Y」字状文を描き以下に対応して「匚」を描く。このモチーフを7単位施文して、その間に2~5条の垂下する沈線を配置する。地文はRL縄文を斜位に施文している。16は平縁の深鉢形土器である。口唇部はやや尖り肉厚である。口唇部の一箇所に指頭による押圧が認められる。RL縄文を胴部上半部以上にのみ施文する。17は平縁の深鉢形土器である。口唇部はやや尖り肉厚である。口縁部を範状工具により磨いている。LR縄文を胴部上半部以上に部分的に施文する。18は口縁部に向かってやや外反する平縁の深鉢形土器である。口唇部は外削ぎ状を呈する。RL縄文を

胴部上半部以上に部分的に施文する。19は深鉢形土器底部である。底部から縦位の範調整が施されている。20は胴部が張り、口縁部に向かって垂直に立ち上がる平縁の粗製深鉢形土器である。口唇部はやや尖り肉厚である。器面は横位の粗い範調整が施されている。21は底部から胴部に向かって外反し口縁部で垂直に立ち上がる、平縁の粗製深鉢形土器である。口唇部は丸みをもち外面は範状工具による磨きが施される。胴上半部は横位の範調整、胴下半部は縦位の範調整が施される。22は口縁部でやや強く外反する平縁の深鉢形土器である。口唇部はやや尖り薄手である。外面は範状工具による磨きが施される。胴上半部は横位の範調整、胴下半部は縦位の範調整が施される。第30図1~11は紐線文を巡らす深鉢形土器口縁部である。1~2~3は2条で、2には2個の円形の刺突をもつ刻文隆帯が連結している。8~9~10には「8」字状貼付文が付く。10は胴部区画沈線下に幾何学文様を描く。11は波状口縁を呈し、内文が描かれている。内文は円文に渦巻文を組み合わせている。胴部文様は三角形のモチーフを構成すると考えられる。12は胴部で括れ口縁部が外反する波状口縁の鉢型土器である。波頂部に渦巻状の貼付文が付く。また内面には1条の沈線が巡る。口端部には沈線が施文されている。また波頂部から刻文隆帯が垂下している。14は平縁の深鉢形土器口縁部である。口唇部は「く」字状に内屈する。2条の沈線により幾何学文を描く。15~21は地文縄文に沈線で施文する、深鉢形土器口縁部である。16は口縁部を横走沈線で区画し、以下に複数の沈線により菱形文を描く。17~18は2条の区画沈線下に渦巻文を描く。19は櫛歯状工具により三角形文を描く。21は細沈線により渦巻文を描く。22~27は細沈線によって施文された深鉢口縁部である。22は2条の沈線で弧状のモチーフを描く。28~38は縄文のみ施文された深鉢口縁部である。32の口縁部はやや肥厚している。37の口唇部は外削ぎ状で、内面には浅い沈線が1条巡る。38の口唇部は尖っている。39~第31図4までは無文の深鉢形土器である。2の口唇部は外削ぎ状を呈する。5~6は胴部で括れ口縁部が外反する鉢形土器

第28図 第12号住居跡出土遺物(1)



第29図 第12号住居跡出土遺物(2)

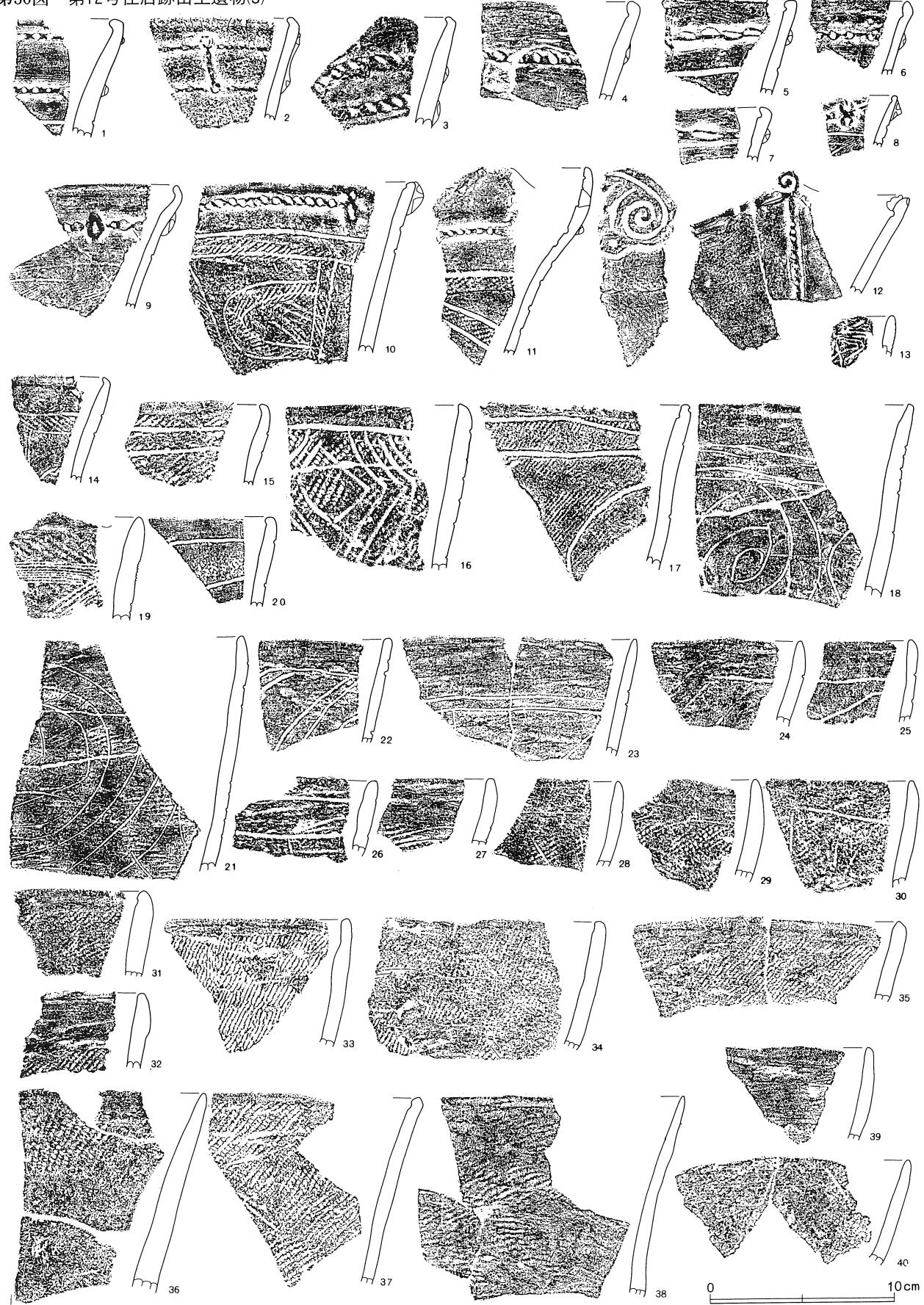


である。5は波状口縁を呈する。7・8は浅鉢形土器である。7は直線的に外反して立ち上がる。口縁部に内文をもつ。内文は2条の横走する沈線間に細かい刻み目を施す。また円形状のモチーフが認められる。8は内彎する平縁の浅鉢形土器である。多条沈線により三角形のモチーフを描く。9～11及び13～16は紐線文が施文される深鉢胴部である。9には「8」字状貼付文が付く。12は刻み目のない隆帯が付く。13～16は紐線文下に2条の沈線により、区画文及び渦巻文が描かれる。区画文内は縄文が充填施文されている。17～34までは沈線により三角形または菱形の組み合わせによるモチーフが描かれる深鉢胴部である。21・22は2条の沈線で菱形文を区画している。区画内は沈線で同形に充填し、区画間に縄文を充填施文している。23は同様に三角形のモチーフを描く。24・25は多条沈線により斜行文を描く。26は菱形の区画沈線外に縄文を施文している。27～33は胴部区画沈線以上に連結して沈線により三角形文を描く。36～42は2条の横走する沈線により胴部区画文を描く深鉢形土器胴部である。43は2条の沈線により縦位に区画し、区画内に幾何学文様を描く。44及び第32図1は沈線により梓状文を描く深鉢形土器胴部である。2は渦巻状のモチーフを施文しLR縄文を充填施文する。3は渦巻文と三角形文を組み合わせたモチーフを描く。4は地文縄文に2条の沈線により蛇行状のモチーフを描く。5・6は沈線により格子目文を描く。7・8及び10～13は多条沈線により文様を描く。10・11・12は弧線状のモチーフを描く。13は矢羽根状のモチーフを描く。14・15は樽形を呈する鉢形土器である。2条の沈線により円文を描く。16～22は縄文のみ施文された深鉢形土器胴部である。23・24は注口土器である。23は胴部の屈曲が強く、無文で丁寧に磨かれている。24は注口部を囲むようにして刻み目の付く複数の沈線が巡る。25～35は無文の粗製深鉢形土器である。25の口唇部は尖っている。第33図1～10は底部破片である。1は範調整を加えている。2・3には編み目の細かい網代痕が付く。

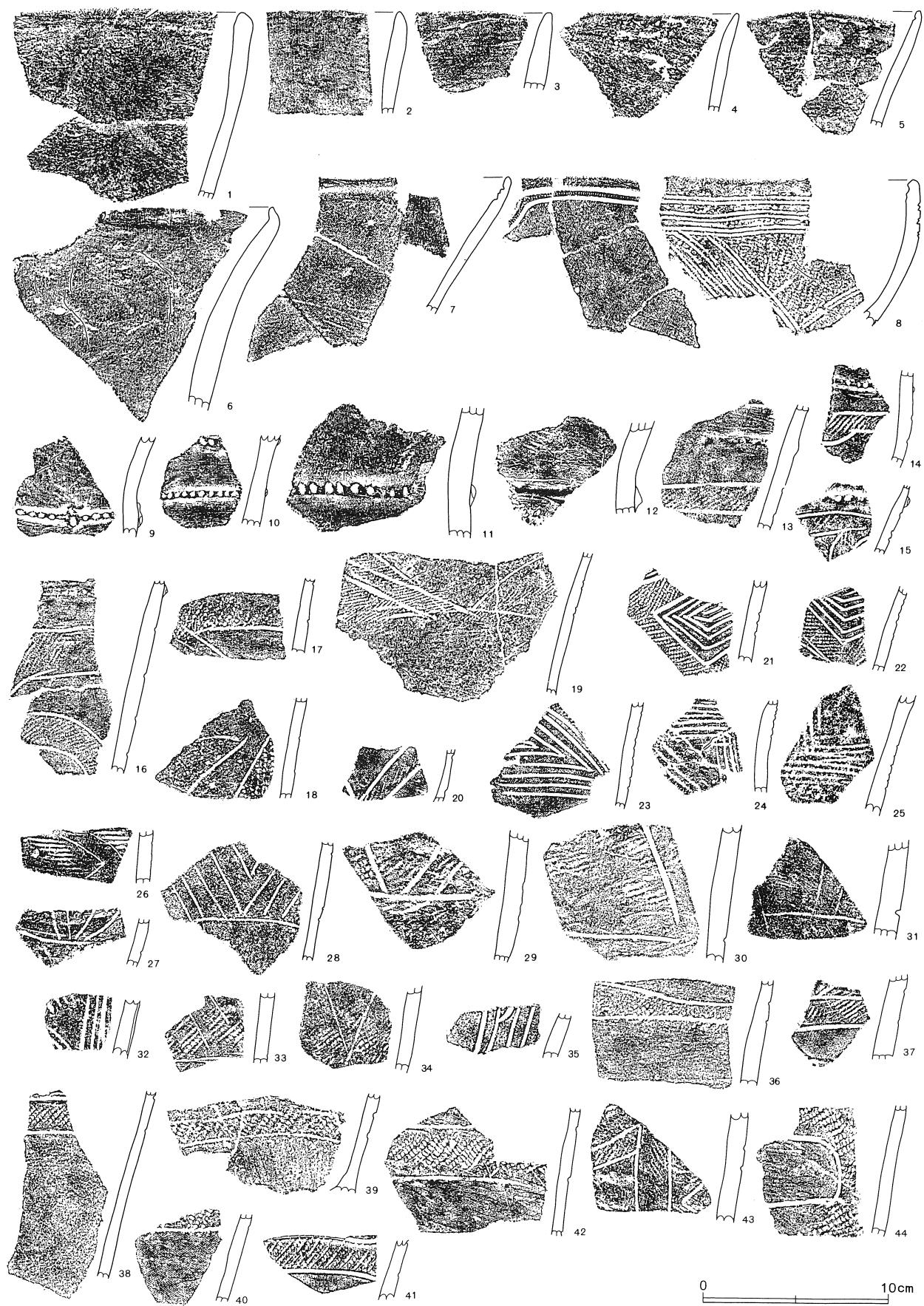
第33図11～33は住居跡覆土に流入して出土した土器である。11～16は底部から直線的に立ち上がり口唇部

で屈曲する平縁の深鉢形土器である。11には口唇部に2条の沈線が施文され、以下縄文が施文される。12は1条の沈線が施文され、以下縄文が施文される。13は口唇部が角頭状を呈し沈線が施文される。14は凹線下に櫛歯状工具による条線を施文する。15は口唇部に刺突列をもつ2条の沈線を配し以下に沈線による縦位の区画沈線を施文する。16は多条沈線により弧状のモチーフを描く。17はやや内傾する口縁部に指頭による押圧を加え、把手を作り出している。18は口縁部直下に隆帯を貼り付けている。19は隆帯下を条線により施文している。20～27は沈線により文様を描く深鉢形土器胴部である。23は蕨手文が施文されている。25は三角形文内に円文が描かれる。26は胴部区画沈線以上に、三角形文を施文している。27は斜行文に多条沈線で充填している。28は胴部が括れ口縁部が外反する鉢形土器胴部である。29・30は地文縄文に沈線で施文する深鉢形土器胴部である。30は複数の沈線で三角形文を描いている。31は垂下する沈線に斜行文を施文している。32・33は垂下する沈線が施文されている。34は分銅形を呈する打製石斧である。頭部から胴部にかけて欠損する。表裏面に自然面を残す。刃部は曲線形で成形剝離は粗い。35は石皿の破片である。

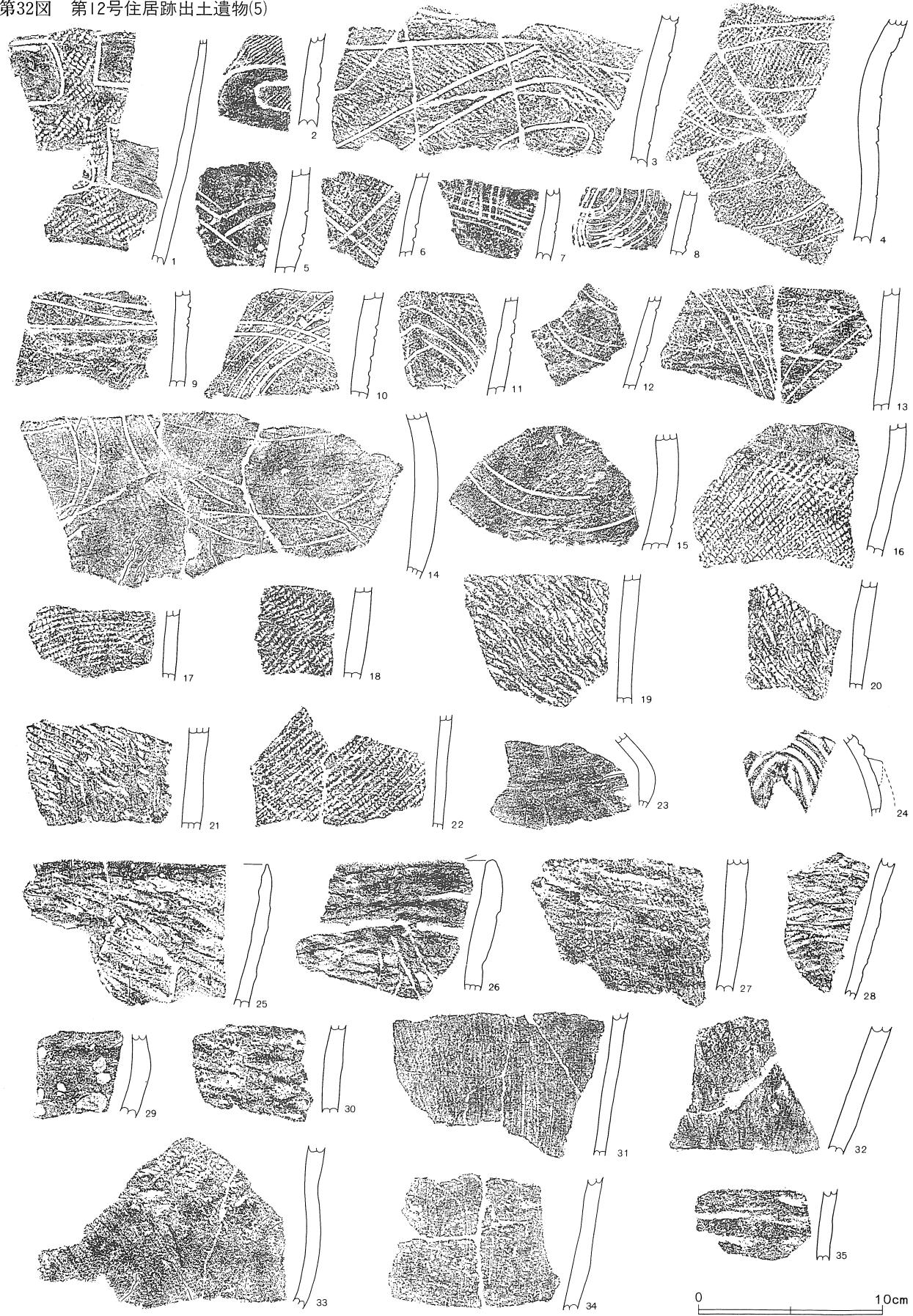
第30図 第12号住居跡出土遺物(3)



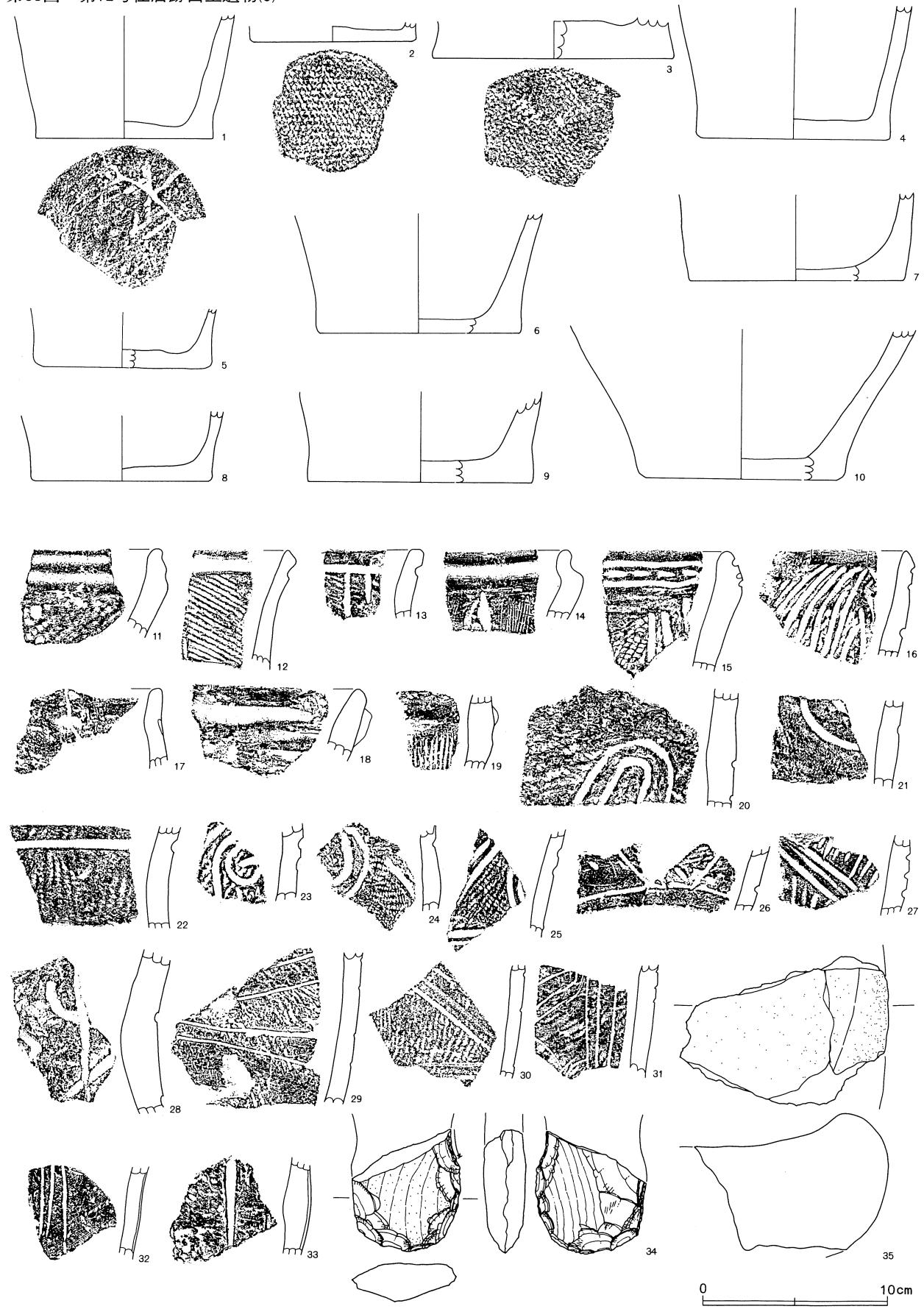
第31図 第12号住居跡出土遺物(4)



第32図 第12号住居跡出土遺物(5)



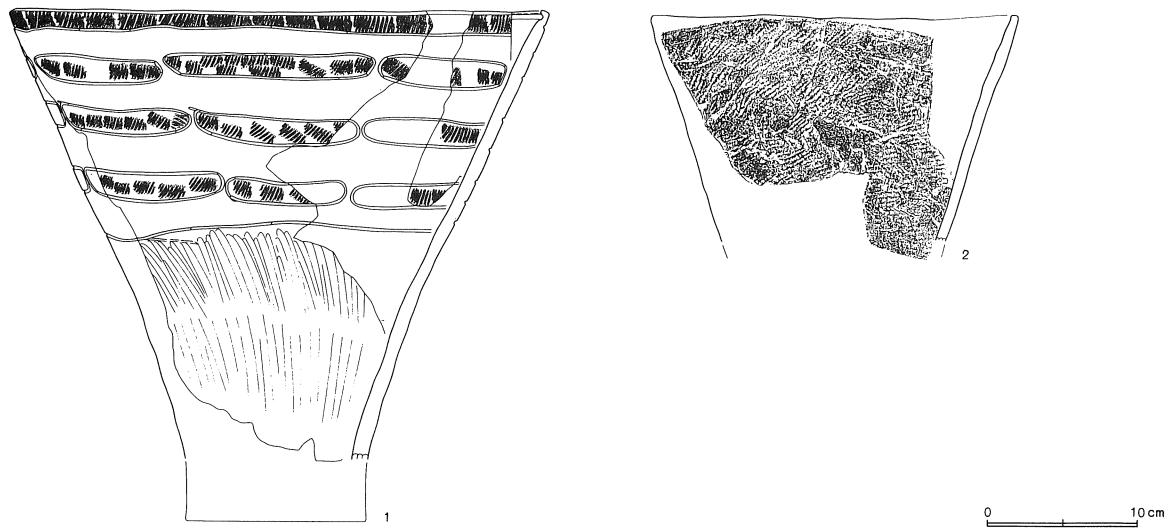
第33図 第12号住居跡出土遺物(6)



第34図 第13号住居跡



第35図 第13号住居跡出土遺物



第13号住居跡（第34図）

G・H-21・22グリッドに検出された。住居跡北西側を第49号溝によって壊されていた。本住居跡炉跡は、第231・232号土壙を切って構築されていた。遺構確認では、壁が検出されなかった。また、住居跡東側は、地形上緩に傾斜しておりこの部分に張り床が認められた。平面プランは、南北方向に長い楕円形と推定される。長軸柱穴間9.20m、短軸柱穴間7.10m、であった。主軸は、不明であった。床面からは、炉跡、柱穴が検出された。柱穴は、計44本検出され壁柱穴であった。P-1～36・38・39で一周する柱穴と、この南内側に巡るP-37・40～44とに別れる。また北東部に重なる柱穴配置を示していたことから、本住居跡の建て替えが行われたと考えられる。深さは、11cm～39cmの範囲にあり西側柱穴は、30cm前後で深かった。炉跡は中央やや西よりで検出され、土器片囲い炉であった。第35図1・2の深鉢胴上半部半周部分及び口縁部破片が文様を表に向け張り付けられていた。堀り方は、長径70cm、短径60cm、深さ30cmの楕円形であった。覆土には、多量の焼土が含まれよく焼けていた。

出土した遺物は、炉跡埋設土器の他、グリッド出土遺物に本住居跡に関連する遺物が出土した。

第13号住居跡出土遺物（第35図）

1は炉体土器であった。底部から口縁部にかけて直線的に外反する平縁の深鉢形土器で、底部を欠損し、半

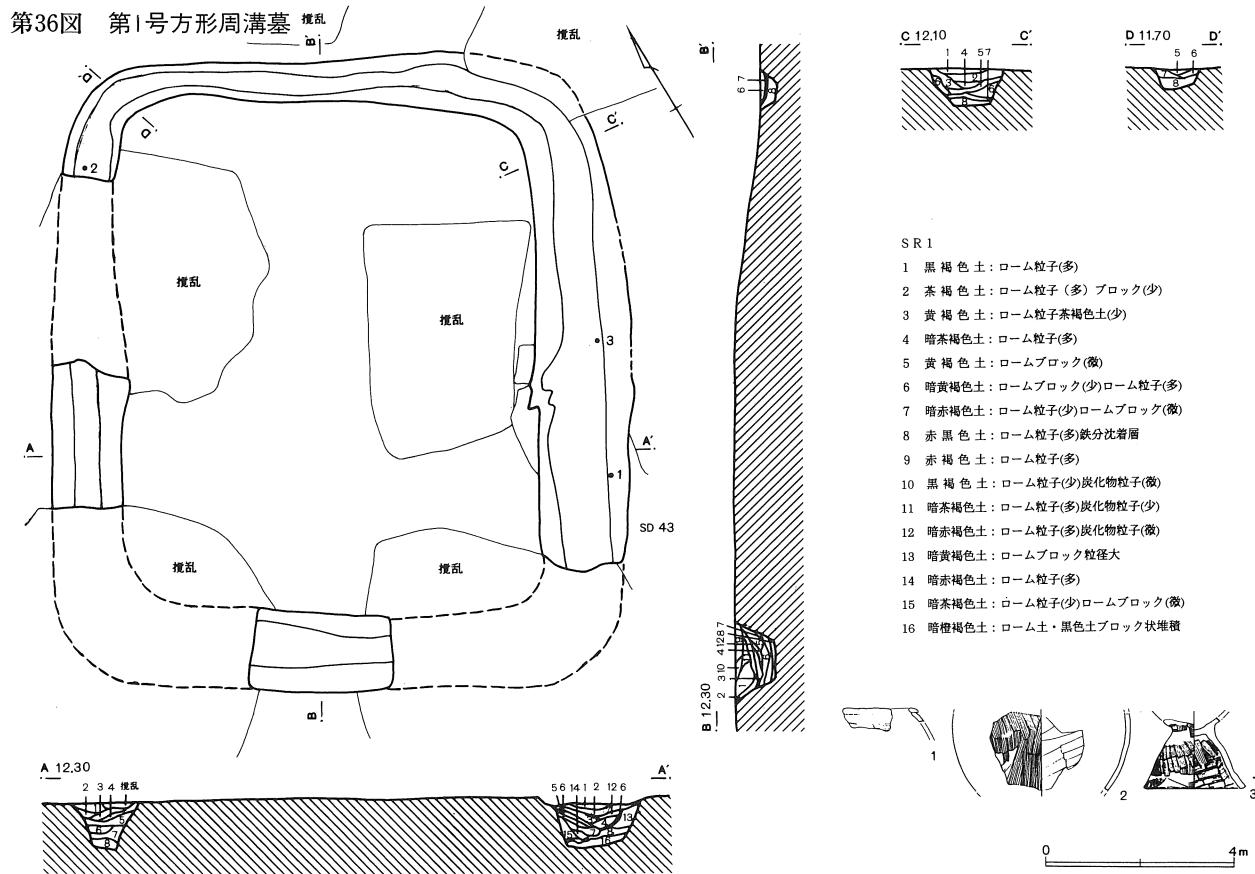
周分のみ残存する。口唇部は「く」字状に内屈する。口縁部内面に1条の横走する沈線が巡る。文様は2条の沈線により、胴部文様帯を区画している。口縁部には撲の細かいLR繩文を横位に充填施文している。胴部文様は1条の沈線により枠状文または、長楕円形の区画文を3段に配置している。区画文は6単位を構成すると考えられる。長楕円形区画文内には、撲の細かいLR繩文が粗雑に充填施文される。胴部区画沈線下には、縦位の範調整が施されている。2は底部から口縁部に向かって直線的に外反する、平縁の深鉢形土器である。胴部上半部以上の大形破片である。口唇部は角頭状を呈する。文様は繩文のみ施文されている。施文原体はLR繩文を横位に施文している。器面に輪積痕が認められる。本土器は薄手に作られている。

## 2. 方形周溝墓

### 第1号方形周溝墓(第36図)

G・H-18・19グリッドに検出された。本跡南東溝東側に近接し軸を同じくして、第2号方形周溝墓があつた。攪乱により大部分が壊されていた。また、第10号住居跡を切り、第43号溝に切られていた。区画溝は南北方向にやや長い隅円方形で、各溝は連接して一周していた。溝は幅2.0m、深さ1.0mの断面逆台形状で、土層観察の結果、方台部からのローム土を交えた土砂の流入堆積が著しかった。溝底は平坦で、土壌状の落ち込みは認められなかった。方台部は、長軸10.7m、短軸8.6mであった。主軸は、長軸方向でN-30°-Eであった。方台部内は、平坦で主体部等の埋葬施設は、確認されなかった。

本方形周溝墓に伴う遺物は少なく、第39図1の無頸壺破片及び台付甕脚部が東側溝底より出土し、同図2の台付甕胴部破片が北西コーナーより出土した。また覆土から縄文時代の遺物が多量に出土した。

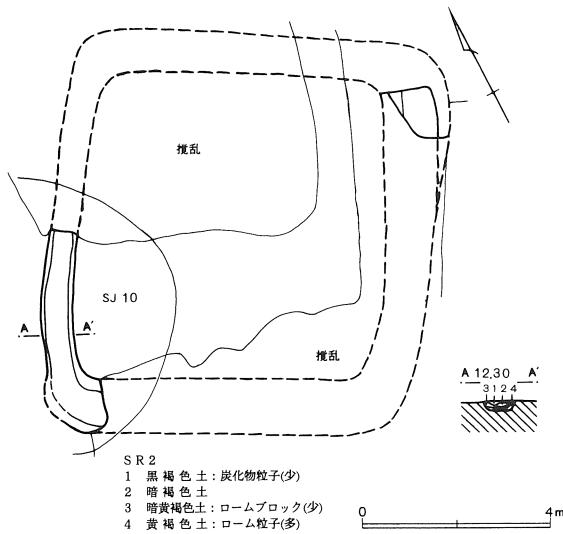


### 第2号方形周溝墓(第37図)

H-19・20グリッドに検出された。本跡南西溝西側に近接し、軸を同じくして第1号方形周溝墓があつた。また北東溝は、第3号方形周溝墓と共有していた。攪乱により大部分が壊されていた。また、第10号住居跡を切って構築していた。区画溝は隅円方形で、各溝は連接して一周していたものと考えられる。溝は幅1.2m、深さ0.2mの断面方形であった。溝底は平坦で、土壌状の落ち込みは認められなかった。方台部は、推定長軸6.6m、推定短軸6.4mであった。主軸は、長軸方向でN-30°-Eであった。方台部内は、平坦で主体部等の埋葬施設は、確認されなかった。

本方形周溝墓に伴う遺物は無く、覆土から縄文時代の遺物が少量出土した。

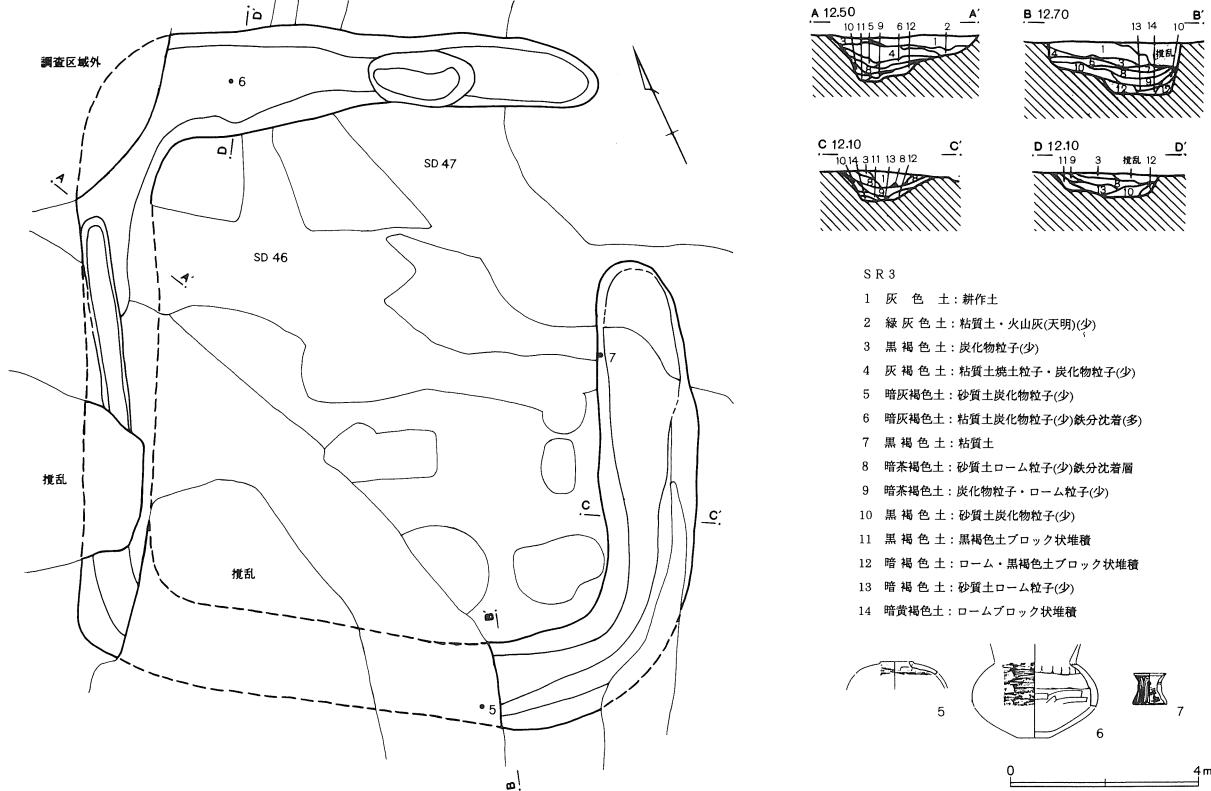
第37図 第2号方形周溝墓



第3号方形周溝墓(第38図)

F・G・H-19・20・21グリッドに検出された。この遺跡で検出された3基の方形周溝墓の中で、最大規模であった。本跡南西溝は、第2号方形周溝墓と共有していた。擾乱により南側溝が壊されていた。北西コーナーは調査区外であった。また、第46・47・48号溝に切られていた。区画溝は、南北方向にやや長い隅円方形で、北東コーナーに陸橋部が設けられていた。溝は、幅2.1m、

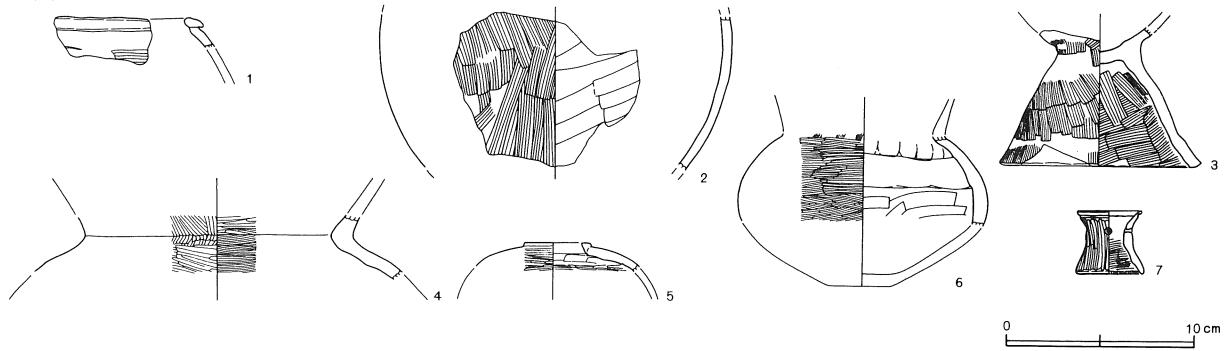
第38図 第3号方形周溝墓



深さ1.1mの方台部側に一段設平場を設けた、断面逆台形状であった。土層観察の結果、方台部からのローム土を交えた土砂の流入堆積が著しかった。溝底は平坦で、北側溝中央部に長径2.2m、短径1.2mの浅い土壌状の落ち込みが検出された。方台部は、長軸11.1m、短軸9.6mであった。主軸は、長軸方向でN-30°-Eであった。方台部内は、平坦であった。中央部には主軸に直交して、第207号土壌及び第217号土壌の2基の長方形をした土壌が検出された。この2基の土壌覆土からは、ロームブロックを含む一括埋土に伴って、多量の炭化材が出土したが、当該期に属する遺物は確認されなかった。よって、主体部に関連する埋葬施設であるかは、判明しなかった。

本方形周溝墓に伴う遺物は少なく、第39図5の小型無頸壺破片が南側溝底より出土し、同図6の堆型土器破片が北側溝より出土した。また同図7の器台ミニチュアが東側溝底から出土した。この他、覆土から縄文時代の遺物が多量に出土した。

第39図 方形周溝墓出土遺物(I)



第1表 方形周溝墓出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	無頸壺(口縁)	—	—	—	ABJ	B	にぶい橙	5%未	SR1
2	台付甕(胴)	—	—	—	ABFH	B	橙	10%	SR1
3	台付甕(脚)	—	—	10.2	ABJ	B	明赤橙	10%	SR1
4	壺(頸)	—	—	—	F	A	にぶい橙	5%未	SR3 赤彩
5	無頸甕(口縁)	3.5	—	—	AH	A	橙	5%未	SR3
6	壇(胴)	—	—	—	AJ	A	にぶい橙	5%	SR3
7	ミニチュア(器台)	3.4	3.3	3.5	BGI	B	灰白	40%	SR3 側面穿孔

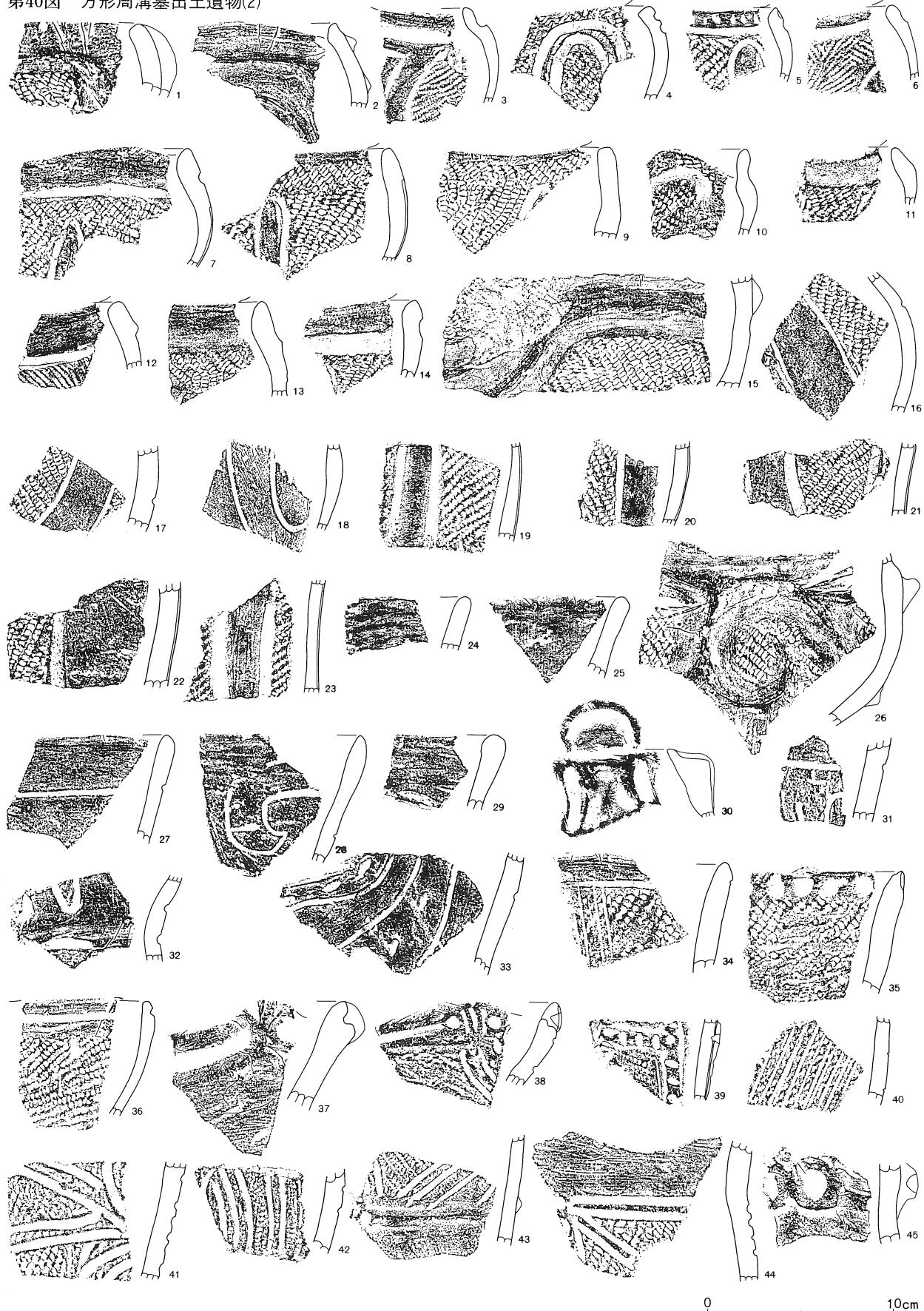
方形周溝墓出土遺物(第39・40・41図)

第39図1は無頸壺口縁部破片である。口縁部に粘土帯を貼り付け、折り返し口縁状に作り出している。成形は外面に横位のヘラミガキが施されている。2は胴部中央部が張る台付甕胴部大型破片である。器面調整は外面が5本1単位の櫛歯状工具による縦位のハケ調整を施す。内面は横位のヘラケズリを施す。3は台付甕脚部である。胴部と脚部の接合部はソケット状に接合している。脚部底面は外反する。器面調整は外面が5本1単位の櫛歯状工具による縦位のハケ調整を施す。内面は同様の工具で、縦位および横位にハケ調整を施す。4は壺頸部破片である。本土器は焼成が良く堅緻である。器面調整は外面が頸部接合部で、縦位のヘラミガキを施し、胴部は横位のヘラミガキを施す。内面は横位のヘラミガキを施す。5は小型の無頸壺口縁部破片である。本土器は薄手であるが堅緻に作られている。口唇部は細い粘土帯を貼り付け平坦に面取りがされている。器面調整は外面が横位のヘラミガキを施す。内面は横位のヘラケズリ後にヘラミガキを施す。6は胴部がやや張る壇形土器胴部破片である。本土器は焼成が良く堅緻である。器面調整は外面が頸部接合部に縦位のハケ

調整後に、横位の細かいヘラミガキを施す。内面は接合部を指頭で押さえ、横位のヘラケズリを施す。7は器台のミニチュアである。口唇部直下に1条の沈線を巡らす。上半部に焼成後の穿孔を一箇所設けている。器面調整は縦位のヘラミガキを施す。

第40・41図出土遺物は方形周溝墓の溝内に流入して出土した遺物である。第40図1は平縁の深鉢形土器口縁部である。口縁部にナゾリを加えた貼り付け隆帯により区画文を施文する。2~14は胴部で緩く括れ口縁部で内弯する、波状口縁の深鉢形土器口縁部である。2は隆帯により口縁部を区画し、以下に渦巻文を施文する。3は幅広の沈線にナゾリを加えて口縁部を区画し、以下に沈線による区画文を施文する。4~6は波状沈線文を施文する。5は「匚」字文が深く貫入する。7は口縁部を1条の沈線で区画し、以下に「W」字状文を施文する。8は幅の狭い波状文を施文する。10は波頂部に「つ」字状の沈線を施文する。11は口縁部にナゾリを加え隆帯状にし、以下に「W」字状文を施文する。15は幅広の隆帯により区画文を施文する深鉢形土器である。16は2条の沈線により渦巻文を描くと考えられる。17~18は、渦巻文・鉤状文を描く深鉢胴部である。19~23は

第40図 方形周溝墓出土遺物(2)

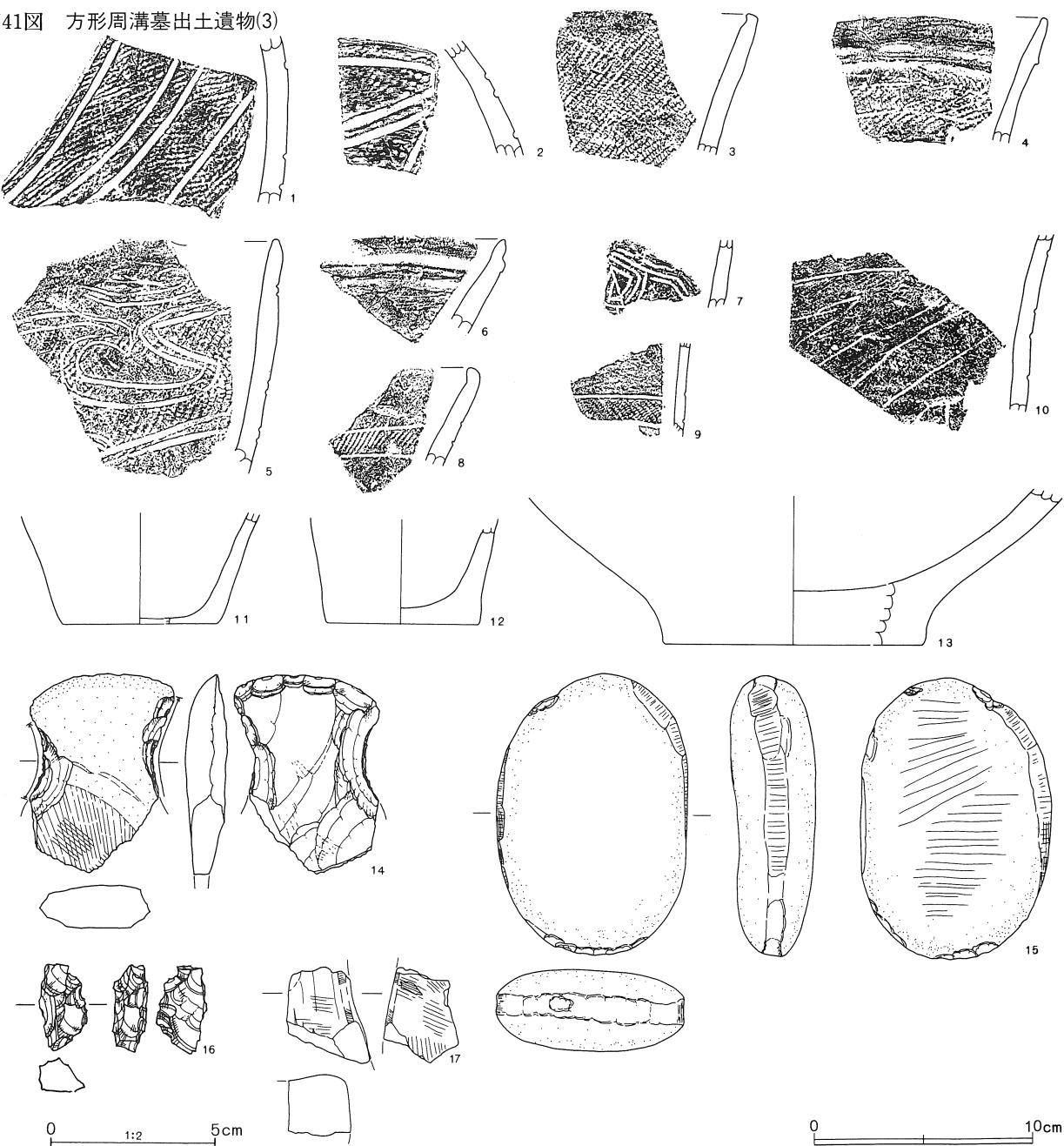


磨消懸垂文を施文する深鉢胴部である。24～26は浅鉢形土器ないしは、両耳壺である。26は隆帯により渦巻文と橢円形の区画文が描かれる。27～33は胴部で括れ口縁部に向かって直線的に外反する深鉢形土器である。施文は1条の沈線により描かれ、33は列点文が充填される。34は口縁部を沈線で区画し、以下に懸垂線を施文する。35は口縁部に工具による押圧列を施す。37は波状口縁部で口縁部に沈線文を施文する。39は縦横の刻文隆帯を施文する。40～42は地文縄文に沈線で施文す

る深鉢形土器である。43・44は隆帯により胴部を区画している。45には眼鏡状の貼付文が付く。第41図1は地文縄文に複数の沈線により、弧状のモチーフを描く。5は地文縄文に沈線により幾何学文を施文する。10は2条の沈線により三角形文を施文する。

第41図14は分銅形打製石斧である。刃部を欠損する。表面に自然面を残す。刃部方向に線条痕が認められる。15は磨石である。16は剝片である。17は、砥石で大部分を欠損する。

第41図 方形周溝墓出土遺物(3)



### 3. 土壙

本項では、主に遺物の出土状況及び形態から重要なとされる土壙について記載する。また形態から炉穴と考えられる土壙が検出されており、この遺構の記載を本項に含めることとする。また、各土壙の諸計測値及び主軸方位、時期など判明しているものに付いては、一覧表として掲載した。

#### 第1号土壙(第42図)

C-3グリッドに検出された。この遺跡で最も北側に検出された土壙である。形態は楕円形で、皿形の堀り込みであった。壙底は平坦であった。主軸が、第1号溝に直交していたことから、溝との関連性があったと考えられる。遺物は出土しなかった。

#### 第40号土壙(第43図)

F-6グリッドに検出された。形態上から縄文時代に属する落とし穴であった。長楕円形でロート状の堀り込みであった。壙底は平坦で、長軸方向に入り込んでいた。覆土は、ロームブロックを含む一括埋土で、遺物は出土しなかった。

#### 第43号土壙(第44図)

F-5グリッドに検出された。形態上から縄文時代早期に属する炉穴であった。楕円形で擂鉢形の堀り込みであった。壙底直上に赤熱による硬化面が認められた。また覆土中に焼土ブロックが堆積していた。土壙南西隅に小形のピットが検出された。遺物は出土しなかった。

#### 第46号土壙(第44図)

G-5グリッドに検出された。形態上から縄文時代早期に属する炉穴であった。不整円形で擂鉢形の堀り込みであった。壙底直上に赤熱による硬化面が認められた。また覆土中に焼土ブロックが堆積していた。土壙北西隅に小形のピットが検出された。遺物は出土しなかった。

#### 第47・48・49号土壙(第44図)

G-5グリッドに検出された。49-48-47号土壙の順番で構築されていた。第47号土壙は、長楕円形で浅い堀り込みであった。第48号土壙は、不整円形で皿形の

堀り込みで第49号土壙と関連性をもつ土壙であった。第49号土壙は、形態上から縄文時代早期に属する炉穴であった。長楕円形で擂鉢形の堀り込みであった。壙底北側直上に、赤熱による円形の硬化面が認められた。また南側壙底部にもブロック状の硬化面が認められた。覆土には、焼土粒子が堆積していた。土壙北側隅に小形のピットが検出された。遺物は出土しなかった。

#### 第59号土壙(第44図)

H-5グリッドに検出された。形態上から縄文時代早期に属する炉穴であった。不整円形で浅い擂鉢形の堀り込みであった。壙底西側直上に赤熱による硬化面が認められた。また覆土中に焼土ブロックが堆積していた。土壙北南西隅に小形のピットが検出された。遺物は、第59図59-1の石鏃が覆土上層より出土した。

#### 第66号土壙(第45図)

I-7グリッドに検出された。形態は不整方形で、皿形の堀り込みであった。壙底は平坦であった。主軸が北西-南東方向に向き、本遺跡で検出された近世の溝及び土壙に対応していた。遺物は第62図66-1の蓮弁文の鉢が出土した。

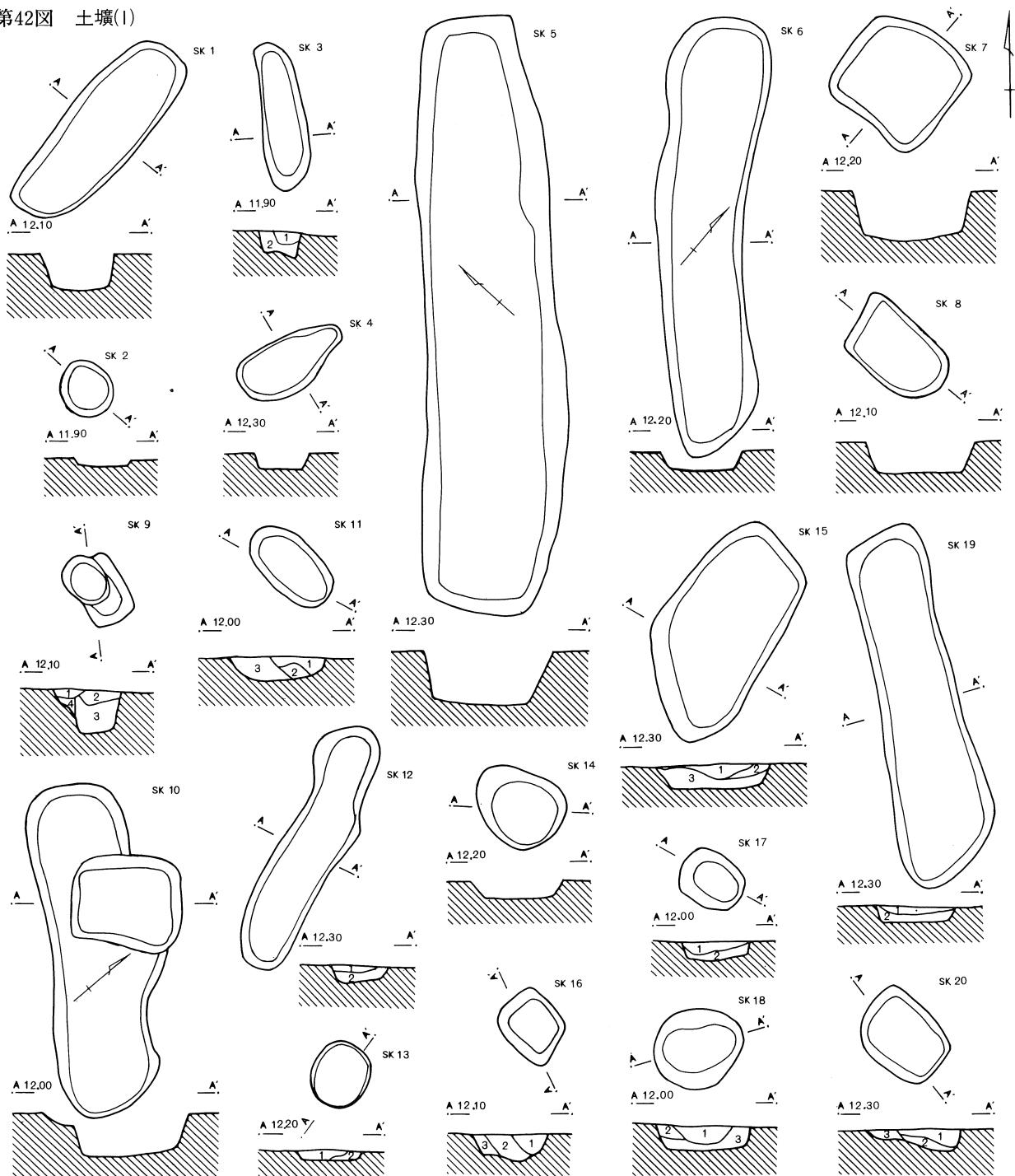
#### 第74号土壙(第45図)

J-6・7グリッドに検出された。この遺跡で最大規模の土壙であった。形態は、方形で二段の堀り込みがあり西側に重複する土壙があった。壙底は平坦であった。遺物は角閃石安山岩大形破片が散乱して出土した。

#### 第81号土壙(第46図)

J-6グリッドに検出された。形態は円形で、垂直の堀り込みであった。壙底は平坦であった。覆土には、黒色の粘質土が堆積していた。遺物は、第62図81-1の常滑産の片口鉢が、外側に漆編物の付着した状態で出土した。

第42図 土壌(1)



SK 3

- 1 黒褐色土: シルト質土  
2 黒褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

SK 9

- 1 黒褐色土: シルト質土 ローム粒子(微)  
2 黒褐色土: シルト質土 ローム粒子(少)  
3 黒褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積  
4 黒褐色土: シルト質土

SK 11

- 1 黒褐色土: シルト質土  
2 黒褐色土: シルト質土 ローム粒子(少)  
3 黒褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

SK 12

- 1 灰黄褐色土: 粘質土 焼土粒子(微)  
2 暗褐色土: シルト質土 ローム粒子(微)

SK 13

- 1 黒褐色土: シルト質土 ローム粒子(少)  
2 黒褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

SK 15

- 1 黒褐色土: シルト質土 ローム粒子(微)  
2 暗褐色土: シルト質土 ローム粒子(微)  
3 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

SK 16

- 1 黒褐色土: シルト質土 暗褐色土ブロック状堆積  
2 黒褐色土: シルト質土 ローム粒子(微)  
3 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

SK 17

- 1 暗褐色土: シルト質土  
2 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

SK 18

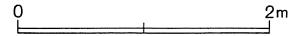
- 1 黒褐色土: シルト質土 ローム粒子(微)  
2 黒褐色土: シルト質土 ローム粒子(微)  
3 黒褐色土: シルト質土 暗褐色土粒子(微)

SK 19

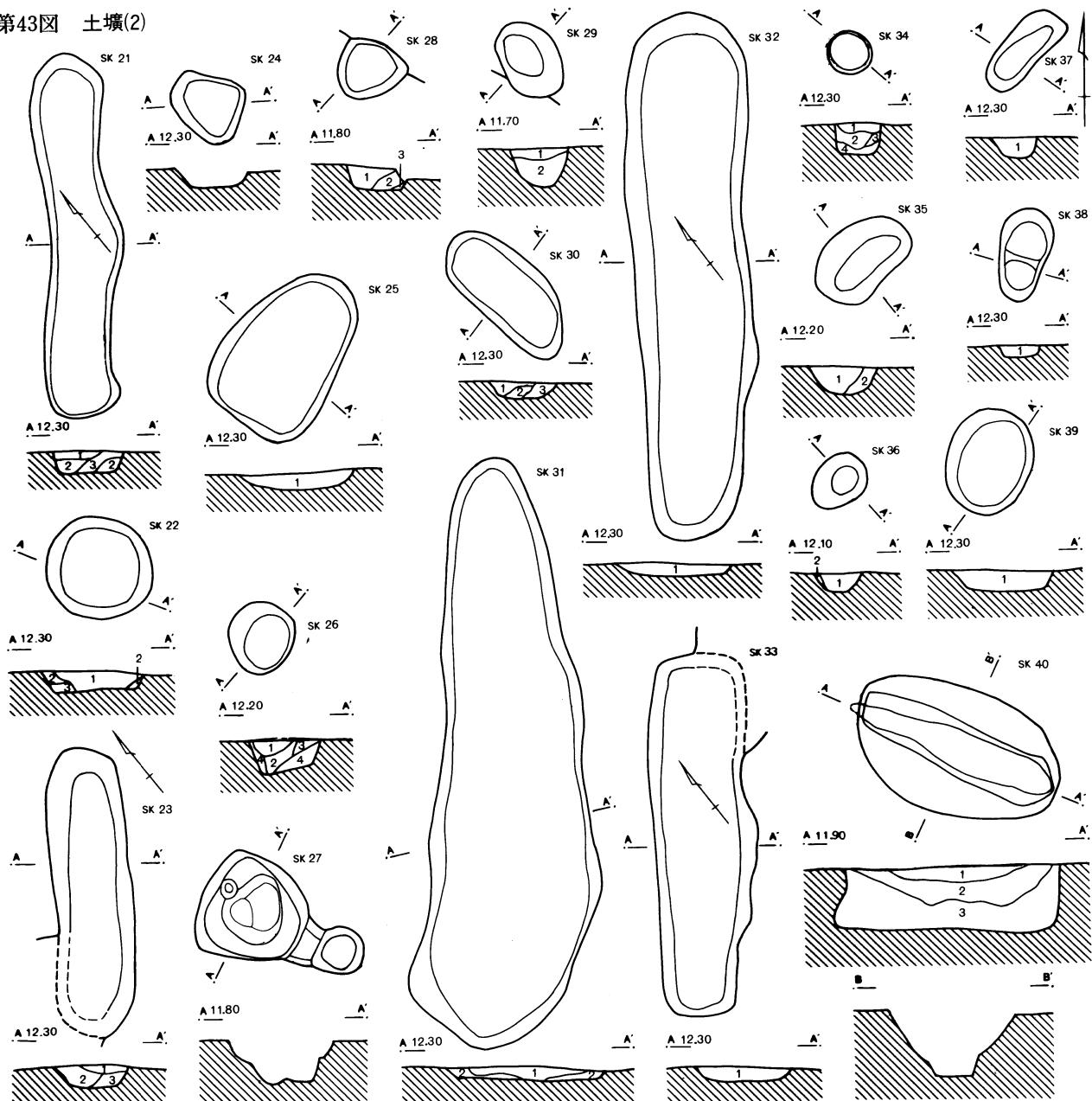
- 1 灰黄褐色土: 粘質土 ローム粒子(少)  
2 褐色土: シルト質土 ローム粒子(多)

SK 20

- 1 黒褐色土: シルト質土 ローム粒子(微)  
2 暗褐色土: シルト質土 黑褐色土粒子(微)  
3 暗褐色土: シルト質土 ローム粒子(少)



第43図 土壌(2)



SK 21

- 1 灰黄褐色土：粘質土 ローム粒子(少)
- 2 黄褐色土：ローム土ブロック状堆積
- 3 暗褐色土：シルト質土 ローム粒子(少)

SK 22

- 1 灰黄褐色土：粘質土
- 2 暗褐色土：粘質土 ローム粒子(少)
- 3 暗褐色土：粘質土

SK 23

- 1 灰黄褐色土：粘質土 ローム粒子(少)
- 2 暗褐色土：シルト質土 ローム粒子(少)
- 3 暗褐色土：シルト質土 ロームブロック状堆積

SK 25

- 1 灰黄褐色土：粘質土 ローム粒子(少)

SK 26

- 1 暗褐色土：ローム粒子(少)
- 2 暗褐色土：シルト質土 ロームブロック状堆積
- 3 暗褐色土：シルト質土 ロームブロック(少)
- 4 暗褐色土：シルト質土 暗褐色土ブロック状堆積

SK 28

- 1 灰色：砂質土 炭化物粒子(少)
- 2 灰オリーブ：ローム粒子(少)
- 3 灰オリーブ：ローム粒子(少)

SK 29

- 1 灰オリーブ：ローム粒子(少)
- 2 灰オリーブ：粘質土

SK 30

- 1 暗褐色土：粘質土 黑色粘土粒子(少)
- 2 暗褐色土：粘質土 ローム粒子(多)
- 3 褐色土：シルト質土 ローム粒子(少)

SK 31

- 1 灰黄褐色土：粘質土 黑色粘土粒子(少)
- 2 暗褐色土：粘質土 ローム土ブロック状堆積

SK 32

- 1 灰黄褐色土：シルト質土 ローム粒子(少)

SK 33

- 1 灰黄褐色土：粘質土 ローム粒子(少)
- 2 暗褐色土：粘質土 ロームブロック状堆積

SK 34

- 1 黑褐色土：シルト質土 ローム粒子(少)
- 2 黑褐色土：シルト質土 ローム粒子(多)
- 3 黑褐色土：シルト質土 暗褐色土ブロック状堆積
- 4 黑褐色土：シルト質土 暗褐色土粒子(多)

SK 35

- 1 灰黄褐色土：粘質土
- 2 暗褐色土：ロームブロック状堆積

SK 36

- 1 暗褐色土：シルト質土 ブロック状堆積
- 2 褐色土：シルト質土 ローム土ブロック状堆積

SK 37

- 1 暗褐色土：シルト質土 ロームブロック(少)

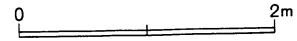
SK 38

- 1 暗褐色土：シルト質土 ロームブロック(多)

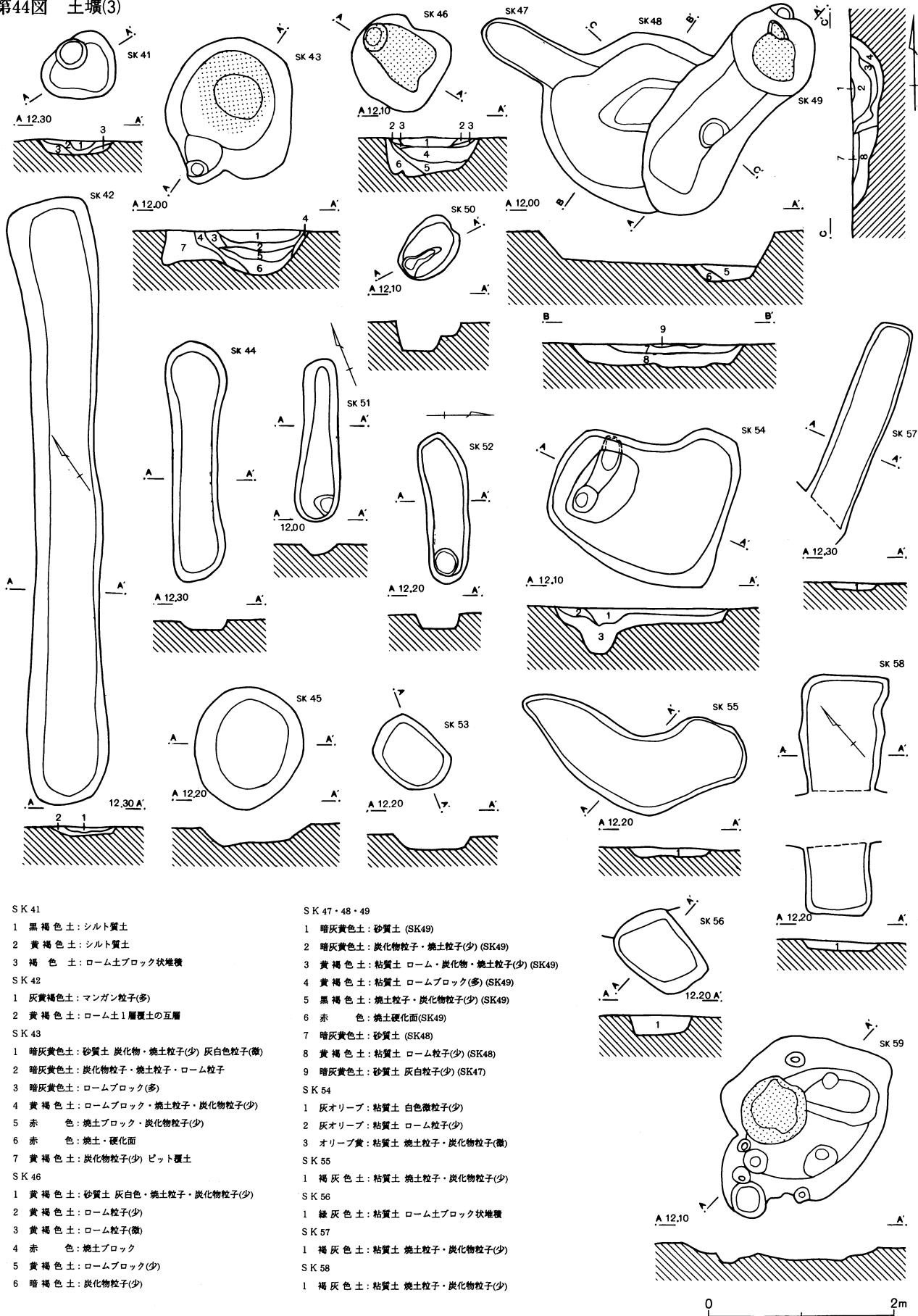
SK 39

- 1 暗褐色土：シルト質土 ブロック状堆積 炭化物粒子(少)
- 2 暗灰褐色土：粘質土
- 3 黄褐色土：砂質土 ローム粒子(少)

- 3 黄褐色土：ローム粒子(少) ブロック状堆積



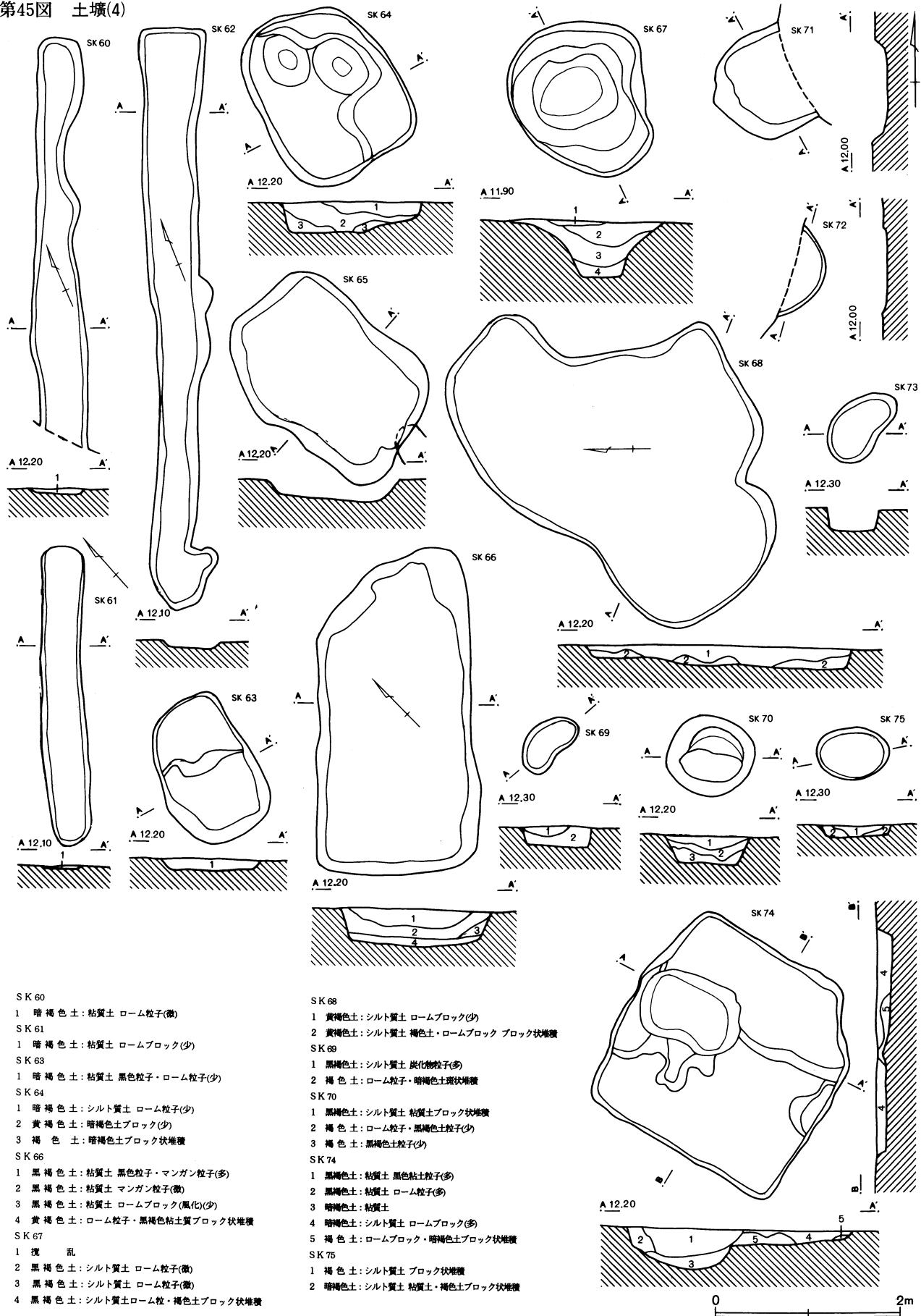
### 第44図 土壌(3)



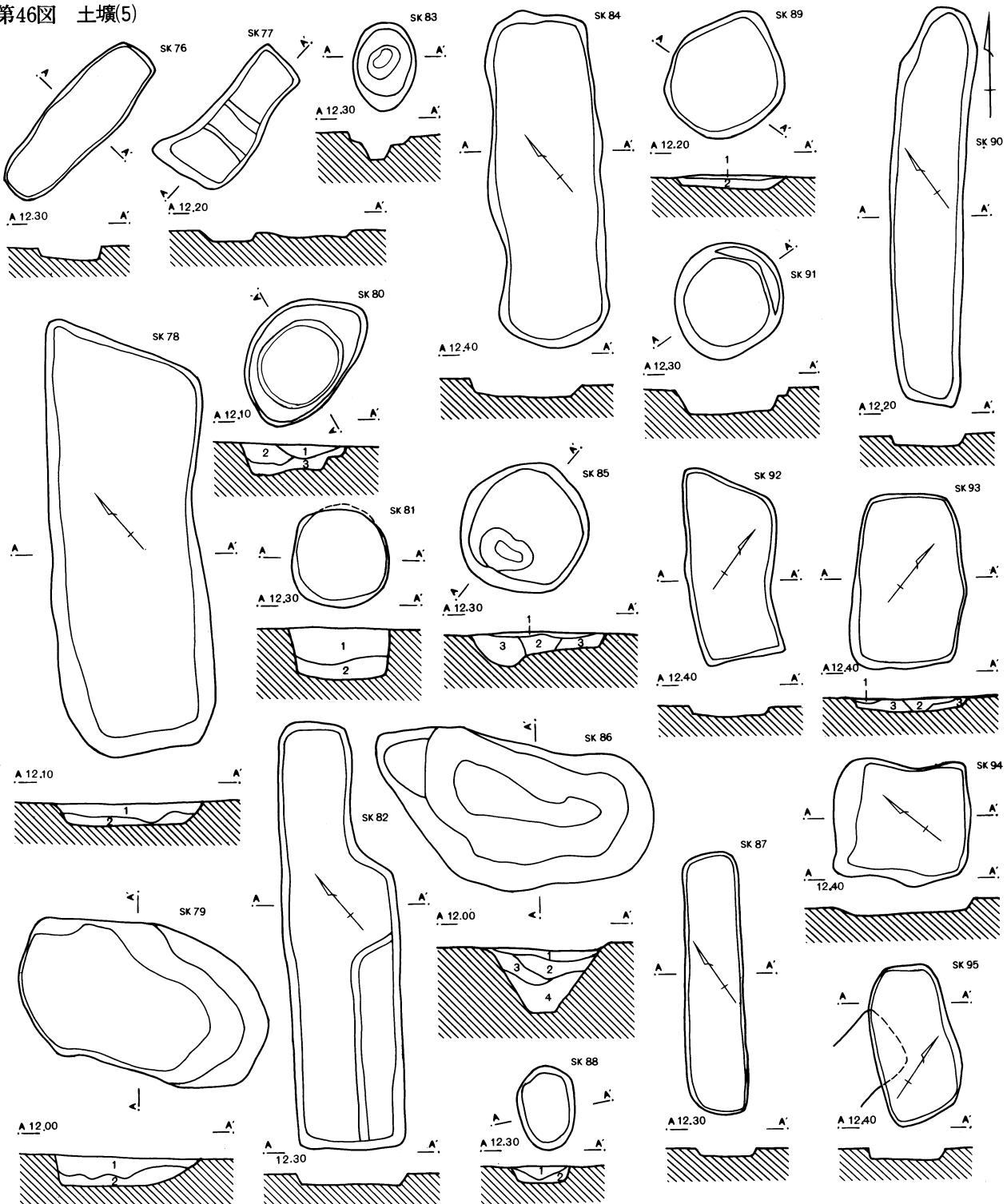
第2表 土壌一覧表(I)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	出土遺物	時期	備考
1	C-3	長方形	2.15	0.76	0.32	N-37°-E		近世	
2	C-4	円形	0.54	0.50	0.06	N-49°-W			
3	C-4	長楕円形	1.48	0.34	0.28	N- 9°-W			
4	D-2	楕円形	1.10	0.35	0.16	N-55°-E			
5	D-2・3	長方形	5.74	1.27	0.52	N-44°-E		近世	
6	D-3	長楕円形	4.23	0.80	0.22	N-40°-W		近世	
7	D-3	方形	1.15	1.00	0.47	N-41°-E		近世	
8	D-3	楕円形	1.02	0.65	0.30	N-50°-W		近世	
9	D-4	長方形	0.74	0.45	0.43	N-32°-W			重複
10	D-4	楕円形	3.18	0.90	0.42	N- 9°-W		近世	重複
11	D-4・5	楕円形	0.94	0.50	0.22	N-47°-W			
12	D-2	長楕円形	2.52	0.54	0.12	N-24°-E		近世	
13	D-3	円形	0.69	0.56	0.07	N-36°-E			
14	D-3	楕円形	0.90	0.70	0.17	N-53°-W			
15	D-4	不整方形	2.20	0.98	0.30	N-34°-E			
16	D-4	方形	0.68	0.54	0.37	N-45°-W			
17	D-4	楕円形	0.66	0.50	0.19	N-60°-W			
18	D-4・5	楕円形	0.90	0.70	0.26	N-74°-E			
19	E-2	長方形	3.46	0.70	0.18	N-14°-W		近世	
20	E-2	長方形	0.90	0.50	0.22	N-42°-W		近世	
21	E-2	長楕円形	3.28	0.60	0.20	N-40°-E		近世	
22	E-2	円形	0.98	0.95	0.20	N-67°-W		近世	
23	E-3	楕円形	2.60	0.70	0.18	N-35°-E		近世	
24	E-3	不整形	0.64	0.43	0.14	N-62°-W			
25	E-3	楕円形	1.56	0.80	0.18	N-32°-E		近世	
26	E-4	円形	0.64	0.56	0.33	N-42°-E			
27	E-6	不整形	0.96	0.92	0.39	N-61°-W			重複
28	E-6	不整形	0.64	0.56	0.19	N-41°-E			
29	E-6	楕円形	0.74	0.50	0.36	N-29°-W			
30	E-1・2	楕円形	1.40	0.38	0.15	N-45°-W		近世	
31	E-2	長楕円形	5.80	1.10	0.13	N- 0°		近世	
32	E-2	長楕円形	4.70	1.02	0.11	N- 0°		近世	
33	E-2	長方形	3.36	0.68	0.12	N-36°-E		近世	
34	E-3	円形	0.40	0.38	0.29	N-49°-W			
35	E-4	楕円形	0.56	0.32	0.26	N-48°-E			
36	E-5	円形	0.54	0.40	0.17	N-48°-E			
37	F-2	楕円形	0.88	0.38	0.20	N-41°-E			
38	F-2	楕円形	0.84	0.39	0.21	N-14°-E			
39	F-3	楕円形	0.94	0.78	0.26	N-10°-E			
40	F-6	楕円形	1.86	1.18	0.56	N-68°-W		縄文	落とし穴
41	F-3	不整形	0.82	0.70	0.45	N-58°-E			重複
42	F-4	長方形	6.44	0.70	0.11	N-39°-E		近世	
43	F-6	不整円形	1.54	1.38	0.22	N-25°-E		縄文	炉穴
44	G-3	長楕円形	2.56	0.50	0.10	N- 0°		近世	
45	G-5	円形	1.30	1.14	0.21	N- 0°			
46	G-5	不整円形	1.06	0.84	0.11	N-59°-W		縄文	炉穴
47	G-5	長楕円形	1.20	0.44	0.06	N-61°-W			48より新
48	G-5	不整円形	1.96	0.98	0.25	N-36°-E			49より新
49	G-5・6	楕円形	2.56	0.82	0.49	N-40°-E		縄文	炉穴
50	G-6	楕円形	0.74	0.54	0.31	N-37°-E			
51	G-6	長楕円形	1.74	0.38	0.11	N-21°-E		近世	
52	G-4	長楕円形	1.60	0.44	0.22	N-90°-W		近世	
53	G-5	楕円形	1.06	0.74	0.17	N-52°-W			

第45図 土壌(4)



第46図 土壌(5)



SK 78  
1 暗褐色土: シルト質土 褐色土ブロック状堆積  
2 褐色土: 暗褐色シルト粘質土(微)

SK 79

1 黒褐色土: シルト質土 ローム粒子(少)  
2 赤褐色土: シルト質土 ロームブロック(少)

SK 80

1 暗褐色土: シルト質土 ロームブロック(微)  
2 暗褐色土: ローム土ブロック状堆積  
3 暗褐色土: ハードローム ブロック状堆積

SK 81

1 黒褐色土: 粘質土 炭化物粒子・ロームブロック(風化)(微)  
2 黑褐色土: 粘質土 細砂粒子(不連続)堆積

SK 85  
1 黒褐色土: シルト質土 ローム粒子(微)  
2 黄褐色土: ローム土ブロック状堆積  
3 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

SK 86

1 黑褐色土: シルト質土 黑色粘土粒子(微)  
2 暗褐色土: シルト質土 黑色粘土粒子(微)  
3 暗褐色土: シルト質土 ロームブロック(多)  
4 黄褐色土: シルト質土 ロームブロック(多)

SK 88

1 暗褐色土: シルト質土  
2 褐色土: ローム土・暗褐色土の互層

SK 89  
1 灰黄褐色土: 粘質土 白色粗砂・ローム粒子(少)  
2 灰黄褐色土: 粘質土 ローム土ブロック状堆積

SK 93

1 暗褐色土: 粘質土 黑褐色粘土粒子(少)  
2 暗褐色土: シルト質土  
3 暗褐色土: 褐色土ブロック状堆積

0 2m

### 第154号土壙(第50図)

N-14グリッドに検出された。形態は楕円形で、皿形の堀り込みであった。壙底は平坦で、出土した深鉢形土器直下に楕円形の浅い堀り込みがあった。覆土は、ロームブロックを含むシルト質土壙が堆積していた。遺物は、第57図154-1の深鉢が底部を欠損して、潰れた状態で出土した。

### 第170号土壙(第51図)

N-14グリッドに検出された。形態は、円形で筒形の深い堀り込みであった。壙底は平坦であった。覆土は、炭化物・焼土・ロームブロックを含む土壙が、レンズ状に堆積していた。遺物は第59図170-1の土器破片が出土した。

### 第178号土壙(第51図)

N-12グリッドに検出された。形態は長楕円形で、垂直の堀り込みであった。壙底は平坦であった。主軸が北西-南東方向に向き、本遺跡で検出された近世の溝及び土壙に、対応していた。遺物は第62図178-1の志野皿が出土した。

### 第205号土壙(第52図)

H-20グリッドに検出された。本土壙は、北東側が調査区外にあった。形態は不整形で、皿形のやや深い堀り込みであった。壙底は平坦であった。また、底面直上に焼土の帶状堆積が認められた。遺物は出土しなかった。

### 第212号土壙(第56図)

G-22グリッドに検出された。本土壙は、縄文時代後期の包含層中に構築していた。形態は不整形で、浅い皿形の堀り込みであった。壙底は平坦であった。覆土は炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。遺物は第59図212-1~5の土器破片が出土した。

### 第215号土壙(第56図)

G-22グリッドに検出された。形態は楕円形で、浅い擂鉢形の堀り込みであった。覆土は黒色土が堆積していた。遺物は第57図215-1の深鉢形土器口縁部が出土した。

### 第218号土壙(第52図)

H-20グリッドに検出された。西側一部が擾乱によって壊されていた。形態は楕円形で、擂鉢形の堀り込みであった。壙底中央に円形の堀り込みがあった。遺物は第57図218-1の深鉢形土器が潰れた状態で出土した。

### 第219号土壙(第52図)

H-20グリッドに検出された。形態は円形で、皿形の堀り込みであった。壙底は平坦であった。覆土に焼土が含まれていた。遺物は第57図219-1の深鉢形土器胴部及び同図219-2の深鉢形土器底部が出土した。

### 第229号土壙(第53図)

H-22グリッドに検出された。本土壙は、第228・234号土壙を切っていた。形態は楕円形で、皿形の堀り込みであった。壙底は平坦であった。覆土は、炭化物・有機物を含む暗褐色土が堆積していた。遺物は第61図229-1~5土器破片が出土した。

### 第231号土壙(第53図)

H-22グリッドに検出された。本土壙は、第232号土壙を切っていた。また、第13号住居跡炉跡に切られていた。形態は楕円形で、擂鉢形の堀り込みであった。壙底は平坦であった。土壙中央部に第58図231-2の底部穿孔された深鉢形土器が倒立した状態で出土した。また、同土器口縁部の一部欠損部を同図231-1の深鉢形土器口縁部破片で覆っていた。覆土は、暗褐色土が堆積していた。また、土器内部からは、遺物は検出されなかった。

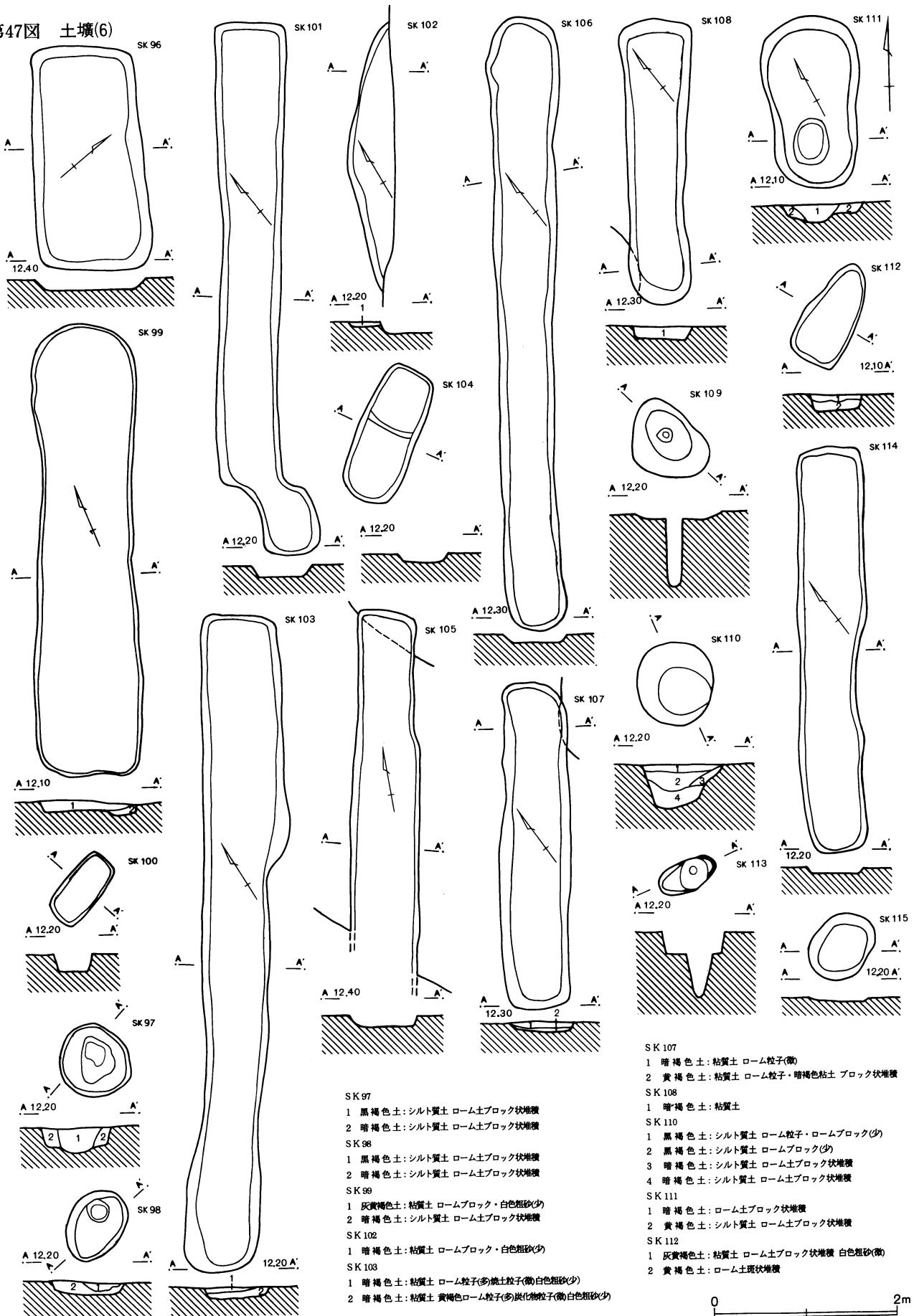
### 第235号土壙(第53図)

G-22グリッドに検出された。形態は楕円形で、擂鉢形のやや深い堀り込みであった。覆土は、炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。遺物は第57図235-1の粗製深鉢形土器が覆土中層で倒れた状態で出土した。

### 第238号土壙(第53図)

H-22グリッドに検出された。形態は楕円形で浅い皿形の堀り込みであった。覆土は炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。遺物は第57図238-1の深鉢形土器半周分が、壙底よりやや浮いた状態で潰れて出土した。

第47図 土壌(6)

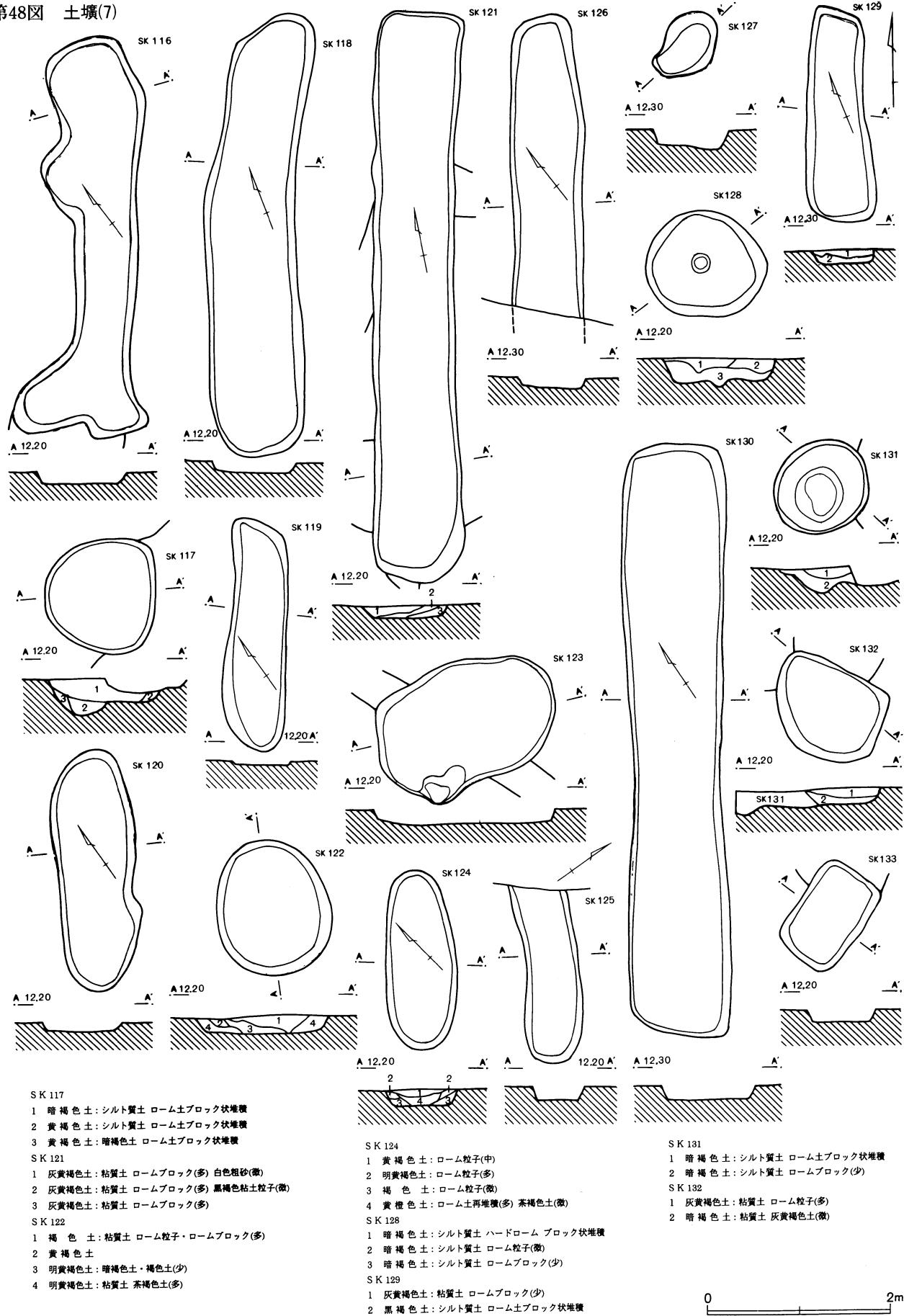


0 2m

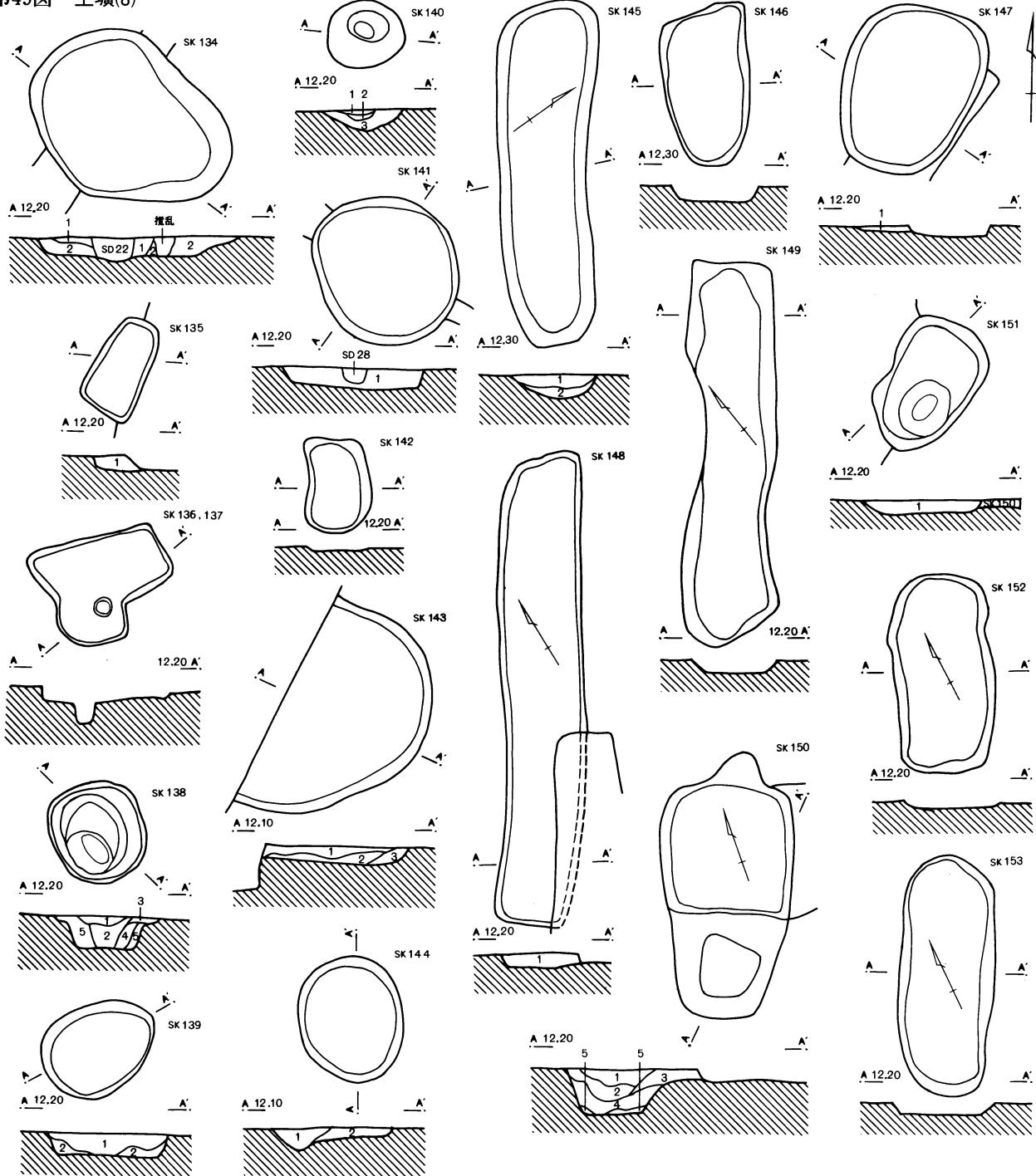
第3表 土壌一覧表(2)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	出土遺物	時期	備考
54	G-5・6	不整形	1.92	1.50	0.54	N-64°-W			
55	H-4	不整形	1.58	0.74	0.10	N-55°-W			
56	H-4	長方形	0.94	0.66	0.21	N-41°-W			
57	H-5	長方形	1.22	0.72	0.12	N-20°-E		近世	
58	H-5	長方形	2.22	0.30	0.07	N-43°-E		近世	
59	H-5	不整円形	2.24	1.65	0.17	N-45°-E	石鏃	繩文	炉穴
60	H-5	長方形	4.26	0.30	0.16	N-22°-E		近世	
61	H-5	長楕円形	3.04	0.42	0.06	N-45°-E		近世	
62	G-6	長方形	6.15	0.42	0.11	N-22°-E		近世	
63	H-6	楕円形	1.58	0.94	0.21	N-25°-W			
64	I-6	長方形	1.88	1.50	0.47	N-28°-W			
65	I-7	長方形	2.20	1.44	0.25	N-48°-W		近世	
66	I-7	不整方形	3.48	1.62	0.40	N-41°-E	蓮弁紋鉢	近世	
67	I-10	不整円形	1.75	1.37	0.59	N-37°-W		繩文	
68	I-6	不整形	3.80	2.65	0.27	N-50°-W			
69	J-7	楕円形	0.70	0.38	0.20	N-50°-E			
70	J-8	円形	0.95	0.83	0.32	N-90°-W			
71	J-12	不整形	1.14	0.85	0.07	N-28°-W			
72	J-12	不整円形	1.00	0.37	0.04	N-15°-E			
73	J-6	楕円形	0.90	0.40	0.24	N-40°-E			
74	J-6・7	方形	2.46	2.40	0.51	N-31°-E		近世	重複
75	J-7	楕円形	0.78	0.55	0.13	N-79°-E			
76	J-7	長方形	1.86	0.54	0.12	N-42°-E		近世	
77	J-8	長方形	1.48	0.47	0.11	N-36°-E		近世	
78	J-9	長方形	4.43	1.40	0.26	N-44°-E		近世	
79	J-10	楕円形	2.48	1.32	0.35	N-75°-W			
80	J-13	楕円形	1.42	0.95	0.27	N-30°-E			
81	K-6	円形	0.98	0.96	0.49	N-0°		中世	片側袋状
82	K-7	長方形	4.14	0.70	0.12	N-39°-E		近世	
83	K-7・8	楕円形	0.82	0.54	0.20	N-0°			
84	K-8	長方形	3.23	1.00	0.16	N-39°-E		近世	
85	K-8	円形	1.30	1.20	0.36	N-40°-E			
86	K-10	不整円形	2.81	1.23	0.75	N-80°-W			
87	K-8	長方形	2.55	0.58	0.14	N-36°-W		近世	
88	K-8	楕円形	0.80	0.51	0.15	N-6°-W			
89	L-12	不整円形	1.30	1.05	0.10	N-29°-E		近世	
90	K-14	長楕円形	3.82	0.67	0.12	N-34°-E		近世	
91	L-8	円形	1.11	1.05	0.25	N-56°-E			
92	L-8	不整方形	1.76	0.78	0.10	N-43°-W		近世	
93	K-8	長方形	1.70	0.97	0.10	N-38°-W		近世	
94	L-8	方形	1.36	1.09	0.15	N-34°-W		近世	
95	L-8	長方形	1.52	0.56	0.10	N-44°-W		近世	
96	L-8・9	長方形	2.91	1.13	0.16	N-44°-W		近世	
97	L-12	円形	0.80	0.74	0.26	N-40°-W			
98	L-12	楕円形	0.85	0.56	0.33	N-25°-E		近世	
99	L-12・13	長方形	4.86	0.96	0.16	N-22°-E		近世	
100	L-14	長方形	0.80	0.41	0.17	N-43°-E		近世	
101	L-14	長方形	5.71	0.62	0.12	N-39°-E		近世	
102	L-14・15	不整形	2.90	0.50	0.05	—			
103	K-15	長方形	7.04	0.70	0.17	N-30°-E		近世	
104	L-15	長方形	1.51	0.66	0.23	N-24°-E		近世	
105	L-8	長方形	4.20	0.61	0.20	N-6°-E		近世	
106	L-9・10	長楕円形	6.60	0.57	0.18	N-42°-E		近世	

### 第48図 土壌(7)



第49図 土壌(8)



SK 134

1 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積  
2 黄褐色土: 淩層

SK 135

1 黄褐色土: 粘質土 ローム土ブロック状堆積

SK 138

1 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロックの互層

2 暗褐色土: シルト質土 ロームブロック(少)

3 暗褐色土: シルト質土 ロームブロック(少)

4 黑褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

5 暗褐色土: シルト質土

SK 139

1 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

2 黄褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

SK 140

1 暗褐色土: シルト質土  
2 暗褐色土: シルト質土 黒色粒子(微)

3 黄褐色土: シルト質土 斑状堆積

SK 141

1 黄褐色土: 黑褐色シルトブロック(少)

SK 143

1 暗褐色土: シルト質土 ブロック状堆積

2 暗褐色土: シルト質土 ブロック状堆積

3 黄褐色土: シルト質土 ブロック状堆積

SK 144

1 暗褐色土: 砂質土 ローム土(少)

2 黄褐色土: ローム土

SK 145

1 灰黄褐色土: 粘質土 ロームブロック(少)

2 灰黄褐色土: シルト質土

SK 147

1 灰黄褐色土: 粘質土 ロームブロック(微)

SK 148

1 灰黄褐色土: 粘質土 ローム粒子(微)

SK 150

1 暗褐色土: シルト質土 斑状堆積

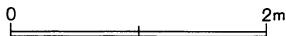
2 褐色土: ハードローム・ソフトローム ブロック状堆積

3 黄褐色土: ローム土斑状堆積 鉄分沈着層

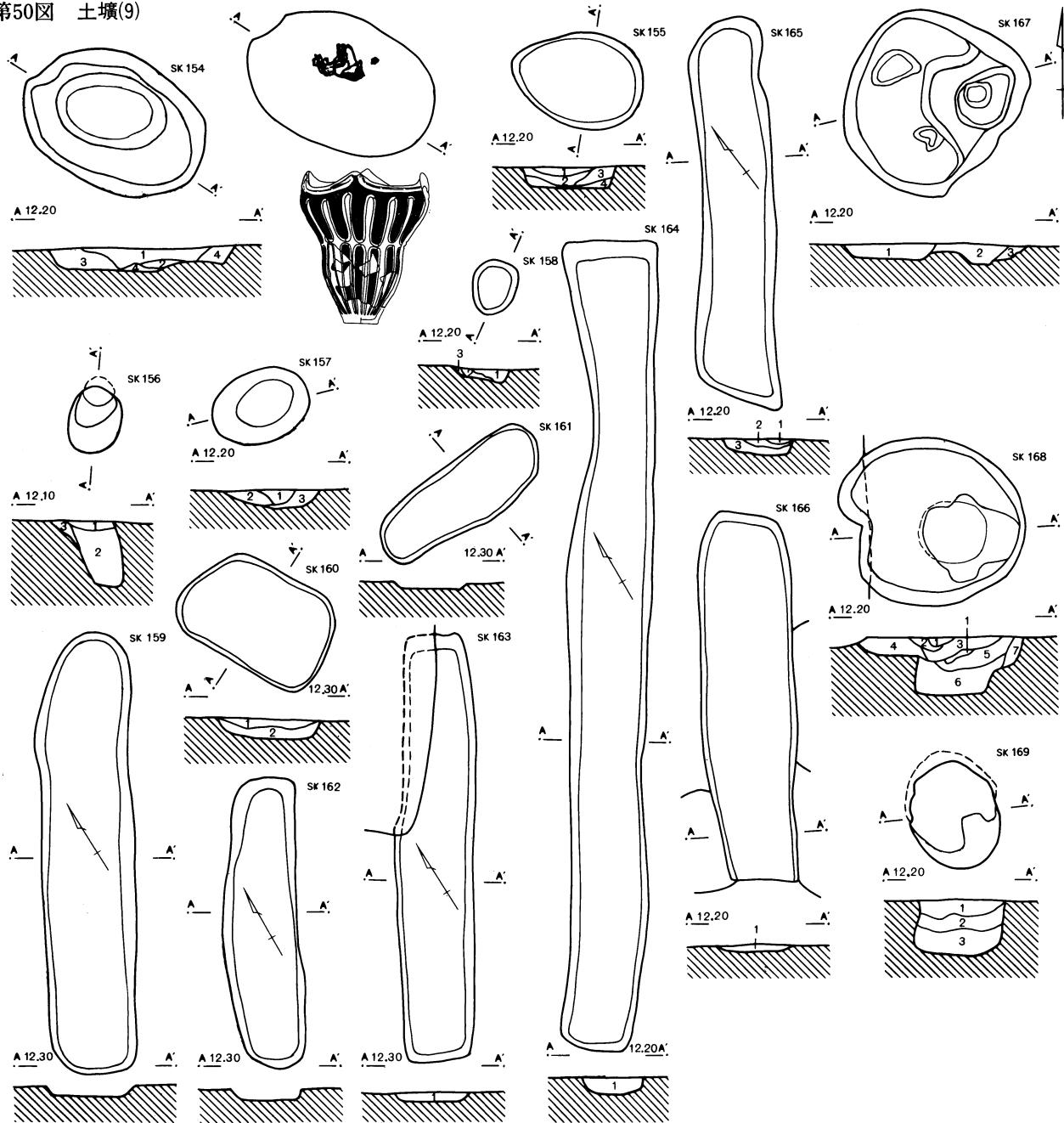
4 暗褐色土: ハードローム・ソフトローム ブロック状堆積

5 挹乱

1 黄褐色土: 褐色土斑状堆積 鉄分沈着層



第50図 土壌(9)



SK 154

1 黄褐色土: シルト質土 ブロック状堆積  
2 暗褐色土: シルト質土  
3 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積  
4 暗褐色土: シルト質土 ローム・ハードロームブロック状堆積

SK 155

1 暗褐色土: シルト質土 ロームブロック(少)  
2 暗褐色土: シルト質土 ロームブロック(少)  
3 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積  
4 暗褐色土: シルト質土 ローム・ハードロームブロック状堆積

SK 156

1 黑褐色土: シルト質土 暗褐色土ブロック状堆積  
2 黑褐色土: シルト質土 ローム粒子 黑色粘土(少)

3 黑褐色土: シルト質土 ローム粒子 暗褐色土の互層

SK 157

1 暗褐色土: シルト質土 ローム粒子(少)  
2 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

3 暗褐色土: シルト質土 減移層

SK 158

1 黄褐色土: 褐色土(微)  
2 黄褐色土: 粘質土 ローム土再堆積  
3 黄褐色土: ローム(少)

SK 160

1 暗褐色土: シルト質土 ブロック状堆積  
2 暗褐色土: ローム粒子(少)

3 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積  
4 暗褐色土: シルト質土 ローム・ハードロームブロック状堆積

SK 161

1 暗褐色土: シルト質土 ブロック状堆積  
2 暗褐色土: ローム粒子(少)

3 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積  
4 暗褐色土: シルト質土 ローム・ハードロームブロック状堆積

SK 162

1 暗褐色土: シルト質土 ブロック状堆積  
2 暗褐色土: ローム粒子(少)

3 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積  
4 暗褐色土: シルト質土 ローム・ハードロームブロック状堆積

SK 163

1 暗褐色土: シルト質土 ブロック状堆積  
2 暗褐色土: ローム粒子(少)

3 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積  
4 暗褐色土: シルト質土 ローム・ハードロームブロック状堆積

SK 164

1 暗褐色土: 粘質土 白色粗砂 ローム粒子(微)

2 暗褐色土: 粘質土 白色粗砂 ローム粒子(微)

3 暗褐色土: 粘質土 ローム粒子(少)

SK 165

1 暗褐色土: 粘質土 白色粗砂 ローム・炭化物 烧土粒子(微)

2 暗褐色土: 粘質土 白色粗砂 ローム・炭化物 烧土粒子(微)

3 暗褐色土: 粘質土 白色粗砂 ローム・炭化物 烧土粒子(微)

SK 166

1 暗褐色土: 粘質土 白色粗砂 ローム・炭化物 烧土粒子(微)

2 暗褐色土: 粘質土 白色粗砂 ローム・炭化物 烧土粒子(微)

3 暗褐色土: 粘質土 白色粗砂 ローム・炭化物 烧土粒子(微)

SK 167

SK 167

1 暗褐色土: シルト質土 ロームブロック(少)  
2 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積  
3 暗褐色土: ハードローム・暗褐色土 ブロック状堆積

SK 168

1 黑褐色土: シルト質土 褐色ハードローム粒子(多)  
2 黑褐色土: シルト質土 ロームブロック(少)  
3 暗褐色土: シルト質土 ブロック状堆積 褐色ハードローム粒子(多)

SK 169

1 褐色土: シルト質土 焼土化 烧土粒子(多)  
2 黄褐色土: シルト質土 褐色ハードロームブロック(少)  
3 黄褐色土: シルト質土 褐色ハードロームブロック(少)



第4表 土壌一覧表(3)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	出土遺物	時期	備考
107	L-9・10	長方形	3.52	0.75	0.15	N-38°-E		近世	
108	L-9・10	長方形	3.10	0.58	0.17	N-50°-E		近世	
109	L-12	不整円形	0.96	0.72	0.78	N-46°-W			ピットあり
110	L-12	円形	0.90	0.78	0.48	N- 0°			
111	L-13	楕円形	1.85	0.90	0.21	N-29°-E		近世	
112	L-13	不整楕円形	1.15	0.42	0.17	N-29°-E			
113	L-13	楕円形	0.68	0.25	0.69	N-65°-E			ピットあり
114	L-14	長方形	4.32	0.66	0.18	N-37°-E		近世	
115	L-14	円形	0.76	0.59	0.03	N-32°-E			
116	M-13	不整形	4.51	0.65	0.11	N-35°-E		近世	
117	L-14	不整円形	1.20	1.20	0.37	N- 0°			
118	M-13	楕円形	4.78	0.86	0.14	N-23°-E		近世	
119	L-14	楕円形	2.52	0.60	0.03	N-38°-E		近世	
120	L-14	楕円形	2.55	0.78	0.09	N-36°-E		近世	
121	L-15	長方形	6.12	0.79	0.16	N-13°-E		近世	
122	L-15	楕円形	1.49	1.24	0.20	N- 6°-W			
123	L-15	楕円形	1.96	1.14	0.20	N-76°-E			
124	L-16	楕円形	1.93	0.70	0.21	N-49°-E			
125	L-16	楕円形	1.88	0.56	0.14	N-53°-W		近世	
126	M- 9	長楕円形	3.31	0.66	0.12	N-39°-E		近世	
127	M- 9	不整円形	0.82	0.39	0.24	N-48°-E			
128	M-12	円形	1.31	1.14	0.28	N-54°-E			
129	M-13	長方形	2.35	0.58	0.18	N-22°-E		近世	
130	M-13	長方形	6.34	0.90	0.16	N-34°-E		近世	
131	M-13	円形	1.08	1.04	0.28	N-44°-E			
132	M-13	不整形	1.26	0.98	0.22	N-60°-W		近世	
133	M-13	長方形	1.07	0.75	0.12	N-35°-E		近世	
134	M-14	不整円形	2.00	1.11	0.21	N-41°-W			
135	M-15	長方形	0.95	0.40	0.15	N-23°-E			
136	M-15	長方形	1.19	0.56	0.08	N-72°-E			
137	M-15	不整形	0.56	0.45	0.32	N-87°-E			ピットあり
138	M-15	円形	1.00	0.83	0.33	N-20°-W			
139	M-15	楕円形	1.11	0.83	0.33	N-62°-E			
140	M-15・16	円形	0.75	0.63	0.51	N-85°-W			
141	M-15・16	円形	1.45	1.34	0.20	N-53°-W			
142	M-16	楕円形	0.88	0.57	0.04	N- 3°-W			
143	M-16	不整形	2.15	1.37	0.15	N-27°-E			
144	M-16	円形	1.15	1.00	0.38	N- 2°-W			
145	M-12	長楕円形	3.20	0.80	0.23	N-52°-W		近世	
146	M-13	楕円形	1.50	0.80	0.13	N- 1°-W		近世	
147	M-13	楕円形	1.70	1.20	0.06	N-18°-E		近世	
148	M-13	長方形	4.48	0.78	0.11	N-35°-E		近世	
149	M-13	長方形	3.50	0.65	0.11	N-38°-E		近世	
150	M-14	長方形	2.44	0.90	0.46	N-20°-E			
151	M-14	楕円形	1.26	0.76	0.24	N-32°-E			重複
152	M-14	楕円形	2.23	0.70	0.09	N-30°-E		近世	
153	M-14	楕円形	1.85	0.85	0.11	N-28°-E		近世	
154	M-14	楕円形	1.76	0.71	0.30	N-59°-W	深鉢		縄文
155	M-15	楕円形	1.20	0.85	0.18	N-76°-W			
156	M-15	楕円形	0.60	0.50	0.58	N-10°-E			
157	M-15	楕円形	0.90	0.65	0.18	N-76°-E			
158	M-16	楕円形	0.50	0.41	0.12	N-23°-E			
159	N-12	長楕円形	4.00	0.54	0.08	N-33°-E		近世	

### 第239・240号土壙(第53図)

H-22グリッドに検出された。第239号土壙が第240号土壙を切っていた。第239号土壙の形態は楕円形で、擂鉢形の堀り込みであった。覆土は、炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。遺物は第61図239-1~3の土器破片が覆土上層で出土した。第240号土壙の形態は、楕円形で浅い皿形の堀り込みであった。覆土は炭化物を含む暗灰褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

### 第242号土壙(第54図)

H-22グリッドに検出された。形態は、楕円形で浅い皿形の堀り込みであった。壙底は平坦であった。遺物は第61図242-1・2の深鉢形土器口縁部破片が出土した。

### 第244号土壙(第54図)

H-18グリッドに検出された。本土壙は、第1号方形周溝墓内に検出された。形態は楕円形で、フラスコ形の深い堀り込みであった。壙底中央部にピットがあった。覆土は、ロームブロックを含む黄褐色土が堆積していた。遺物は第61図244-1~7深鉢形土器破片が出土した。

### 第245号土壙(第54図)

H-19グリッドに検出された。本土壙は、第10号住居跡を切って構築していた。形態は円形で、筒形のやや深い堀り込みであった。壙底は平坦であった。壙底中央部にピットがあった。覆土は、ロームブロックを含む暗黄褐色土が堆積していた。遺物は縄文時代後期に属する粗製深鉢形土器破片が覆土上層より出土した。

### 第246号土壙(第54図)

H-20グリッドに検出された。形態は不整形で、二段の堀り込みであった。壙底は平坦であった。覆土は、炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。遺物は第61図246-1・2の土器破片が出土した。

### 第251号土壙(第54図)

H-22グリッドに検出された。第12号住居跡西側に近接していた。形態は不整形で、浅い皿形の堀り込みであった。覆土は、炭化物を含む暗褐色土が堆積して

いた。遺物は第57図251-1の深鉢形土器が出土した。

### 第258号土壙(第54図)

H-21グリッドに検出された。本土壙は第49号溝に切られていた。形態は楕円形で、筒形の深い堀り込みであった。壙底は平坦であった。覆土は、炭化物・ロームブロックを含む暗褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

### 第263号土壙(第54図)

I-21グリッドに検出された。本土壙は第49号溝に切られていた。形態は円形で、筒形の深い堀り込みであった。壙底は平坦であった。土層観察の結果、柱穴痕跡が認められた。覆土は、焼土粒子・炭化物・ロームブロックを含む暗褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

### 第268号土壙(第55図)

I-21グリッドに検出された。形態は楕円形で、擂鉢形の堀り込みであった。覆土は、炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。遺物は第57図268-1の精製深鉢形土器が出土した。

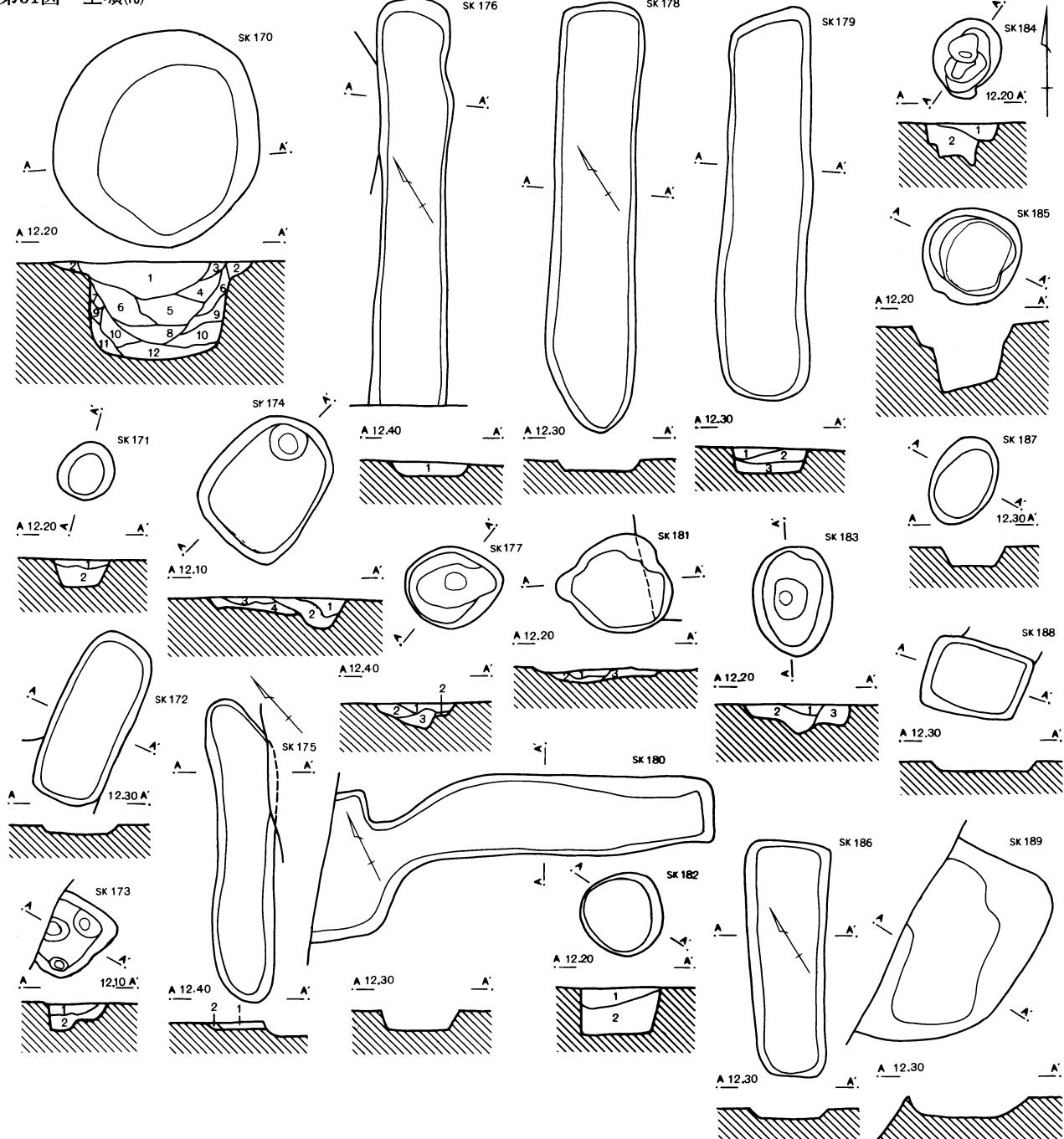
### 第271・272号土壙(第55図)

I-22グリッドに検出された。本土壙は重複する2基の土壙であったが、土層断面観察の結果、新旧関係は判明しなかった。形態は楕円形で、皿形の堀り込みであった。壙底は平坦で、北東よりに第272号土壙があった。覆土は、炭化物・焼土・ロームブロックを含む暗褐色土が堆積していた。遺物は第61図271-1・272-1の土器破片が出土した。

### 第276号土壙(第54図)

I-22グリッドに検出された。形態は楕円形で、筒形の深い堀り込みであった。壙底はやや尖っていた。覆土は、炭化物・焼土・有機物を含む黒色土が堆積していた。遺物は第58図276-1深鉢形土器胴上半部破片の他に、同図276-2の深鉢形土器破片が、覆土上層より散乱した状態で出土した。

第51図 土壌(10)



SK 170

- 1 暗褐色土: 砂質土 褐色土(多) ロームブロック・焼土粒子(少)
- 2 黄褐色土: 砂質土 黑色土(多) 焼土粒子・炭化物粒子(微)
- 3 黄褐色土: 黑色土・焼土粒子(多)
- 4 黑色土: 游移層
- 5 黄褐色土: 褐色土(少) 烧土粒子・炭化物粒子(多)
- 6 暗褐色土: ローム土・褐色土(多) 烧土粒子・炭化物粒子(少)
- 7 黄褐色土: 烧土粒子・炭化物粒子(微)
- 8 暗褐色土: 烧土粒子・炭化物粒子・ローム土(多)
- 9 黄褐色土: 炭化物粒子(多) 褐色土ブロック状堆積
- 10 黄褐色土: 烧土粒子・ローム粒子(少)
- 11 暗褐色土: 烧土粒子・炭化物粒子(少)
- 12 暗褐色土: 烧土粒子・炭化物粒子(多)

SK 171

- 1 褐色土: ローム土ブロック状堆積
- 2 黄褐色土: 游移層
- SK 173
- 1 褐色土: ローム土・暗褐色土(多)
- 2 黄褐色土: 烧土粒子(多)

SK 174

- 1 暗褐色土: 粘質土 ローム粒子・暗褐色土(多)
- 2 黄褐色土: 粘質土 ロームブロック(多) 暗褐色土(微)
- 3 黄褐色土: 粘質土 ローム土・粘土(少)
- 4 明黄褐色土: 粘質土 暗褐色土(少)
- SK 175
- 1 暗褐色土: 粘質土 ローム粒子・白色粗砂(少) 炭化物粒子(微)
- 2 暗褐色土: 粘質土 ローム土ブロック状堆積

SK 176

- 1 暗褐色土: 粘質土 ローム粒子(少) 白色粗砂(微)

SK 177

- 1 暗褐色土: シルト質土 マンガン沈着層

SK 178

- 2 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

SK 179

- 3 暗褐色土: シルト質土 ロームブロック(微)

SK 181

- 1 暗褐色土: 粘質土 ブロック状堆積 砂粒子(少)
- 2 灰黄褐色土: 粘質土 ローム土ブロック状堆積 砂粒子(少)
- 3 暗褐色土: シルト質土 ロームブロック(少)

SK 182

- 1 暗褐色土: シルト質土 ロームブロック(多)
- 2 黑褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

SK 183

- 1 黑褐色土: シルト質土 ブロック状堆積
- 2 暗褐色土: シルト質土 ブロック状堆積
- 3 暗褐色土: シルト質土 ローム土ブロック状堆積

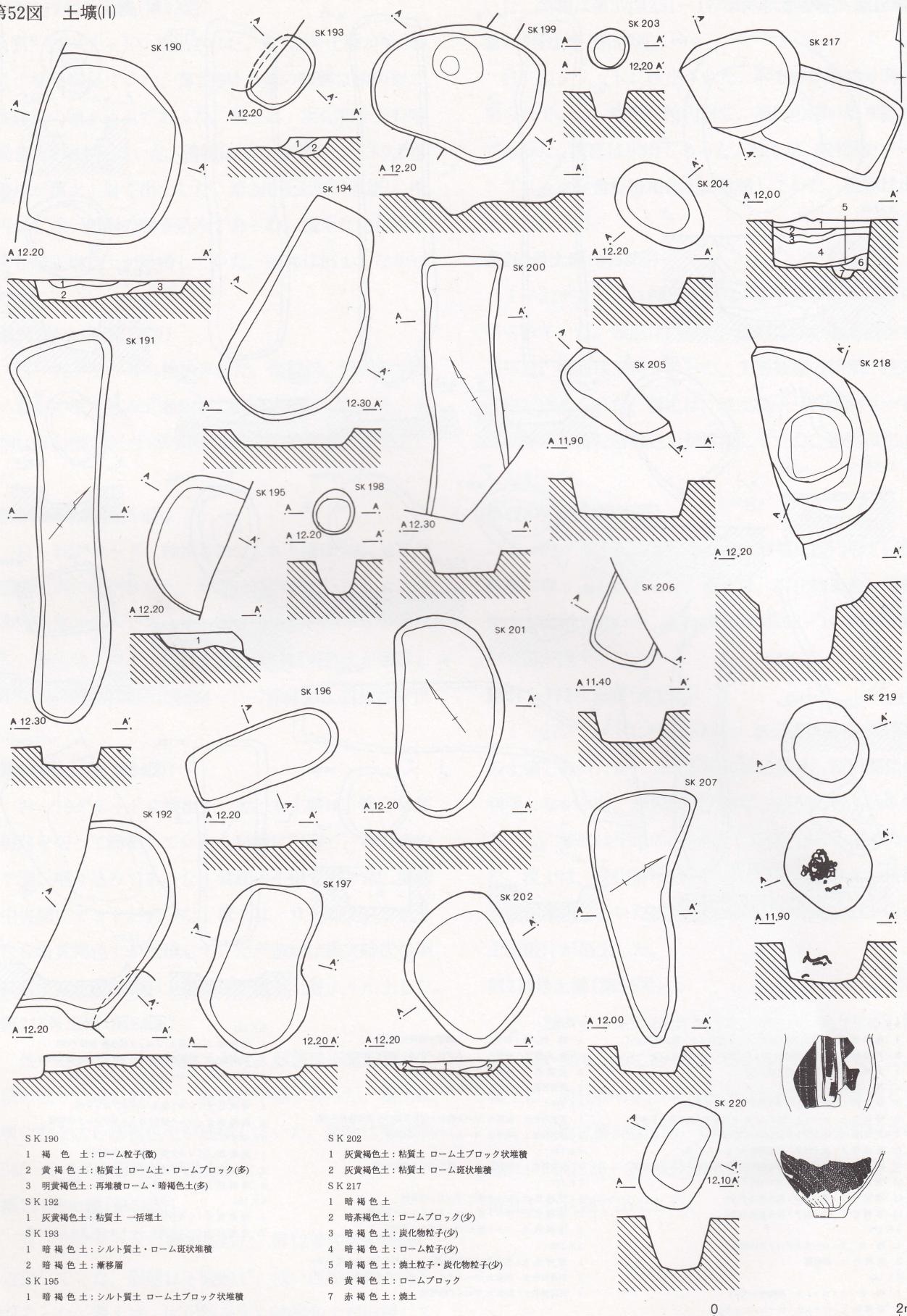
SK 184

- 1 暗褐色土: シルト質土 ブロック状堆積
- 2 暗褐色土: シルト質土 ハードローム ブロック状堆積

0

2m

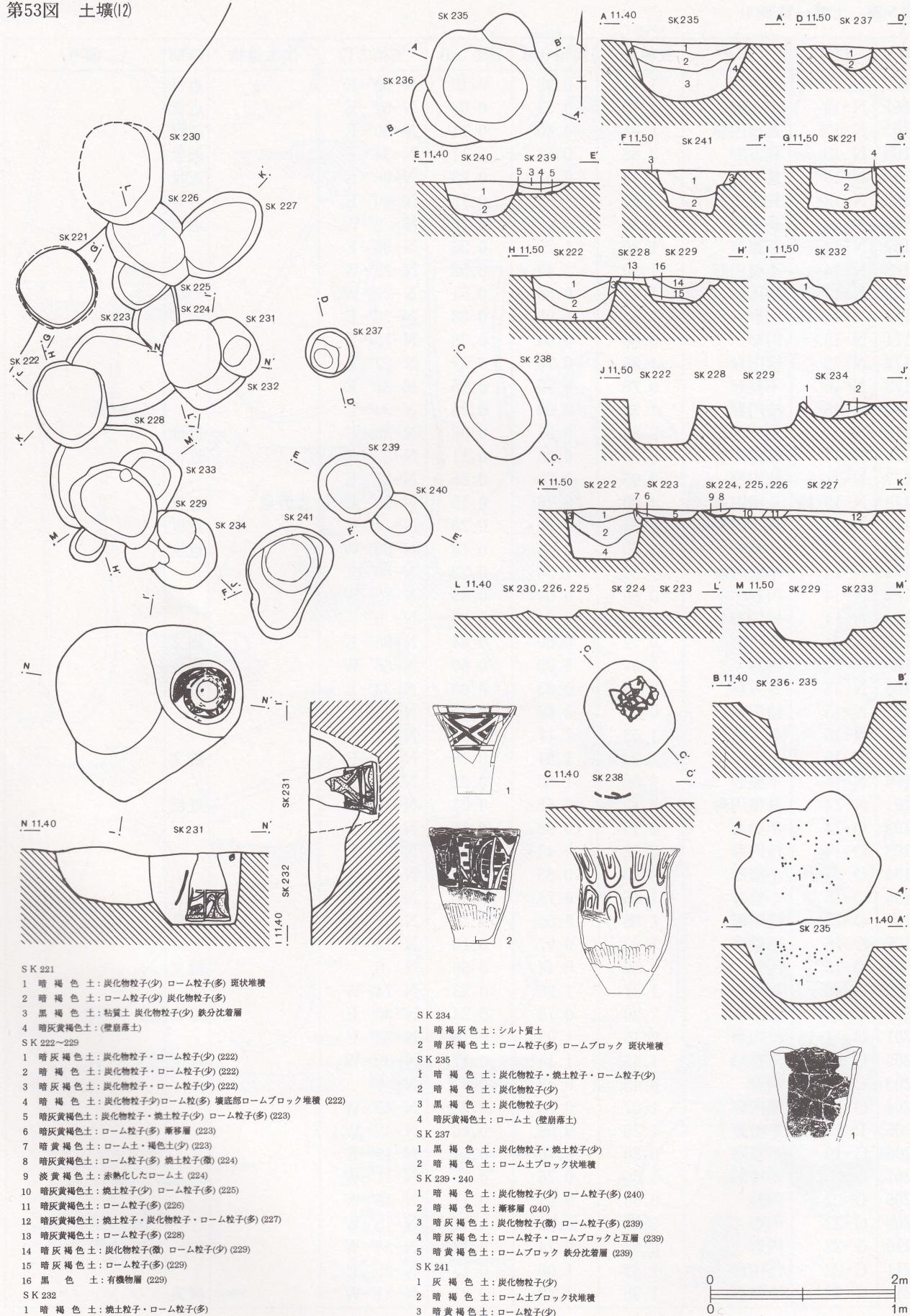
第52図 土壌(II)



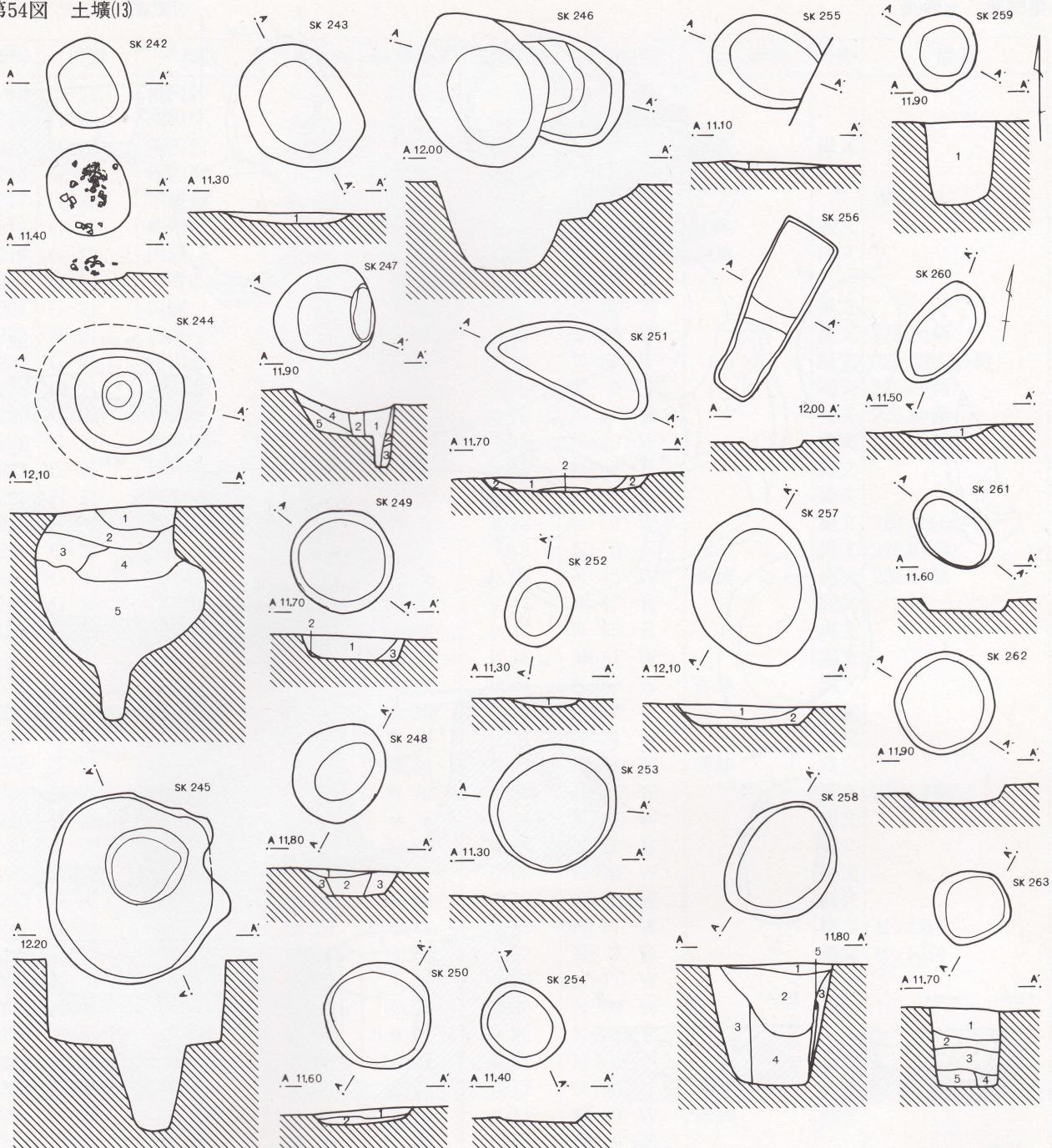
第5表 土壌一覧表(4)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	出土遺物	時期	備考
160	N-12	長方形	1.41	0.92	0.15	N-60°-E		近世	
161	N-12	楕円形	1.70	0.51	0.08	N-52°-E		近世	
162	N-13	長楕円形	2.64	0.60	0.11	N-30°-E		近世	
163	N-13	長方形	3.88	0.68	0.11	N-34°-E		近世	
164	N-13	長方形	7.40	0.57	0.23	N-28°-E		近世	
165	N-13・14	長楕円形	3.52	0.65	0.15	N-40°-E		近世	
166	N-14	長方形	3.30	0.86	0.10	N-2°-W		近世	
167	N-14	不整形	1.80	1.70	0.26	N-30°-E			
168	N-14	不整円形	1.50	1.43	0.52	N-82°-W			重複
169	N-14	楕円形	1.08	0.85	0.51	N-27°-W			
170	N-14・15	円形	2.02	1.95	0.88	N-26°-E			
171	N-15	円形	0.60	0.54	0.28	N-15°-E			
172	N-15	楕円形	1.86	0.74	0.07	N-22°-E			
173	N-16	不整形	0.76	0.50	0.25	N-38°-E			
174	N-16	楕円形	1.33	0.90	0.28	N-34°-E			ピットあり
175	N-11	長楕円形	2.80	0.51	0.08	N-38°-E		近世	
176	N-11	長楕円形	3.76	0.38	0.11	N-35°-E		近世	
177	N-11	楕円形	0.95	0.75	0.25	N-85°-E			
178	N-12・13	長楕円形	4.00	0.76	0.15	N-33°-E	志野皿	近世	
179	N-13	長楕円形	3.64	0.76	0.26	N-4°-E		近世	
180	N-14	不整形	3.60	0.65	0.18	N-65°-W		近世	
181	N-14	不整円形	1.36	1.20	0.22	N-86°-E			
182	N-14	円形	0.80	0.64	0.45	N-13°-W			
183	N-14	楕円形	1.00	0.74	0.30	N-0°			
184	N-14	楕円形	0.72	0.60	0.44	N-36°-E			
185	N-14	円形	0.94	0.90	0.60	N-66°-W			
186	N-15	長方形	2.20	0.63	0.08	N-33°-E			
187	N-15	楕円形	0.85	0.60	0.17	N-25°-E			
188	N-15	長方形	1.43	1.17	0.20	N-72°-W			
189	N-15	不整形	2.04	1.04	0.18	N-14°-E			
190	N-16	不整形	2.00	1.60	0.22	N-12°-E			
191	N-14	長楕円形	4.12	0.68	0.21	N-40°-W		近世	
192	O-14	不整形	2.15	0.98	0.15	N-27°-E			
193	O-14	楕円形	0.52	0.43	0.15	N-36°-E			
194	O-14・15	不整形	2.40	0.83	0.18	N-25°-E			
195	O-15	不整形	1.45	0.78	0.20	N-20°-E			
196	O-15	楕円形	1.66	0.65	0.10	N-67°-E		近世	
197	O-16	不整形	1.83	0.97	0.10	N-14°-E			
198	O-16	円形	0.50	0.44	0.36	N-0°			
199	O-16	楕円形	1.81	1.25	0.23	N-74°-W			
200	O-12	長方形	2.80	0.78	0.24	N-30°-E		近世	SJ-9より新
201	O-14・15	楕円形	2.15	1.05	0.16	N-38°-E			
202	O-15	不整形	1.45	1.14	0.17	N-39°-W		近世	
203	O-16	円形	0.45	0.42	0.27	N-0°			
204	O-16	楕円形	1.07	0.72	0.28	N-49°-W			
205	F-20	不整形	1.26	0.58	0.40	N-42°-W			
206	G-19	不整形	0.80	0.76	0.34	N-19°-E			
207	G-20	不整形	2.66	0.76	0.25	N-11°-W			
208	G-22	円形	0.60	0.54	0.17	N-15°-W			
209	G-22	円形	0.92	0.82	0.11	N-15°-W			208より新
210	G-22	円形	0.82	0.74	0.12	N-34°-W			211より新
211	G-22	楕円形	1.22	1.06	0.13	N-85°-E			
212	G-22	不整形	1.98	1.48	0.21	N-21°-W			繩文

第53図 土壌(12)



### 第54図 土壌(13)



S K 243

- 1 暗褐色土：ローム粒子(少) 暗灰色化ローム土 底面斑状堆積  
SK 244

1 暗茶褐色土：シルト質土 ロームブロック(少)

2 暗黃褐色土：シルト質土 ロームブロック(多)

3 茶褐色土：粘質土 ローム粒子(少) 粘性強

4 黄褐色土：シルト質土 ローム粒子(少) ロームブロック(多)

5 里褐色土：粘質土 ロームブロック(多)

S K 217

- 1 暗褐灰色土: ローム粒子(多) 班状堆積  
 2 暗黄褐色土: ローム粒子・ロームブロック(多)

2 咱興  
3 暗

- 3 喀 梅 工 : ローム層  
4 暗 褐 灰 土 : ローム粒子(多)  
5 暗 喀 黃褐色土 : ローム粒子(多) ロームブロック(少)  
SK 248  
1 暗 褐 灰 土 : ローム粒子(多) 炭化物粒子(少)  
2 暗 褐 灰 土 : ローム粒子・ロームブロック(少) 炭化物粒子(微)

S K 249 • 250

- 1 暗褐灰色土：ローム粒子（多）（249）（250）  
2 暗灰褐色土：漸移層（249）（250）  
3 暗灰黃褐色土：ローム土ブロック状堆積（249）  
SK 251

1 暗灰

- 2 暗灰黃褐色土： $\text{CaMg}(\text{OH})_2$ 粒子(多)  
S K 252  
1 黑褐色土：燒土粒子(少)

SK 255

- 1 黑 色 土  
SK 257  
1 暗褐灰色土； $\text{口}-\text{ム}$ 粒子(多) 炭化物粒子(少)

SK 258

- 1 暗褐灰色土: ローム粒子・炭化物粒子(少)
  - 2 暗褐色土: 炭化物粒子(多) ローム土斑状堆積
  - 3 暗褐色土: 漸移層
  - 4 暗黑灰褐色土: 粘質土 包含物(少)
  - 5 暗灰黃褐色土: ローム粒子・ロームブロック(崩落土)

5 咨詢

- S K 259  
1 暗茶褐色土：ローム土ブロック状堆積

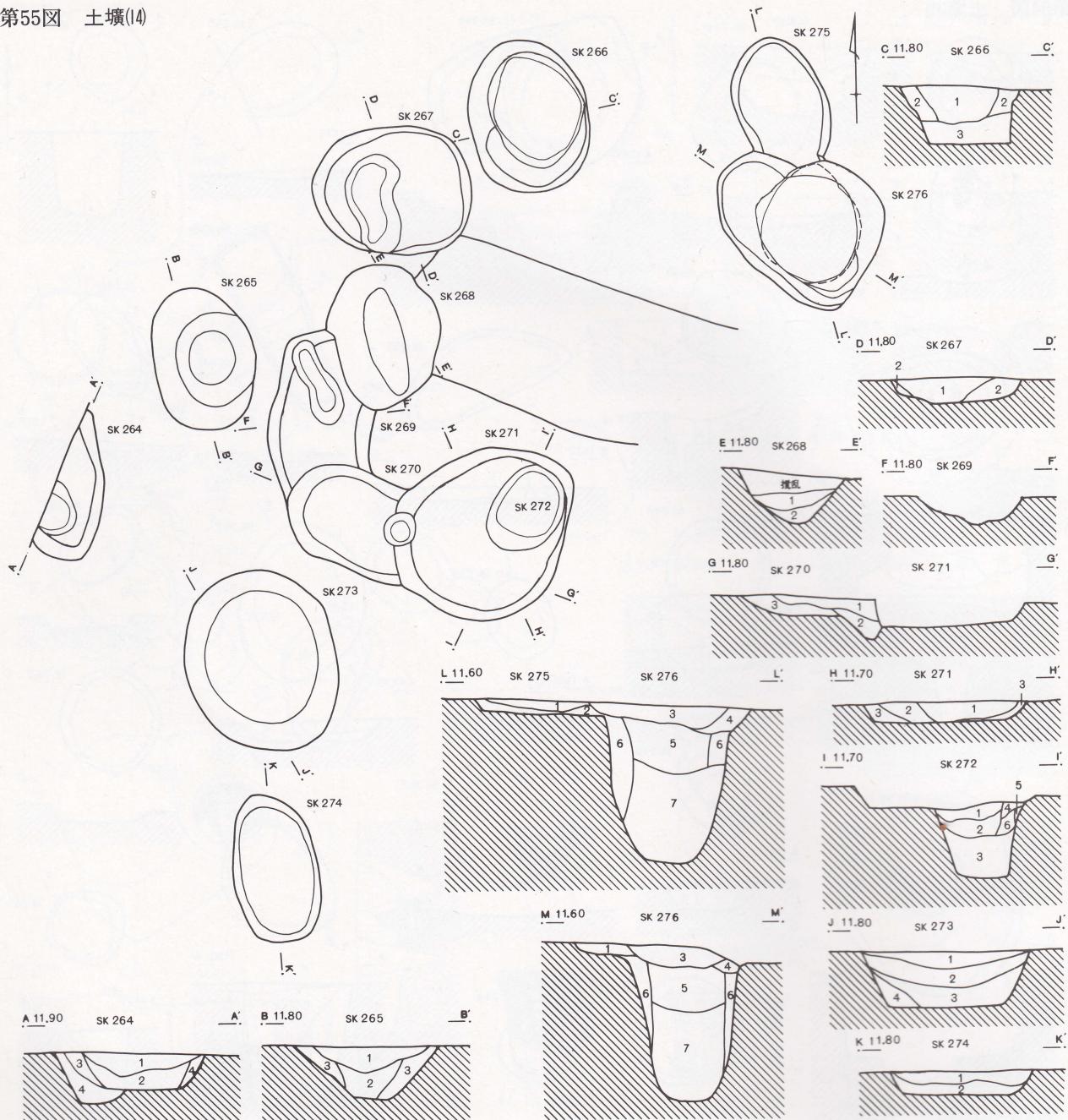
S K 260  
1 暗灰褐色土：炭化物粒子(少) ローム土斑状堆積

1 唱歌

- SK 263

  - 1 暗褐色土：焼土粒子・炭化物粒子(少)
  - 2 暗茶褐色土：焼土粒子(少)
  - 3 黒褐色土：炭化物粒子(少) ローム土ブロック状堆積
  - 4 暗褐色土：粘質土 ローム土ブロック状堆積
  - 5 暗黃褐色土：ローム土ブロック状堆積

第55図 土壌(14)



SK 264

1 暗灰黒褐色土: ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子(少)

2 暗灰褐色土: 漸移層

3 暗灰褐色土: ローム粒子(少)

4 暗黄褐色土: ローム土(壁崩落土)

SK 265

1 暗灰黒黄色土: ローム粒子斑状堆積 炭化物粒子(少)

2 暗灰黒黄色土: 漸移層

3 暗灰黃褐色土: ローム土ブロック状堆積(壁崩落土)

SK 266

1 黒褐色土: 炭化物粒子(微)

2 暗灰黃褐色土: ローム土ブロック状堆積(壁崩落土)

3 黑褐色土: 漸移層

SK 267

1 暗灰黒黄色土: ローム粒子斑状堆積 炭化物粒子(少)

2 暗灰黒黄色土: ローム粒子(多)

SK 268

1 黑褐色土: 炭化物粒子(微)

2 黑褐色土: 漸移層

SK 270

1 暗灰黒褐色土: 炭化物粒子(少)

2 淡灰土: 漸移層

3 暗灰黃褐色土: ローム土斑状堆積

SK 271

1 暗灰黒褐色土: 炭化物粒子(多)

2 暗灰褐色土: ローム粒子(多) 漸移層

3 暗黄褐色土: ローム粒子(多) 壁崩落土

SK 272

1 黒褐色土: 炭化物粒子・ローム粒子(少)

2 黑褐色土: 漸移層

3 黑褐色土: ローム粒子(多) 有機物(少)

4 暗灰黒黄色土: 烧土粒子・炭化物粒子(少) ローム粒子(多)

5 暗灰黃褐色土: ローム土(壁崩落土)

6 暗灰黃褐色土: ローム粒子(多)

SK 273

1 暗灰黒褐色土: 炭化物粒子(少)

2 暗灰黒褐色土: ローム粒子(多)

3 暗褐色土: 炭化物粒子(少) 漸移層

SK 274

SK 274

1 暗灰黒褐色土: ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子(少)

2 暗灰褐色土: ローム粒子(多)

SK 275・276

1 暗褐灰黃褐色土: ローム粒子(多) 炭化物粒子・焼土粒子(少) (275)

2 暗黄褐色土: ローム土 炭化物粒子(微) (275)

3 黑褐色土: ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子(少) (276)

4 暗黄褐色土: ローム土 壁崩落土 (276)

5 黑色土: 有機物(少) 烧土粒子・炭化物粒子(少) (276)

6 暗褐灰黃褐色土: ローム土 壁崩落土 (276)

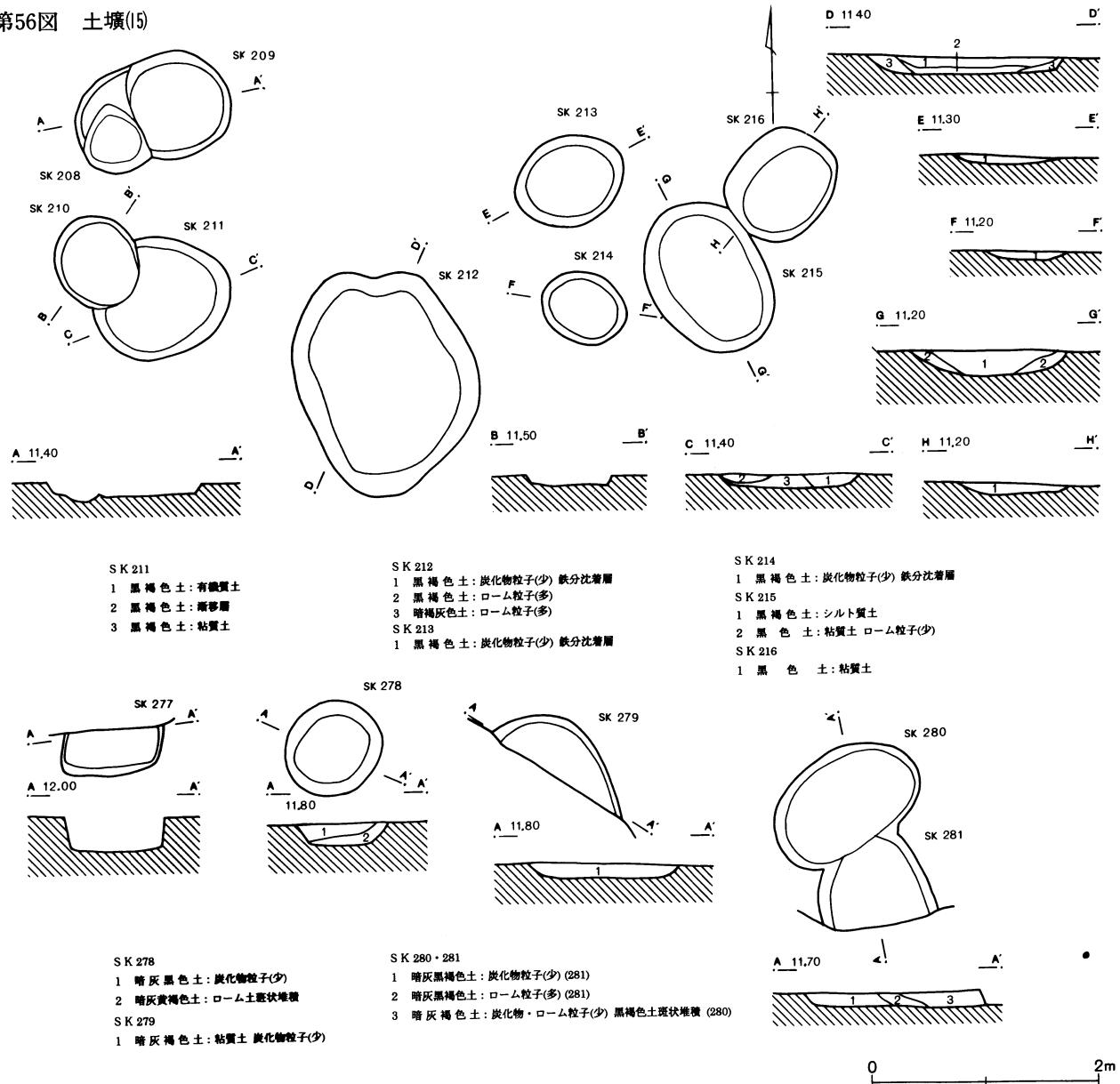
7 黑色土: 有機物(多) (276)

0 2m

第6表 土壌一覧表(5)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	出土遺物	時期	備考
213	G-22	楕円形	0.98	0.78	0.09	N-64°-E			
214	G-22	楕円形	0.74	0.60	0.09	N-56°-W			
215	G-22	楕円形	1.36	1.02	0.13	N-26°-W	深鉢	縄文	
216	G-22	楕円形	1.00	0.86	0.10	N-39°-E			
217	G-20	不整形	2.42	0.96	0.48	N-70°-W			重複
218	G-20	楕円形	2.16	1.22	0.85	N-31°-W	深鉢	縄文	
219	G-20	円形	1.06	0.88	0.31	N-34°-W	深鉢	縄文	
220	G-20	長方形	1.14	0.70	0.52	N-25°-E			
221	G-21	円形	0.86	0.80	0.44	N-36°-W		縄文	
222	H-21	円形	0.88	0.84	0.45	N-36°-W		縄文	228より新
223	G-21	楕円形	1.24	0.94	0.13	N-90°-W		縄文	222.224より新
224	G-21	楕円形	0.72	0.54	0.09	N- 0°		縄文	225より新
225	G-21	楕円形	0.64	0.42	0.09	N-47°-E		縄文	226より新
226	G-21	楕円形	1.02	0.78	0.15	N-45°-W		縄文	227より新
227	G-21	楕円形	1.08	0.70	0.06	N-47°-E		縄文	
228	H-21	楕円形	1.38	0.40	0.09	N-56°-E		縄文	
229	H-21	楕円形	0.98	0.84	0.23	N-59°-W		縄文	228.234より新
230	G-21	楕円形	1.02	0.60	0.18	N- 0°		縄文	226より新
231	G-20・21	楕円形	0.78	0.42	0.30	N-45°-W	伏甃	縄文	232より新
232	G-20・21	楕円形	0.74	0.52	0.14	N-47°-E		縄文	
233	H-21	円形	0.70	0.36	0.13	N-25°-E		縄文	
234	H-21	楕円形	0.90	0.78	0.18	N-51°-W		縄文	
235	G-22	楕円形	1.50	1.32	0.61	N-55°-W	深鉢	縄文	
236	G-22	楕円形	0.86	0.30	0.18	N-42°-W		縄文	
237	G-22	円形	0.52	0.50	0.31	N-14°-W		縄文	
238	J-21	楕円形	1.02	0.86	0.07	N-41°-W	深鉢	縄文	
239	H-22	楕円形	0.80	0.70	0.35	N-45°-W		縄文	240より新
240	H-22	楕円形	0.60	0.56	0.14	N-62°-W		縄文	
241	H-22	不整円形	1.26	0.80	0.45	N-12°-E		縄文	
242	G-22	楕円形	0.84	0.70	0.08	N-30°-W		縄文	
243	G-22	楕円形	1.24	0.98	0.10	N-26°-W		縄文	
244	H-18	楕円形	1.70	1.44	1.85	N-77°-W		縄文	ピットあり
245	H-19	円形	1.72	1.52	1.62	N- 7°-W		縄文	ピットあり
246	H-20	不整形	1.95	1.30	0.80	N-77°-W		縄文	
247	H-20	楕円形	0.94	0.88	0.30	N-90°-W		縄文	
248	H-20・21	楕円形	0.96	0.82	0.20	N-33°-E			
249	H-21	円形	0.96	0.92	0.21	N- 0°		縄文	
250	H-21	円形	1.00	0.98	0.12	N- 0°		縄文	
251	H-21	不整形	1.58	0.70	0.14	N-60°-W	深鉢	縄文	
252	H-22	楕円形	0.74	0.60	0.05	N- 9°-E			
253	H-22	円形	1.20	1.10	0.09	N-36°-E			
254	H-22	楕円形	0.82	0.70	0.07	N-40°-W		縄文	
255	H-23	楕円形	0.96	0.82	0.05	N-69°-W		縄文	
256	H-17	長方形	1.70	0.42	0.53	N-28°-E			
257	H-20	不整円形	1.44	1.16	0.20	N-35°-W			
258	H-21	楕円形	1.18	0.94	1.10	N-31°-E		縄文	
259	H-21	円形	0.74	0.68	0.76	N-25°-E		縄文	
260	H-22	楕円形	1.00	0.58	0.09	N-45°-E		縄文	
261	H-22	楕円形	0.82	0.56	0.12	N-52°-W		縄文	
262	I-17	円形	0.96	0.90	0.13	N-38°-W		縄文	
263	I-21	円形	0.74	0.70	0.71	N-18°-W		縄文	
264	I-21	不整形	1.30	0.50	0.45	N-20°-E		縄文	
265	I-21	楕円形	1.30	0.92	0.48	N-13°-W		縄文	

### 第56図 土壌(15)



## 第277号土壤(第56図)

J-21グリッドに検出された。形態は長方形で、攪乱により約半分を壊されていた。皿形のやや深い堀り込みであった。壌底は平坦であった。覆土は、炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

### 第278号土壤(第56図)

J-21グリッドに検出された。形態は円形であった皿形で壁は緩やかに立ち上がる。壙底は平坦であった。覆土は、炭化物を含む暗灰黒色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

## 第279号土壤(第56図)

J-21グリッドに検出された。形態は橢円形で、攪乱により約半分を壊されていた。皿形の浅い堀り込みであった。壙底は平坦であった。覆土は、炭化物を含む暗灰褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

### 第280・281号土壤(第56図)

J-21グリッドに検出された。第280号土壙は第281号土壙に切られていた。形態は楕円形で、皿形のやや浅い堀り込みであった。壙底は平坦であった。覆土は、炭化物を含む暗灰黒褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

第7表 土壌一覧表(6)

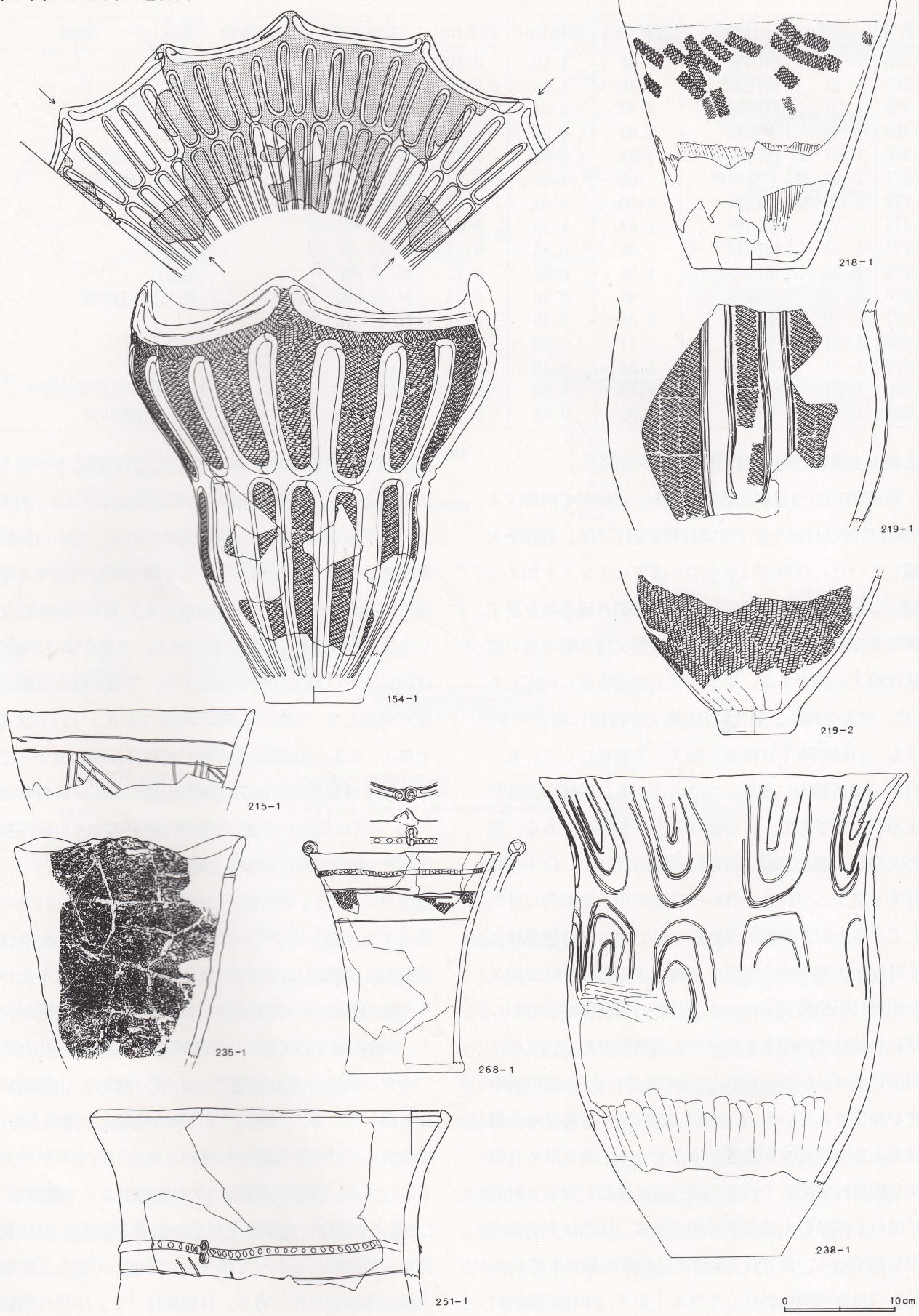
番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	出土遺物	時期	備考
266	I-21・22	楕円形	1.42	1.10	0.50	N-13°-W		縄文	
267	I-21	楕円形	1.40	1.16	0.25	N-84°-E		縄文	
268	I-21	楕円形	1.32	0.94	0.47	N-13°-W	深鉢	縄文	269より新
269	I-21	不整形	1.63	0.94	0.36	N-9°-E		縄文	
270	I-21・22	楕円形	1.58	0.90	0.20	N-70°-W		縄文	269より新
271	I-21・22	不整形円形	1.62	1.56	0.23	N-25°-E		縄文	270より新
272	I-21・22	楕円形	0.90	0.62	0.60	N-25°-E		縄文	
273	I-21	楕円形	1.84	1.40	0.51	N-13°-W		縄文	
274	I-21	楕円形	1.36	0.80	0.22	N-11°-W		縄文	
275	I-22	楕円形	1.24	0.84	0.14	N-10°-W		縄文	
276	I-22	不整形	1.60	0.90	0.43	N-52°-W	深鉢	縄文	275より新
277	J-19	不整形	0.88	0.40	0.31	N-87°-E		縄文	
278	J-21	円形	0.84	0.80	0.19	N-34°-E		縄文	
279	J-21	不整形	1.34	0.46	0.10	N-23°-W		縄文	
280	J-21	楕円形	1.40	0.84	0.11	N-56°-E		縄文	
281	J-21	不整形	1.00	0.88	0.13	N-11°-W		縄文	280より新

## 土壌出土遺物(第57・58・59・60・61・62図)

第57図154-1は胴部で緩く括れ、口縁部で内彎する4単位の波状口縁を呈する深鉢形土器である。底部を欠損していた。口唇部はやや尖り直下にナゾリを加えた幅広の沈線が巡る。沈線は波頂部で切れ渦巻状を呈す。胴部文様帶は2段に分かれる。上半部文様は幅の狭い波状沈線文を施文する。下半部は上部波頂部に対応して「匁」字文を描く。地文はRL縄文を縦位に施文する。また、口縁部直下は横位に施文して羽状にしている。215-1は直線的に外反して立ち上がる、平縁の深鉢形土器口縁部である。口唇部は丸くやや肉厚である。胴部文様帶上部を2条の平行する沈線で区画し、以下に斜行文を施文している。218-1は底部から直線的に外反して立ち上がる平縁の深鉢形土器である。口唇部は丸く外面に丁寧なヘラミガキを施す。胴部文様はLR縄文を粗雑に斜位施文している。219-1は胴部で緩やかに括れ口縁部で内彎する深鉢形土器胴部である。文様は両側にナゾリが加えられた2条の隆帶により、磨消懸垂文が施文されている。また図上中央の2本の隆帶の先端は丸まり、連結する様相を示している。地文はLR縄文を縦位に施文している。219-2は底部が窄まり胴部で括れる深鉢形土器胴下半部である。底部はやや丸く作られている。地文はRL縄文を斜位に施文している。235-1は直線的に外反して立ち上がり、3単位の波状口

縁を呈する粗製深鉢形土器である。口唇部はやや尖り肉厚である。口唇部波頂部に2本の刻み目が入る。胴部上半に焼成後の穿孔が一箇所認められる。238-1は胴部がやや張り、口縁部に向かって緩やかに外反する平縁の深鉢形土器である。口唇部は丸く薄手に作られている。胴部文様帶は2段に分かれる。上部文様は3条の沈線により「U」字文を施文する。下部文様は上部文様に対応して、2ないし3条の沈線により、「匁」字状文を描く。251-1は胴部上半部で括れ口縁部に向かってやや強く外反する平縁の深鉢形土器である。口唇部は「く」字状に内屈し内面に1条の沈線が巡る。口縁部無文帶を1条の刻み目を加えた隆帶により区画している。隆帶上には「8」字状貼付文が付く。隆帶下には1条の横走する沈線と垂下する沈線が認められる。268-1は底部から口縁部にむかって緩やかに外反して立ち上がる平縁の深鉢形土器である。図上で1単位の把手が付く。口唇部は平坦で1条の沈線が巡る。把手は円孔をもつボタン状貼付文と渦巻文を組み合わせて、山形状を作り出している。口縁部下に1条の紐線文を施文する。紐線文上には把手部直下に対応して、「8」字状貼付文を貼付する。胴部文様帶は2条の沈線によって区画し、LR縄文を横位に充填施文している。第58図231-1は底部から口縁部にむかって緩やかに外反して立ち上がる、平縁の深鉢形土器である。口唇部は「く」字状に内屈

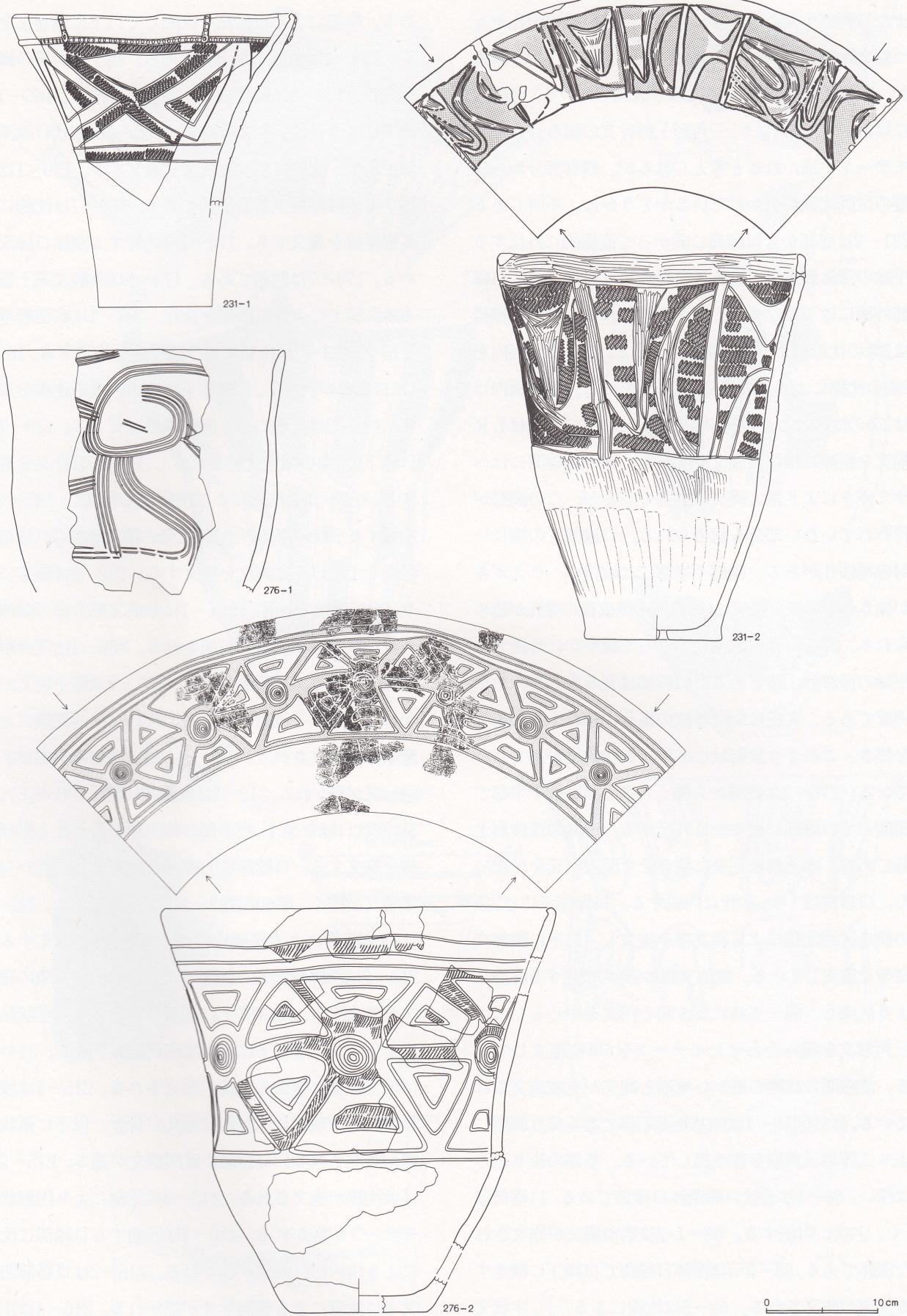
第57図 土壤出土遺物(1)



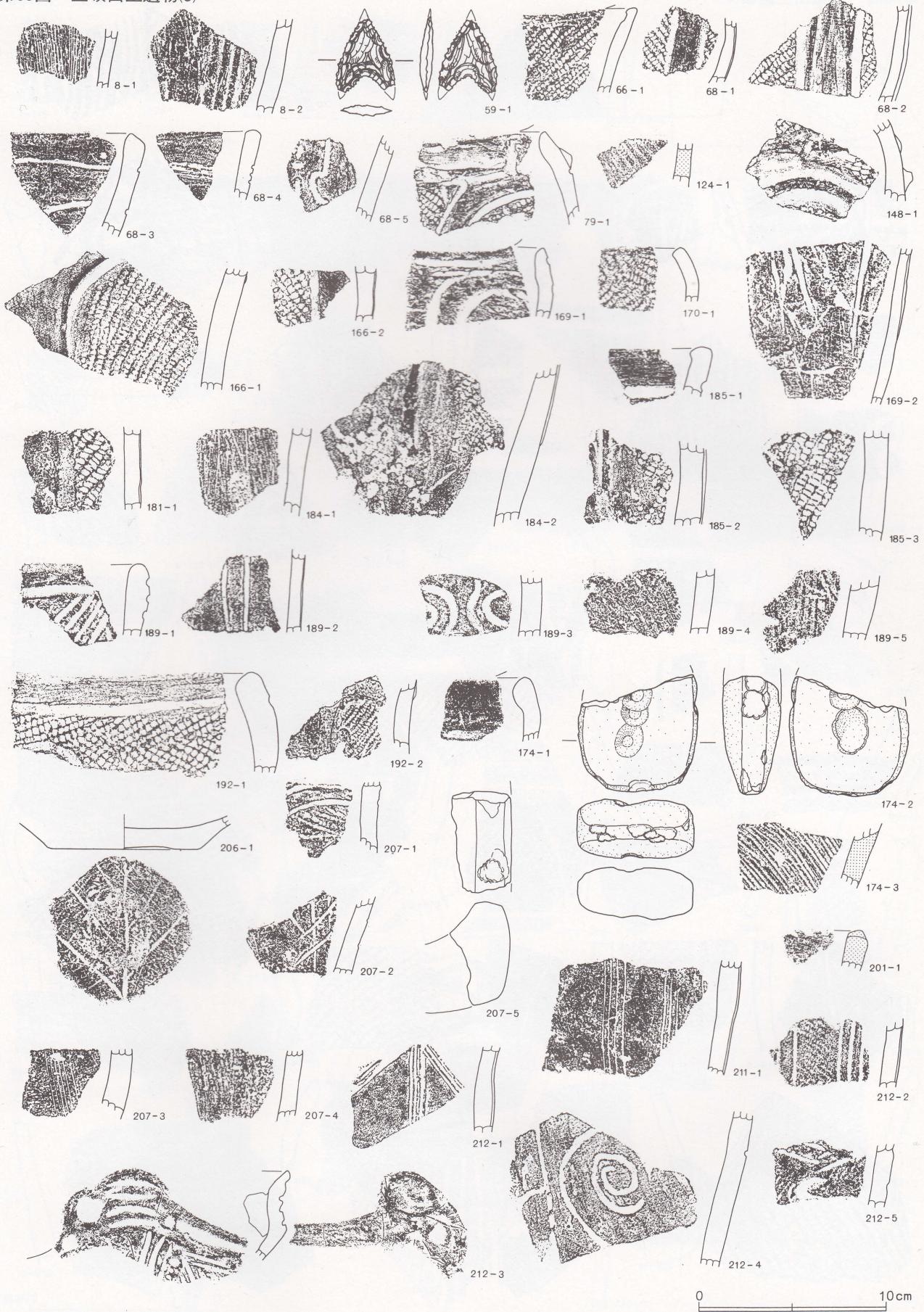
する。口縁部下には1条の刻み目を加えた隆帯が巡る。また口唇部からこの隆帯に連結して、1箇所の円孔をもつ刻文隆帯が2条付く。胴部文様帶は隆帯で上部を区画し、下部を2条の横走する沈線で区画している。区画内には2条の沈線により、三角形と斜行文の組み合わせたモチーフが描かれると考えられるが、残存部分からは、縦の区画沈線が引かれているかどうかは、不明である。231-2は底部から口縁部に向かって直線的に外反する平縁の深鉢形土器である。口唇部は丸みをもつ。口縁部外面には丁寧なヘラミガキが施される。胴部文様帶は2条の沈線により、区画されている。さらに区画内を2条の沈線により、縦位6区画にしている。各区画内には2条の沈線により幾何学文を描いている。地文はLR縄文を粗雑に横位に施文している。区画沈線間にはヘラミガキにより地文縄文を磨消しているが、この調整が行われていない部分も認められる。口縁部との境に一对の補修孔がある。胴部下半部には縦位のヘラミガキが施されている。底部には1箇所の焼成後の穿孔が認められる。276-1は口縁部に向かって緩やかに外反する平縁の深鉢形土器である。口唇部は丸みをもち、やや肉厚である。文様は5本1単位の集合沈線により渦巻文を描き、これより放射状に派生する沈線文が施文されている。276-2は底部から強く外反し、胴部下半部で屈曲して口縁部に緩やかに外反する、平縁の深鉢形土器である。本土器は完全に接合せず図上復元を行なった。口唇部は「く」字状に内屈する。口縁部下には2条の横走区画沈線による縄文帯を施文し、以下に胴部文様帶を施文している。胴部文様は2条の横走する沈線により区画し、同一工具による同心円文を中心として、三角形文を組み合わせたモチーフを6単位施文している。沈線間には撲の細かい無筋L縄文が充填施文されている。第59図59-1は凹基無茎石鏃である交互剝離により二等辺三角形を作り出している。基部の抉り込みは深い。66-1は波状口縁深鉢口縁部である。口唇部は「く」字状に内屈する。68-1・2は磨消縄文が施文された深鉢である。68-3・4は深鉢口縁部で口縁下に横走する沈線が施文される。68-5は沈線による「J」字状文

に列点文が充填される。79-1は波状口縁深鉢口縁部である。隆帯により口縁部を区画して以下に渦巻文を描く。124-1は条痕文系土器である。胎土に少量の纖維を含む。148-1は隆帯により渦巻文を描く。166-1は隆帯により「匂」字文を描く。166-2は波状口縁深鉢形土器で、沈線により波状文を施文する。170-1は内彎する平縁深鉢土器口縁部である。169-1は沈線による懸垂線を施文する。174-1は内彎する深鉢口縁部である。174-2は凹石である。174-3は条痕文系土器である。胎土に少量の纖維を含む。181-1は磨消懸垂文を描く。184-2は隆帯により懸垂線を施文する。185-1は口唇部が内屈し、口縁部下に幅広の横走沈線を巡らす。185-2は隆帯により懸垂線を施文する。189-1は口縁下に1条の横走沈線を巡らし、以下に斜行文を施文する。189-3は沈線により幾何学文を描く。192-1は内彎する平縁の深鉢形土器で1条の横走沈線で口縁部を区画して、以下に縄文を施文する。192-2は隆帯により「匂」字文を描く。201-1は条痕文系土器口縁部である。口唇部に刻み目が施される。206-1は浅鉢形土器底部である。木葉痕が付く。207-1は格子目文が描かれる。207-2は石皿である。211-1は細沈線により懸垂線が施文される。212-1は3条1単位の沈線により斜行文が描かれる。212-2は懸垂文が施文される。212-3は波状口縁を呈す。把手部には円形の貫通孔と弧状沈線を施文する。口唇部に凹線文を施文する。212-4は渦巻文を描く。第60図212-1は注口部である。213-1は刻文隆帯による区画内に弧状の沈線を施文する。213-2は深鉢形土器口縁部である。口縁下に1条の紐線文を施文する。紐線文上に間延びした「8」字状貼付文を付ける。隆帯下に横走沈線が施文される。214-3は地文縄文に複数の沈線が施文される。215-1は波状口縁部で波頂部に円形の貫通孔が付き、以下に弧状沈線が施文される。口唇部には凹線文が巡る。215-2は多条沈線が施文される。215-3は沈線により円形状のモチーフが描かれる。216-1は屈曲する口縁部に沈線による楕円形区画文が描かれる。216-2は口唇部凹線文下に沈線による幾何学文が描かれる。216-4は注口

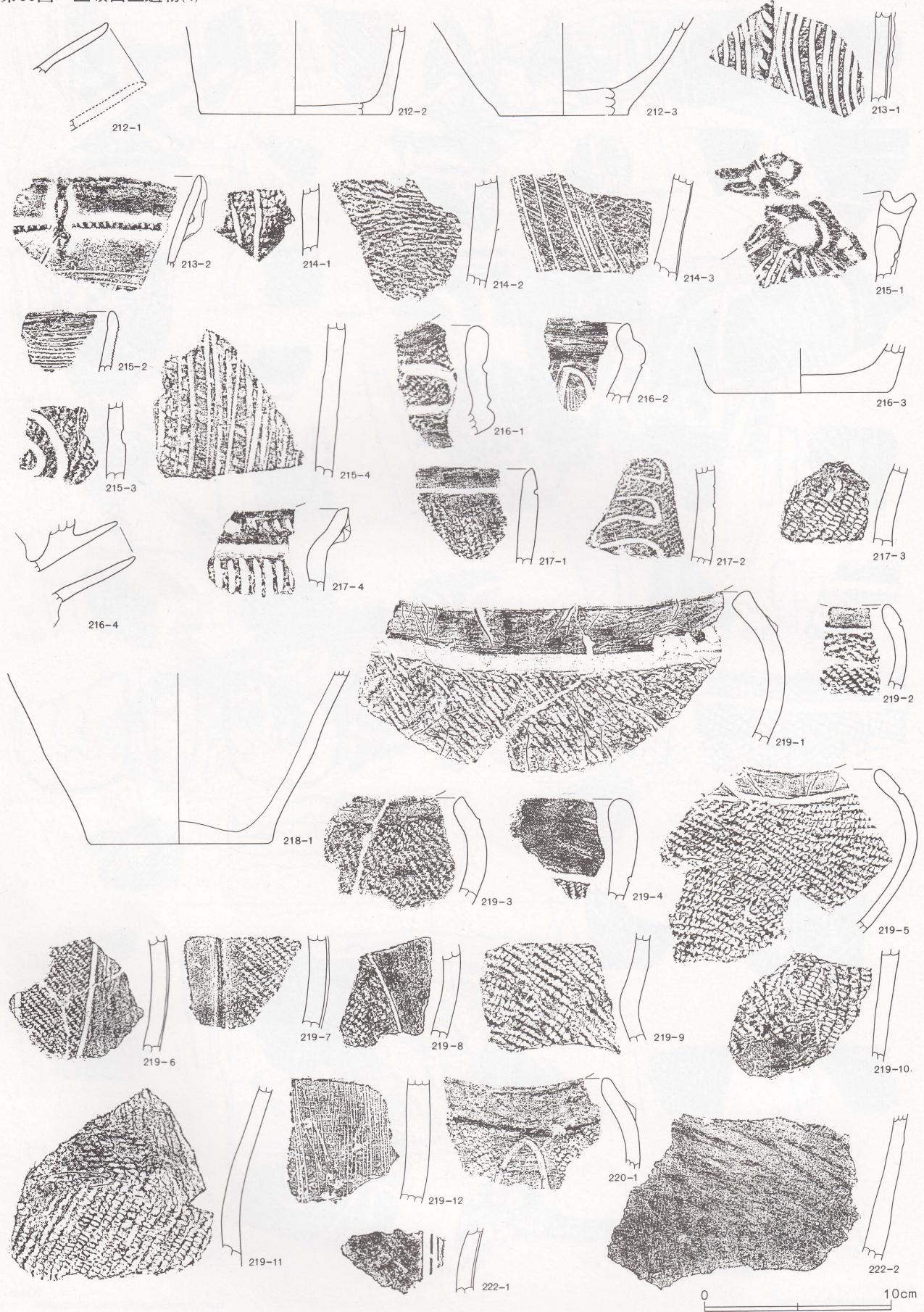
第58図 土壤出土遺物(2)



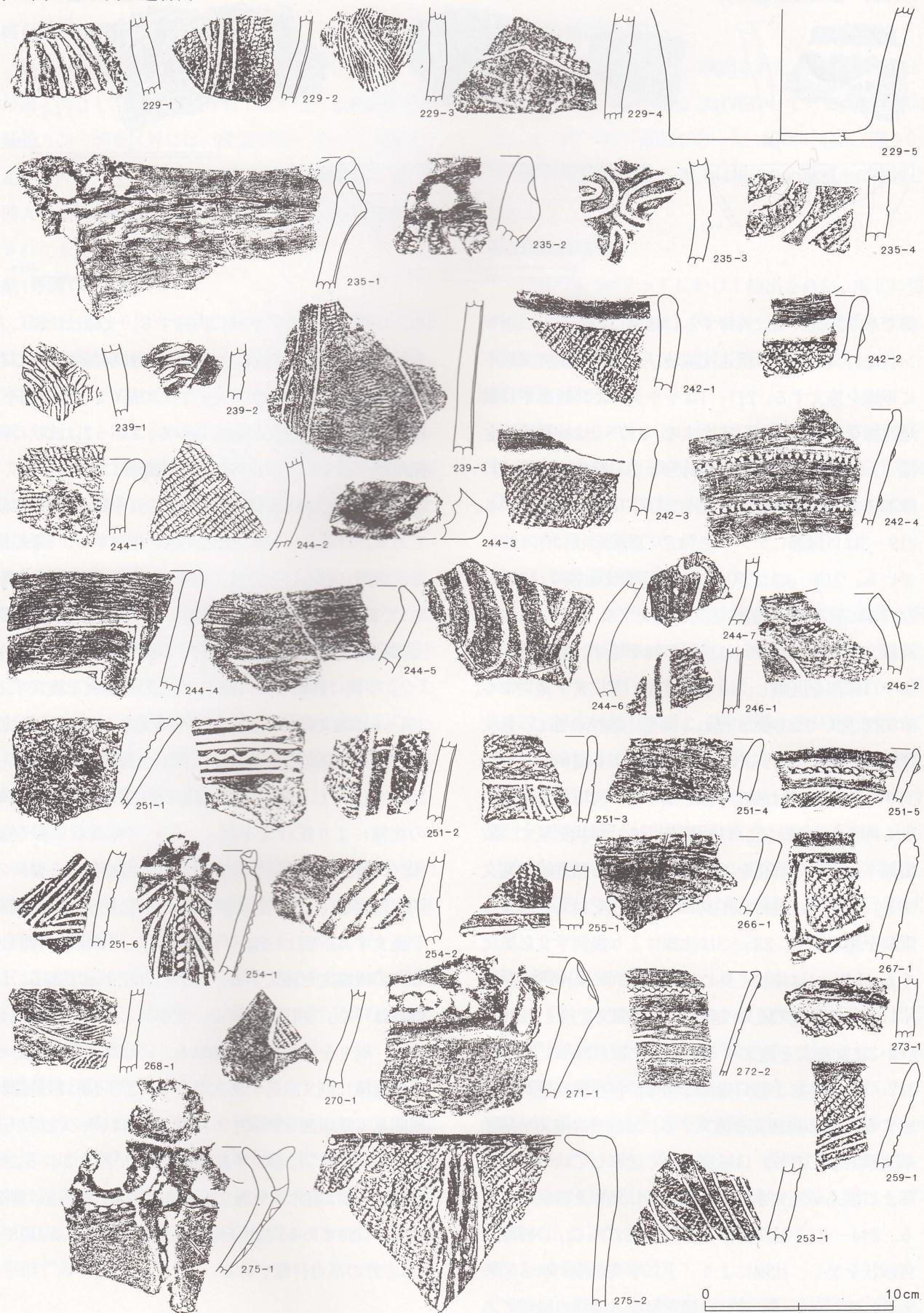
第59図 土壌出土遺物(3)



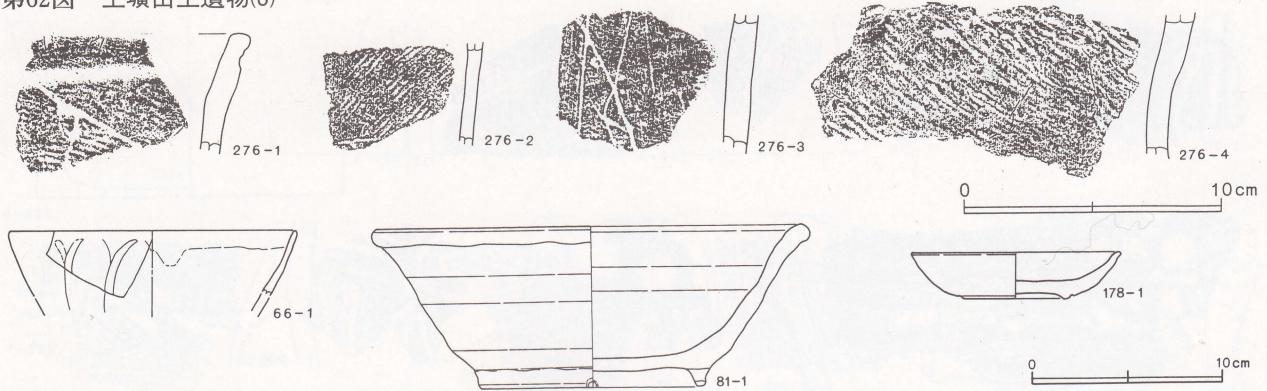
第60図 土壌出土遺物(4)



第61図 土壤出土遺物(5)



第62図 土壤出土遺物(6)



部である。217-4は外彎する口縁部に円孔をもつボタン状貼付文をつけ、横走沈線及び三角連続刺突文以下に垂線を施文する。217-1はやや尖った口唇部下に横走沈線を施文し縄文を施文する。217-2は蛇行沈線を描く。219-1は波状口縁深鉢形土器口縁部である。口縁部無文部を横走沈線で区画し以下に縄文を施文する。219-3は口縁部にナゾリを加えて微隆起状に作りだしている。219-6は沈線により「Ω」字文を描く。219-7は微隆帶による磨消懸垂文を施文する。219-8は波状沈線文を描く。220-1は波状口縁を呈す。微隆起線により口縁部を区画し、以下に「W」字状文を施文する。第61図229-1は胴部が括れる鉢型土器括れ部で、弧状沈線文を描く。229-3は多条沈線により幾何学文を施文する。235-1は波状口縁を呈する。波頂部に指頭による押さえを加える。口唇部は「く」字状を呈す。波頂部下に円形の盲孔を2箇所設け、以下に懸垂線を施文する。235-2は丸棒状工具による押圧を付し、以下に垂線を施文する。235-3は沈線により幾何学文を施文する。239-1は棒状工具による刺突列により円文を描く。239-3は地文縄文に垂下する沈線文を描く。242-1・2・3は沈線文を施文する深鉢形土器口縁部である。242-4は深鉢形土器口縁部である。口唇部は僅かに内屈する。2条の紐線文を施文する。244-1は縄文早期撚糸文系土器である。口唇部は丸く肥厚している。口端部まで撚糸が施文される。244-3は異形土器底部である。244-4は平縁深鉢形土器口縁部である。口唇部は角頭状を呈し、沈線により「J」字文が描かれると考えられる。244-5は波状口縁を呈する深鉢口縁部であ

る。口唇部が「く」字状に内屈する。文様は沈線により区画文が施文される。244-6は深鉢胴部屈曲部である。文様は沈線により「X」字文が描かれる。246-1は隆帶により懸垂文が施文される。246-2は波状口縁深鉢形土器である。口縁部を微隆起線により区画し、以下に「W」字状文を施文する。251-1は浅鉢形土器である。口端部に1条の横走沈線を施文する。3条の横走沈線間に刻み目と波状沈線を組み合わせた、内文をもつ。251-2は懸垂文を施文する。251-3は2条の胴上部区画沈線下に垂線を施文する。251-5は口唇部が「く」字状に内屈し、口縁下に1条の紐線文を施文する。251-6は地文縄文に三角形文を施文する。254-1は波状口縁下に刻文隆帶を施文し、弧状沈線文を描く。267-1は沈線文下に沈線による区画文を描く。268-1は2条の沈線により蛇行文を描く。271-1は波状口縁を呈す。口唇部は「く」字状を呈する。波頂部に2箇所の円形刺突を付し、円形刺突列を加えた長槽円形区画文を施文する。271-2は口唇部が「く」字状に内屈し、2条の紐線文を施文する。275-1は把手部である。口唇部は「く」字状を呈する。波頂部に円形の貫通孔を設け、周りを沈線により縁取る。円形の盲孔を中心として縦横に刻文隆帶が施文される。275-2は口縁部が屈曲して平坦面を形成する。平坦面には1条の沈線が巡る。口縁部からは垂下する3条の沈線が施文される。第62図66-1は蓮弁文を施文する鉢である。81-1は常滑産の片口鉢である。13世紀後半に位置づけられる。178-1は志野の高台付皿である。

## 4. 棚列跡・溝

### 第1号棚列跡(第63図)

G・H・I-5・6グリッドに検出された。本跡は、第3号溝と共有し、第5号溝に平行していた。また本跡南側延長方向の調査区外には、農道が続いていた。棚列の走行方向は、N-24°-Eであった。本跡覆土には、浅間A火山灰が含まれていたことから、近世以降に構築されたものであった。

### 第1号溝(第64図)

C-E-3-6グリッドにかけて検出された。西側は、調査区外に続いていた。第2号溝に平行していた。本跡は途中で切れていたが、南東側で折れて第4号溝に続いていたと考えられる。また、旧地割区画に一致していた。走行方向は、N-48°-Wで直線であった。幅は0.50m、深さ0.10mで、底面は平坦であった。覆土は粘質土が堆積していた。

### 第2号溝(第64図)

E-6-7グリッド上に検出された。第1号溝に平行していた。南側で土壤状の広がりがあった。本跡は途中で切れていたが、南東側で折れて第5号溝に続いていたと考えられる。走行方向は、N-60°-Wで直線であった。幅は、0.50m、深さ0.30mで、底面は平坦であった。覆土は粘質土が堆積していた。

### 第3号溝(第63図)

H・I-5・6グリッドにかけて検出された。第1号棚列跡と共有していた。また、第5号溝に平行していた。本跡南側は、調査区外に続いていた。走行方向は、N-24°-Eで直線であった。幅は0.80m、深さ0.10mで、底面は平坦であった。覆土には浅間A火山灰を含む砂質土が堆積していた。

### 第4号溝(第63図)

G-I-5-6グリッドにかけて検出された。東側第5号溝にはほぼ平行していた。第7号溝に切られていた。南側は調査区外に続いていた。走行方向は、N-25°-Wで直線であった。幅は0.30m、深さ0.15mで、底面は平坦であった。

### 第5号溝(第63・64図)

F-H-6-7グリッドに検出された。第1号棚列跡と平行していた。第4号溝とほぼ平行していた。走行方向は、N-24°-Wで直線であった。幅は0.44m、深さ0.16mでU字形であった。覆土は褐灰色の粘質土が堆積していた。

### 第6号溝(第63図)

G-H-4-5グリッドにかけて検出された。南北に切れていた。走行方向は、N-45°-Eで直線であった。幅は0.10m、深さ0.08mでU字形であった。

### 第7号溝(第63図)

G-H-4-5グリッドにかけて検出された。第4号溝を切っていた。また、第6号溝と共有していた。走行方向は、N-50°-Wで直線であった。幅は0.45m、深さ0.19mで底面は平坦であった。

### 第8・9・10号溝(第65図)

L-M-7-9グリッドにかけて検出された。北西-南北方向にやや湾曲して走行し、調査区外に続いていた。本跡は、3本の平行する溝からなっていた。このうち第8号溝と第10号溝は共有し、第9号溝は第8号溝を切っていた。第8号溝肩部には杭列が検出された。また、調査区外に平行して用水路が走行していた。よって本跡は、覆土の堆積状況から灌漑用の施設と考えられる。走行方向は、N-55°-Wであった。幅は、2.20m、深さ0.84mで箱型であった。遺物は第77図8-1の砥石が出土した。

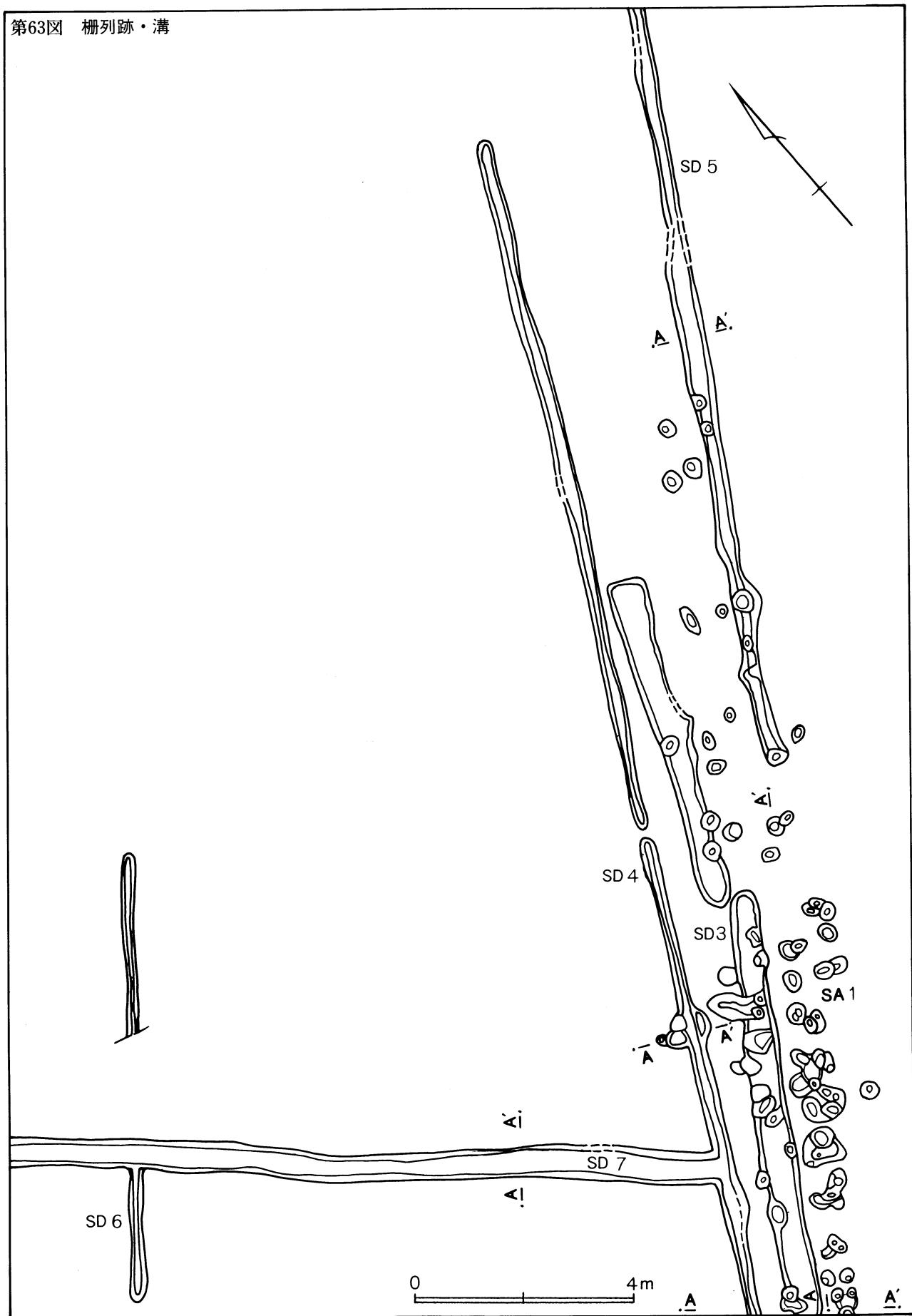
### 第11号溝(第66・67・68図)

I-O-9-12グリッドにかけて検出された。第15号溝に平行していた。北西側で切れていた。また、南東側で第12・13・14号溝に分岐していた。走行方向は、N-25°-Wでやや蛇行していた。幅は1.56m、深さ0.65mでU字形であった。堆積土には、砂質土が含まれていた。本跡は旧農道下に位置する。遺物は第77図11-1の乗燭が出土した。

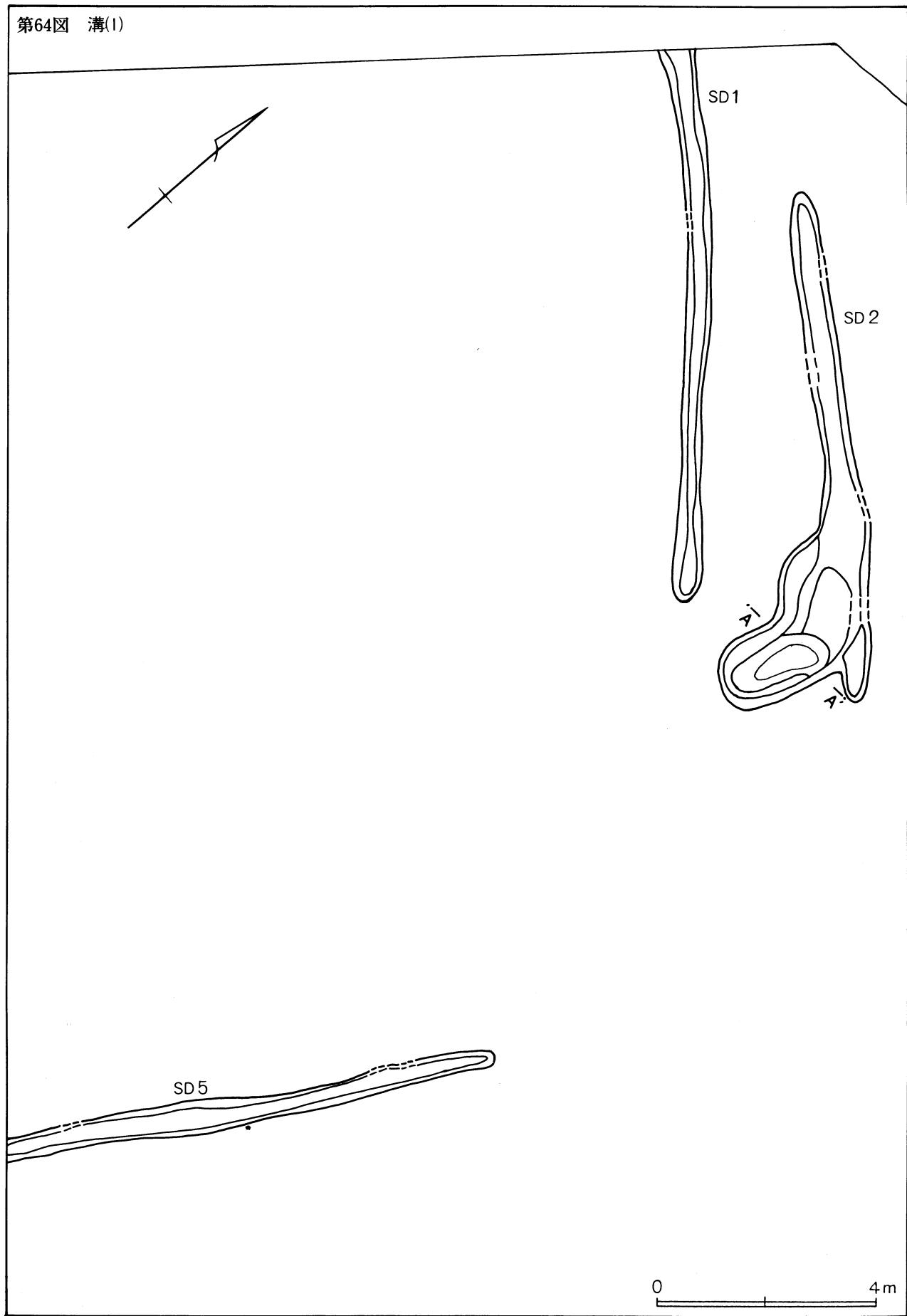
### 第12・13号溝(第67図)

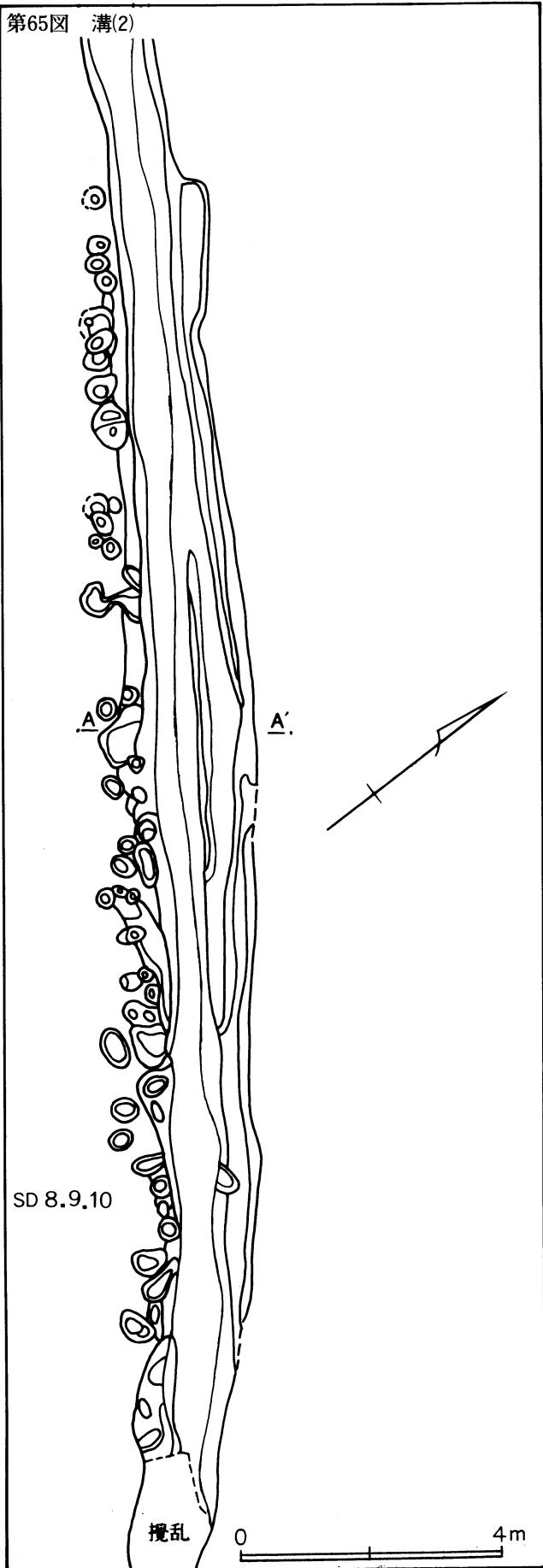
K-10グリッドに検出された。第11号溝から分岐し

第63図 棚列跡・溝



第64図 溝(1)





ていた。南側途中で切れていた。第15号溝に平行していた。走行方向は、N-20°-Wでやや蛇行していた。幅は1.34m、深さ0.14mで底面は平坦であった。遺物は第77図12・13-1の瀬戸・美濃産高台付皿が出土した。

#### 第14号溝(第67図)

K-10グリッドに検出された。第15溝に平行していた。走行方向は、N-35°-Wで直線であった。幅は0.38m、深さ0.07mで、底面は平坦であった。遺物は出土しなかった。

#### 第15号溝(第66・67・68図)

I-O-9~12グリッドにかけて検出された。この遺跡で最も長い溝であった。第11号溝と並走していた。第16・17号溝に切られていた。走行方向は、N-30°-Wでやや蛇行していた。幅は2.54m、深さ0.72mでU字形であった。覆土には砂質土が堆積していた。また、底面は凹凸があった。本跡は旧農道脇に平行していた。出土遺物は、第77図15-1の瀬戸・美濃煎茶碗、同図15-2の小皿、同図15-3の古銭が出土した。

#### 第16号溝(第67・68・69図)

M-O-10~12グリッドにかけて検出された。第17号溝とほぼ平行していた。北西側攪乱部で切れていた。南東側で第22号溝と交差していた。また、第11・15号溝を切っていた。走行方向は、N-55°-Wで直線であった。幅は0.40m、深さ0.20mで、U字形の堀り込みであった。覆土は白色砂粒を含む粘質土が堆積していた。

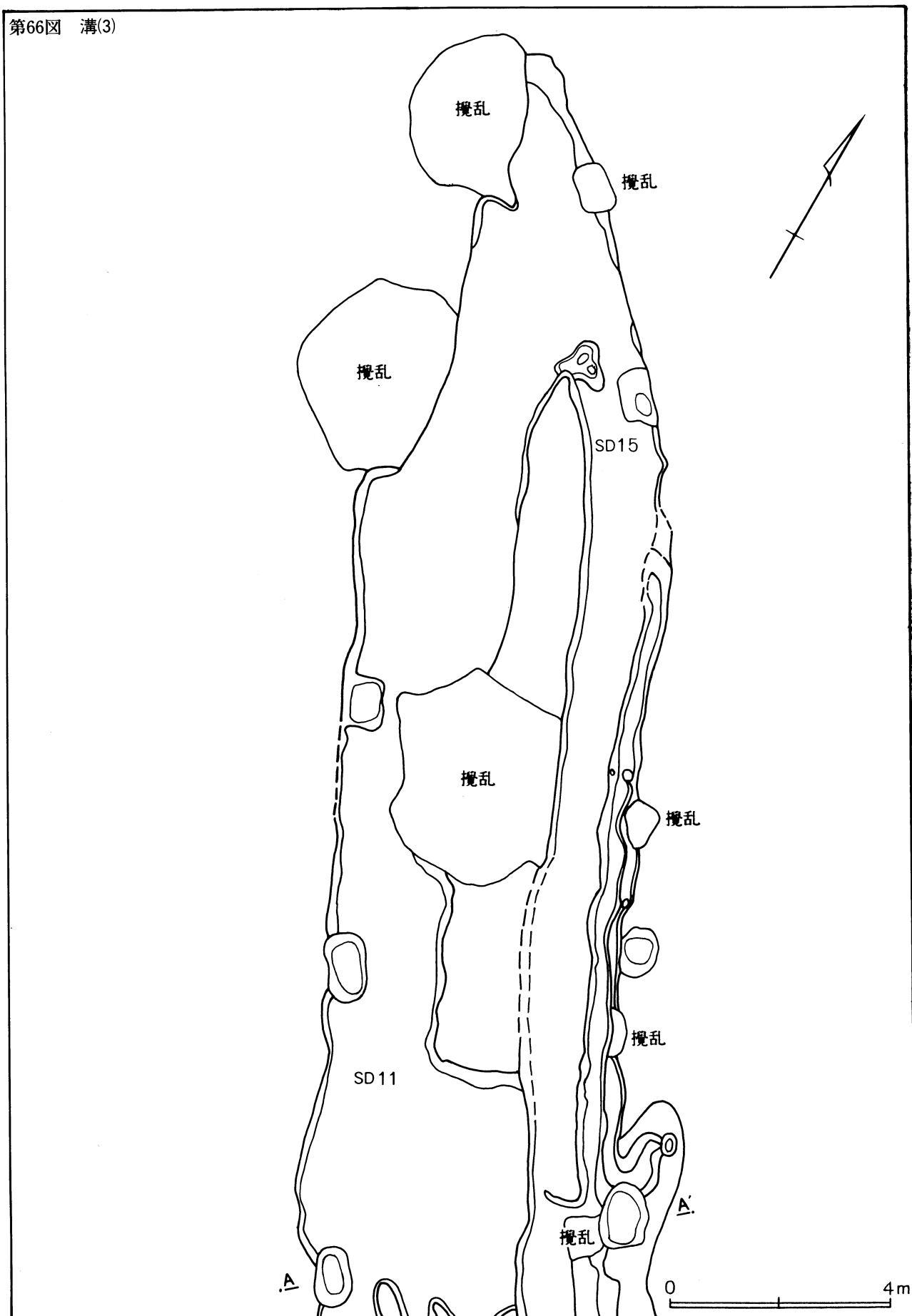
#### 第17号溝(第67・68・69図)

M-O-10~13グリッドにかけて検出された。第16号溝とほぼ平行していた。北西側攪乱部で切れていた。南東側で第22号溝と交差していた。また、第11・15号溝を切っていた。走行方向は、N-60°-Wで直線であった。幅は0.56m、深さ0.38mで、U字形の堀り込みであった。覆土は白色砂粒を含む粘質土が堆積していた。遺物は、第77図17-1の小皿が出土した。

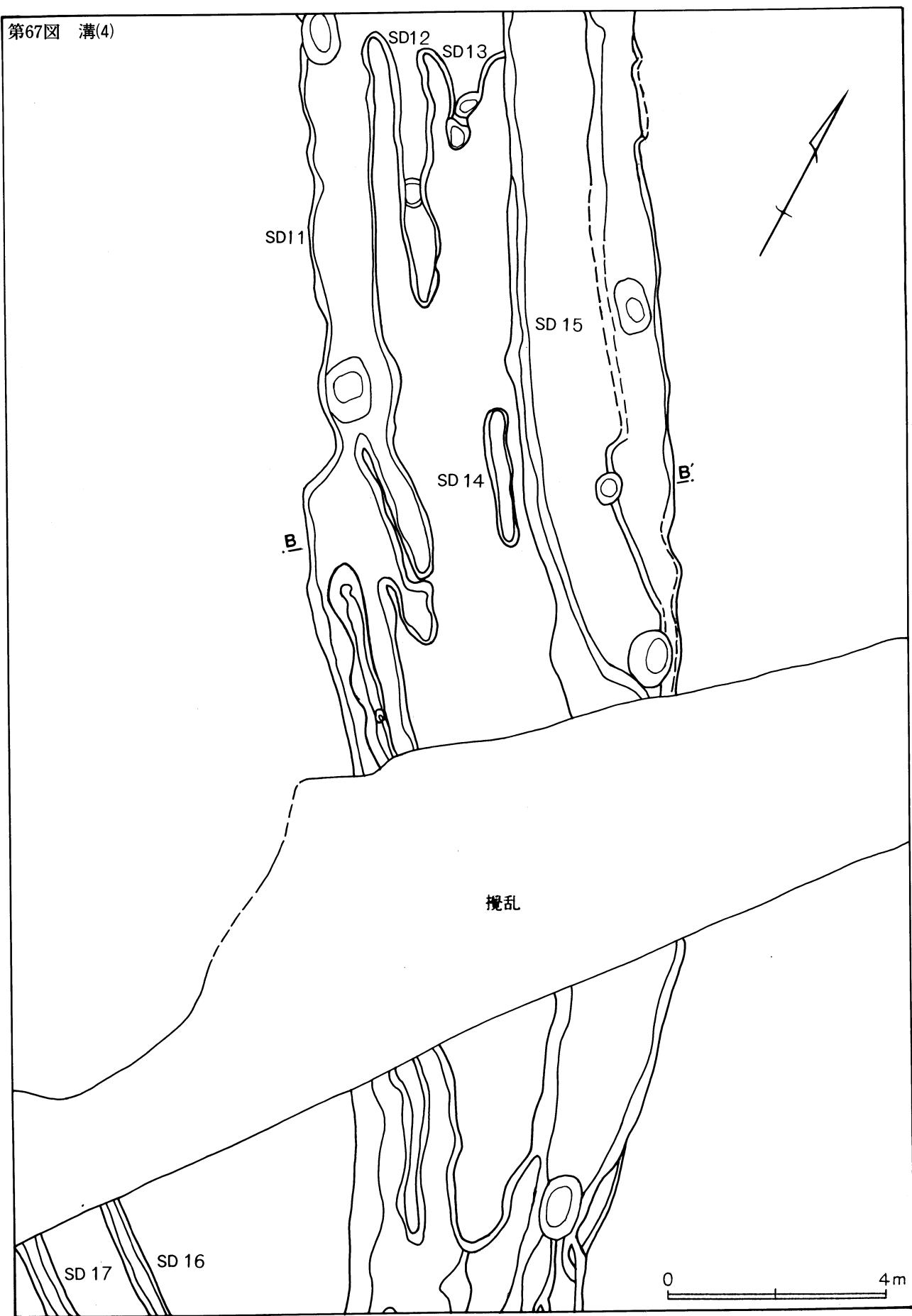
#### 第18号溝(第4図)

L-12グリッドに検出された。第19号溝とほぼ平行し、南側で接続していた。走行方向は、N-24°-Eで湾曲していた。幅は1.40m、深さ0.12mで、底面は平

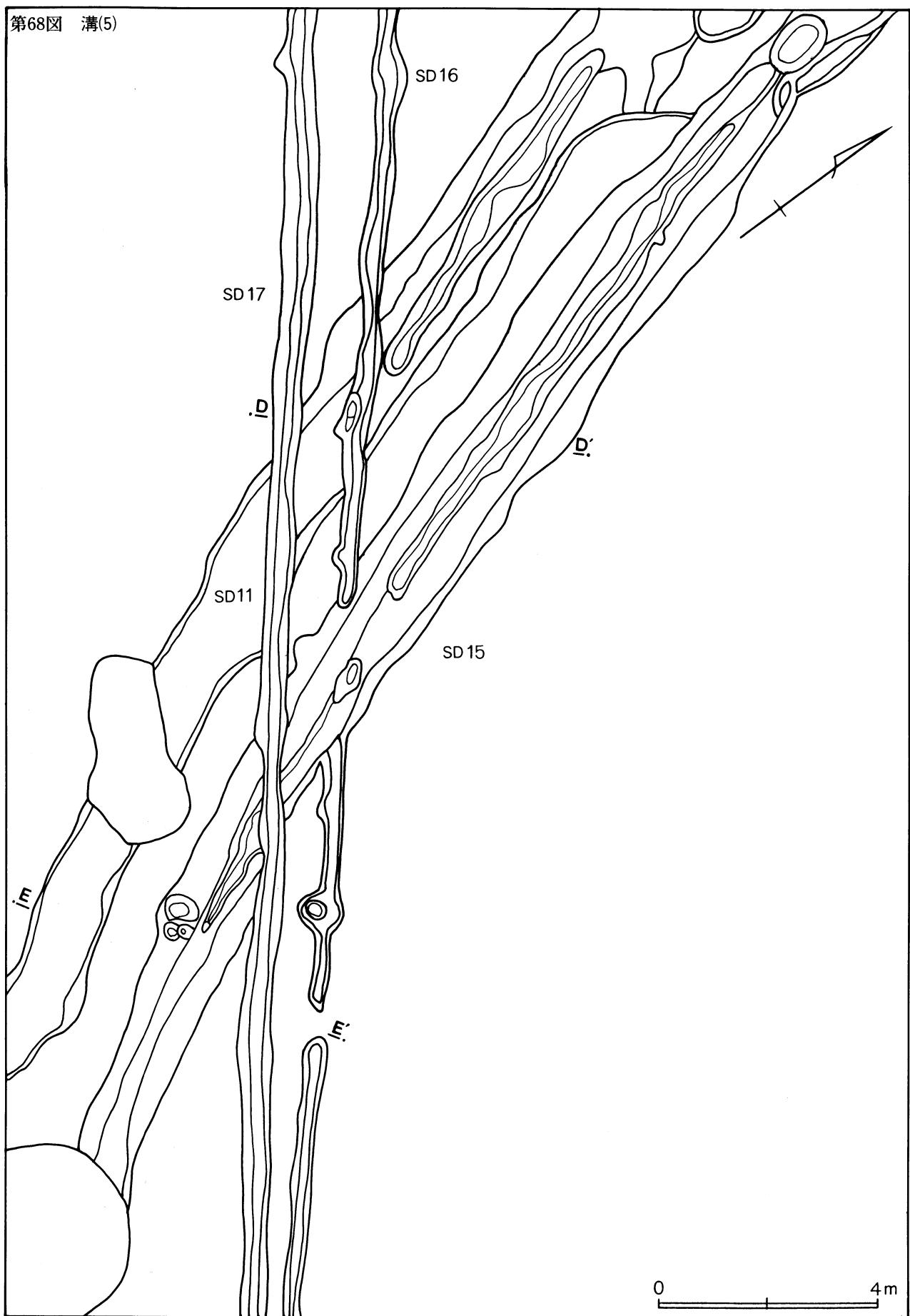
第66図 溝(3)



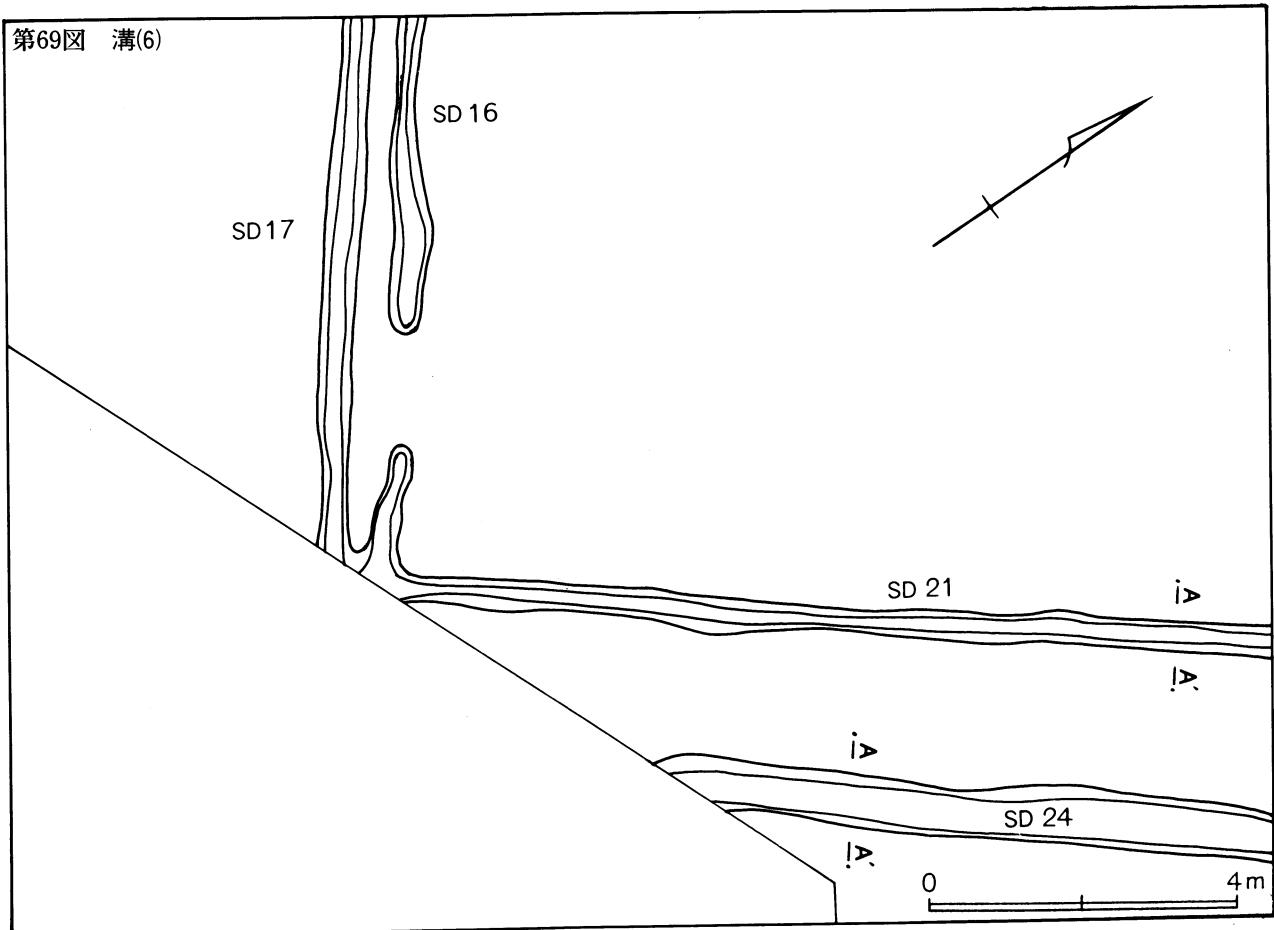
第67図 溝(4)



第68図 溝(5)



第69図 溝(6)



坦であった。遺物は出土しなかった。

#### 第19号溝(第4図)

K・L-12グリッドに検出された。第18号溝とほぼ平行し、南側で接続していた。走行方向は、N-40°-Eで直線であった。幅は0.80m、深さ0.19mで、底面は平坦であった。遺物は出土しなかった。

#### 第20号溝(第4図)

J・K-12・13グリッドにかけて検出された。第19号溝の北側延長上にあった。第4号住居跡を切っていた。走行方向は、N-55°-Eで直線であった。幅は1.20m、深さ0.13mで、底面は平坦であった。遺物は出土しなかった。

#### 第21号溝(第69・70図)

N・O-13・14グリッドにかけて検出された。第24号溝に平行し、北側途中で切れていた。また、第16・17号溝と交差していた。本跡は、調査区外南西側に現存する、寺域の延長上にあたる。走行方向は、N-37°-Eで直線であった。幅は0.34m、深さ0.22mで、箱形で

あった。底面は平坦であった。覆土は白色砂粒及びローム粒子を含む、粘質土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

#### 第22号溝(第70図)

L・N-14・15グリッドにかけて検出された。第21号溝の延長上に平行して走行していた。北側途中で直角に曲がり第23号溝に接続していた。本跡は調査区外南西側に現存する、寺域の延長上にあたる。走行方向は、N-32°-Eで直線であった。幅は0.26m、深さ0.19mで、U字形であった。覆土は白色砂粒及びローム粒子を含む粘質土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

#### 第23号溝(第70・71図)

L・M-15・16グリッドにかけて検出された。第22号溝に直角に接続し、第26・27号溝と交差していた。また東側で第28号溝に接続していた。本跡は調査区外南西側に現存する、寺域の延長上にあたり、この区画溝の可能性が高い。走行方向は、N-60°-Wで直線であった。幅は0.44m、深さ0.21mで、箱形であった。底面

は平坦であった。

#### 第24号溝(第69・70図)

N・O-13・14グリッドにかけて検出された。第21号溝に平行し、北側途中で直角に曲がり第25号溝に接続していた。また、南西側は、調査区外に続いていた。本跡は調査区外南西側に現存する、寺域の延長上にあたる。走行方向は、N-40°-Eで直線であった。幅は0.64m、深さ0.20mで、U字形であった。底面は平坦であった。覆土はローム粒子を含む粘質土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

#### 第25号溝(第70図)

N-14グリッドに検出された。第24号溝に接続していた。また、第26・27号溝に切られていた。走行方向は、N-55°-Wで直線であった。幅は0.48m、深さ0.11mで、U字形であった。底面は平坦であった。遺物は出土しなかった。

#### 第26・27号溝(第70・71図)

L-O-14~16グリッドにかけて検出された。本跡は、2本の並走する溝であった。第27号溝が第26号溝を切っていた。また、第29号溝とほぼ平行していた。本跡調査区外南西延長上には、軸を同じくして県道-加須・鴻巣線に至る。走行方向は、N-35°-Eで直線であった。幅は1.11m、深さ0.29mで、U字形であった。底面は平坦であった。覆土は粘質土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

#### 第28号溝(第70・71図)

M-16グリッドにかけて検出された。本跡は、第23号溝に接続していた。また、第29号溝に合流していた。走行方向は、N-65°-Wで直線であった。幅は0.36m、深さ0.25mで、U字形であった。底面は平坦であった。遺物は出土しなかった。

#### 第29号溝(第70・71図)

L-O-14~16グリッドにかけて検出された。本跡は、第26・27号溝とほぼ平行していた。本跡調査区外南西延長上には、軸を同じくして県道-加須・鴻巣線上に至る。走行方向は、N-33°-Eで直線であった。幅は0.94m、深さ0.38mで、箱形であった。底面は平坦で

あった。覆土は上層に炭化物・焼土を含む粘質土が、下層にロームブロックを含むシルト質土が堆積していた。遺物は、第77図29-1の瓦質土器が出土した。なお、騎西町教育委員会の発掘調査により本跡が北西側に続きクランク状に曲がって走行していることが確認された。

#### 第30・31・32号溝(第71図)

M-16・17グリッドにかけて検出された。本跡は、3本の並走する溝であった。また、第30号溝は第28号溝に接続し最も新しかった。本跡は寺域を区画する溝であったと考えられる。走行方向は、N-60°-Wでやや湾曲していた。幅は2.76m、深さ0.32mで、箱形であった。第31・32号溝底面には凹凸があった。覆土は炭化物・焼土が多く含まれていた。遺物は、第77図30・31・32-1~7が出土した。

#### 第33号溝(第4図)

O・P-15グリッドにかけて検出された。第203号土壙を切っていた。南側は調査区外に続いていた。走行方向は、N-20°-Wで湾曲していた。幅は0.40m、深さ0.16mであった。遺物は出土しなかった。

#### 第34号溝(第4図)

N・O-16グリッドにかけて検出された。調査区東隅に検出された。走行方向は、N-30°-Eで直線であった。幅は0.30m、深さ0.10mであった。遺物は出土しなかった。

#### 第35号溝(第4図)

G-16グリッドに検出された。南西側は調査区外に続いていた。走行方向は、N-35°-Eで直線であった。幅は0.40m、深さ0.10mであった。遺物は出土しなかった。

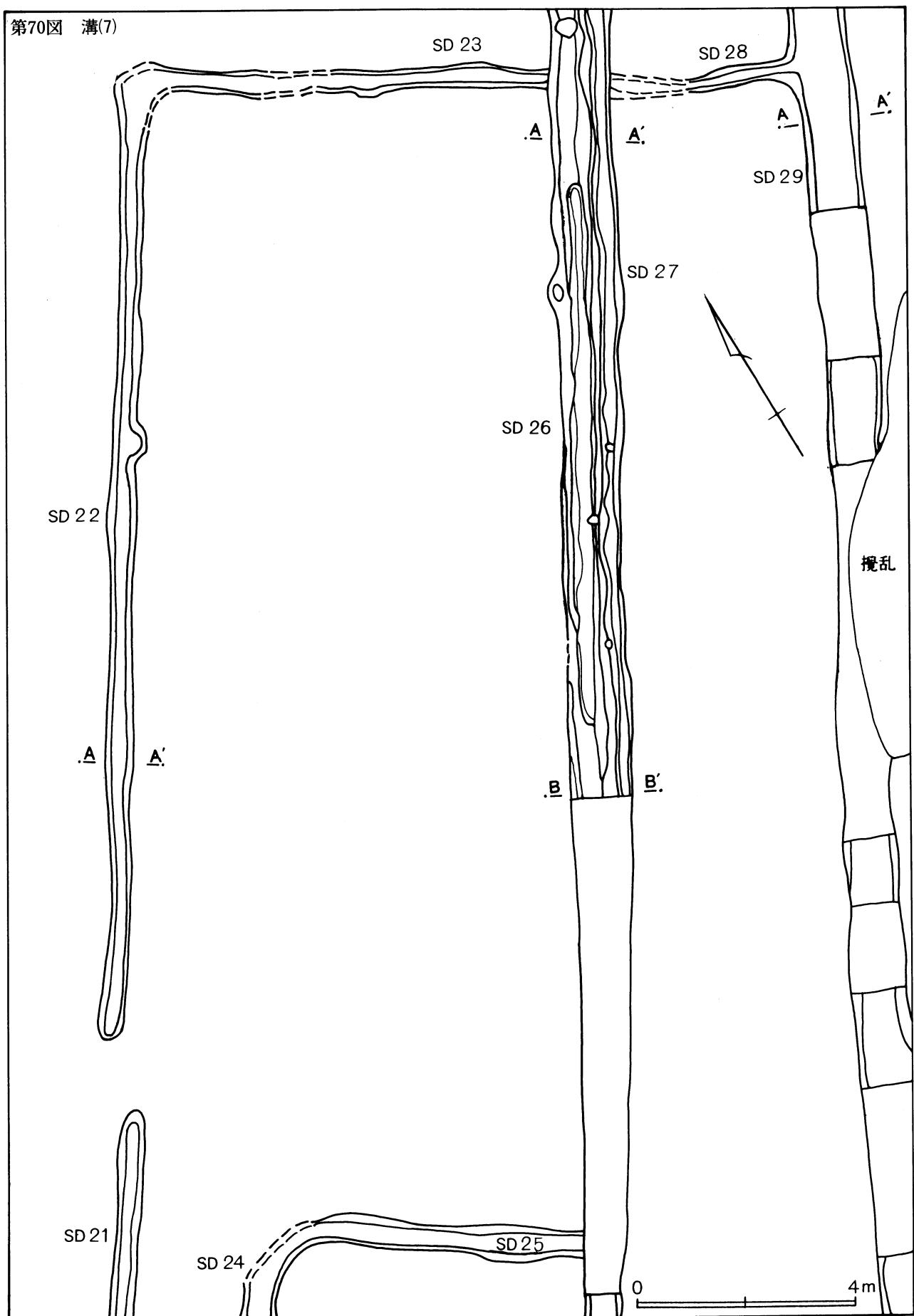
#### 第36号溝(第4図)

G・H-17グリッドにかけて検出された。北側は攪乱により壊されていた。走行方向は、N-20°-Eで直線であった。幅は0.60m、深さ0.10mであった。遺物は出土しなかった。

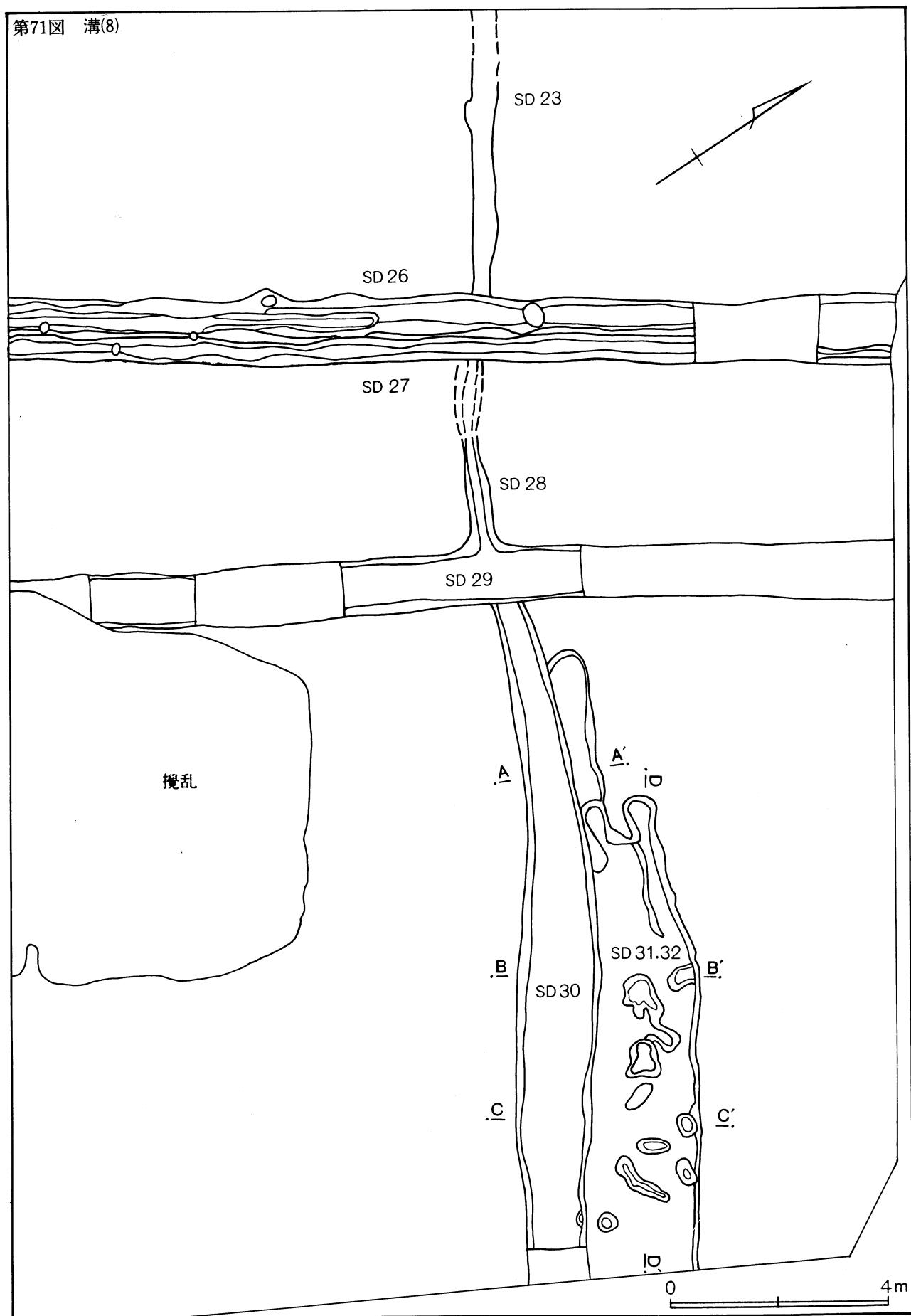
#### 第37号溝(第72図)

I-17グリッドに検出された。南側は途中で切れていた。北側は攪乱により壊されていた。走行方向は、

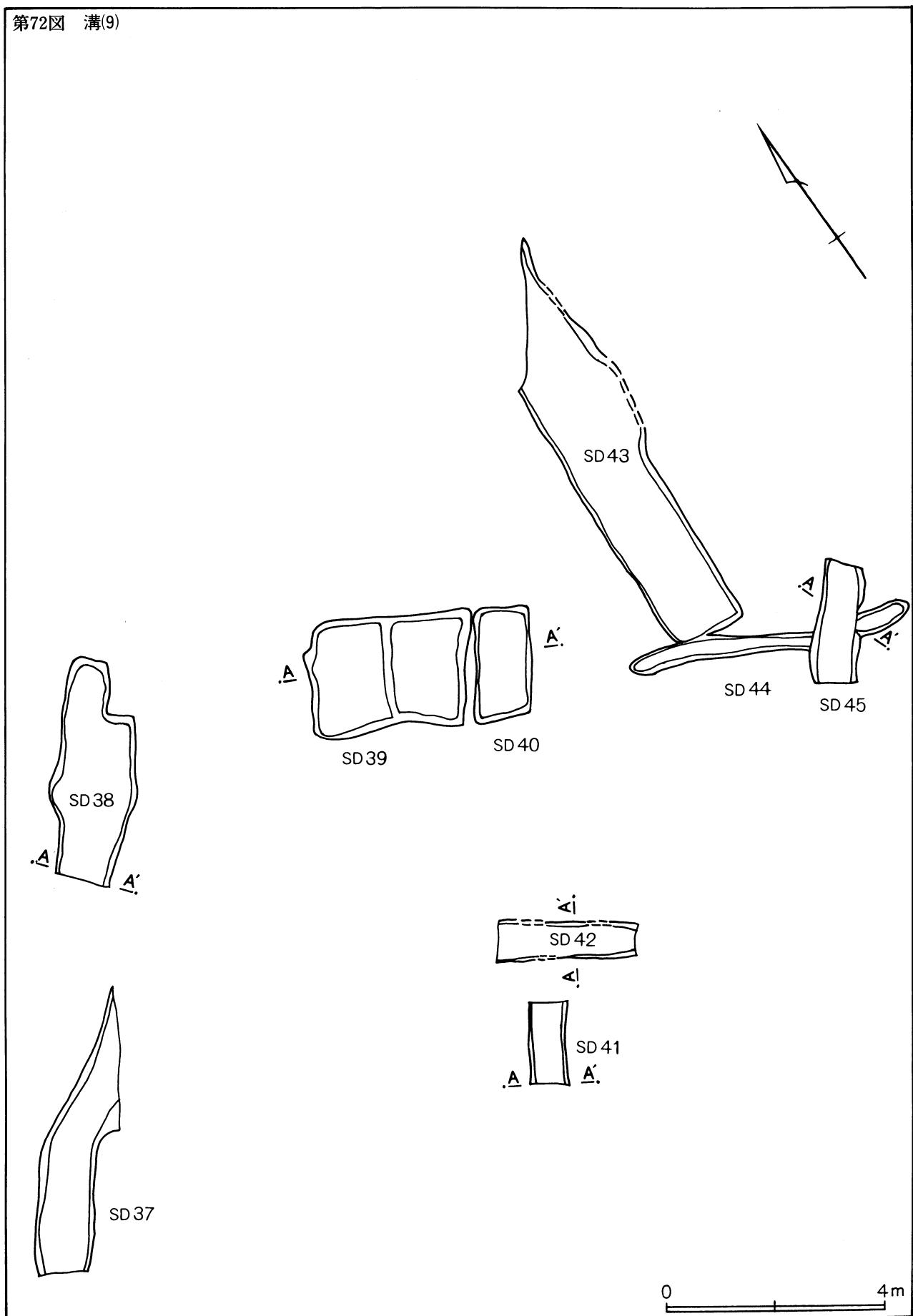
第70図 溝(7)



第71図 溝(8)



第72図 溝(9)



N-50°-Eでやや湾曲していた。幅は1.04m、深さ0.11mであった。遺物は出土しなかった。

#### 第38号溝(第72図)

H-17・18グリッドにかけて検出された。北側は途中で切れていた。南側は攪乱により壊されていた。走行方向は、N-45°-Eでやや湾曲していた。幅は0.98m、深さ0.20mであった。遺物は出土しなかった。

#### 第39号溝(第72図)

H-18グリッドに検出された。南北両側を攪乱により壊されていた。走行方向は、N-50°-Eで直線であった。幅は2.70m、深さ0.22mであった。遺物は出土しなかった。

#### 第40号溝(第72図)

H-18グリッドに検出された。南北両側を攪乱により壊されていた。走行方向は、N-55°-Eで直線であった。幅は0.98m、深さ0.14mであった。遺物は出土しなかった。

#### 第41号溝(第72図)

I-18グリッドに検出された。南側は調査区外に続いている。北側は第11号住居跡を切っていた。走行方向は、N-40°-Eで直線であった。幅は0.67m、深さ0.44mであった。遺物は出土しなかった。

#### 第42号溝(第72図)

I-18グリッドに検出された。東西両側を攪乱により壊されていた。走行方向は、N-70°-Wで直線であった。幅は0.64m、深さ0.06mであった。遺物は出土しなかった。

#### 第43号溝(第72図)

H・I-19グリッドにかけて検出された。南側は第44号溝手前で切れていた。北側は第1号方形周溝墓を切り、その先を攪乱により壊されていた。走行方向は、N-0°-Wで直線であった。幅は1.42m、深さ0.13mであった。遺物は出土しなかった。

#### 第44号溝(第72図)

H・I-19グリッドにかけて検出された。東西両側が途中で切れていた。第45号溝に切られていた。走行方向は、N-65°-Wでやや蛇行していた。幅は0.28m、

深さ0.08mであった。遺物は出土しなかった。

#### 第45号溝(第72図)

H・I-19グリッドにかけて検出された。南北両側を攪乱により壊されていた。第44号溝を切っていた。走行方向は、N-30°-Eで直線であった。幅は0.72m、深さ0.12mであった。遺物は出土しなかった。

#### 第46・47号溝(第73・74図)

G～I-20グリッドにかけて検出された。本跡は、2本の並走する溝であった。また、第48・49号溝と途中まで並走していた。本跡は、北側でクランク状に曲がり調査区外に続いている。また、このクランク部分で堰と考えられる遺構が検出され、ここを起点に溝が分岐していた。南西側は、騎西町教育委員会の発掘調査区に続いていることが確認された。走行方向は、N-30°-Eで直線であった。幅は第46号溝が1.54m、第47号溝が2.60m、深さ0.36m及び0.45mで、U字形であった。溝底面は平坦であった。覆土は浅間A火山灰を含む砂質土が堆積していた。遺物は、第77図46-1～9及び同図47-1～3が出土した。

#### 第48号溝(第73・74図)

G～I-20・21グリッドにかけて検出された。本跡は、2本の並走する溝であった。また、第48・49号溝と途中まで並走していた。北側は途中で切れていた。南西側は、騎西町教育委員会の発掘調査区に続いていることが確認された。走行方向は、N-25°-Eで直線であった。幅は1.70m、深さ0.45mで、U字形であった。溝底面は平坦であった。覆土はロームブロックを含む砂質土が堆積していた。遺物は、77図46・47・48-1の砥石が出土した。

#### 第49号溝(第73・74図)

G～I-20・21グリッドにかけて検出された。本跡は、第48号溝と並走する溝であった。走行方向は、N-25°-Eで直線であった。幅は2.84m、深さ0.40mで、逆台形であった。溝底面は平坦であった。覆土は砂質土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

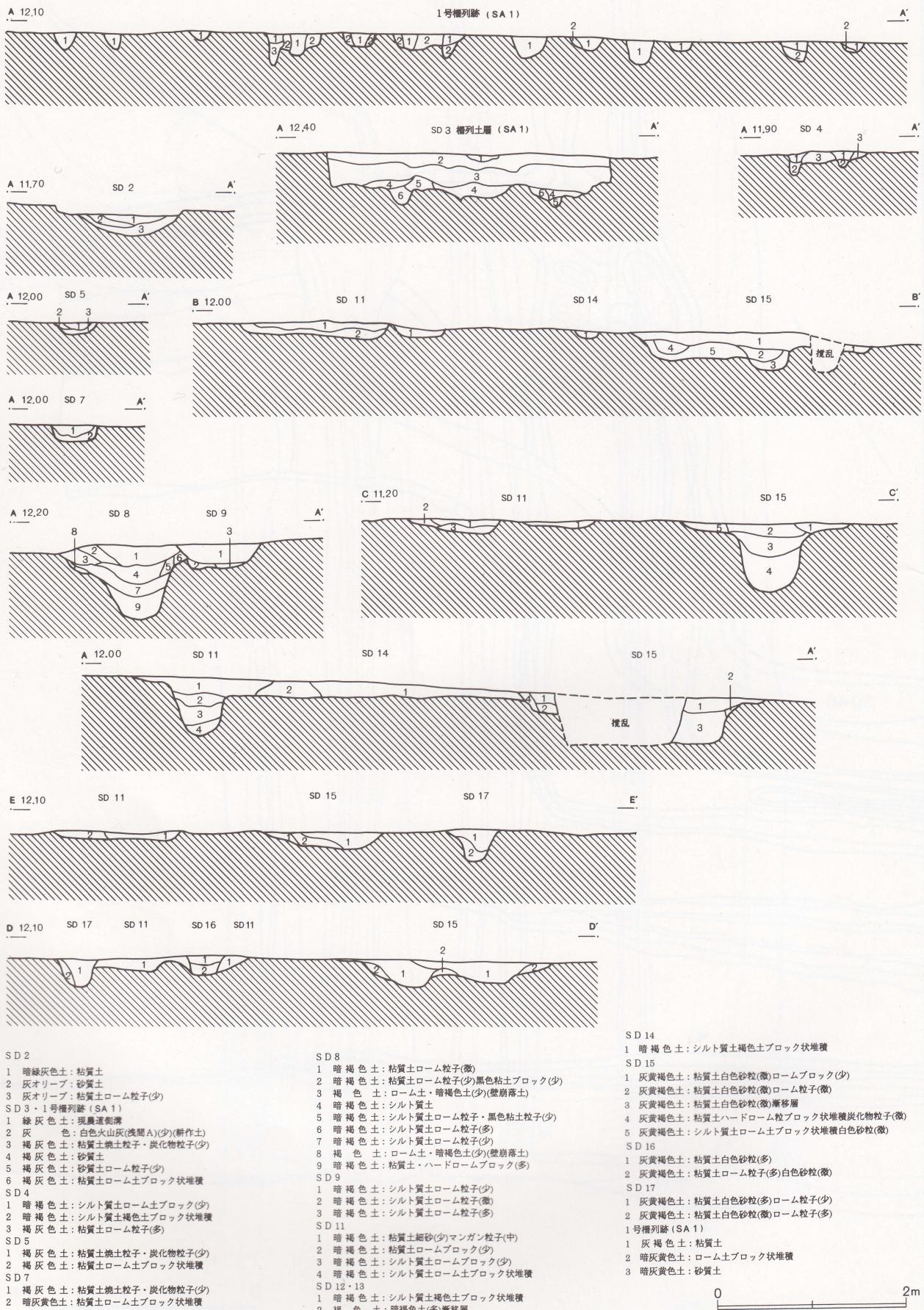
第73図 溝(10)



第74図 溝(II)



第75図 溝断面図(1)





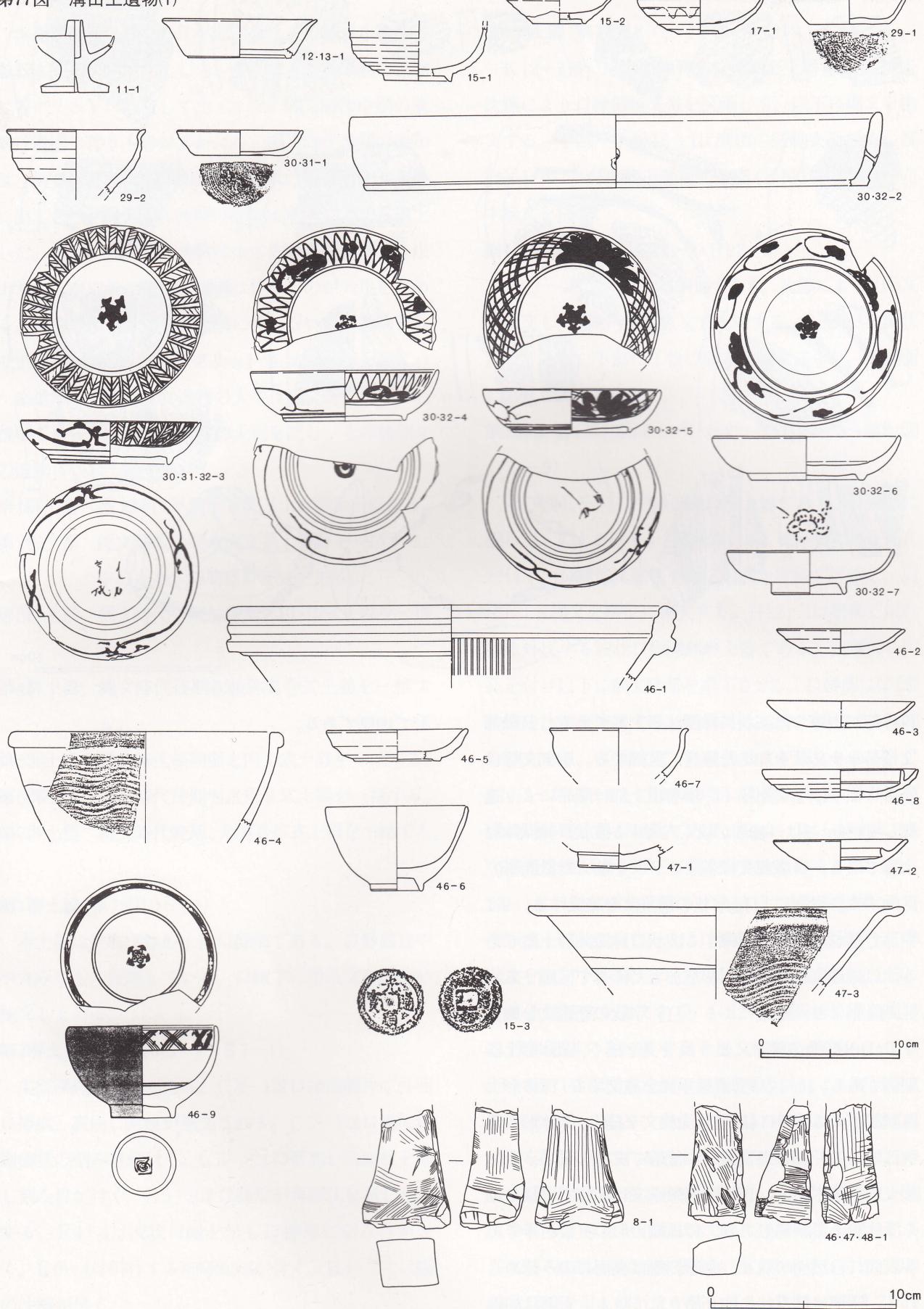
#### 柵列・溝出土遺物(第77・78図)

第77図11-1は陶器製の秉燭である。ロクロ成形で糸切底である。底部に穿孔があり、灯芯部が受皿より突出している。12・13-1は瀬戸美濃系高台付皿である。口唇部がやや外反する。16世紀後半に位置づけられる。15-1は陶器製の瀬戸美濃系腰錆碗である。ロクロ成形で鉄釉が掛かる。18世紀に位置づけられる。15-2は陶器製の瀬戸美濃系高台付小皿である。高台部無釉である。17世紀前半に位置づけられる。17-1は陶器製の瀬戸美濃系の高台付小皿である。凹高台を呈す。内面に三指が付く。17世紀前半に位置づけられる。29-1はかわらけである。ロクロ成形で糸切底である。29-2は陶器製の天目茶碗である。口唇部が外反する。17世紀代に位置づけられる。30・31-1はかわらけである。ロクロ成形で糸切底である。30・32-2は瓦質の焙烙である。板作り成形で側面に焼成後の穿孔が付く。30・31・32-3は磁器製の肥前系高台付皿である。高台裏に「大明年製」銘が付く。ロクロ成形で呉須による染付を施す。見込みに五弁花コンニヤク判を押す。内面矢羽根状文。18世紀代に位置づけられる。30・32-4は磁器製の肥前系高台付皿である。ロクロ成形で呉須による染付を施す。見込みに五弁花コンニヤク判を押す。内面矢波状文。18世紀代に位置づけられる。30・32-5は磁器製の肥前系高台付皿である。高台部凹高台で「大明年製」銘が付く。ロクロ成形で呉須による染付を施す。見込みに五弁花コンニヤク判を押す。内面格子に菊花文。18世紀代に位置づけられる。30・32-6は磁器製の肥前系高台付皿である。ロクロ成形で呉須による染付を施す。見込みに五弁花コンニヤク判を押す。外面無文。18世紀代に位置づけられる。30・32-7は陶器製の瀬戸美濃系摺絵皿である。ロクロ成形で型紙摺呉須絵により梅花文が付く。17世紀代に位置づけられる。46-1は陶器製の擂鉢である。ロクロ輪積成形で、擂目は1単位26mmの間に8本である。46-2は陶器製の志戸呂系灯火平皿である。ロクロ成形で糸切底である。焼締に鉄釉が掛かる。46-3は陶器製の志戸呂系灯火平皿である。ロクロ成形で糸切底である。焼締に鉄釉が掛かる。

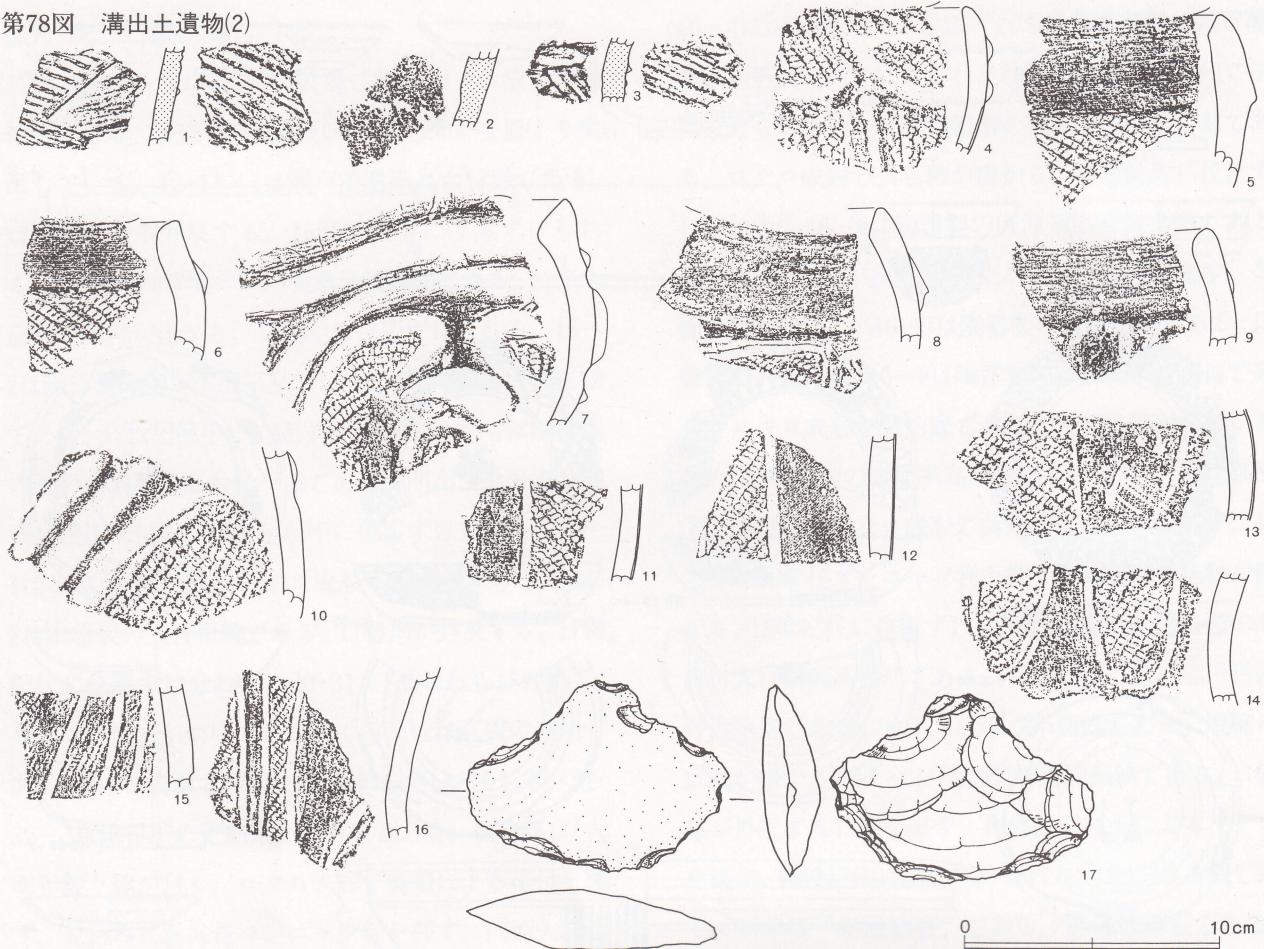
46-4は陶器製の唐津系鉢である。口唇部珠口状を呈す。内外面を白土によるハケ目を施す。18世紀代に位置づけられる。46-5は陶器製の信楽系高台付小皿である。ロクロ成形で長石釉が掛かる。17世紀代に位置づけられる。46-6は陶器製の唐津系高台付小碗である。ロクロ成形で、内外面を白土によるハケ目を施す。全面に釉が掛かる。46-7は陶器製の天目茶碗である。口唇部が外反する。46-8は陶器製の志戸呂系灯明皿である。ロクロ成形で糸切底である。焼締に鉄釉が掛かる。46-9は磁器製の肥前系高台付碗である。高台裏に渦福字銘が付く。ロクロ成形で呉須による染付を施す。見込みに五弁花コンニヤク判を押す。外面は青色釉が掛かる。18世紀代に位置づけられる。47-1は陶器製の高台付天目茶碗高台部である。47-2は陶器製の志戸呂系灯火平皿である。ロクロ成形で糸切底である。焼締に鉄釉が掛かる。47-3は陶器製の唐津系鉢である。口唇部が外反する口状を呈す。内外面を白土によるハケ目を施す。18世紀代に位置づけられる。15-3は古銭である。刻印は「光通順寶」である。8-1は砥石である。半分を欠損する。46・47・48-1は砥石である。半分を欠損する。

第78図は溝覆土に流入して出土した遺物である。1は縄文早期条痕文系土器胴部破片である。斜行する細隆起が認められる。胎土に少量の纖維を含む。2は擦痕が付く。胎土に少量の纖維を含む。3は縄文早期条痕文系土器胴部破片である。横走及び斜行する細隆起が認められる。胎土に少量の纖維を含む。4は胴部で括れ口縁部が内彎する波状口縁深鉢形土器である。口唇部にRL縄文が横位に施文される。口縁部文様帶は貼り付け隆帶及び篦描沈線により、楕円形区画文が描かれる。区画文下に磨消懸垂文が施文される。地文はRL縄文を縦位に施文する。また区画文内は横位に施文する。5は口縁部が緩く内彎する波状口縁深鉢形土器である。口縁部にナゾリを加え無文帶にする。以下に縄文を施文する。6は胴部で括れ口縁部が内彎する波状口縁深鉢形土器である。口縁部文様帶をナゾリを加えた微隆帶で区画する。区画文下に縄文を施文する。7は胴部で括れ

第77図 溝出土遺物(1)



第78図 溝出土遺物(2)



口縁部が内彎する波状口縁深鉢形土器である。口縁部文様帯をナゾリを加えた隆帯で区画する。胴部文様は隆帯により渦巻文を描く。渦巻頂部は隆帯により連結している。8は口縁部が緩く内彎する波状口縁深鉢形土器である。口縁部文様帯をナゾリを加えた微隆帯で区画する。以下に「匚」字状の懸垂文を施文する。9は胴部で括れ口縁部が内彎する波状口縁深鉢形土器である。口縁部文様帯をナゾリを加えた隆帯で区画する。区画隆帯より、隆帯による「匚」字状の懸垂文を施文する。10は2条の隆帯により渦巻文を描く、深鉢形土器胴部である。11・12は磨消懸垂文を施文する、深鉢形土器胴部である。13・14は波状沈線文を描く、深鉢形土器胴部である。15は地文縄文に沈線で文様を描く、深鉢形土器胴部である。16は磨消懸垂文に沈線で文様を描く深鉢形土器胴部である。17は横刃形の打製石斧である表面に自然面が残る。成形剝離は裏面にのみ認められる。頭部は摘み状に作り出されている。刃部は曲線

形で肉厚である。

## 5. 包含層・グリッド

本遺跡からは縄文時代早期撚糸文系土器から近世陶磁器までの遺物が出土している。縄文時代早期の遺物は各グリッドに散在して出土した。縄文時代中期の遺物は遺構に伴うものが多かった。縄文時代後期の遺物は、調査区北西部谷津部に形成された包含層より多量に出土した。縄文時代晚期の遺物は僅かに1点のみ出土した。古墳時代前期の遺物は全て方形周溝墓内より出土した。中近世の遺物は遺構に伴うものが大半を占める。本項では包含層及び遺構に伴わない出土遺物を取り上げる。(遺物NO.C5はグリッド名、表は表採を示す。)

本遺跡から出土した遺物の大半は縄文時代早期から後期であった。以下に分類の大別を記し、その後個々の遺物について述べていく。

第1群土器 縄文時代早期撚糸文系土器群を一括する。

第2群土器 縄文時代早期条痕文系土器群を一括する。  
中心となる時期は野島式である。

第3群土器 縄文時代中期加曾利E III・IV式土器を一括する。

第4群土器 縄文時代後期初頭称名寺式土器を一括する。

第5群土器 縄文時代後期堀之内1式土器を一括する。

第6群土器 縄文時代後期堀之内2式土器を一括する。

第7群土器 縄文時代晚期、大洞B C式土器を一括する。

### 第1群土器(第79図D 5-1)

本土器は尖底深鉢形土器口縁部である。口唇部はやや丸みをもち肥厚している。口縁下に撚糸文を縦位に施文している。

### 第2群土器(第79図C 3-1～G 7-1)

尖底深鉢形土器である。C 3-1は口縁部破片で外面に擦痕、裏面に条痕が施文される。C 5-1は口唇部に鋸歯状の刻み目が付く。C 5-2は口唇部が角頭状を呈し刻み目が付く。E 5-2は口唇部が角頭状を呈し肥厚する。E 4-1は波状口縁を呈し口唇部に刻み目が付く。E 6-4は斜行する細隆起線が付く。B 4-1には縦の沈線が付く。

### 第3群土器(第79図K 12-1～N 16-2)

K 12-1は口縁部が内彎する深鉢形土器である。横走沈線により口縁部無文帯を区画して、以下に縄文を施文する。T 21-1・N 15-1は磨消の区画文を描く。N 14-1・N 11-1は磨消懸垂文を描く。N 16-1・2は「W」字状文を描く。

### 第4群土器(第79図G 22-2・H 22-3)

G 22-2は深鉢形土器胴部である。沈線により区画文を施文し、区画内を列点文で充填する。H 22-3は環状把手である。下部に1状の横走沈線を巡らし、両側面に盲孔が付く。

### 第5群土器(第79図E 5-1・H 22-1・G 22-3～第81図G 22-9)

第79図E 5-1は平縁の深鉢形土器である。口唇部に摘み出しによる把手を1箇所設ける。把手部には貫通孔が付く。口縁部文様帯を幅広の横走沈線で区画し、以下にLR縄文を横位に施文する。H 22-1は胴部で括れ強く外反する波状口縁深鉢形土器である。波頂部に円孔を付け以下に刻文隆帯を垂下させる。口唇部には1条の横走沈線を施文する。括れ部には2条の横走する沈線を施文する。区画沈線下には弧状文が施文される。G 22-3～G 22-6までは口唇部に凹線文が施文される平縁の深鉢形土器口縁部である。G 22-7は口縁部に2条の横走沈線が巡り以下に縄文が施文される。第80図G 23-1は口唇部横走沈線下に連結して3条の沈線による懸垂文を描く。G 22-1は口唇部横走沈線下に「W」字状文を施文する。G 22-2は口唇部横走沈線下に沈線による連鎖状文を施文する。G 22-3は波状口縁を呈す。口唇部凹線文下に蕨手文を施文する。G 22-4・5・G 23-2は口唇部横走沈線下に複数の沈線による幾何学文を施文する。H 22-1～G 22-9は口縁部に丸棒状工具による押圧が施される深鉢形土器口縁部である。H 22-1には蕨手文が施文される。H 22-2は弧状沈線文が施文される。H 22-3は弧状沈線に幾何学文が配される。G 22-6は刻み目の付く沈線が施文される。G 22-9は波状口縁を呈し斜行文が描かれる。H 22-4～I 21-1

第79図 グリッド出土遺物(I)



第80図 グリッド出土遺物(2)



第81図 グリッド出土遺物(3)



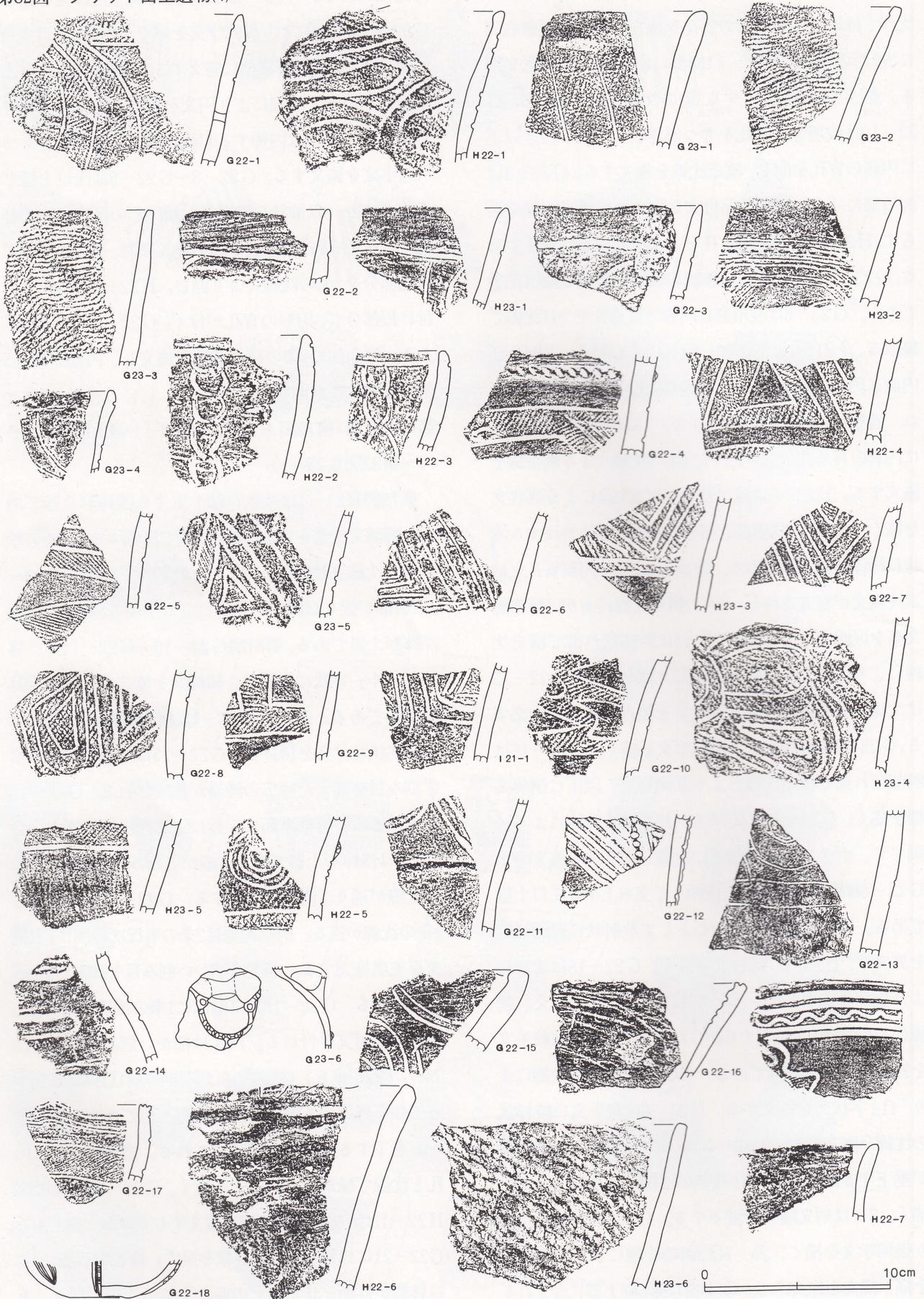
は把手である。H22-4は波頂部に円孔を付し、下部に沈線で縁取られた円形の盲孔を施文する。波頂部右側に2箇所の円孔を付す。口縁部に沿って沈線を施文する。また円孔から垂下する3条の沈線が施文される。G22-10は波頂部に円孔をもつ渦巻状の貼付が付き以下に円形の盲孔を配し、横走沈線を施文する。G23-4は波頂部に「8」字状の貼付文を施文し、横走沈線を巡らす。H23-1は円形の盲孔をもつ棒状の橋状把手である。G23-5は先端部に渦巻状の貼付を付ける橋状把手である。G23-6は波頂部に円形の貫通孔をつけ沈線で縁取る。I21-1は波頂部に冠状把手が付く。上面及び内面に円形の盲孔が付く。冠状部上面は沈線で縁取られ、渦巻状の貼付が付く。G22-12は内彎する口縁部に円形の貫通孔を付け以下に3条の沈線による懸垂線を施文する。H22-5は波頂部に4条の沈線による弧状文を描く。H22-6は胴部で括れ口縁部が強く外反する波状口縁深鉢形土器である。波頂部に2箇の円形盲孔を結ぶ沈線文が施文される。2条の横走沈線により口縁部無文帯を区画する。G22-13・14は胴部括れ部で横走沈線により区画して、以下に胴部文様を描く。G22-15は沈線により同心円文と弧状文を組み合わせて施文する。G23-7は沈線により幾何学文を描く。G22-16は胴部括れ部で横走沈線により区画して、以下に胴部文様を描く。G22-17は胴部括れ部で横走沈線により区画して、ボタン状貼付文下に沈線で蕨手文を施文する。G23-8は胴部で屈曲して内傾して立ち上がる注口土器である。円形の貫通孔を中心として放射状に区画沈線を施文し、区画内に蛇行文を描く。G22-18は沈線により幾何学文を描く。第81図H22-1は地文縄文に沈線による懸垂線を施文する。G22-1・G23-1は蕨手文を施文する深鉢胴部である。G23-2は2条の沈線により「匚」字状文を施文する。G23-3は蕨手文に綾杉状の沈線を施文する。G23-4は刺突列を加えた区画沈線が垂下する。G22-2・3は複数の沈線により幾何学文を描く。3には刻文隆帯が垂下する。G22-4は沈線により幾何学文を描く。表-1は2条の沈線により三角形文を描き縄文を施文する。本土器は第6群土器に含まれる

可能性がある。G23-5は地文縄文に三角形文を描く。G22-5は沈線により幾何学文を描く。G22-6は多条沈線により縦位及び横位に施文する。H23-1は注口土器胴部である。沈線により円文を中心としたモチーフを描く。G22-7は内彎する口縁部無文帯に円孔をもつ「C」字文を施文する。G22-8～G22-9は注口土器である。G22-8は波状口縁を呈し楕円形の区画沈線文を描く。H22-2は橋状把手である。H22-3は注口部で円孔部分を3条の沈線により囲む。H22-4は橋状把手付け根部分で、円形の盲孔が付く。G22-9は注口部である。屈曲部に2条の横走沈線を施文し、円孔部分を3条の沈線により囲む。

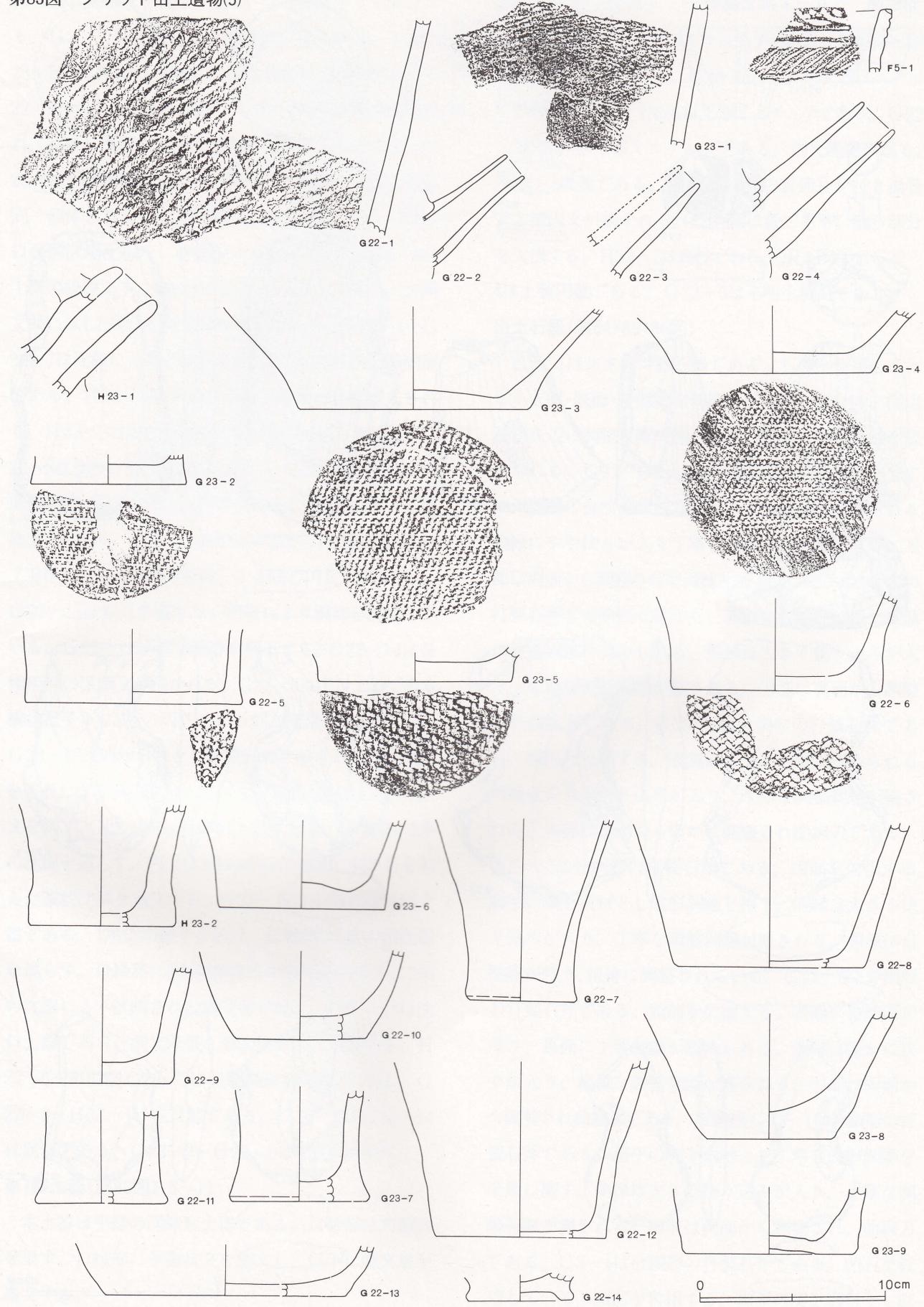
#### 第6群 土器(第79図 H21-1・G23-1・第81図 G22-10～第83図 G23-1)

第79図H21-1は波状口縁を呈する深鉢形土器である。胴部文様帯を2条の横走沈線で区画する。1条の垂下する沈線を対称にして、弧状沈線文を描く。G23-1は胴部が張り口縁部が垂直に立ち上がる、無文の粗製深鉢形土器である。第81図G22-10～G22-14は口唇部が「く」字状に内屈し、紐線文を施文する平縁深鉢形土器である。表-2・G22-13は紐線文を2条施文し「8」字状貼付文を付ける。G22-15は口唇部が内屈せず刻み目を加えた幅広の隆帯が施文される。G22-16は内屈する口唇部上面に工具による押圧列を施す。G23-6は浅鉢形土器である。細かい刻み目を加えた2条の沈線が巡り、内文を構成する。G22-17は口端部に1条の沈線が巡る。胴部文様は2条の平行沈線間にLR縄文を充填施文する。内文は細かい刻み目を加えた4条の沈線が巡る。G22-18は口端部に1条の沈線が巡り「S」字状の貼付文を付ける。内文は細かい刻み目を加えた3条の沈線が巡る。G22-19は胴部で括れ口縁部に向かって強く外反する波状口縁深鉢形土器である。波頂部から垂下する刻文隆帯が施文される。波頂部内面に円孔と沈線で縁取りした内文が付く。G22-20～第82図H22-1は地文縄文に沈線で施文する深鉢形土器である。G22-21は口唇部が外削ぎ状を呈す。第82図G22-1は口唇部が外削ぎ状を呈し内面に1条の沈線が巡る。文

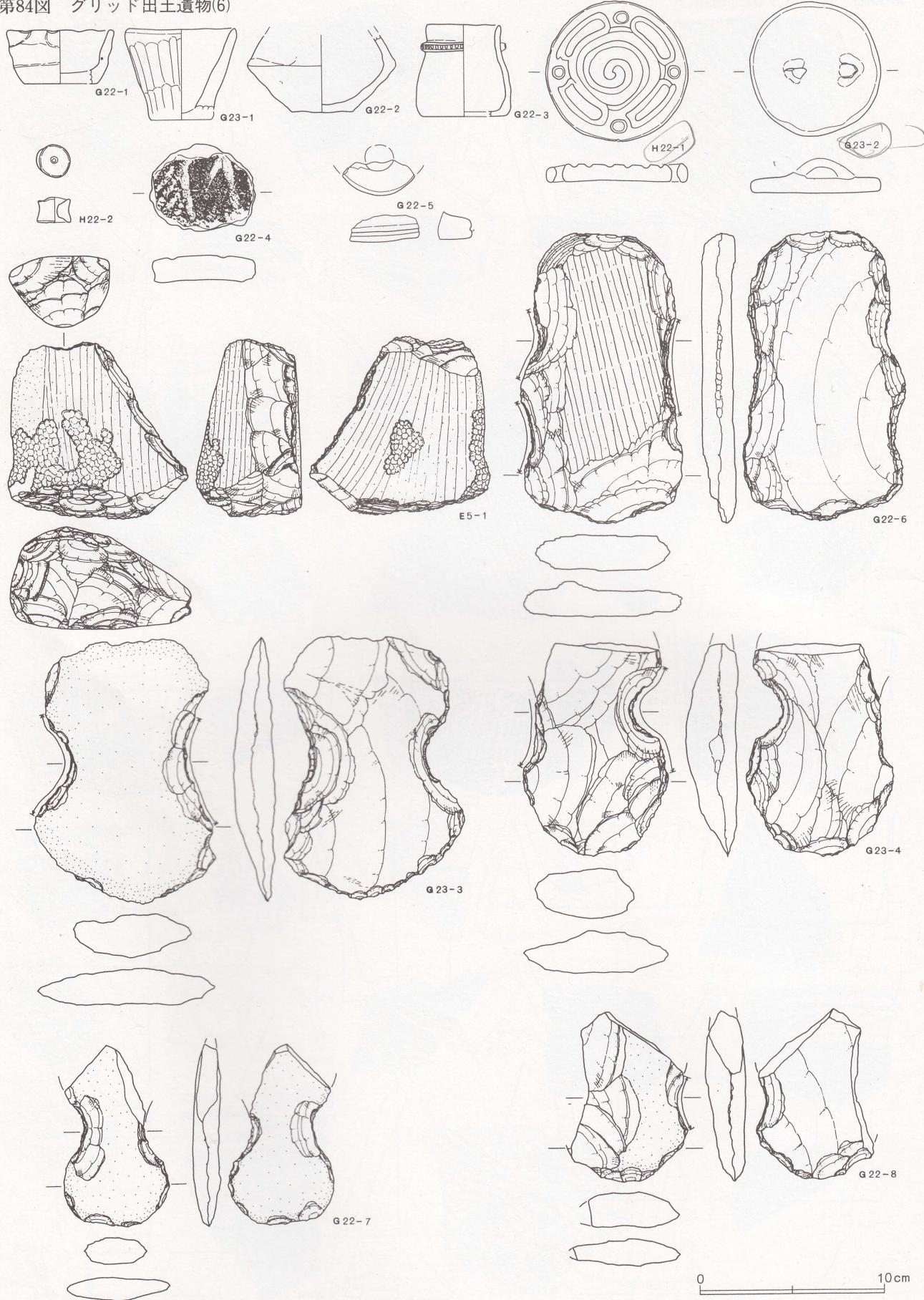
第82図 グリッド出土遺物(4)



第83図 グリッド出土遺物(5)



第84図 グリッド出土遺物(6)



様は弧状沈線文を描く。H22-1は幾何学文を施文する。G23-1は沈線による懸垂線が施文されてる。G23-2・3は縄文のみ施文される深鉢形土器である。G22-2～G22-3は口縁部に1条の横走沈線が施文され、以下に沈線文が施文される深鉢形土器である。H23-2は多条沈線により施文されている。H22-2・3は同一個体と考えられる深鉢形土器口縁部である。1条の口縁部区画沈線下に連鎖状文を施文する。G22-4は1条の紐線文下に2条の沈線により区画文を描く。区画文間にはLR縄文が充填施文されている。H22-4～G22-7は沈線により三角形文が描かれる深鉢形土器胴部である。H22-4は区画沈線間に縄文が充填施文される。H23-3は2条の胴部区画沈線に連結している。G22-8は幾何学形の区画文を描く。G22-9は枠状文を施文する。G22-10は幾何学文内をLR縄文により充填施文している。H22-5は刺突が加えられた円形の貼付文を中心として3条の沈線による同心円文が描かれる。G22-11は刻みを施さない隆帶により胴部を区画している。G22-12は刻文隆帶が垂下する。G22-14は長楕円形の区画文が描かれる。G23-6は注口土器である。橋状把手下に2箇の円孔をもつ刻文隆帶が施文される。G22-15は波状口縁を呈す浅鉢形土器である。波頂部を工具により押圧を加えている。2条の沈線により弧状文を描く。G22-16は浅鉢形土器である。口端部に1条の沈線を巡らす。内文は3条の平行沈線間に刻み目をえた波状沈線を施文する。G22-17は小型の浅鉢形土器である。1単位の把手を設け、口端部に2条の細沈線を巡らす。口縁部に2条の細沈線を施文し、以下に2条の沈線により区画された縄文帯を描く。G22-18は注口土器である。刻文隆帶と弧状沈線文を配置する。H22-6～第83図G23-1は粗製深鉢形土器である。G22-2～H23-1は注口部である。G23-3～G22-14は底部である。G23-2～G22-6は網代痕が付く。

#### 第7群土器(第83図F5-1)

本土器は平縁の深鉢形土器である。口唇部は角頭状を呈す。口縁部に羊歯状文を施文し、以下に縄文帯を施文する。

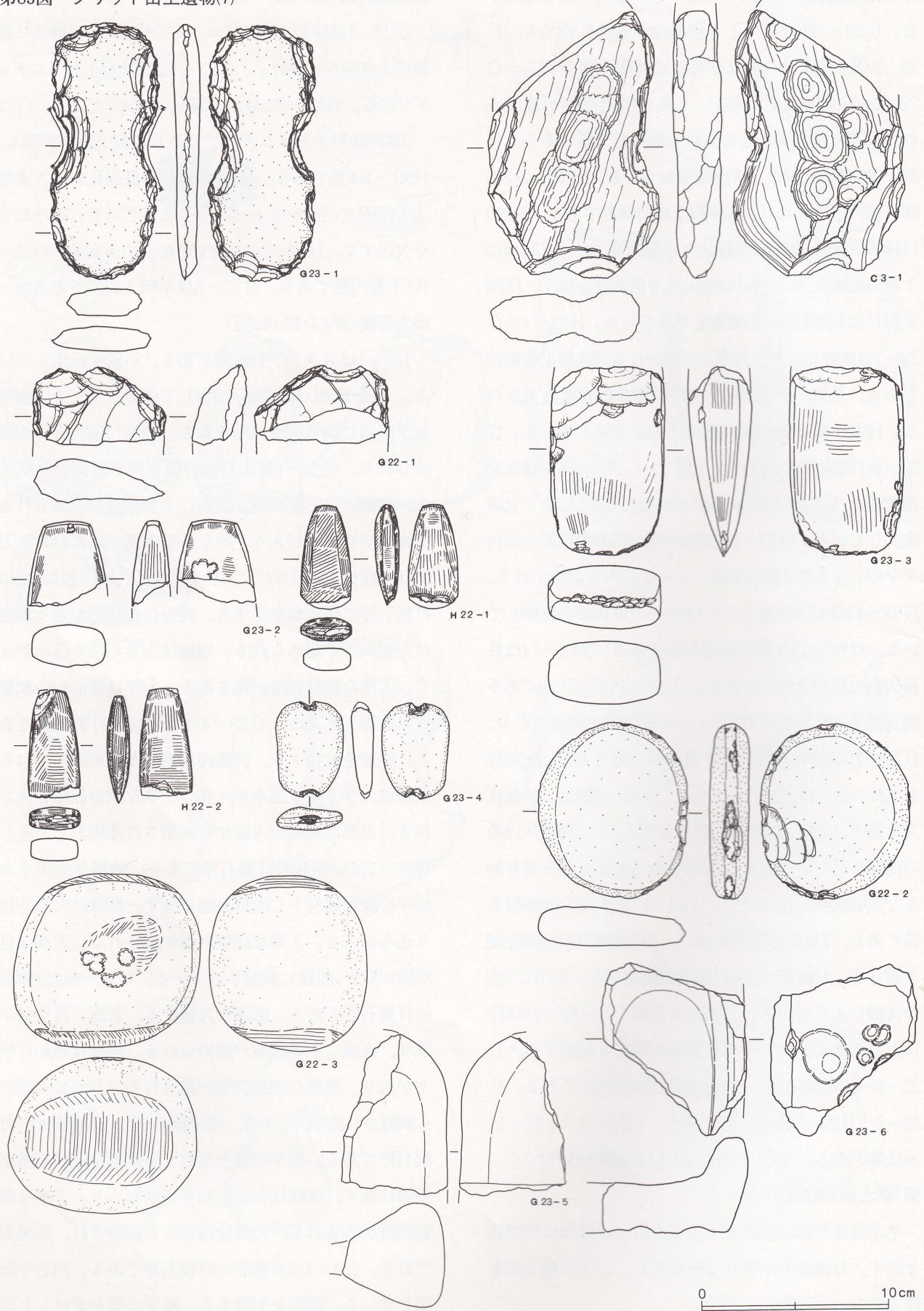
#### 出土土製品(第84図)

G22-1は鉢型土器のミニチュアである。口唇部に指頭による押さえが付く。G23-1は深鉢形土器ミニチュアである。G22-2は注口土器ミニチュアである。G22-3は深鉢形土器ミニチュアである。刻文隆帶が巡る。H22-1は蓋である。4箇所に円形の貫通孔が付き渦巻文と楕円文が描かれる。G23-2は蓋である。摘み部分を欠損する。H22-2は耳栓である。円孔が付く。G22-4は土製円盤である。G22-5は不明土製品である。

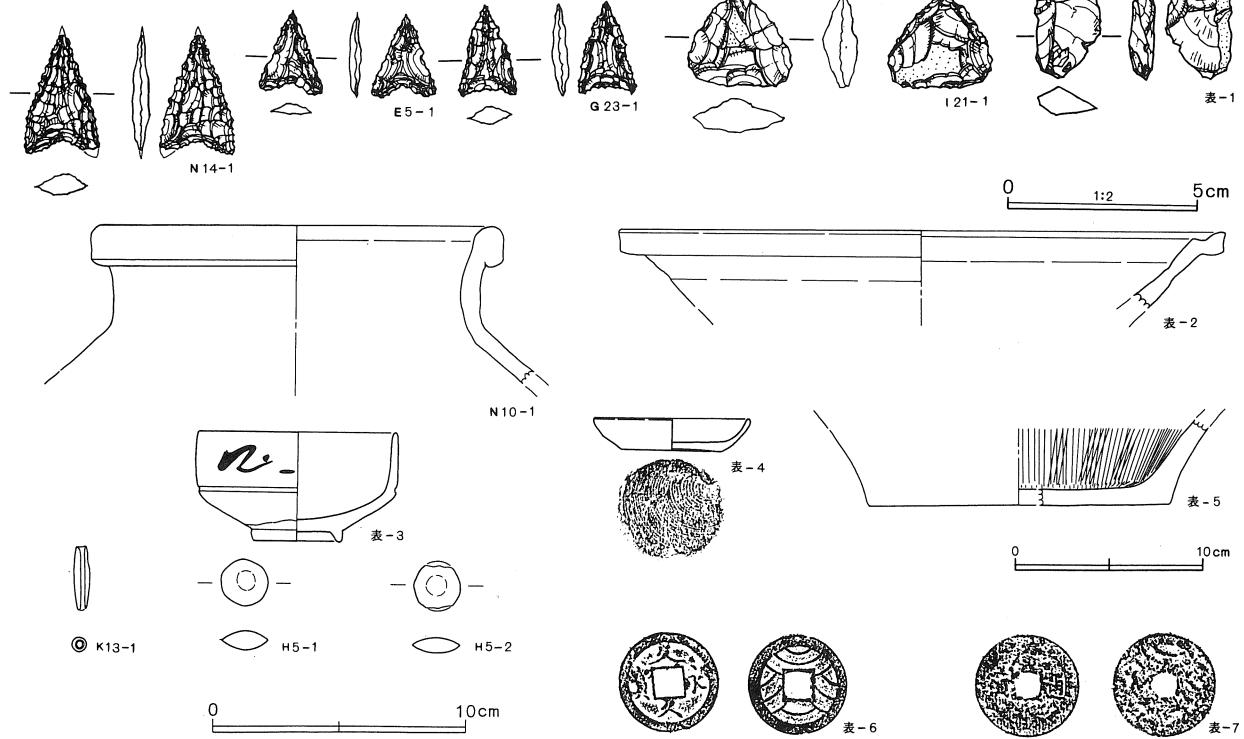
#### 出土石器(第84・85・86図)

E5-1はスタンプ形石器である。石皿を転用している。上面・底面・片側縁を切断して成形している。側辺及び底辺に調整剝離が施される。側面に敲打痕跡が認められる。G22-6は大型の打製石斧で短冊形を呈する。表面に自然面が残り裏面に主要剝離が認められる。側縁にやや抉りが入り丁寧な調整剝離が施される。刃部は両面から調整され片刃状を呈す。G23-3は大型の打製石斧で分銅形を呈する。表面に自然面が残り裏面に主要剝離が認められる。側縁は大きく抉り込みが入り、丁寧な調整剝離が施される。刃部は裏面から調整され曲線刃である。G23-4は分銅形の打製石斧である。頭部を欠損する。表裏面に主要剝離が認められる。側縁は大きく抉り込みが入り、丁寧な調整剝離が施される。刃部は裏面から僅かに調整され曲線刃である。G22-7は分銅形の打製石斧である。頭部を欠損する。扁平の礫を素材とし成形剝離を施す。側縁は大きく抉り込みが入り、丁寧な調整剝離が施される。刃部は自然面が残り、粗雑に調整されている。G22-8は分銅形の打製石斧である。頭部を欠損する。表面に自然面が残り、裏面に主要剝離が認められる。側縁は僅かに抉りが入り、粗雑な調整剝離が施される。刃部は両面から調整され曲線刃である。第85図G23-1は分銅形の打製石斧である。扁平の礫を素材とし丁寧な成形剝離を全周に施す。側縁は大きく抉り込みが入り、丁寧な調整剝離が施される。刃部は両面から調整され、曲線刃である。C3-1は分銅形の打製石斧である。凹石を転用している。頭部を欠損する。扁平の礫を素材とし成

第85図 グリッド出土遺物(7)



第86図 グリッド出土遺物(8)



形剥離を施す。側縁は僅かに抉りが入り、粗雑な調整剥離が施される。刃部は成形剥離のみで自然面が残り肉厚である。G22-1は打製石斧頭部である。両面に主要剥離が施される。G23-2は定角式の磨製石斧である。刃部を欠損する。頭部は湾曲する。器面に成形時の線条痕が残る。G23-3は磨製石斧で定角式に近いものである。基部を欠損するが再利用されている。刃部は蛤刃を呈し曲線刃である。器面に成形時の線条痕が残る。H22-1は定角式磨製石斧である。刃部の一部を欠損する。刃部は蛤刃を呈し曲線刃である。基部表裏面に弱い稜をもつ。成形時の線条痕が残る。H22-2は定角式磨製石斧である。刃部の一部を欠損する。刃部は蛤刃を呈し直線刃である。成形時の線条痕が残る。G23-4は切目石錐である。G22-2は磨石である。側縁に敲打によると考えられる剥離が認められる。G22-3は磨石である。上下両面に使用時の線条痕が認められる。部分的に敲打痕跡が付く。G23-5は石皿である。大部分を欠損している。G23-6は石皿である。皿部が丁寧に作り出されている。裏面を凹石として使用している。第86図N14-1は凹基無茎式石錐である。両面か

らの交互剥離により二等辺三角形を作り出している。刃部は鋸歯状を呈す。抉り込みは浅い。E5-1は凹基無茎式石錐である。両面からの交互剥離により二等辺三角形を作り出している。抉り込みは浅い。G23-1は凹基無茎式石錐である。両面からの交互剥離により二等辺三角形を作り出している。抉り込みは浅い。I21-1は円基錐である。両面からの粗雑な剥離により三角形を作り出している。表-1は剥片である。

#### その他の出土遺物

N10-1は常滑産の甕である。折り返し口縁を付ける。表-2は陶器製の鉢である。口唇部が外反して段を付ける。表-3は陶器製の摺絵煎じ碗である。表-4はかわらけである。ロクロ成形で糸切底である。表-5は陶器製の擂鉢である。K13-1は環状土錐である。H5-1・2は土製の碁石である。表-6は古銭である。刻印は「文久永寶」である。表-7は古銭である。刻印は「寛永通寶」である。

第8表 石器一覧表(I)

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
84- 6	G-22	打製石斧	15.7	7.9	1.7	379.3	片岩	包含層
84- 3	G-23	打製石斧	14.2	9.5	2.3	362.0	ホルンフェルス	包含層
84- 4	G-23	打製石斧	11.2	7.9	2.7	283.2	ホルンフェルス	包含層 基部欠
85- 1	G-23	打製石斧	13.6	5.7	1.4	197.8	砂岩	包含層
84- 7	G-22	打製石斧	9.6	5.7	1.4	87.9	粘板岩	包含層 基部欠
84- 8	G-22	打製石斧	9.0	5.9	2.1	127.3	ホルンフェルス	包含層 一部欠
85- 1	G-22	打製石斧	4.6	7.0	2.1	69.4	硬質砂岩	包含層 刃部以外欠
9- 1	SJ-1	打製石斧	10.1	6.6	1.6	102.7	ホルンフェルス	
9- 2	SJ-1	打製石斧	10.1	5.0	1.5	97.6	緑泥片岩	
9- 3	SJ-1	打製石斧	9.5	5.5	2.2	161.6	硬質砂岩	
33-34	SJ-12	打製石斧	5.6	5.6	2.4	97.6	粘板岩	
85- 1	C-3	打製石斧	14.2	8.3	2.6	440.7	絹雲母片岩	部分欠
77-18	SD-1	打製石斧	7.2	10.0	2.2	119.9	安山岩	
41-14	SR-3	局部磨製石斧	9.3	5.9	1.7	141.4	ホルンフェルス	刃部欠
85- 3	G-23	磨製石斧	10.2	6.3	3.4	336.3	砂岩	基部欠 包含層
85- 2	G-23	磨製石斧	4.6	4.1	2.5	60.1	硬質砂岩	包含層
85- 2	H-22	磨製石斧	5.8	2.8	1.3	33.5	蛇紋岩	包含層
85- 1	H-22	磨製石斧	5.3	2.8	1.3	32.2	蛇紋岩	包含層
85- 4	G-23	石錐	5.1	3.7	1.2	31.1	粘板岩	包含層
86- 1	N-14	石鏃	2.8	1.9	0.6	2.3	チャート	
86- 1	E-5	石鏃	1.9	1.6	0.3	0.7	黒耀石	
86- 1	G-23	石鏃	2.2	1.5	0.5	1.1	黒耀石	包含層
59- 1	SK-59	石鏃	2.0	2.1	0.3	1.3	ホルンフェルス	包含層
86- 1	I-21	石鏃	2.2	2.7	0.8	4.9	チャート	包含層
86- 1	表採	剥片	2.3	1.5	0.6	2.9	黒耀石	
9-10	SJ-1	剥片	2.9	2.6	0.6	4.1	黒耀石	
9- 9	SJ-1	剥片	4.5	2.5	0.9	10.6	チャート	
41-16	SR-2	剥片	2.6	1.4	0.9	3.6	黒耀石	
9- 4	SJ-1	凹石	11.1	7.0	3.4	352.9	凝灰岩	
9- 5	SJ-1	凹石	11.5	7.6	3.5	390.5	凝灰岩	部分欠
59- 2	SK-174	凹石	5.2	6.2	3.0	152.3	凝灰岩	部分欠
85- 2	G-22	磨石	9.1	8.0	2.0	199.8	凝灰岩	包含層
9- 6	SJ-1	磨石	10.0	4.3	2.1	107.0	凝灰岩	部分欠
9- 8	SJ-1	磨石	5.8	3.9	3.6	86.7	凝灰岩	
9- 7	SJ-1	磨石	8.8	6.6	5.0	195.3	凝灰岩	部分欠
41-15	SR-1	磨石	12.9	8.9	4.0	681.5	粘板岩	
85- 3	G-22	敲石	9.2	9.8	8.3	1,213.3	凝灰岩	包含層
85- 6	G-23	石皿	7.8	7.7	2.9	244.5	凝灰岩	部分欠 四有り包含層
85- 5	G-23	石皿	8.2	5.4	5.4	350.5	凝灰岩	部分欠 包含層
33-35	SJ-12	石皿	20.6	7.2	7.7	554.0	凝灰岩	部分欠
59- 3	SK-207	石皿	5.1	3.1	5.2	109.8	凝灰岩	部分欠
84- 1	E-5	スタンプ形石器	9.5	9.3	5.3	616.6	硬質砂岩	石皿転用
41-17	SR-1	砥石	4.0	3.2	3.3	51.4	凝灰岩	部分欠
76- 1	SD-11	砥石	6.0	4.5	3.0	109.8	凝灰岩	部分欠
76- 1	SD-47	砥石	6.3	3.0	2.8	65.6	凝灰岩	部分欠

第9表 遺構新旧对照表(1)

報告番号	発掘番号	報告番号	発掘番号	報告番号	発掘番号
1号土壙	63号土壙	53号土壙	211号土壙	105号土壙	23号土壙
2号土壙	66号土壙	54号土壙	202号土壙	106号土壙	25号土壙
3号土壙	67号土壙	55号土壙	194号土壙	107号土壙	27号土壙
4号土壙	58号土壙	56号土壙	195号土壙	108号土壙	28号土壙
5号土壙	57号土壙	57号土壙	197号土壙	109号土壙	94号土壙
6号土壙	61号土壙	58号土壙	196号土壙	110号土壙	99号土壙
7号土壙	62号土壙	59号土壙	199号土壙	111号土壙	98号土壙
8号土壙	64号土壙	60号土壙	198号土壙	112号土壙	110号土壙
9号土壙	68号土壙	61号土壙	200号土壙	113号土壙	113号土壙
10号土壙	65号土壙	62号土壙	201号土壙	114号土壙	107号土壙
11号土壙	71号土壙	63号土壙	3号土壙	115号土壙	106号土壙
12号土壙	56号土壙	64号土壙	2号土壙	116号土壙	104号土壙
13号土壙	59号土壙	65号土壙	32号土壙	117号土壙	155号土壙
14号土壙	60号土壙	66号土壙	5号土壙	118号土壙	103号土壙
15号土壙	43号土壙	67号土壙	72号土壙	119号土壙	105号土壙
16号土壙	44号土壙	68号土壙	1号土壙	120号土壙	118号土壙
17号土壙	69号土壙	69号土壙	30号土壙	121号土壙	144号土壙
18号土壙	70号土壙	70号土壙	31号土壙	122号土壙	188号土壙
19号土壙	48号土壙	71号土壙	307号土壙	123号土壙	148号土壙
20号土壙	53号土壙	72号土壙	308号土壙	124号土壙	172号土壙
21号土壙	49号土壙	73号土壙	9号土壙	125号土壙	173号土壙
22号土壙	52号土壙	74号土壙	4号土壙	126号土壙	24号土壙
23号土壙	51号土壙	75号土壙	29号土壙	127号土壙	26号土壙
24号土壙	55号土壙	76号土壙	7号土壙	128号土壙	93号土壙
25号土壙	54号土壙	77号土壙	6号土壙	129号土壙	92号土壙
26号土壙	42号土壙	78号土壙	8号土壙	130号土壙	91号土壙
27号土壙	217号土壙	79号土壙	74号土壙	131号土壙	104号土壙
28号土壙	215号土壙	80号土壙	156号土壙	132号土壙	102号土壙
29号土壙	216号土壙	81号土壙	10号土壙	133号土壙	101号土壙
30号土壙	47号土壙	82号土壙	11号土壙	134号土壙	123号土壙
31号土壙	46号土壙	83号土壙	12号土壙	135号土壙	145号土壙
32号土壙	45号土壙	84号土壙	14号土壙	136号土壙	142号土壙
33号土壙	50号土壙	85号土壙	13号土壙	137号土壙	143号土壙
34号土壙	41号土壙	86号土壙	73号土壙	138号土壙	139号土壙
35号土壙	35号土壙	87号土壙	15号土壙	139号土壙	140号土壙
36号土壙	38号土壙	88号土壙	16号土壙	140号土壙	170号土壙
37号土壙	39号土壙	89号土壙	150号土壙	141号土壙	171号土壙
38号土壙	40号土壙	90号土壙	109号土壙	142号土壙	169号土壙
39号土壙	37号土壙	91号土壙	20号土壙	143号土壙	177号土壙
40号土壙	208号土壙	92号土壙	21号土壙	144号土壙	186号土壙
41号土壙	36号土壙	93号土壙	17号土壙	145号土壙	86号土壙
42号土壙	34号土壙	94号土壙	18号土壙	146号土壙	90号土壙
43号土壙	223号土壙	95号土壙	22号土壙	147号土壙	87号土壙
44号土壙	33号土壙	96号土壙	19号土壙	148号土壙	88号土壙
45号土壙	219号土壙	97号土壙	95号土壙	149号土壙	100号土壙
46号土壙	203号土壙	98号土壙	96号土壙	150号土壙	121号土壙
47号土壙	220号土壙	99号土壙	97号土壙	151号土壙	122号土壙
48号土壙	221号土壙	100号土壙	114号土壙	152号土壙	135号土壙
49号土壙	222号土壙	101号土壙	108号土壙	153号土壙	134号土壙
50号土壙	205号土壙	102号土壙	119号土壙	154号土壙	136号土壙
51号土壙	204号土壙	103号土壙	120号土壙	155号土壙	138号土壙
52号土壙	193号土壙	104号土壙	149号土壙	156号土壙	168号土壙

第10表 遺構新旧対照表(2)

報告番号	発掘番号	報告番号	発掘番号	報告番号	発掘番号
157号土壙	167号土壙	209号土壙	272号土壙	261号土壙	305号土壙
158号土壙	178号土壙	210号土壙	273号土壙	262号土壙	225号土壙
159号土壙	77号土壙	211号土壙	274号土壙	263号土壙	303号土壙
160号土壙	83号土壙	212号土壙	292号土壙	264号土壙	253号土壙
161号土壙	82号土壙	213号土壙	290号土壙	265号土壙	250号土壙
162号土壙	85号土壙	214号土壙	291号土壙	266号土壙	252号土壙
163号土壙	89号土壙	215号土壙	293号土壙	267号土壙	251号土壙
164号土壙	116号土壙	216号土壙	294号土壙	268号土壙	249号土壙
165号土壙	117号土壙	217号土壙	234・240号土壙	269号土壙	257号土壙
166号土壙	125号土壙	218号土壙	237号土壙	270号土壙	246B号土壙
167号土壙	132号土壙	219号土壙	236号土壙	271号土壙	246A号土壙
168号土壙	127号土壙	220号土壙	239号土壙	272号土壙	246C号土壙
169号土壙	131号土壙	221号土壙	270号土壙	273号土壙	254号土壙
170号土壙	133号土壙	222号土壙	261号土壙	274号土壙	255号土壙
171号土壙	166号土壙	223号土壙	262号土壙	275号土壙	248号土壙
172号土壙	165号土壙	224号土壙	263号土壙	276号土壙	247号土壙
173号土壙	187号土壙	225号土壙	264号土壙	277号土壙	230号土壙
174号土壙	182号土壙	226号土壙	265号土壙	278号土壙	256号土壙
175号土壙	75号土壙	227号土壙	267号土壙	279号土壙	243号土壙
176号土壙	76号土壙	228号土壙	268号土壙	280号土壙	245号土壙
177号土壙	78号土壙	229号土壙	260号土壙	281号土壙	244号土壙
178号土壙	84号土壙	230号土壙	266号土壙	6号住居跡	146号土壙
179号土壙	115号土壙	231号土壙	258号土壙	6号住居跡	147号土壙
180号土壙	111号土壙	232号土壙	259号土壙	8号住居跡	151号土壙
181号土壙	153号土壙	233号土壙	269号土壙	8号住居跡	152号土壙
182号土壙	126号土壙	234号土壙	278号土壙	1号溝	11号溝
183号土壙	128号土壙	235号土壙	276号土壙	2号溝	34号溝
184号土壙	129号土壙	236号土壙	275号土壙	3号溝	31号溝
185号土壙	130号土壙	237号土壙	296号土壙	4号溝	30号溝
186号土壙	161号土壙	238号土壙	256号土壙	5号溝	32号溝
187号土壙	163号土壙	239号土壙	285号土壙	6号溝	33号溝
188号土壙	164号土壙	240号土壙	286号土壙	7号溝	29号溝
189号土壙	175・176号土壙	241号土壙	295号土壙	8号溝	1号溝
190号土壙	181号土壙	242号土壙	277号土壙	9号溝	2号溝
191号土壙	124号土壙	243号土壙	279号土壙	10号溝	3号溝
192号土壙	157号土壙	244号土壙	227号土壙	11号溝	4号溝
193号土壙	158号土壙	245号土壙	SJ-10内土壙	12号溝	5号溝
194号土壙	159号土壙	246号土壙	238号土壙	13号溝	6号溝
195号土壙	160号土壙	247号土壙	297号土壙	14号溝	7号溝
196号土壙	179号土壙	248号土壙	299号土壙	15号溝	8号溝
197号土壙	183号土壙	249号土壙	280号土壙	16号溝	9号溝
198号土壙	192号土壙	250号土壙	281号土壙	17号溝	10号溝
199号土壙	185号土壙	251号土壙	287号土壙	18号溝	12号溝
200号土壙	80号土壙	252号土壙	288号土壙	19号溝	13号溝
201号土壙	174号土壙	253号土壙	283号土壙	20号溝	14号溝
202号土壙	180号土壙	254号土壙	284号土壙	21号溝	15号溝
203号土壙	190号土壙	255号土壙	289号土壙	22号溝	16号溝
204号土壙	191号土壙	256号土壙	226号土壙	23号溝	17号溝
205号土壙	242号土壙	257号土壙	298号土壙	24号溝	18号溝
206号土壙	233号土壙	258号土壙	300号土壙	25号溝	19号溝
207号土壙	235号土壙	259号土壙	302号土壙	26号溝	20号溝
208号土壙	271号土壙	260号土壙	304号土壙	27号溝	21号溝

第11表 遺構新旧対照表(3)

報告番号	発掘番号	報告番号	発掘番号	報告番号	発掘番号
28号溝	22号溝	36号溝	44号溝	43号溝	35号溝
29号溝	23号溝	37号溝	43号溝	44号溝	36号溝
30号溝	24号溝	38号溝	42号溝	45号溝	37号溝
31号溝	25号溝	39号溝	40号溝	46号溝	46号溝
32号溝	26号溝	40号溝	39号溝	47号溝	47号溝
33号溝	27号溝	41号溝	41号溝	48号溝	48号溝
34号溝	28号溝	42号溝	38号溝	49号溝	49号溝
35号溝	45号溝				

## V 結語

### 修理山遺跡における縄文時代中期後半から後期前葉にかけての変遷について

修理山遺跡の形成期は第II章において記述したように、縄文時代早期撚糸文期に始まる。しかし、本遺跡において主体的に構成された時期とは認められない。そこで、本章では主体的に遺跡が構成される縄文時代中期後半(加曽利E III式)及び、後期前葉(堀之内2式)を中心として、その変遷を述べたい。なお、各時期(段階)の土器変遷については、変遷図(1)・(2)を基に記述する。また各段階における型式編年については、縄文時代中期後半は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団紀要・1982に準じ、後期前葉については阿部氏(1987)、石井氏(1984)、今橋氏(1980)、小川氏(1984)、柳澤氏(1994)、領塚氏(1992)の諸論文を参考とした。

第1期(変遷図(1)-1)は埼玉編年第XI期に該当し、概ね加曽利E II式に相当する。本遺跡における集落の開始期である。第2号住居跡出土炉体土器は、口縁部文様帶が隆帯による渦巻文で、連弧状に構成していることから、在地の文様構成を基調としながら、東海地方(呪畠系)の影響を受けていると考えられる。第7号住居跡出土土器も2条の沈線による懸垂文を施文し、本段階に位置付けられるものである。

第2期(変遷図(1)-2)は埼玉編年第XIII~XIV期に該当し、概ね加曽利E III式新段階からE IV式段階に相当する。第XIIIと第XIV期を明確に区分し得なかった理由は、各住居跡一括遺物に両期にまたがる資料が出土したためによる。そこで、変遷図第3期との境界を点線により区分した。第11号住居跡出土資料は、概ねXIII期に納まる資料である。ただし、埋甕に用いられた深鉢(第25図1)は、渦巻文が縦位に懸垂文化していることから、東北地方(大木9式新段階)の影響を受けていると考えられる。本例に類似する資料は大宮台地では見当たらず、茨城県南三島遺跡6・7区第34号住居跡例、福島県郡山市谷地遺跡2号炉跡例などが、器形を異にして認められる。

第1号住居跡出土資料は、第XIII~XIV期にかかると考え

られる資料である。本資料は調査所見に従えば、一括資料として取り扱われる。このうち炉体土器は2条の隆帯に沈線による縁取りを加えた、渦巻文系列の資料である。また、埋甕については2条の隆帯にナゾリを加えた「匂」字状の懸垂文を施文する資料である。本資料はやや新しい施文技法をとるもの、これに第7図9の口縁部区画文を残す、最終段階の資料(茨城県大谷津A遺跡第13号住居跡出土例に類似する、東関東系土器)を加えた資料が第XIII期に該当する。これに対し第7図1・2・5・6の資料は波状文の間隔の狭まり、隆帯の描出技法、沈線による「J」字状の渦巻文施文などから、第XIV期にかかる資料である。ただし、ここで注意されるのは、器形の小さいものに主に関わる点である。このような一括資料を出土する遺跡は、茨城県砂川遺跡第30号住居跡例に認められる他、類似の様相を示すものに、埼玉県北・相野谷遺跡第25号住居跡、群馬県荒砥前原4T16号住居跡例などがある。第6・8号住居跡出土資料は、第8号住居跡炉体土器が第6号住居跡炉跡出土土器に利用されていることから、時期的に近接するものの、第6号住居跡資料がやや後出的である。ここで問題となるのが第6号住居跡炉跡出土資料(第17図1・2)の時期差である。2は3条の沈線による磨消懸垂文を施文し、第XIII期に属する。1は微隆起線による波状口縁部に、沈線による渦巻文および「A」字状文を施文することから第XIV期(加曽利E IV式)に該当する。

ここで改めて出土状態を確認するならば、本炉跡は各種土器の破片を集めて構築された、土器片囲炉である。そこで、これらの土器が第8号住居跡例も含め、本住居跡以外の周辺部からの寄せ集めによるものであったとの解釈をとれば、このような時期差も生ずることになる。

第154号土壙出土資料は第XIII期に属すると考えられるが、第XIV期段階の波状口縁部区画が、微隆起線

による弧状区画を呈す前段階的様相を示す。ただし、波頂部に「の」字状の渦巻文の痕跡を留めている点が注意される。

第3期(変遷図(1)-3)は、埼玉編年第XIV期に該当し、概ね加曾利E IV式段階に相当する。本遺跡では主体的に占る時期ではなく、口縁部を微隆起線で区画する資料が、時期を異にする遺構に混在して出土しているのみである。

縄文時代中期後半の土器変遷は、本遺跡では以上のように変遷する。そこで、各住居跡の変遷も第2・7号住居跡→第11号住居跡(第4号住居跡)→第1・8号住居跡(第3・9号住居跡)→第6号住居跡(第5号住居跡)が想定される。なお、本遺跡当該期住居跡に特徴づけられる点として、炉跡に埋甕が近接することがあげられる。これに類似する事例は大宮台地第XIII期の住居跡に、僅かながら認められるものであるまた武藏野台地においてはやや後出して、柄鏡形住居跡が造られるようになる。

一般に加曾利E I式以降、時期が新しくなるに従い、住居跡内に占める埋甕の位置が壁際に移動することが認められている。以上を総合して推察するならば、本遺跡の埋甕の占める位置関係は、柄鏡形住居跡の住居跡内に埋設された埋甕に類似すると考えられる。ただし、本遺跡では埋甕部分を意図的に掘り込んだ住居跡(第11号住居跡)が存在するものの、住居跡張出部も検出されず住居跡周辺部屋外埋甕も認められなかった。本例に類似する資料の増加を待ち、柄鏡形住居跡との関連性に期待するものである。

第4期(変遷図(1)-4)は、縄文時代後期初頭(称名寺式)期に該当する。第10号住居跡出土資料があるが、他の遺構出土資料を加えても、あまり主体的構成を示さない時期である。出土資料には第40図18の細かい縄文による鉤状文を施文する破片の他は、列点文を充填するか、または無文である。また、文様は胴部括れ部で横流れ状を呈するもの、2段に分帶されるものなど称名寺II式の様相を示している。

第5期(変遷図(2)-5)は、縄文時代後期前葉(堀之内1式)期に該当する。近年の研究における堀之内式土器の編年細分は、1式を4段階に、2式を3段階に細別する方向で進められている。研究者各氏により細目については異にするものの、本遺跡出土資料は第2段階に位置付けられる。この他、当該期のあたる資料が少量出土しているが、本遺跡の主体的構成を示す時期にあたらないようである。

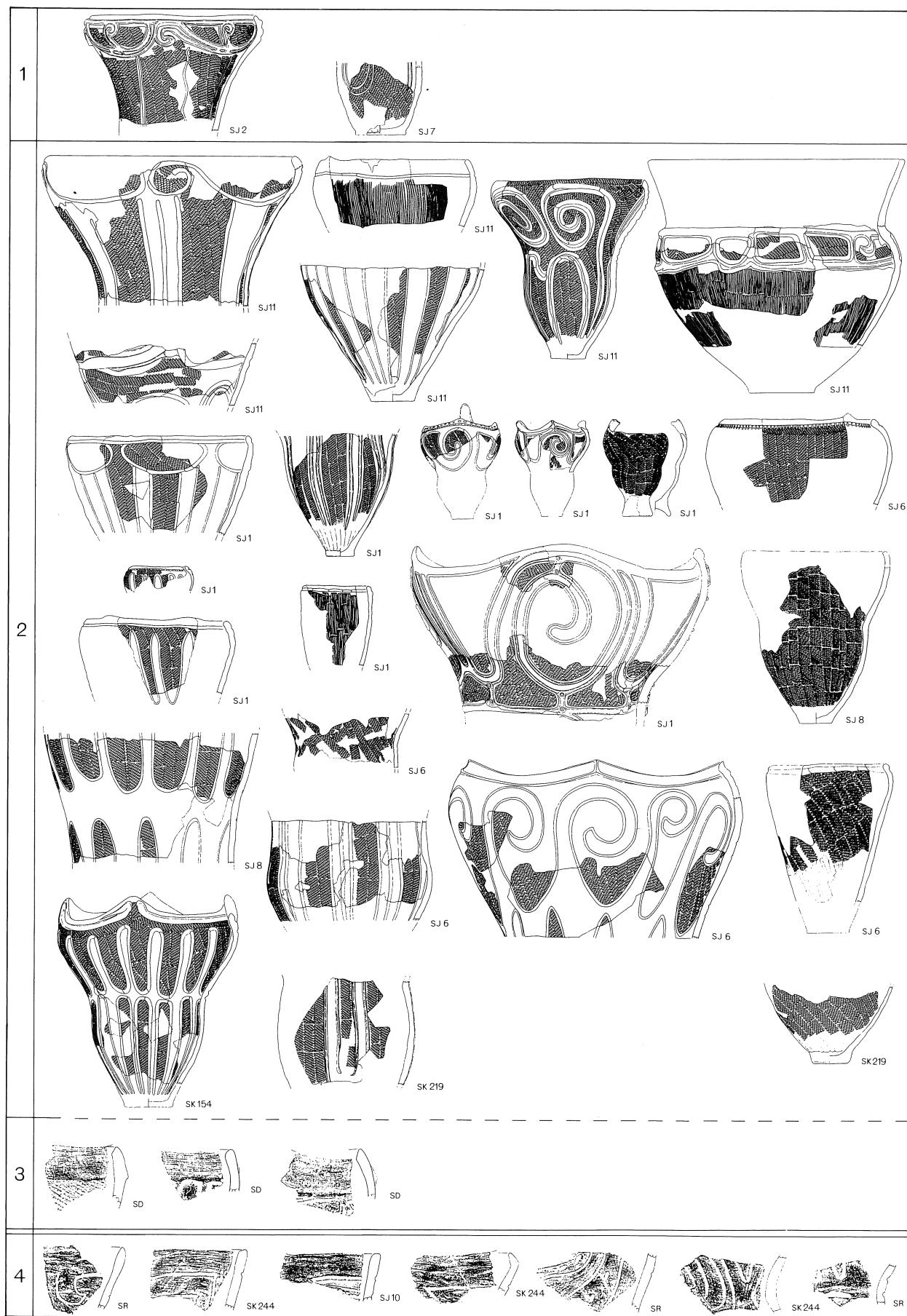
第6期(変遷図(2)-6)は、縄文時代後期前葉(堀之内1式)期第3~4段階に該当する。本遺跡では土壙及び包含層出土資料が中心を占める。また当該期資料の特徴として土製の蓋2点の出土と、「小仙塚類型」と呼ばれる、胴部で強く屈曲し頸部無文部をもつ鉢形土器の出土量が少量に限る点があげられる。この鉢型土器が少ない点については、千葉県伊篠白幡遺跡、茨木県廻り地A遺跡などにみられ、東関東的様相を示すものと考えられる。

この他、第216号土壙覆土上層より口縁部に三角連続刺突文を施文する深鉢破片(第60図216-5)が出土している。この資料は北陸地方を中心とする気屋式土器に類似するものである。気屋式の編年について米沢義光氏(1983)が堀之内1式段階においており、本資料共伴遺物との対比において符合するものである。また、本時期における関東地方に搬入された遺物については、近藤敏氏(1993)の研究があり注目される。

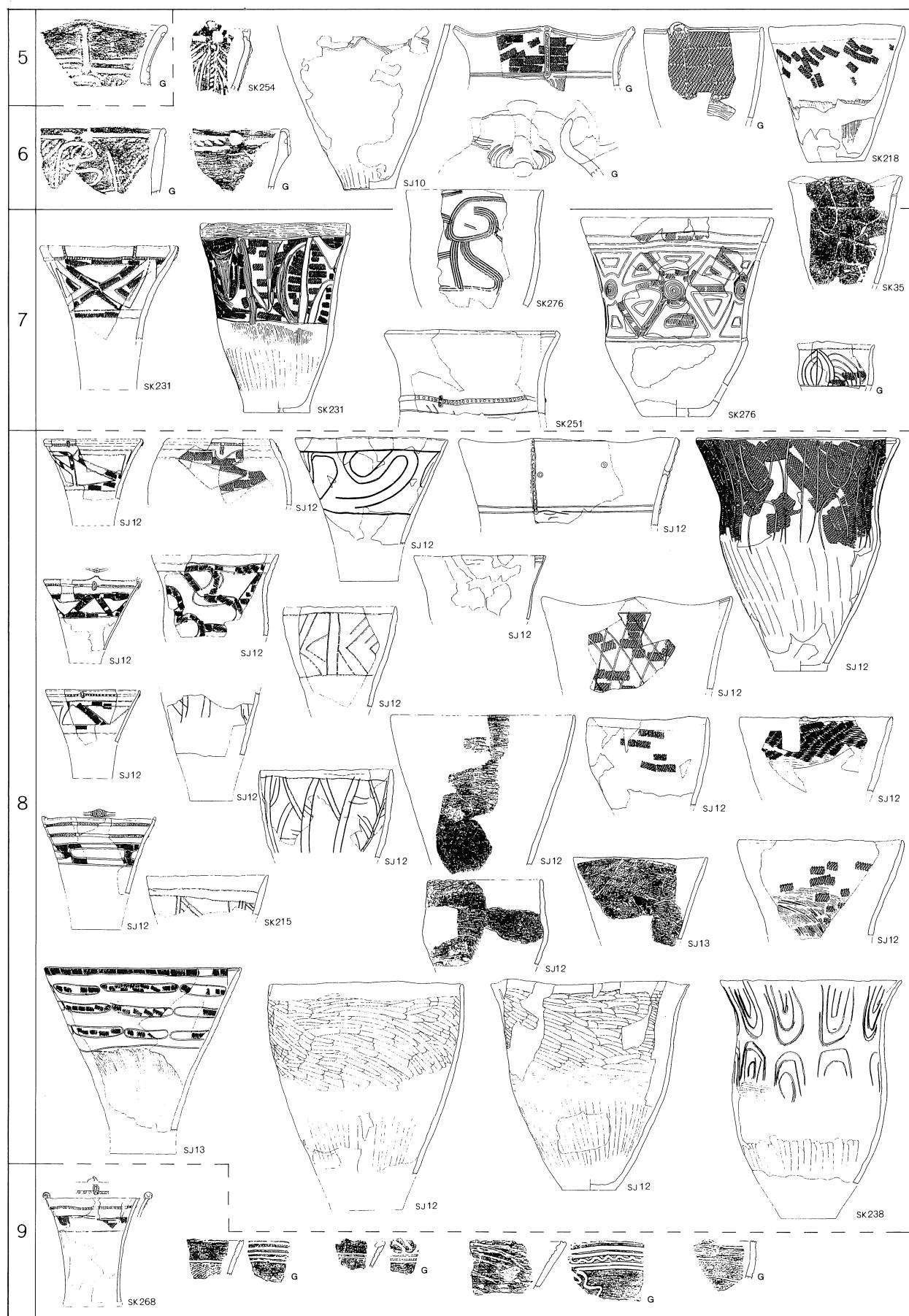
第7期(変遷図(2)-7)は、縄文時代後期前葉(堀之内2式)期に該当する。前述のとおり堀之内2式を3段階に細分すれば、本資料は第1段階に位置付けられる。土壙出土資料が中心となり、本遺跡が再び主体的構成を取り戻す時期である。

ここで注目される資料として、第231号土壙出土遺物(第58図231-1・2)及び第276号土壙出土遺物(第58図276-1・2)があげられる。231-1資料は刻文隆帯がいまだ紐線文化せず、横位区画沈線の上端沈線が引かれないので、やや古相を示している。またこれと共に出土した2は、堀之内貝塚シ- II地點出土の刻文隆帯によって区画された、朝顔形深鉢

修理山遺跡土器変遷図(1)



修理山遺跡土器変遷図(2)



(堀之内1式第4段階)区画内モチーフに類似する。これに東京都西ヶ原貝塚SI02・SK02出土(第21図4)の入組斜行文を施文する朝顔形深鉢を考慮に入れるならば、本資料のモチーフは、入組斜行文の入組部が縦位区画文に変質した様相として捉えることができよう。さらに、本資料は地文縄文でありながら、部分的に充填施文したり、区画文内を不完全に磨消しているなど、堀之内2式横位区画文成立段階のやや錯綜した状況を示す資料である。

第276号土壙出土資料、276-2は胴部が強く屈曲した深鉢である。この資料に描かれているモチーフは、領塚氏(1992)が「精製深鉢と注口の文様が近似し、両者間に親和的関係が認められる」との指摘があるとおり、算盤形を呈する注口土器によく用いられるものである。さらに、加えれば注口土器の胴部屈曲化と本資料の胴部屈曲は相互に連動しているものと考えられる。276-1の共伴資料は集合沈線により施文され、やや古相を示している。第251号土壙資料は口縁部が「く」字状に屈曲し内面に沈線が廻ることから、本期に含められる。またグリッド出土資料(第79図H21-1)は、横位区画が確立していることからより新しい様相を示している。

第8期(変遷図(2)-8)は、縄文時代後期前葉(堀之内2式)期第2段階に該当する。第12・13号住居跡出土資料を基準とし、本遺跡における縄文時代後期前葉の興隆期にあたる。第12号住居跡からは精製土器・粗製土器の良好な一括資料が出土している。本跡は覆土に第6期及び7期に属する資料が含まれているが、これらを除外すれば、注口土器(第32図24)を含め、当該期のセットを成す資料である。精製深鉢は紐線文系では、三角文・斜行文・棒状文・菱形文が主体を占め、東京都日暮里延命院

貝塚出土(第5-21図1)例の渦巻文系が1片(第32図2)のみである他、対弧文系は出土していない。また樽形を呈する器形は、前述の延命院貝塚に類例(第5-23図1)が認められるものの、異形の土器である。また半截竹管施文(第28図7)土器及び、「小仙塚類型」土器(第28図14・第30図12)なども出土している。第28図12を代表とする細沈線による懸垂文と斜行文の組み合わせは、堀之内1式から受け継がれるモチーフで、本段階ではすでに粗製化している。また同図13は、西関東地域の粗製土器にみられる格子文を施文し、第29図15は同じく西関東地域にみられる、所謂「下北原類型」にあたる資料である。これらの資料には地文縄文が施文されており、東関東ナイズされている。また成形も粗製土器とは言い難い。本例に類似する遺跡として大宮市御藏山中遺跡J-14号住居跡があげられる。粗製土器は、口縁部内面に沈線が廻るもの、口端部が尖るもの、無文、地文縄文、条線地などバラエティーに富んでいる。また、第29図21・22は幅広の口縁部無文帯が意識され、加曾利B式粗製深鉢に繋がる様相を示している。

第9期(変遷図(2)-9)は、縄文時代後期前葉(堀之内2式)期第3段階に該当する。本遺跡では衰退期にあたる。精製深鉢形土器は帶縄文を施文し内文をもつ。また浅鉢形土器はボウル状を呈する器形のものと、朝顔形のものが認められ、後期中葉加曾利B式への移行段階の様相を示している。

以上修理山遺跡における各時期の土器変遷の様相を示したが、本遺跡の土器群が大宮台地における在地的土器を基盤としながら、周辺緒地域の影響を大きく受けた状況が窺えよう。このような状況は本遺跡の地理的位置を考慮する上で示唆に富むものである。

## 引用・参考文献

- 我孫子昭二1970 「神明貝塚」庄和町文化財調査報告第2集 庄和町教育委員会  
我孫子昭二1988 「加曾利B様式土器の変遷と年代」(上) 『東京考古』6 東京考古談話会  
我孫子昭二1989 「加曾利B様式土器の変遷と年代」(下) 『東京考古』7 東京考古談話会  
阿部芳郎 1987 「縄文時代後期前葉型式群の構造と動態」『駿台史学』第71号 駿台史学会  
阿部芳郎 1988 「堀之内I式土器の構成と変遷」 『信濃』第40巻 第6号 信濃史学会

- 阿部芳郎 1990 「西ヶ原貝塚小泉ビル地点出土の堀之内1式土器について」『文化財研究紀要』第4集 東京都北区教育委員会
- 阿部芳郎 1990 「北陸北半地域における後期前葉土器型式の再検討」『信濃』第42巻10号 信濃史学会
- 阿部芳郎 1994 「西ヶ原貝塚出土の堀之内1式土器とその変遷」『西ヶ原貝塚II東谷戸遺跡』 東京都北区教育委員会
- 池谷信之 1981 「東北地方における縄文時代中期末葉土器の変遷と後期土器の成立」『沼津市博物館紀要』12 沼津市歴史民族資料館
- 池谷信之 1990 「綱取・堀之内型注口土器」 『縄文時代』第1号 縄文時代文化研究会
- 石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究」(予察)『調査研究集録』第5冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石井 寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊 (財)横浜市ふるさと歴史財団
- 石坂 茂他1985 『荒砥前原遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 茂 1985 「加曾利E式土器に関する一考—いわゆる「胴部隆帯文土器」の系譜—」『群馬の考古学』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 藤巻幸男 桜岡正信
- 泉 拓良他1986 「文様系統論—縁帯文土器—」 季刊『考古学』第17号 雄山閣出版株式会社
- 市川正史他1994 『宮ヶ瀬遺跡群IV』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書21 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 今橋浩一 1979 「第2章 中妻貝塚出土の堀之内2式土器について」『取手と先史文化』上巻 茨城県取手市教育委員会
- 今橋浩一 1980 「堀之内土器について」 『太田区史(資料編)考古II』
- 今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究(上)」『考古学雑誌』63-1 日本考古學會
- 今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究(下)」『考古学雑誌』63-2 日本考古學會
- 大塚達郎 1986 「型式学的方法—加曾利B式土器—」 季刊『考古学』第17号 雄山閣出版株式会社
- 小川和博 1984 「縄文土器の規範と選択」『奈和』第22号 奈和同人会
- 小川和博 1984 「堀之内2式土器編年の課題」『奈和』15周年記念論文集 奈和同人会
- 小川和博 1985 「堀之内2土器の成立をめぐって」『古代』第80号 早稲田大学考古学会
- 柿沼修平 1975 「堀之内式土器論」(1) 『史館』第5号 熊野正也
- 柿沼修平 1976 「堀之内式土器論」(2) 『史館』第6号 熊野正也
- 柿沼修平他1986 「文様系統論—称名寺式土器—」 季刊『考古学』第17号 雄山閣出版株式会社
- 金箱文男他1987 『赤山』 川口市遺跡調査会報告第12集 埼玉県川口市遺跡調査会
- 國平健三他1987 『宮久保遺跡I』 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 近藤 敏 1993 「市原市内出土の非在地系土器」『市原市文化財センター研究紀要II』(財)市原市文化財センター
- 郷田良一他1979 『千葉東南ニュータウン7-木戸作遺跡—(第2次)』 (財)千葉県文化財センター
- 斉藤弘道 1987 「堀之内式土器研究のあゆみ」 『茨城県歴史館報』5 (財)茨城県歴史館
- 桜井清彦 1990 『日暮里延命院貝塚』 東京都荒川区教育委員会

- 庄司 克 1981 「堀之内II式土器小考」(1)『貝塚博物館紀要』第7号 千葉市加曾利貝塚博物館
- 鈴木保彦 1972 『東正院遺跡調査報告』 神奈川県教育委員会東正院遺跡調査団
- 鈴木義治他1985 『大谷津A遺跡(上)・(下) 水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 3』 (財)茨城県教育財団
- 田中耕作 1985 「所謂「三十稻場式土器」の成立について」『信濃』第37巻 第4号 信濃史学会
- 谷井 彪他1982 「縄文中期土器群の再編」 『研究紀要』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 千葉 豊 1989 「縁帶文系土器群の成立と展開」 『史林』第72巻 総目次 史学研究会
- 千葉 豊 1992 「西日本縄文後期土器の二三の問題」 『古代吉備』第14集 古代吉備研究会
- 中島庄一 1981 「土器文様の変化—称名寺様式を中心として—」 『神奈川考古』第12号 神奈川考古同人会
- 中島庄一 1985 「土器文様からみた称名寺様式期の地縁集団の構造」『東京考古』3 東京考古懇話会
- 中島庄一他1994 『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書 栗林遺跡・七瀬遺跡』 長野県道路公社 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 中村恵次 1976 『千葉市中野僧御堂遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 西田泰民 1992 「縄文土瓶」『古代学研究所研究紀要』第2輯 (財)古代学協会
- 丹羽 茂 1971 「東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」福島考古12
- 堀越正行 1971 「施文系統と編年の改正(予察)」 『ふれいく2』
- 本間 宏 1987 「縄文時代後期初頭土器群の研究」(1)『よねしろ考古』第3号 よねしろ考古学研究会
- 本間 宏 1988 「縄文時代後期初頭土器群の研究」(2)『よねしろ考古』第4号 よねしろ考古学研究会
- 馬目順一他1975 『大畠貝塚調査報告』 福島県いわき市教育委員会
- 鈴木徳雄他1982 「シンポジウム堀之内式土器資料集—各地の堀之内式土器とその変遷—」 市立市川考古博物館
- 柳澤清一 1989 「東北縄文中・後期編年の諸問題」『古代』第88号 早稲田大学考古学会
- 柳澤清一 1991 「加曾利E3-4(中間)式考 —中期後半土器の広域編年の観点から—」『古代深叢III』 早稲田大学出版部
- 柳澤清一 1994 「西日本縄文後期前葉編年の再検討」『古代』第98号 早稲田大学考古学会
- 柳田和久他1984 『小泉山田遺跡・谷地遺跡・大明遺跡・北ノ内遺跡 郡山東部IV』 福島県郡山市教育委員会 農林水産省東北農政局
- 山形洋一他1989 『御蔵山中遺跡 I』 大宮市遺跡調査会
- 八幡一郎他1973 『貝の花貝塚』 松戸市文化財調査報告第4集 松戸市教育委員会
- 米沢義光 1983 「羽作群志賀町火内谷大垣内遺跡出土土器再見」『北陸の考古学』第26号 石川考古学研究会
- 領塚正浩 1992 「第2節 堀之内貝塚出土の堀之内式土器」 『堀之内貝塚資料図譜』 市立市川考古博物館
- 渡辺俊夫 1982 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 4 宮部遺跡・鹿の子A遺跡・砂川遺跡』 (財)茨城県教育財団
- 1990 「縄文後期の諸問題」 縄文セミナーの会